

天神山古墳

—福岡県嘉徳郡桂川町大字豆田所在前方後円墳の調査—

桂川町文化財調査報告書

第22集

2024

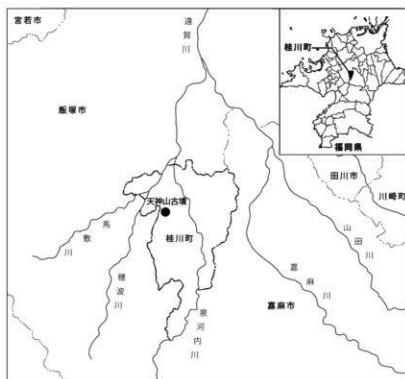
桂川町教育委員会

天神山古墳

— 福岡県嘉穂郡桂川町大字豆田所在前方後円墳の調査 —

桂川町文化財調査報告書

第22集



2024

桂川町教育委員会



天神山古墳周辺の航空写真



王塚古墳墳丘から天神山古墳・ホーケントウ古墳を望む（西から）



墳丘全景・西から（社殿の左手・北側がDトレンチ付近）



天神山古墳・Dトレンチ通路状遺構（東から）



Lトレンチ須恵器集積部 I (西から)



L4トレンチ墓道検出状況 (西から)



84：広口壺



134：高坏形器台



140：子持配像脚付壺A



141：子持配像脚付壺B

序

福岡県のほぼ中央部に位置する桂川町は、国指定特別史跡である「王塚古墳」をはじめ、県指定史跡「金比羅山古墳」などの前方後円墳が集中する地域で、その他にも数多くの文化財があり、古代のロマンあふれる文化の町です。

この度、王塚古墳から南へ約700mの位置に所在する天神山古墳の範囲確認調査を実施しました。天神山古墳は、王塚古墳の石室発見と同じ時期に認識された前方後円墳で、江戸時代より豆田天満宮の境内にあったため、大きな開発に影響されることなく非常に残りの良い形で現在まで残されてきました。これまでの研究の蓄積から天神山古墳は、王塚古墳との関係性、当地域に所在する古墳群との関わり、『日本書紀』の記述に見られる穂波屯倉との関係性が指摘され、学術的にも重要な古墳です。しかし、これまで詳細な調査が行われておらず、天神山古墳の規模や築造時期などが未解明でした。桂川町では天神山古墳の重要性を鑑みて、今後の保存に繋げるために、国立大学法人九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室の皆様のご協力を得て調査を実施しました。

この度の調査では、天神山古墳の規模をはじめ、築造時期も明らかとなり、穂波川流域沿いに所在する8基の前方後円墳の内、最後に築造された前方後円墳であることが分かりました。また、周溝・周堤から通路状遺構や墳丘からは段状遺構の珍しい発見もありました。特に、未盗掘と考えられる石室への墓道と、その墓道で人物や動物、器物などを付けた装飾付須恵器などが破砕供献された状態で出土したことは大きな発見となりました。この調査の成果が、今後の研究の一助となるとともに、郷土の歴史に対して住民の皆様に対して理解が深まることを願います。

最後になりますが、調査にあたり御協力いただきました、地元の皆様方と文化庁や福岡県教育委員会、国立大学法人九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室の皆様、筑豊教育事務所管内の市町村教育委員会の皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

令和6年3月26日

桂川町教育委員会
教育長 大庭 公正

例 言

1. 本書は平成26年(2014)年度から令和5年(2023)度を実施した福岡県嘉穂郡桂川町大字豆田に所在する天神山古墳の範囲確認調査および整理作業の記録で、桂川町文化財調査報告書第22集となる。
2. 本古墳の範囲確認調査および整理作業、報告書作成は、国と県の補助を受け、桂川町教育委員会が主体となり、国立大学法人九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室(以下九州大学考古学研究室)の協力を得て実施した。
3. 本書に掲載した測量図、土層図、遺構図は九州大学考古学研究室が作成した。
4. 測量図および遺構実測図中の方位は磁北を表す。
5. 土層の色調は『新版 標準土色帳』(1998年版)を参考とした。
6. 出土遺物の実測図は、九州大学考古学研究室が作成した。
7. 測量図、土層図、遺構図、遺物実測図の製図は、桂川町教育委員会の長安慧と九州大学考古学研究室が行った。
8. 本書に掲載した遺構写真は九州大学大学院人文科学研究院の辻田淳一郎准教授が、遺物写真は九州大学大学院地球社会統合科学府の足達悠紀他、九州大学考古学研究室所属学生が撮影した。
9. 出土した須恵器の胎土分析は、九州大学の足達悠紀・足立達朗の他、尾関晃・長安慧・嶋田光一・柳山範一・八木健一郎・松浦宇哲・辻田淳一郎が行い、その結果は本書の第5章第1節に収録した。
10. 本古墳の土壌分析は、株式会社古環境研究所に委託し、その結果は本書の第5章第2節に収録した。
11. 本書の執筆は、第1章、第2章、第7章を長安が、第3章から第4章までを辻田と足達が、第6章を辻田が行なった。
12. 出土遺物及び写真・図面等の記録は全て桂川町教育委員会が保管し、王塚装飾古墳館に収蔵・管理されている。多くの方々に活用いただきたい。
13. 本書の編集は、長安と辻田が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	2
3. 調査・整理の組織	2
第2章 位置と環境	4
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	4
第3章 天神山古墳の各調査区と古墳時代の遺物	7
1. 墳丘測量図と全体の調査区の配置	7
2. Aトレンチ～Pトレンチの調査(Lトレンチ以外)	13
3. Lトレンチの調査と出土遺物	23
4. Lトレンチ以外の調査区の出土遺物	73
5. 小結	75
第4章 弥生時代以前の遺構と遺物	83
1. 弥生時代以前の遺構	83
2. 弥生時代以前の遺物	83
3. 小結	86
第5章 自然科学的分析	95
1. 天神山古墳と周辺遺跡出土須恵器の胎土分析	95
2. 天神山古墳土壌分析報告	111
第6章 天神山古墳の調査成果	119
1. 天神山古墳の墳丘形態・規模と築造技術の復元	119
2. 墳丘に付属する施設について	120
3. Lトレンチの墓道の復元と須恵器出土状況	122
4. 天神山古墳出土土器類の構成と特徴	127
5. 天神山古墳の築造年代と歴史的背景	128
第7章 総括と課題	137

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

天神山古墳は、福岡県嘉穂郡桂川町大字豆田に所在し、遠賀川の上流を流れる穂波川の東岸に位置する豆田天満宮の境内にある前方後円墳で、墳丘をはじめ周溝や周堤が良く残されている。

豆田天満宮は、天神山古墳のくびれ部の一部を削って社殿が建立されており、『筑前国統風土記拾遺』と『筑前国統風土記附録』によれば元々は大川（穂波川）の辺にあったものを承応年間中（1652 - 1655）に当時の国君（福岡藩主）の命により現在の場所に移したと伝えている。そのため、天神山古墳は、17世紀中頃までにはすでに古墳として認識されていなかったと思われる。

天神山古墳が古墳として認識されたのは昭和に入ってからである。昭和9年（1934）に豪華絢爛な壁画が描かれた王塚古墳の石室発見を受けて調査を行った川上市太郎氏により、王塚古墳の付近に所在する古墳として金比羅山古墳とともに「豆田天神山古墳」または「豆田古墳」として挙げた事で、古墳として認識された。その当時は、天神山古墳の調査が行われなかったが、川上氏が王塚古墳の調査途中で地元の古老の話を聞き取った際、王塚古墳と天神山古墳とが関連するかのような伝説が語られた。その後、昭和13年（1938）に京都帝国大学が行った王塚古墳の補足調査の際、梅原末治氏、小林行雄氏とともに九州帝国大学の鏡山猛氏及び同大学有志の援助を得て天神山古墳の測量が実施された。測量により天神山古墳は前方後円墳で、王塚古墳よりも後出するが、周溝や墳丘盛土から類似性が指摘され、王塚古墳と関連性がある古墳として周知されるようになった。

京都帝国大学と九州帝国大学による測量以降、天神山古墳自体の調査は行われなかったが、ホーケントウ古墳や北古賀1号墳の前方後円墳の確認、昭和24年（1949）に児島隆人氏と森貞次郎氏らにより金比羅山古墳、宮ノ上古墳、大平古墳の前方後円墳と大型円墳の茶臼山古墳の測量、昭和42年（1967）に前方後円墳である森原1号墳の発掘調査、地元郷土史家の西村二馬氏による周辺古墳の分布調査が行われ、穂波川沿いに所在する古墳の存在が明らかとなり、桂川古墳群または穂波川流域南部古墳群として遠賀川流域でも大規模な古墳群を形成することが指摘された。その古墳群の中で天神山古墳は、金比羅山古墳、宮ノ上古墳、大平古墳、森原1号墳、王塚古墳、北古賀1号墳、ホーケントウ古墳の合計8基の前方後円墳と茶臼山古墳の大型円墳1基を含む首長墓系譜の中で理解され、多くの研究者により変遷が示されてきた。

また、天神山古墳が所在する地域一帯はかつて穂波と呼ばれ、『日本書紀』安閑2年（535）に設置された穂波屯倉の比定地とされており、詳細な築造時期は明らかではなかったが、王塚古墳に後出する6世紀中頃の前方後円墳と目されていたため、天神山古墳と穂波屯倉の関係性が注目されてきた。

以上のように天神山古墳は、王塚古墳との関連性、遠賀川流域でも大規模な古墳群の中の首長墓、穂波屯倉と関係性のある古墳として注目されてきたが、京都帝国大学と九州帝国大学の測量以降、発掘などによる詳細な調査が行われず、墳丘規模や周溝などを含めた構造、築造時期が明らかではなく、どのような性格を持つ古墳であるのかは未解明であった。

桂川町では、これまでの研究の蓄積から天神山古墳が当町の歴史を特徴づける重要な文化財の一つと考え、古墳の性格を明らかにし、今後の保存に繋げるために、範囲確認調査を国庫補助と県費補助を受けて実施した。調査は、桂川町教育委員会が主体となり、九州大学大学院人文科学研究院の宮本一夫氏の指導のもと同大学の辻田淳一郎氏と院生および学生諸氏の協力を得て、平成26年度（2014）から令和4年度（2022）に実施し、令和5年度（2023）に報告書を作成した。なお、令和3年度（2021）は、新型コロナウイルス感染症の拡大とその防止による非常事態宣言の発出などにより、調査を行うことが困難となったため、整理作業のみ実施した。

第2節 調査の経過

天神山古墳の調査は、金比羅山古墳の調査最終年度である平成26年度（2014）から、並行して行う形で開始した。平成26年度（2014）はトラバース測量を行った後、電子平板による墳丘測量を行った。平成27年度（2015）は周溝・周堤および周辺地形の平板測量を行いながら、A～Eトレンチの発掘調査を開始した。平成28年度（2016）以降は、令和3年度（2021）に新型コロナウイルス感染症の影響により1年間調査が中断した以外は、毎年9月に約2週間前後の期間発掘調査を実施し、令和4年度（2022）9月に調査を終了した。各年度の調査期間と内容は以下の通りである。平成29年（2017）9月23日と令和2年（2020）9月20日には現地説明会を開催し、多くの方に御参加いただいた。令和4年（2022）年にも開催を予定していたが、台風の影響で中止となった。また整理作業は、調査開始より桂川町教育委員会と九州大学文学部で行い、令和5年度（2023）年度に報告書作成を行った。

- ・平成26年度（2014）9月11日～9月19日 墳丘測量調査、整理作業
- ・平成27年度（2015）9月11日～9月21日 墳丘測量・発掘調査：A～Eトレンチ、整理作業
- ・平成28年度（2016）9月9日～9月17日 発掘調査：A・D・Fトレンチ、整理作業
- ・平成29年度（2017）9月8日～9月25日 発掘調査：D・G・Hトレンチ、現地説明会、整理作業
- ・平成30年度（2018）9月11日～9月23日 発掘調査：G・I・Jトレンチ、整理作業
- ・令和元年度（2019）9月11日～9月21日 発掘調査：K・L・Mトレンチ、整理作業
- ・令和2年度（2020）9月11日～9月23日 発掘調査：H2・L・Nトレンチ、現地説明会、整理作業
- ・令和3年度（2021）新型コロナウイルス感染症の影響で調査中止、整理作業
- ・令和4年度（2022）9月8日～9月21日 発掘調査：L・O・Pトレンチ、整理作業
- ・令和5年度（2023）整理作業、報告書作成

第3節 調査・整理の組織

- ・平成26年度（2014）～平成28年度（2016）

総括

桂川町教育委員会 教育長 瓜生 郁義
社会教育課 課長 穂坂 千鶴

調査・整理

調査指導 九州大学大学院人文科学研究院 教授 宮本 一夫
調査・整理担当 桂川町教育委員会社会教育課文化財振興係 係長 尾園 晃
九州大学大学院人文科学研究院 准教授 辻田 淳一郎

- ・平成29年度（2017）～令和元年度（2019）

総括

桂川町教育委員会 教育長 瓜生 郁義
社会教育課 課長 尾園 晃
文化財振興係 係長 穂坂 千鶴（再任用）

調査・整理

調査指導 九州大学大学院人文科学研究院 教授 宮本 一夫
調査・整理担当 桂川町教育委員会社会教育課文化財振興係 書記 長安 慧
九州大学大学院人文科学研究院 准教授 辻田 淳一郎

・令和2年度(2020)～令和3年度(2021)

総括

桂川町教育委員会 教育長 大庭 公正
社会教育課 課長 原田 紀昭
文化財振興係 係長 尾園 晃

調査・整理

調査指導 九州大学大学院人文科学研究院 教授 宮本 一夫
調査・整理担当 桂川町教育委員会社会教育課文化財振興係 書記 長安 慧
九州大学大学院人文科学研究院 准教授 辻田 淳一郎

・令和4年度(2022)～令和5年度(2023)

総括

桂川町教育委員会 教育長 大庭 公正
社会教育課 課長 原田 紀昭
文化財振興係 係長 尾園 晃

調査・整理

調査指導 九州大学大学院人文科学研究院 教授 宮本 一夫
調査・整理担当 桂川町教育委員会社会教育課文化財振興係 主査 長安 慧(報告担当)
九州大学大学院人文科学研究院 准教授 辻田 淳一郎(報告担当)

なお、平成26年度(2014)から令和5年度(2023)の調査および整理作業員は以下の通りである。
芳中佐代美、片峯真紀(以上桂川町教育委員会)。齊藤希、柿添康平、戴羽、富宝財、楊萌、高藤淳、原梓、曹絲茶、小澤利満、譚永超、薄穎悦、三浦萌、李寧、藪遙菜、張宇、陳映玉、内田千種、鈴木沙弥、津久井駿、中田風歌、アリーン・ドレハー(以上九州大学大学院人文科学府)。中井歩、福永将大(以上九州大学大学院比較社会文化学府)。福永将大、梶原慎司、カルロス・ヴェレッキア、大童淳一郎、星野宙也、山下理呂、白楊、中野真澄、松尾樹志郎、足達悠紀、植野律子、蓮田賀子、出見優人、日高風海斗、森春奈(以上九州大学大学院地球社会統合科学府)。萩原尚樹、梶佐古幸謙、櫻木織部、森大樹、吉田賢多郎、舟木太郎、松尾泉、武下智美、中野瑞香、吉田英彦、牧野朱莉、三浦萌、連景伊、平井貴大、岩田英信、新谷広太郎、田中利沙、長谷川桃子、藤尾徳馬、山下理呂、内田千種、下釜菜々子、宗田結衣、土居隼人、中野真澄、柱七彩、松尾樹志郎、山地優輝、吉原萌、中島渉太郎、亀川徹香、大河巴奏、足達悠紀、森田雄士、坂上義実、坂ノ上奈央、田中佑希乃、出見優人、唐高暉、永島さくら、諸岡初音、山田樹、佐久間慧、進藤菜々穂、日高風海斗、森春奈、今村竜平、笠屋佑輔、瀧内更朝、田淵朱莉、中原佳佑、松村祐奈、矢崎空音、栗原悠里子、重石拓郎、野村華鈴、藤岡実優、渡邊響、今林潤世、江口真佑美、加藤諒、菊池沙夏、木村裕斗、長岡海翔、橋橋さくら、濱崎翔太、横田隼人、米倉千穂、リアム・アトキンソン、北村仁乃、島田理穂子、田村宗大、大和隆誠(以上九州大学文学部)。

この10年間にわたる天神山古墳の調査および整理作業では、文化庁、福岡県教育委員会文化財保護課をはじめ、九州大学の諸先生方、筑豊教育事務所管内市町村教育委員会文化財担当者の皆様や各市町村の文化財担当者の皆様、地域の学識経験者の皆様、豆田天満宮の関係者の皆様、豆田地区や土居地区の区長並びに地元の皆様から多大なる御支援、御協力、御教示を賜りました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

天神山古墳は、福岡県嘉穂郡桂川町大字豆田字下宮原 455-1、458-1 に所在する。

天神山古墳が所在する桂川町は、福岡県のはほぼ中央に位置し、東を金国・戸谷ヶ岳山地、西を三郡山地、南を古処山地で囲まれた嘉穂盆地の南部に位置する。町内では、古処山地を水源とする泉河内川が中央を貫流し、北西域には三郡山地を水源とする穂波川と馬敷川が流れ、嘉穂盆地内で各支流と交わり福岡県第2位の河川である遠賀川となり、響灘にそそがれる。町内には、泉河内川を境として、東に長谷山(311m)、西に弥山岳(377m)、北に大将陣山(112m)の三山があるほか高山性の山地はなく、古第三紀層からなる低丘陵が点在する。その低丘陵の間を縫うように河川が流れ沖積平野が発達し、水田地帯が形成される。その中で天神山古墳は、穂波川の東岸に位置した標高約45mの丘陵上に立地し、約700m北に王塚古墳、約800m南にホークントウ古墳が所在する。

第2節 歴史的環境

桂川町における旧石器時代の様相は明らかではないが、続く縄文時代では、土塚遺跡より縄文時代晩期頃の鎌や石斧などの石器が表採され、この頃より町内で人々が活動していたことを示している。

紀元前5世紀から6世紀ごろ、稲作文化の導入により縄文時代の狩猟採集社会から農耕社会へと変わった弥生時代より町内の遺跡数が増加する。泉河内川より東の土師地区遺跡群に含まれる十三塚遺跡では、中期～後期の土墳墓、木棺墓、甕棺墓が合計492基と祭祀遺構10基が検出された。また低丘陵上に位置する大坪遺跡、寿命隈西遺跡、飯塚牟田南遺跡では前期末～中期の貯蔵穴群が、影塚東遺跡や寿命隈西遺跡では前期末～後期の住居跡が検出された。天神山古墳が位置する丘陵上の上宮ノ原遺跡と下宮ノ原遺跡は、弥生時代の集落跡が包蔵すると推定されている。なお、町内の中央部に位置する土居地区より、田畑の耕作中に四乳八禽鏡(個人蔵)の破鏡1点が表採され、同地区内の別の場所から大泉五十(個人蔵)1点が表採されており、今後の発掘調査の進展により町内の弥生時代との関わりが明らかになる可能性がある。



四乳八禽鏡(拓本)



大泉五十(拓本)

図2-1 土居地区表採品(1/2)

3世紀中頃から7世紀中頃までに及ぶ古墳時代では、穂波川沿いに天神山古墳をはじめとする金比羅山古墳、宮ノ上古墳、大平古墳、森原1号墳、王塚古墳、北古賀1号墳、ホークントウ古墳の合計8基の前方後円墳と大型円墳である茶白山古墳群1号墳の首長墓が築造される。その他に西ノ浦上遺跡、中屋古墳群、塔ノ山古墳群、古野古墳群、経塚古墳群、放駒古墳、瀬戸古墳群、宝塚古墳群、火打塚古墳の各古墳群や西ノ浦上横穴群、出雲百穴・九郎丸横穴墓群の各横穴墓群が形成され、遠賀川流域でも大規模な古墳群となっており、桂川古墳群または穂波川流域南部古墳群と称されている。なお、町の中央を流れる泉河内川より東側には、コノマ遺跡群、平塚横穴墓群、八王寺横穴墓群、影塚横穴墓群(1・2地点)、寿命隈東遺跡、二塚遺跡の横穴墓群が密集しており、古墳を主体とする穂波川沿いとは対照的である。前期では、全長81mを測る金比羅山古墳が寿命丘陵の最高所に位置し、前葉～中葉ごろ築造される。その他には、コノマ遺跡群の三十六古墳群4号墳や、山陰系土師器を伴う箱式石棺墓が検出されたコノマ遺跡がある。中期では、寿命丘陵上に前方後円墳の宮ノ上古墳や大平古墳、円墳の茶白山古墳群1号墳が築造される。後期では、寿命丘陵の南西に位置し馬敷川と穂波

川が合流する東側台地上に王塚古墳が築造される。全長 86 m を測る王塚古墳は、6 世紀前半に築造され、装飾古墳の白眉として著名である。また南方に天神山古墳やホーケントウ古墳が位置する。当時期になると群集墳や横穴墓群が爆発的に増加し、中には平塚古墳のサルボや二塚遺跡 8 - ①号横穴墓の有刺銅鉤から朝鮮半島との交流が伺える遺物が出土している。集落遺跡も増加しており、中でも大坪遺跡 16 号住居跡では竈から馬具が出土した珍しい例がある。生産遺跡も確認されており、コノマ遺跡群で須恵器を焼成した窯跡が検出されている。この時期の文献資料では、『日本書紀』の継体天皇 22 年 (528) に筑紫君磐井の乱が平定され、その後、安閑天皇 2 年 (535) に徳波屯倉の設置が記述される。桂川町一帯は『和名類聚抄』に記述された筑前国徳波郡土師郷の比定地であり、その後、明治に至るまで徳波郡の中にあつた。屯倉とは、ヤマト王権の政治的、軍事的拠点であり、町の周辺が徳波屯倉の比定地と考えられている。そのため 6 世紀中頃に、ヤマト王権の支配力が強化されていくが、一方で屯倉を設置するほど王権側にとって戦略的に重要な地域であつたと考えられる。

古代の遺跡は未発掘であるが、町内には二ノ坪、中ノ坪などの条里制に関わる地名が残され、付近には法起寺式の伽藍配置で 7 世紀末～8 世紀の造営と推定される飯塚市大分廃寺があり、大宰府から大分廃寺付近を通過し、豊前国府を経由して周防灘へ続く官道が通じるとされる。

平安時代以降は、嘉徳盆地に多数の荘園・寺領が形成された。天徳 2 年 (958) には安楽寺の荘園として土師荘が成立していた。その後、鎌倉幕府が成立すると、平氏の所領を没収し各地に地頭を置いた。町内には「土居」や「地頭屋敷」の地名が残り、その存在を窺わせる。南北朝の動乱期の情勢は明らかでないが、土居老松神社の棟札、足利尊氏が「土師荘内翁九十五町」を景福寺に寄進した記録などが残る。文明 9 年 (1477) には土師村、吉隈村、豆田村が大内氏家臣の所領となる。この頃、土師氏を称する有力武士があらわれ、文安 4 年 (1447) の土師老松神社の棟札に土師左馬頭の名が、天文 4 年 (1557) に安楽寺天満宮の連歌会に土師宮内丞の名が見える。土師老松神社西方の西田地区遺跡群では青磁や白磁が出土し、居館跡や土塼墓が検出され、中世に活躍した土師氏との関連が注目される。

天文 20 年 (1551) の大内氏滅亡後は、大友氏、毛利氏、秋月氏の争いの場となり、天正 14 年 (1586) からの小早川隆景による筑前国支配、慶長 5 年 (1600) 年関ヶ原の戦いを経て、黒田長政に筑前国が与えられ、町域の瀬戸村、寿命村、中屋村、豆田村、九郎丸村、土居村、吉隈村、土師村、内山田村の 9 ヶ村は福岡藩領となる。寛永 13 年 (1636) には内山田村は秋月藩領に編入され、幕末に至る。町内には、天神山古墳の西側を通る長崎街道をはじめ秋月街道が通り、街道沿線上には新茶屋の地名や一里塚跡、参勤交代の難所であつた瀬戸の渡しがある。天神山古墳の一部を削って建立された豆田天満宮は、承応年間中 (1652 - 1655) に当時の国君 (福岡藩主) の命により大川 (徳波川) の辺にあつたのを現在の場所に移した。『筑前国統風土記拾遺』や『筑前国統風土記附録』は伝えている。

近代になると明治 4 年 (1871) には、廃藩置県により当町域は福岡県下に組み込まれ、明治 22 年 (1889) に 9 ヶ村の合併により桂川村が成立した。平山、吉隈、豆田などで炭坑が操業し、明治 34 年 (1901) には長尾駅 (現桂川駅) が開業するなど、桂川村は発展の一途をたどった。その後、大資本による炭鉱進出により従業者が大量移住し、大正 7 年 (1918) 年に人口 1 万人、昭和 14 年 (1939) に 2 万人を超え、昭和 15 年 (1940) に町制が施行され桂川町となった。昭和 20 年代までの石炭産業は、日本における重要な産業であつたが、昭和 30 年代後半のエネルギー革命により石炭産業は斜陽化し、いわゆる「スクラップ・アンド・ビルド」政策によって各地の炭鉱が相次いで閉山した。桂川町では、昭和 44 年 (1969) には麻生鉱業所吉隈炭鉱の閉山と明治鉱業所平山炭鉱の縮小、昭和 47 (1972) 年に明治鉱業所平山炭鉱が閉山したことで町内の炭鉱は全て姿を消した。コノマ遺跡群からは炭鉱に関わる遺構が検出されており、町内には巻き上げ台座の一部が今も残されている。



1. 天神山古墳 2. 王塚古墳 3. ホーケントウ古墳 4. 北古賀1号墳 5. 金比羅山古墳 6. 宮ノ上古墳 7. 大平古墳 8. 森原1号墳
 9. 茶臼山古墳群 10. 瀬戸古墳群 11. 塔ノ山古墳群 12. 古野古墳群 13. 京塚古墳群 14. 放駒古墳 15. 放駒遺跡 16. 中屋古墳群
 17. 乙ヶ迫遺跡 18. 西ノ浦上横穴群 19. 西ノ浦上遺跡 20. 上宮ノ原遺跡 21. 下宮ノ原遺跡 22. ヤケデラ遺跡 23. 狐坂遺跡
 24. 宝塚遺跡・宝塚古墳群 25. 明寺原遺跡・明寺原古墳 26. 九郎丸横穴墓群(出雲百穴) 27. 火打塚古墳 28. 道才古墳
 29. 瀬戸・日ノ隈古墳群 30. 吉隈・日ノ隈古墳群 31. 丁子丸古墳・丁子丸横穴墓群 32. 榑遺跡 33. 榑古墳 34. 小隈古墳群
 35. 西田新町遺跡 36. 土師古墳 37. 西田地区遺跡群 38. コノマ遺跡 39. コノマ遺跡群 40. 三十六古墳群 41. 三十六遺跡
 42. 平塚古墳・平塚横穴墓群 43. 八王寺横穴墓群 44. 十三塚遺跡 45. 飯塚牟田北遺跡 46. 飯塚牟田東遺跡 47. 飯塚牟田南遺跡(1・2地点)
 48. 二塚遺跡 49. 長迫遺跡 50. 寿命隈北遺跡 51. 赤松ヶ浦遺跡 52. 影塚横穴墓群(1地点) 53. 影塚横穴墓群(2地点) 54. 影塚南遺跡(1・2地点)
 55. 影塚南遺跡(3地点) 56. 影塚東遺跡 57. 大坪遺跡 58. 長崎街道 59. 秋月街道 60. 瀬戸の渡し

図2-2 周辺遺跡分布図(1/25000)

第3章 天神山古墳の各調査区と古墳時代の遺物

第1節 墳丘測量図と全体の調査区の配置

(1) 既往の調査成果

天神山古墳は、福岡県嘉穂郡桂川町大字豆田に所在する。穂波川上流域東岸の北側に延びる低丘陵上に築かれた前方後円墳である。後円部墳頂部の標高は約51.5mである。古墳の西側には豆田天満宮の社殿が築かれており、墳丘が大きく削られている。西側には南北に国道が通っており、国道に面した丘陵部分は切り立つような形で削平が進んでいる。本来は東西南北に緩やかに傾斜が続く地形であったものと想定され、その最も高い地点に天神山古墳が築かれたものと考えられる(図3-1)。王塚古墳の墳丘からは、北に金比羅山古墳・大平古墳・宮ノ上古墳などが所在する寿命丘陵、東に天神山古墳、南側に飯塚市ホーケントウ古墳の丘陵が現在も視認でき、築造当時はそれぞれの古墳がランドマークとして存在していたものと考えられる(巻頭図版1)。

天神山古墳の北北西、直線距離にして約700mの位置に特別史跡の王塚古墳が所在する。王塚古墳で彩色壁画の石室が発見されたのが1934(昭和9)年であり、その前年の1933(昭和8)年には旧穂波町(現飯塚市)で山の神古墳が発見され、多くの遺物が出土している。山の神古墳については以前報告書を刊行しており(辻田編2015)、そちらを御参照いただきたい。王塚古墳は、その後京都帝国大学の梅原末治氏・小林行雄氏らによって調査が行われ、1940(昭和15)年に正式報告書が刊行されている(梅原・小林1940、以下「京大報告」と呼称)。この調査に際して近隣の古墳の確認が行われ、金比羅山古墳と天神山古墳についても言及されている。金比羅山古墳は遠景写真のみの掲載であ

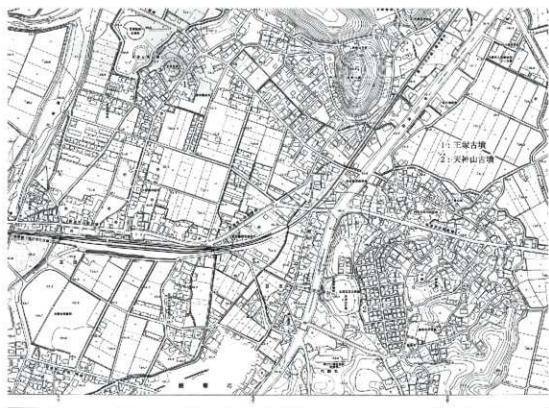


図3-1 天神山古墳周辺地形測量図

ったが、天神山古墳については墳丘の全景写真（東から）とともに、測量図が掲載された（図3-2）。天神山古墳については註の中で以下のように説明されている：「この天神山古墳は王塚と相去る數町の豆田本部落の背後の丘上にあつて、南面して営まれた前方後円墳である。現在その西側の中央に氏神の社殿が営まれて、封土の一部を削っているが、余の部分は割合によく保存されて、周囲に空堀を繞らした形ははっきりと認められ、なほ通じて王塚古墳との類似が顕著である。依つて昭和十三年末の調査の際鏡山猛氏其他九州大学有志の援助を得て、これが外形の実測を行い、王塚古墳考察の参考に供することにした」（梅原・小林1940：p.3）。測量図の作成は1938（昭和13）年12月であり、墳丘と周堤全体が測量されている。後述するように、現在の墳丘はこの当時の状況と殆ど変わっておらず、この測量図が今回発掘調査を行う上での基本情報となった。

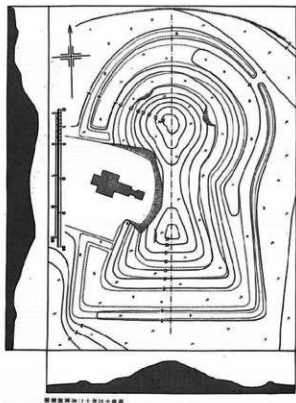


図3-2 天神山古墳旧測量図（梅原・小林1940）

その後、「桂川町誌」（1967）でも言及されているが、調査自体がその後行われていないため、新しい情報は特に追加されていない。京大報告では全長等の規模が明記されていないが、「桂川町誌」でも墳丘規模等についての言及はない（地元での口頭伝承や、「装飾古墳ではないかといわれている」といった点についての記述がみられる）。

これ以後でまとまった形で報告されているのは宇野愷敏氏による表採資料の報告である（宇野1986）。この中では、「昭和60年7月20日に、第9回九州古墳文化研究会において後円部西側裾部で採集された土器は、全部で57点ある。そのうち弥生土器片1点、土師器片4点、須恵器片52点を数える」（宇野1986：図3-3）と報告されている。「後円部西側裾部」は、本報告におけるLトレンチ付近であり、この一帯のみ、本報告での調査以前から須恵器が表採されていた。この箇所について宇野氏は、「堆積土は、盛土の流れ込んだものと考えられ、他の古墳の例からしても、墓前祭に使用したものと考えられ、本墳の上限を示唆するものである」と述べている。その上で、古墳の時期については、表採須恵器と墳丘形態から、「王塚古墳の築造年代、6世紀中葉前後をやや下る時期、6世紀中葉～後半の時期に比定して大過ないであろう」と結論づけている（宇野前掲）。あわせて墳丘については、「二段築成で、全長約65m、後円部径、前方部幅ともに約40mを測る。また後円部高さ約6.5mを測り、前方部は後円部より約1.5m低い。周囲には基底部幅約4mの周庭帯と周堀を繞らせている。周庭帯は後円部の北東側で一部途切れているほか、くびれ部西側を社殿のために削平されている。周庭帯外側基底線までの主軸長は、約85mを測る。墳丘および周庭帯は、社殿のために削平された西側くびれ部以外はほぼ原形を留めている。削平された墳丘崖面を観察すると、厚さ7～8cmの赤褐色土と黒褐色土の互層が明らかで、丁寧な版築によって盛土を施しているものと思われる。外部施設では、現在、円筒埴輪は検出されていないが、一部葺石がみられる」と報告され、この内容が最も詳細な基礎情報として知られることになった（宇野1986）。規模の数値等については、以下の発掘調査の結果

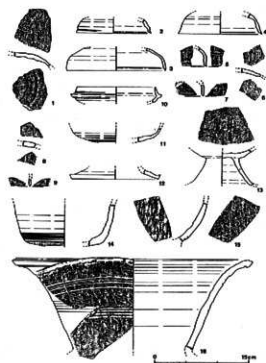


図04 榑川・天神山の埴土器類発掘図(1)

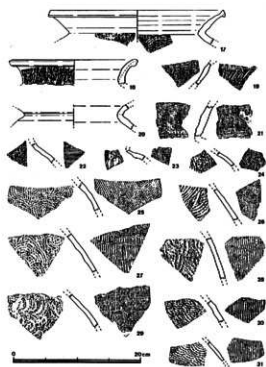


図05 榑川・天神山古墳出土遺物発掘図(2)

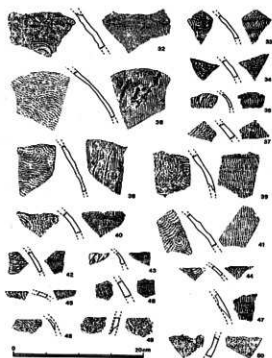


図06 榑川・天神山古墳出土遺物発掘図(3)

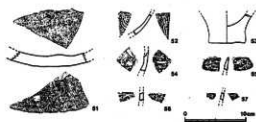


図07 榑川・天神山古墳出土遺物発掘図(4)

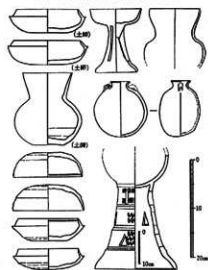


図08 王塚古墳発掘具上器類発掘図(注・左は平切)

図3-3 宇野嶺敏氏報告(2003 [1986])掲載の天神山古墳・王塚古墳出土土器類

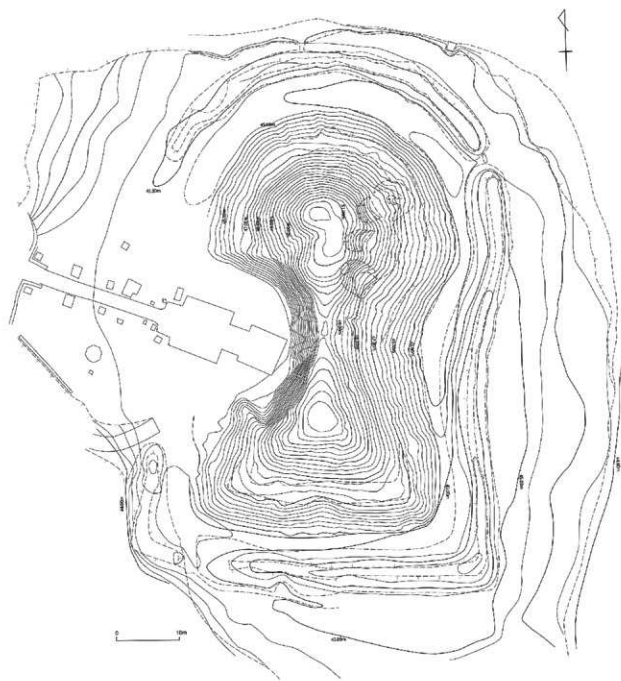


图3-4 天神山古墳墳丘測量図 (S=1/600)

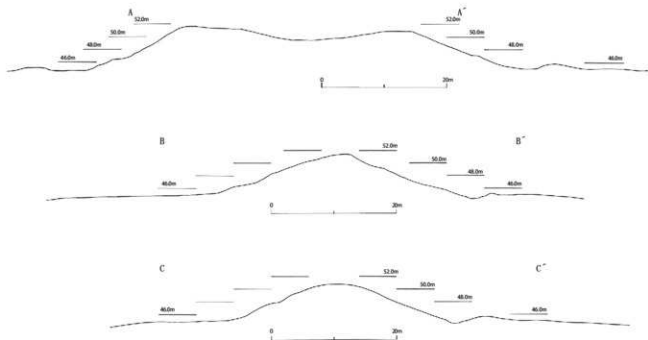


図3.5 天神山古墳墳丘断面図 (S=1/600)

をもとに後述するが、それ以外の墳丘全般に関する基本認識は、この宇野氏の報告の時点と大きくは変わっていない。唯一異なるのは、発掘調査の結果、葺石の存在が確認されていない点である。それ以外は、表採資料の須恵器なども含めて、発掘調査が行われない中では、古墳の内容と年代を考える上で貴重な報告であったことが確認できる。その後、長谷川清之氏により『前方後円墳集成 九州編』（1992）の中で規模等の説明が行われている。そこでは、以下のような情報が提示されている：「立地：低丘陵上 標高44m 沖積地からの比高約10m、墳丘：前方後円墳 前方部2段・後円部2段 方位N-177°-W 造出なし 周濠あり（約5m）周庭あり（約5.5m）総長約85.5m 墳丘長約66.8m 後円部径約40m・高約7m・頂径約6mか 前方部幅約41m（約44m）・長約30.4m・高約6m くびれ幅推定約26m 後前高差-1m、外表施設：埴輪未確認 葺石未確認」。新たな測量調査は行われていないため、1938年作成の測量図によるものとみられるが、具体的な数値がより詳細に示されている。同じ『前方後円墳集成 九州編』の中で、柳沢一男氏は、天神山古墳の年代について、飯塚市の寺山古墳と同じく「10期」に位置づけている（柳沢1992）。宇野氏の報告とともに、これらが天神山古墳の年代的位置づけの基本認識となって今日に至っている。また柳沢氏の『描かれた黄泉の世界 王塚古墳』（2004）においては、天神山古墳の規模は67mとされ、墳丘東側の丘陵部斜面が宅地化される前の全景写真が掲載されている。

以上が本報告の調査前の状況である。京大報告掲載の測量図（1938年）以降、墳丘測量図が作成されておらず、範囲確認などの発掘調査も行われていなかったため、墳丘の規模・構築技術と築造年代についての詳細な検討という点が課題となった。

(2) 今回の調査区 (図34・5・6)

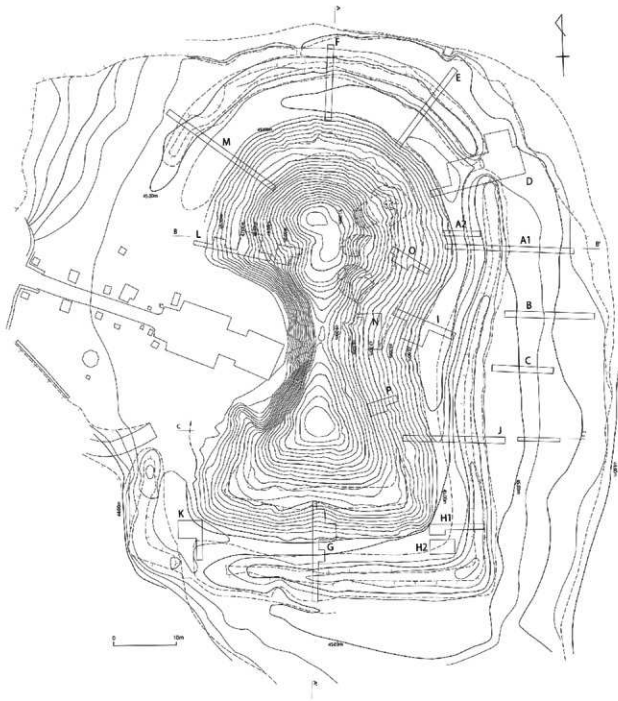


図36 墳丘測量図・トレンチ配置図 (S=1/600)

先述のように、今回の調査は桂川町の事業として2014年度から開始した。同年まで行われていた金比羅山古墳の調査に継続して行ったもので、測量調査から着手した。墳丘に関してはトラバース測量を行った後、光波測距機により座標測定を行い、それをもとに平面図を作成した。周溝から周堤および周堤外部の平坦面付近については、平板測量により平面図を作成し、両者を合成した。

トレンチによる発掘調査を行う前の時点での所見としては、1938年の鏡山氏らによる測量図と墳丘付近の殆ど地形が変わっていない点が特筆された。ただし、西側の国道付近や、北側・東側・南側にはいずれも宅地開発が進んでおり(図3-1)、墳丘付近が良好に残存しているのは、墳丘周辺が豆田天満宮の神域として地元の方たちから大事にされ、保存されてきたことによるものである。すでに指摘されているように、墳丘西側は社殿により大きく削り込まれており、このため本来は連続していたであろう周堤は西側部分が大きく失われている。逆に東側は周堤が全体として良好に保存されており、この点で宇野氏が指摘している、墳丘北東側で周堤が一部途切れている箇所が例えば後世の破壊によるものであるのか、といった点が課題となった(Dトレンチ)。これ以外にもOトレンチを設定している後円部東斜面に所々凹みがみられることから、例えば盗掘孔の可能性なども想定されたが、表面を清掃したところ凹みは非常に浅く、周辺に遺物等も認められなかったことから、最終的には発掘による確認は行っていない。また周堤の東側に広がる平坦面に、古墳時代の遺構などが広がるかどうかについても検討課題とした。

そのような点をふまえ、墳丘に大きくA～Pのトレンチを設定した。調査方針は、基本的に幅や深さも必要最小限とし、また墳丘自体を極力傷つけずに墳丘の範囲確認・構築技術の確認を行うこととした。また調査期間を毎年9月中旬の2週間前後と計画していたため、各年度に3箇所ほどのトレンチを調査し、必要に応じてトレンチの範囲を拡大しながら墳丘の範囲確認調査を行った。最終的にはAトレンチ・Hトレンチを2箇所ずつ設定したこともあり、計18箇所の調査区を設定した形となった。宇野氏の報告などから、本報告でいうLトレンチ付近で須恵器が出土することが調査前から知られていたが、豆田天満宮社殿の脇にあたるため、この地点を調査する前に、まず墳丘東側の調査を行うこととし、Aトレンチから順に調査を開始した。以下、第2節にてAトレンチからPトレンチの順に説明を行い、多量の遺物が出土したLトレンチについては第3節にて別途報告を行う。墳丘の規模等については、本章第5節にて検討を行う。また、天神山古墳の調査区からは、遺物として大きく古墳時代・弥生時代と近世以降の遺物が出土している。本章では主に古墳時代の遺構・遺物について報告し、弥生時代の遺構と遺物については第4章にて報告する。

第2節 A～Pトレンチの調査(Lトレンチ以外)

(1) Aトレンチの調査(図3-7)

2015年度に最初に設定したトレンチである。調査の開始に際して、墳丘測量図をもとに長軸方向と短軸方向を想定し、墳丘東側で長軸と直交する方向にA1トレンチを設定した。以下のトレンチでも同様であるが、1m幅でトレンチ設定と表土はぎを行い、実際には50cm幅の部分のみを掘削し、必要に応じて残り50cm幅の部分に拡張するといった方針で調査を行った。A1トレンチは、墳裾と周堤および周堤東側平坦面の遺構の有無を確認としたもので、推定墳裾付近から長さ約20mとして設定した(最終的には拡張により約20.7mとなった)。最初の発掘に際して、当初は周溝がどのくらいの深さであるかわからなかったこともあり、2015年度は周溝の途中の深さまでしか掘削できていなかったため、翌年度に確認のため約1mの間隔で北側にもう1本A2トレンチを設定し、この結果地山面まで

周溝を完掘することができた。その結果をもとに、A1トレンチも地山面まで周溝を完掘した。これによりA1・A2トレンチのいずれでも墳裾部分に小さな段を検出し、墳丘一段目に地山面が続いていくことが確認された。また周堤については、盛土によるものか地山整形かという点についての確認が必要であったため、掘削を行ったところ、基本的に地山の削り出しによるものであることが判明した。墳丘も同様であるが、本来の古墳の面および周溝内に表土層と天満宮境内の枝葉によるとみられる厚い黒色の堆積層が確認できる。また周堤東側の平坦面については、表土と堆積層の下に地山面が検出され、その周辺から弥生土器が多く確認されたが、古墳時代の遺構や遺物等は検出されなかった。

(2) Bトレンチの調査(図3-8)

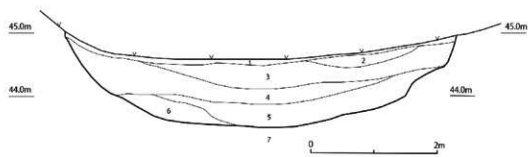
Aトレンチの南側に並行する形で長さ約15mのトレンチを設定した(実際の長さは14.5m)。本トレンチは調査日程の都合上、表土剥ぎを行った段階で全体を掘削することが難しかったため、西端から4mの位置から約4mの部分のみサブトレンチ状に掘削を行い、3層(地山)を検出した時点で掘削を中断している。2層は弥生土器が含まれており、包含層と考えられる。サブトレンチの東端部に径0.45m、深さ約0.7mのビットを検出した。表土直下での検出であるが、遺物が出土しておらず時期については不明である。

(3) Cトレンチの調査(図3-8)

Bトレンチの南側に並行する形で長さ約10mのトレンチを設定した。古墳時代の遺構・遺物に関しては検出されていない。本トレンチも、調査日程の関係で、全体として表土剥ぎを行った時点で掘削を止めており、トレンチの中央付近でやや大きめの弥生土器(14)が出土したため、この付近のみ掘削範囲を拡張して3層(地山)の検出まで行った。弥生時代に関しても遺構は特に検出されていない。また2層は弥生時代前期～中期前後の土器を含む包含層であり、古墳時代の遺構があるとすればこの層を掘り込む形で検出されると判断されたが、検出されたのはBトレンチのビット1つのみであり、明確な遺構および古墳時代の遺物については確認できていない。

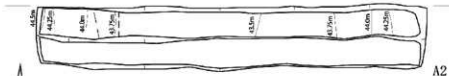
(4) Dトレンチの調査(図3-9-1・2)

Aトレンチの北側、Eトレンチの南側で両者の中間地点に設定した。ここでは、前述のように、京大報告所収の1938年の測量図においても周堤が途切れるように僅かに凹んでいることが知られており、測量の結果、現状でもその状態が維持されるとみられることから、この凹みが後世の擾乱などによるものであるのか、築造当時から存在するものであるのかといった可能性について検証を行うべく、調査を行った。当初は墳丘斜面側から周溝を挟んで周堤外側までの直線的な形でトレンチを設定し、周堤の途切れている部分を深掘りしたところ、この部分だけが一箇所だけ現状の表土層よりも深く・厚く堆積していることを確認したため、この周堤が途切れている部分をベルト状に掘り残して土層を確認しながら、図3-9-1のような形に拡張した。この結果、測量図上で周堤が途切れているように見えていた部分は、本来幅約1m、長さ約10mで細長く伸びる通路状遺構であるものと考えられた。この通路状遺構は、周堤東側の平坦面側に続いており、そこからは標高が低くなる形で丘陵斜面が緩やかに続いていることから、本来は本丘陵の裾部から周堤を通して周溝へと入る(あるいは逆に周溝から出て丘陵斜面を下る)ための通路であったものと想定した。トレンチ内の東端部と周溝近くでは、それぞれ高さ30cm・20cm前後の段状施設が設けられている。周堤東側平坦面の側が一旦高くなっており、そこから周溝側に向かっていく形で通路が設置されている。これらは全て地山の削り出しである。問題



【A2 トレンチ】

1. 褐色土(1ha7-2YR6/4), しまり強い, 粘性なし, 硬さなし, 径のぼろり粒状の砂(真土)
2. ニゴリ(褐色土1ha7YR6/4), しまり強い, 粘性中々あり, 硬さなし, 径のぼろり土粒あり
3. 褐色土(1ha7YR3/4), しまり中々強い, 粘性中々あり, 硬さほとんどない
4. 褐色土(1ha7YR3/3), しまり中々あり, 粘性中々あり, 硬さほとんどない
5. 赤土(1ha7-2YR3/1), しまり中々, 粘性あり, 硬さなし
6. 黄赤土(1ha7-5YR4/6), しまり強い, 粘性中々強い, 硬さ中々強い
7. 黄赤土(1ha7-5YR4/6), しまり中々強い, 粘性中々強い, 1cm程度の塊を含む(細砂)



A2



A1

【A1 トレンチ】

1. 黄褐色土(1ha7-8YR2/3), しまり中々あり, 粘性あり, 硬なし(土砂)
2. 褐色土(1ha7-5YR4/4), しまりなし, 粘性なし, 硬なし
3. 黄褐色土(1ha7-5YR2/3), しまり中々あり, 粘性中々, 硬なし
4. 黄褐色土(1ha7-8YR2/3), しまりなし, 粘性なし, 硬なし
5. 赤土(1ha7-2YR3/1), しまりあり, 粘性なし, 硬なし
6. 黄赤土(1ha7-5YR4/6), しまりあり, 粘性なし, 硬なし(堆積)

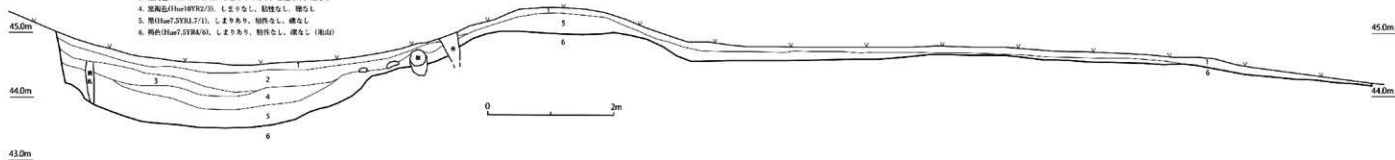


図3-7 A1・2トレンチ平面図・土層図 (S=1/60)

は、この通路状遺構が古墳の築造に伴って当初から造成されたものか、後世の掘乱などによるものかという点であるが、これについては、通路状遺構から周溝付近までトレンチ内の埋土が水平堆積で連続しており、堆積層を切り込むような人為的な不連続面が確認されなかったことから、古墳の造営後に自然に埋没した結果であると理解された（B-B'とF-F'）。このため、通路状遺構は古墳築造当時において造られ、人為的に埋め戻された形跡がないことから、一定期間の間、実際に墳丘・周溝と周堤外・丘陵裾部との間をつなぐ「通路」として機能していたものと考えられる。トレンチ内では、僅かながら須恵器なども出土した。この他に周堤東側平坦面上から幅約40cm、長さ約4m、深さ約10cmでやや屈曲する浅い溝状遺構（溝1）が検出されている。性格は不明であるが、通路状遺構に沿うように掘削されていることから、通路状遺構に関連する何らかの施設である可能性も想定される。また本トレンチでは、周溝内部および南側の周堤北端において弥生時代の貯蔵穴とみられる袋状堅穴の底部付近が検出され（土坑2・3）、周堤東側平坦面では、径約0.8mの円形ピットを検出しており、同様の袋状堅穴の上面と想定された（土坑1）。弥生時代の遺跡の調査が目的ではないため、検出面の確認にとどめ、埋め戻している。出土した弥生時代の遺構と遺物については第4章で報告しているのでそちらを御参照願いたい。

(5) E トレンチの調査（図3-10下）

D トレンチの北側、後円部裾部から周堤および周堤外側の平坦面までの範囲約15.5mでE トレンチを設定した。ここでも墳丘裾部に段状の地山整形が確認でき、墳丘一段目が地山削り出しであることが確認できた。周溝の深さは現在の堆積層の地表面から約1mで、幅は墳丘裾から周堤の立ち上がりの部分までで約3.4m、周堤の周溝側の上端までの高さは約1.6m、周堤の幅は周溝側の上端から北東側平坦面までで約3.9mであった。

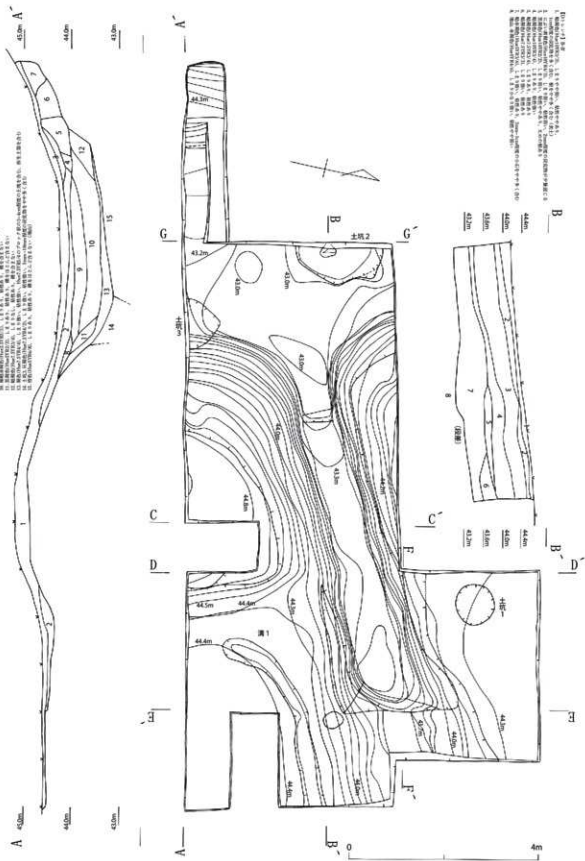
(6) F トレンチの調査（図3-10上）

E トレンチの西側、墳丘の長軸方向に一致すると想定する位置に長さ約12mでF トレンチを設定した。ここでは墳丘端部がやや切り立つような形で検出されており、他のトレンチと同様に、周溝から墳丘一段目まで地山削り出しであることを確認した。周溝の深さは現在の堆積層の地表面から約1.2mで、幅は墳丘裾から周堤の立ち上がりの部分までで約3.5m、周堤の周溝側の上端までの高さは約1.3m、周堤の幅は周溝側の上端から北東側平坦面までで約3.1mであった。以下で検討するG トレンチやH・I トレンチなどで、墳丘の長軸方向・くびれ部・前方部隅角部などの各地点でピットが検出されており、古墳の築造に伴うとみた場合にはF トレンチの位置にもピットの存在が想定されるが、50cm幅の掘削範囲では確認できていない。

(7) G トレンチの調査（図3-11）

墳丘南側の長軸方向にあたる位置にG トレンチを設定した。前方部の長軸端部付近は、測量図作成時点で僅かに凹んでいたため、後世の破壊などによるものかを確認するために周辺を拡張して掘削を行った。周溝から周堤にかけては他のトレンチと同様に地山削り出しによる整形であり、周溝の深さは表土層から約1.4m、周堤の幅は周溝側端部から南側平坦面との段差までで約3.6mを測る。周堤の最高所から周溝最深部までの比高差が約1.8mで、傾斜もやや急であるためか、周堤側前方部中心の正面付近にあたる位置の斜面には地山を段状に整形している痕跡が認められた（土層図西側4層と8層の間と9層付近）。また周溝の最深部で墳丘長軸方向に一致する位置に、径0.4～0.5m、深さ約0.4m

1. 地質調査の目的
 2. 調査の経緯
 3. 調査の範囲
 4. 調査の方法
 5. 調査の結果
 6. 調査の結論
 7. 調査の補遺
 8. 調査の参考資料
 9. 調査の担当者
 10. 調査の年月日



1. 地質調査の目的
 2. 調査の経緯
 3. 調査の範囲
 4. 調査の方法
 5. 調査の結果
 6. 調査の結論
 7. 調査の補遺
 8. 調査の参考資料
 9. 調査の担当者
 10. 調査の年月日

図3-9-1 Dトレンチ平面図・土層図 (S=1/80)

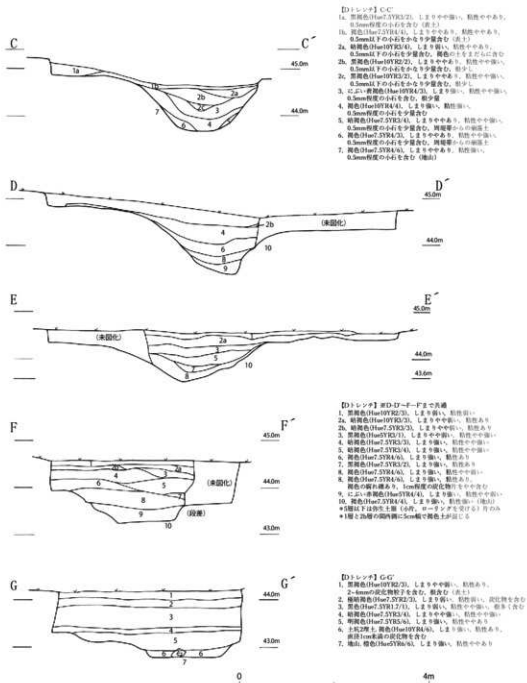


図3-9-2 Dトレンチ平面図・土層図続き (S=1/80)

のビットを検出した。H・Iトレンチなどでもみられるため、古墳の築造に伴うビットの可能性が想定される。もし何か柱状のものを立てたと想定した場合も、最終的には抜き取られ、埋め戻された状態が墳丘の完成形態とみられる。墳丘側では、西壁の31層～16層が墳丘盛土であり、31層下面までが墳丘一段目の地山削り出しによる整形面であるとみられる。このうち、29層～31層は10～20cm前後でやや盛土層が厚く、28層～16層は5～10cm前後の薄い盛土を互層で積み上げている。この下部の厚い盛土層はやや濃いオレンジ色味の層で、墳丘一段目の地山整形の後に、墳丘全体で一段目を平坦に揃えるための一次盛土と考えられる。その後、28層以上の薄い互層により二次盛土が行われたと想定される。一次盛土はL・N・Oトレンチなどで確認でき、地山削り出しの際に旧地形がやや低い地点に施されたものと考えられる。また、周堤側周溝斜面で確認された段状の整形が前方部墳丘斜面でも確認できる（5層下面、29層西端、27・28層西側）。階段というには段差が大きすぎるが、幅約1.3mで平坦面が面的に広がっていること、またこの墳丘主軸上に位置する前方部斜面は前方部の完成後に僅かに凹んだ状態で、他のDトレンチやLトレンチ同様、古墳の完成後にそのまま埋没していることとみられることから、墳丘への登り口のような場所であった可能性も考えられる。また同様の段状の地山整形は、Dトレンチの通路状遺構およびLトレンチの一段目斜面でも確認でき、天神山古墳の特徴とみられる。

(8) Hトレンチの調査（図3-12）

前方部の南東隅角部分にあたる位置から東側の周堤斜面にかけてH1トレンチを、後にその1m南側で周溝隅角部分にあたる位置にH2トレンチを設定した。H1トレンチでは地山削り出しによる前方部の隅角を良好に検出し、あわせてやや前方部中軸線寄りの位置に径約0.4m、深さ0.45mのビットを検出した。埋土は固く締まった土壌であり、位置関係と検出面から、古墳の築造に伴って設置されたものと考えられた。周堤側は下端に段差が認められる。周堤最高所と周溝最深部の比高差は約1.9mである。H2トレンチでは周堤側の立ち上がりを中心に掘削を行ったが、トレンチの範囲内では立ち上がりを確認できず、最終的に東南隅部分について地山部分を下層まで掘り進めている。前方部隅角から周堤側の立ち上がりまでの周溝最深部の幅は約3mであり、概ねこの幅を基準として墳丘全体に周溝（および周堤）が掘削されているものと考えられる。

(9) Iトレンチの調査（図3-13）

東側のくびれ部付近で、墳丘一段目から周堤の立ち上がりにかけて細長くIトレンチを設定した。あわせて、くびれ部付近を面的に確認するために幅約3m×3.5mで拡張した。くびれ部付近の周溝底部は平坦面がやや広く、幅約5.5m前後であることが確認でき、周堤側には若干の段差が確認できた。墳丘裾部分も段差がみられ標高45.2mのあたりからやや厚めの盛土層が確認でき、Gトレンチで検出した一次盛土と考えられる。標高46.0m付近が一段目テラス面となる。また3m×3.5mの拡張部分では、くびれ部の墳丘一段目を面的に確認し、地山削り出しによる墳丘斜面を良好に検出した。この中でちょうどくびれ部の屈曲点にあたる位置から、径約0.3m、深さ約0.5mのビットを1基検出した。垂直に掘り込まれており、かつ埋土も固く締まっていたことから、G・Hトレンチと同様に、墳丘の築造に伴うビットと想定された。また、墳丘一段目斜面の中ほどに弥生時代の貯蔵穴とみられる範囲を検出した。貯蔵穴の検出面からすれば、弥生時代の地表面は一段目平坦面付近であったものと考えられる。

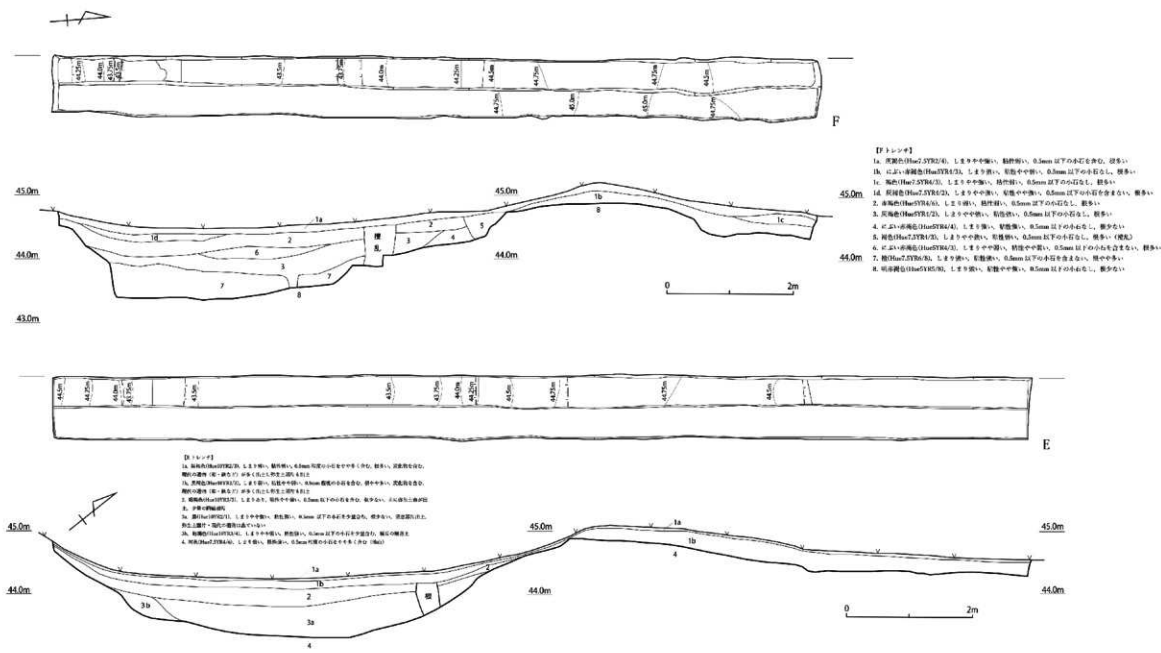


図3-10 E・Fトレンチ平面図・土層図 (S=1/60)

(10) J トレンチの調査 (図 3-8 : B・C トレンチと同じ)

C トレンチの南、H トレンチの北側で、墳丘から周堤、東側平坦面にかけて細長く約 26m の長さで J トレンチを設定した。概ね C・H トレンチと同様に、墳丘斜面と周堤周辺の地山整形を確認した。墳裾部では段差がみられ、標高 45.9m 付近で一段目の平坦面を検出しているが、ここでは G トレンチなどでみられた一次盛土は確認できず、地山削り出しによる平坦面整形と想定された。少なくとも平坦面の斜面側端部付近では一次盛土が施されていないが、後述する P トレンチで面的に盛土が確認できるため、墳丘側のもう少し高い部分では盛土による造成が行われているものと考えられる。なお、周堤上面付近で弥生時代の浅い土坑 1 を確認した。土層図では 16 層にあたる。

(11) K トレンチの調査 (図 3-14)

前方面の西南隅角付近で、墳丘から周堤にかけて長軸方向に並行して K トレンチを設定した。隅角周堤については 3m × 3m の範囲で拡張した。墳丘裾部・周溝・周堤の立ち上がりを良好に検出しており、土層図では段差状の起伏が所々でみられるが、面的に広がっていないことから、G トレンチなどで確認した段状の状況とは異なり、これは地山削り出しの際の凸凹によるものと考えられる。墳丘の斜面を検出しているが、トレンチの西側に現在も利用されている天満宮の遊歩道があり、掘削を行っていないため、厳密には隅角そのものの部分を検出できていない。このため H トレンチで検出したようなピットの存在の有無の確認を目的としていたが、本トレンチの拡張区の範囲内では確認できなかった。存在するとすれば、拡張区よりさらに西側数 m の範囲に位置するものと考えられる。

(12) M トレンチの調査 (図 3-15)

後門部西側、L トレンチの北側で、墳丘二段目斜面付近から周溝、周堤およびその外側の平坦面にかけて細長く M トレンチを設定した。墳丘の二段目付近までトレンチを拡張したのはこのときが最初である。この結果、標高 46.0m 付近で幅約 4m で一段目の平坦面を検出した。この部分は地山削り出しであり、一次盛土は確認されなかった。墳丘二段目斜面は二次盛土であり、掘削はしていないが 10 ~ 20cm 前後の互層の盛土を確認した。周溝は底部に幅広の平坦面を検出した。周堤上面付近には大きな木があり、また西側平坦面にかけてもやや削平を受けているものとみられる。M トレンチの西側から緩やかに低く傾斜する地形であり、周堤西側の平坦な部分周辺までが古墳の築造に伴う造成の範囲であることが想定される。

(13) N トレンチの調査 (図 3-16)

I トレンチの西側、墳丘一段目平坦面付近に 3m × 6m の範囲で N トレンチを設定した。一段目平坦面 (テラス面) の幅等を確認する目的で設定したものであるが、当初の予想よりも堆積が厚かったため、一段目平坦面を検出できたのは北側半分 (3m 四方) のみで、南側半分については、調査日程の関係で、表土剥ぎを行った後に堆積層を確認した時点で掘削を中断している。北側半分では、面的に盛土による平坦面を検出しており、また南北 3m の範囲内で、北 2m 分と南 1m 分付近の間で盛土の色調が異なっていたため、一次盛土を面的に造成した範囲を示すものと考えられた (北側を盛土 A、南側を盛土 B と表記)。その上で、トレンチ北壁に沿って墳丘二段目斜面側に約 50cm 幅で約 1m の範囲で拡張し、墳丘斜面を検出した。ここでは厚さ 5 ~ 15cm 前後の互層の盛土が確認でき、墳丘二段目の二次盛土と考えられた。全体として、一段目平坦面がやや厚めの一次盛土で幅広く造成されていることが確認できた。

【H1・H2トレンチ断面】

1. 地層①(No=4079(1))、しりりり、粘性弱い、1m程度の中心を占む
2. 地層②(No=4079(2))、しりりり、粘性弱い、1m程度の中心を占む
3. 地層③(No=4079(3))、しりりり、粘性弱い、硬なし
4. 地層④(No=4079(4))、しりりり、粘性弱い、硬なし、粘土を認め多く含む
5. 地層⑤(No=7578(1))、しりりり、粘性弱い、硬なし
6. 地層⑥(No=7578(2))、しりりり、粘性弱い、硬なし(崩壊)
7. 地層⑦(No=4079(5))、しりりり、粘性弱い、硬なし

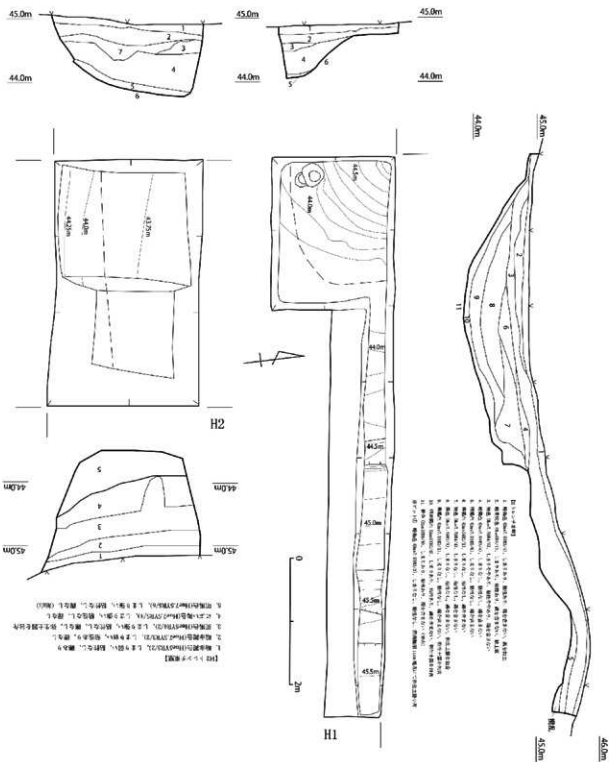


図3-12 Hトレンチ平面図・土層図 (S=1/60)

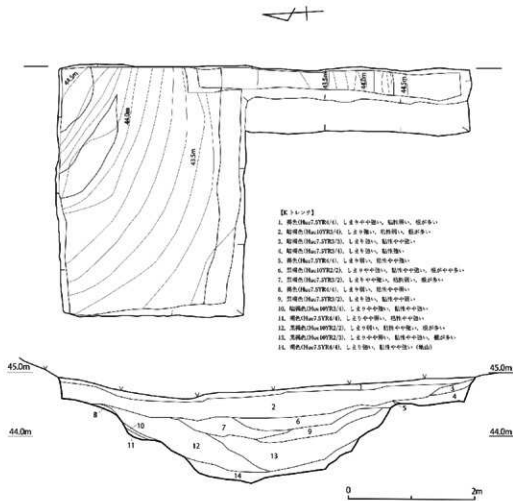


図3-14 Kトレンチ平面図・土層図 (S=1/60)

(14) O トレンチの調査 (図 3-17)

I トレンチ・N トレンチの北側、一段目平坦面に $1\text{m} \times 7\text{m}$ の範囲で設定し、填丘二段目斜面の 1m 部分から約 $3\text{m} \times 1\text{m}$ の幅で拡張した。南側に $2\text{m} \times 2\text{m}$ の範囲で表土剥ぎを行ったが、調査日程の関係もあってそれ以上の掘削は行っていない。本トレンチでは、全体にわたって明るい地山面を検出しており、G トレンチやN トレンチなどで検出した一次盛土は確認できなかった。填丘二段目斜面は、厚さ 10cm 前後の薄い互層による盛土で造成されている。一段目の平坦面の幅は約 4m である。周溝側は標高 46.2m 付近から始まり、二段目斜面の傾斜は 46.4m 付近から始まる。本トレンチで特徴的であるのは、中央に溝状遺構が検出されたことである。長さ約 4m 、幅約 0.8m で、一部分のみ掘削したところ、深さは約 20cm であった。埋土は暗褐色で粘質がつよく、黄色と黒色の粒子がブロックで混じっている。填丘二段目の中央部から一段目斜面に向けて延びており、墓道・羨道の開口方向とは別方向で石室から続く排水施設などの可能性も想定された。

(15) P トレンチの調査 (図 3-18)

J トレンチに近く、N トレンチの南側の填丘一段目平坦面付近に、 $1\text{m} \times 5\text{m}$ で設定し、二段目斜面側について幅 $1\text{m} \times$ 長さ 2m で拡張した。さらに南側に $2\text{m} \times 3\text{m}$ の範囲で表土剥ぎを行っているが、調査日程の関係でそれ以上の掘削は行っていない。本トレンチでは、全体として一段目平坦面としての一次盛土層を検出している。平坦面の幅はやや狭く、 2.4m ほどである。平坦面の標高は 46.8m 前後で、他のトレンチと比べてもやや高い。一段目斜面はやや掘り過ぎており、土層断面により本来の墳

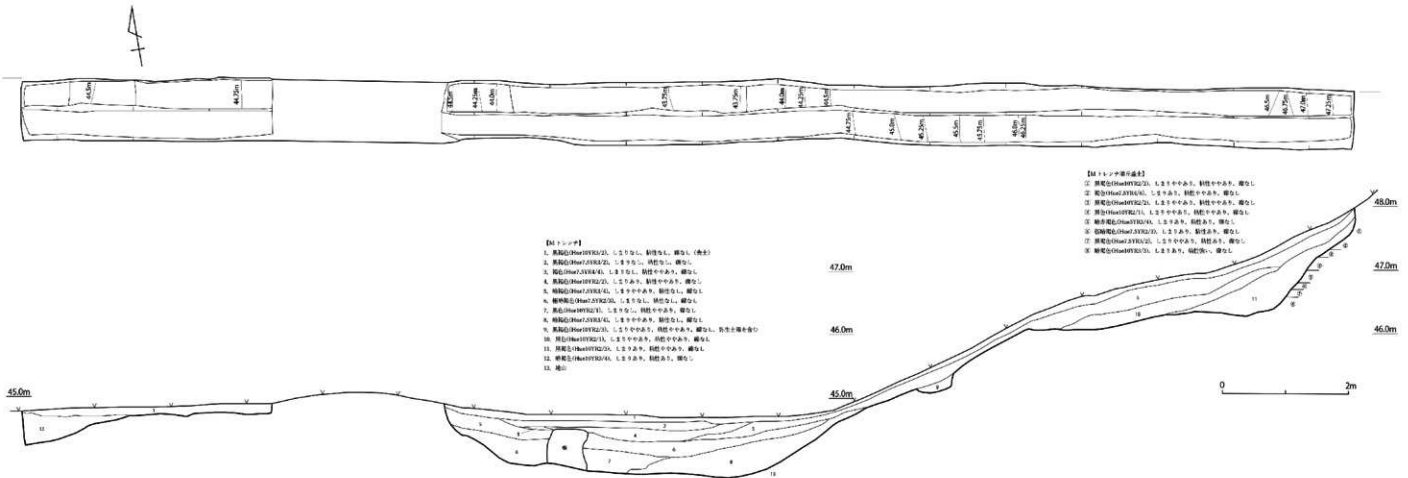


図3-15 Mトレンチ平面図・土層図 (S=1/60)

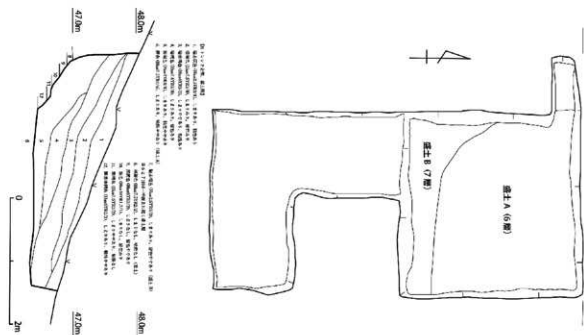


図3-16 Nトレンチ平面図・土層図 (S=1/60)

丘斜面を検出している。トレンチ西側の壁面において、厚さ10～20cm前後で幅30～50cm前後の細かい互層による盛土の造成面を確認した。各層の幅と厚さが盛土の単位を示すものとみられる。

(16) 小結

以上、A～Pトレンチまでの各調査区とその成果について述べてきた。全体として墳丘一段目と周溝、周堤と周堤東側平坦面について、盛土・地山整形・範囲確認を目的として調査を行い、墳丘形態復元の基礎情報を得ることができた。ただし、必要最小限のトレンチ設定しか行っていないため、特に墳丘二段目の範囲確認については不十分な点があり、今後の課題として残されている。

調査の過程においては、比較的早い段階でDトレンチ内に通路状遺構を確認し、また後円部東側斜面付近に数カ所の凹みがみられたことから、当初は墳丘東側に主体部の開口部が存在する可能性も想定された。他方で、これらのトレンチ（Lトレンチ以外）では後述するように須恵器などの古墳時代遺物の出土が極めて少ないことから、墳丘の東側は、通路状遺構のような「出入口」などがあつたとしても、いわば墳丘の「裏側」であることが可能性として考えられるようになった。逆にLトレンチ周辺においては調査以前から須恵器などが表採されていたこともあり、あらためてこの付近が他の調査区周辺と性格が異なる地点であることが予想された。この点をふまえて、Lトレンチの調査に着手したのが2019年度である。ここで節をあらため、Lトレンチについて報告する。

第3節 Lトレンチの調査と出土遺物

(1) Lトレンチの調査概要 (図3-19・20・21)

Lトレンチの設定に際して、周辺を事前に踏査した結果、一段目平坦面が他の箇所よりもやや広く墳丘側に入り込んでいること、また社殿の築造にあたってくびれ部付近の墳丘が大きく削り込まれているため、この付近で主体部の墓道などが検出される可能性が想定された。この点に鑑み、社殿・参道の方向および削られた墳丘の面とほぼ平行になるような位置に、長さ約11m、幅1mでLトレンチ

【Oトレンチ】

1. 層相表 (Sheet:19702/1), Lより深い、砂層なし
2. 層相表 (Sheet:19702/2), Lより浅い中層部、砂層あり
3. 層相表 (Sheet:19702/3), Lより浅い中層部、砂層あり、粗砂あり
4. Lより浅い中層部 (Sheet:19702/4), Lより浅い中層部、粗砂あり
5. Lより浅い中層部 (Sheet:19702/5), Lより浅い中層部、粗砂あり
6. Lより浅い中層部 (Sheet:19702/6), Lより浅い中層部、粗砂あり
7. 層相表 (Sheet:19702/7), Lより浅い中層部、粗砂あり
8. 層相表 (Sheet:19702/8), Lより浅い中層部、粗砂あり
9. Lより浅い中層部 (Sheet:19702/9), Lより浅い中層部、粗砂あり
10. 層相表 (Sheet:19702/10), Lより浅い中層部、粗砂あり
11. 層相表 (Sheet:19702/11), Lより浅い中層部、粗砂あり
12. 層相表 (Sheet:19702/12), Lより浅い中層部、粗砂あり
13. 層相表 (Sheet:19702/13), Lより浅い中層部、粗砂あり
14. 層相表 (Sheet:19702/14), Lより浅い中層部、粗砂あり
15. 層相表 (Sheet:19702/15), Lより浅い中層部、粗砂あり
16. 層相表 (Sheet:19702/16), Lより浅い中層部、粗砂あり
17. 層相表 (Sheet:19702/17), Lより浅い中層部、粗砂あり
18. 層相表 (Sheet:19702/18), Lより浅い中層部、粗砂あり
19. 層相表 (Sheet:19702/19), Lより浅い中層部、粗砂あり
20. 層相表 (Sheet:19702/20), Lより浅い中層部、粗砂あり
21. 層相表 (Sheet:19702/21), Lより浅い中層部、粗砂あり
22. 層相表 (Sheet:19702/22), Lより浅い中層部、粗砂あり
23. 層相表 (Sheet:19702/23), Lより浅い中層部、粗砂あり
24. 層相表 (Sheet:19702/24), Lより浅い中層部、粗砂あり
25. 層相表 (Sheet:19702/25), Lより浅い中層部、粗砂あり
26. 層相表 (Sheet:19702/26), Lより浅い中層部、粗砂あり
27. 層相表 (Sheet:19702/27), Lより浅い中層部、粗砂あり
28. 層相表 (Sheet:19702/28), Lより浅い中層部、粗砂あり
29. 層相表 (Sheet:19702/29), Lより浅い中層部、粗砂あり
30. 層相表 (Sheet:19702/30), Lより浅い中層部、粗砂あり
31. 層相表 (Sheet:19702/31), Lより浅い中層部、粗砂あり
32. 層相表 (Sheet:19702/32), Lより浅い中層部、粗砂あり
33. 層相表 (Sheet:19702/33), Lより浅い中層部、粗砂あり
34. 層相表 (Sheet:19702/34), Lより浅い中層部、粗砂あり
35. 層相表 (Sheet:19702/35), Lより浅い中層部、粗砂あり
36. 層相表 (Sheet:19702/36), Lより浅い中層部、粗砂あり
37. Lより浅い中層部 (Sheet:19702/37), Lより浅い中層部、粗砂あり
38. 層相表 (Sheet:19702/38), Lより浅い中層部、粗砂あり

図1 層相表 (Sheet:19702/38) Lより浅い中層部、粗砂あり、粗砂ありの剖面図



図3-17 Oトレンチ平面図・土層図 (S=1/60)

- Figure 18 shows the plan view and soil layers of the P trench. The plan view is a rectangular layout with a width of 48.0m on the left and a length of 47.0m on the bottom. It is divided into several sections: a large rectangular area on the left, a smaller rectangular area on the right, and a central area with a complex, wavy pattern representing soil layers. The soil layers are numbered from 1 to 30, with 1 at the top and 30 at the bottom. The soil layers are labeled with their respective soil types and depths: 1. 砂質粘土 (Sandy clay), 2. 粘質土 (Clayey soil), 3. 砂質土 (Sandy soil), 4. 粘質土 (Clayey soil), 5. 砂質土 (Sandy soil), 6. 粘質土 (Clayey soil), 7. 砂質土 (Sandy soil), 8. 粘質土 (Clayey soil), 9. 砂質土 (Sandy soil), 10. 粘質土 (Clayey soil), 11. 砂質土 (Sandy soil), 12. 粘質土 (Clayey soil), 13. 砂質土 (Sandy soil), 14. 粘質土 (Clayey soil), 15. 砂質土 (Sandy soil), 16. 粘質土 (Clayey soil), 17. 砂質土 (Sandy soil), 18. 粘質土 (Clayey soil), 19. 砂質土 (Sandy soil), 20. 粘質土 (Clayey soil), 21. 砂質土 (Sandy soil), 22. 粘質土 (Clayey soil), 23. 砂質土 (Sandy soil), 24. 粘質土 (Clayey soil), 25. 砂質土 (Sandy soil), 26. 粘質土 (Clayey soil), 27. 砂質土 (Sandy soil), 28. 粘質土 (Clayey soil), 29. 砂質土 (Sandy soil), 30. 粘質土 (Clayey soil).

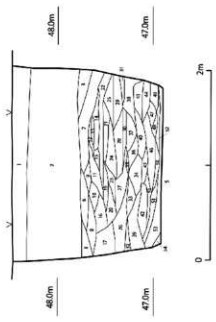
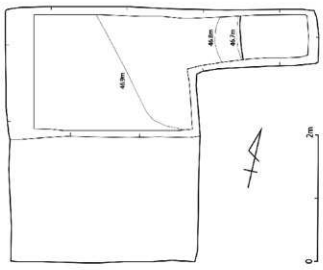
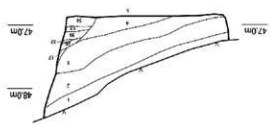
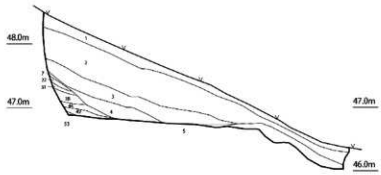
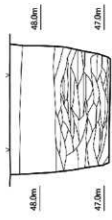


図3-18 Pトレンチ平面図・土層図 (S=1/60, 西壁のみS=1/40の拡大図あり)

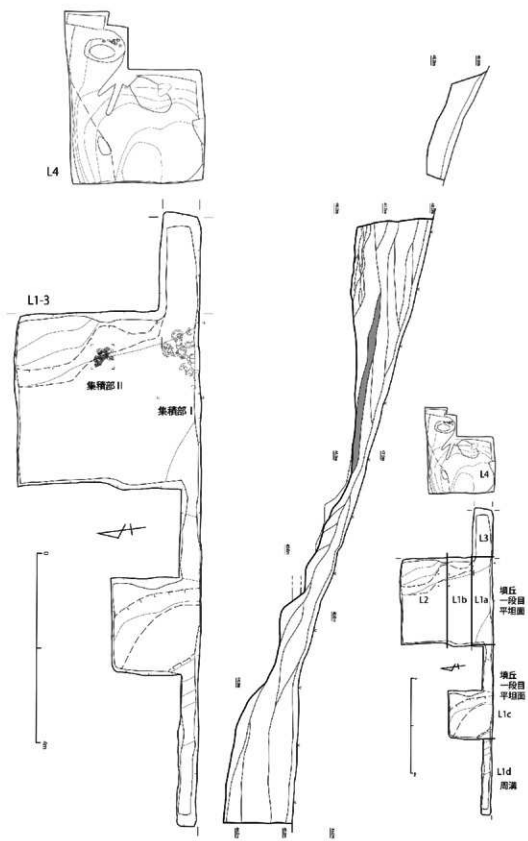


図3-19 Lトレンチ全体図 (S=1/80)

【L1-3】トレンチ

1. 緑サテライト褐色(Hue2.5Y3/3)、しまり強い、粘性なし、一部層に褐色、殻・小石、瓦が多い
2. 灰褐色(Hue10YR2/2)、しまりやや弱い、粘性あり、土の質(土)がある、遺跡に伴う基壇の礎上
3. 土に白褐色(Hue7.5YR3/3)、しまり強い、粘性やや弱い、褐色の塊、褐色の面がある、粗砂、一部層に砂や礫の混入
4. 灰褐色(Hue7.5YR3/3)、しまりやや弱い、粘性あり、小骨等に褐色殻が混じる、粗砂あり、遺跡に伴う基壇の礎上
5. 土に白褐色(Hue7.5YR3/3)、しまりやや弱い、粘性やや弱い、褐色の塊やサテライト褐色の面がある、遺跡に伴う基壇の礎上
6. 灰褐色(Hue7.5YR3/3)、しまりやや弱い、粘性あり、塊状に褐色と褐色、粗砂あり、遺跡に伴う基壇の礎上
7. 灰褐色(Hue7.5YR3/2)、しまりやや弱い、粘性あり、粗砂あり、褐色の塊や面がある、遺跡に伴う基壇の礎上
- 8a. 暗褐色(Hue10YR3/4)、しまりやや強い、粘性あり、褐色の塊や面がある、遺跡に伴う基壇の礎上
- 8b. 暗褐色(Hue10YR3/4)、しまりやや強い、粘性あり、褐色の塊や面がある、遺跡に伴う基壇の礎上
9. 土に白褐色(Hue10YR3/3)、しまりやや弱い、粘性なし、塊状に褐色、粗砂あり、多量の瓦片混入、次層群に伴う土、褐色磁器片

10. 暗褐色(Hue10YR3/2)、しまり強い、粘性あり、褐色の塊や面がある
11. 赤褐色(Hue7.5YR4/3)、しまり強い、粘性あり、粘性なし、粗砂あり
12. 土に白褐色(Hue7.5YR3/3)、しまり強い、粘性なし、一部層に褐色がある
13. 灰褐色(Hue8YR4/2)、しまり強い、粘性あり、塊状に暗褐色、土褐色層あり
14. 土に白褐色(Hue7.5YR3/3)、しまりやや弱い、粘性あり、粗砂あり、一部層に暗褐色がある
15. 土に白褐色(Hue8YR4/3)、しまりやや弱い、粘性あり
16. 暗褐色(Hue7.5YR3/3)、しまり強い、粘性あり
17. 暗褐色(Hue7.5YR3/3)、しまりやや弱い、粘性あり
18. 褐色(Hue7.5YR4/3)、しまりやや弱い、粘性あり、一部層に暗褐色がある
19. 暗褐色(Hue7.5YR3/2)、しまりやや弱い、粘性あり、一部層に褐色がある
20. 褐色(Hue7.5YR4/6)、しまり強い、粘性あり、一部層に暗褐色あり
21. 暗褐色(Hue7.5YR3/2)、しまり強い、粘性やや弱い、粗砂あり
22. 褐色(Hue7.5YR4/3)、しまり強い、粘性あり
23. 暗褐色(Hue7.5YR3/2)、しまり強い、粘性やや弱い、粗砂あり
24. 土に白褐色(Hue7.5YR3/3)、しまり強い、粘性あり、褐色の塊や面がある、粗砂あり

25. 褐色(Hue7.5YR4/6)、しまりやや弱い、粘性あり、明褐色が部分的にある
26. 褐色(Hue7.5YR4/6)、しまりやや弱い、粘性やや弱い、粘性中量あり、1mm程度の砂粒をわずかに含む
27. 褐色土層(Hue10YR2/1)、しまり強い、粘性あり、下部から暗褐色土層
28. 暗褐色(Hue10YR3/4)、しまり強い、粘性あり
29. 暗褐色(Hue10YR3/4)、しまり強い、粘性あり、粗砂あり、小石あり、近隣遺物あり(X)
30. 土に白褐色(Hue7.5YR3/4)、しまり強い、粘性あり
31. 暗褐色(Hue7.5YR3/4)、しまりやや弱い、粘性やや弱い
32. 褐色(Hue7.5YR2/4)、しまり強い、粘性強い(一次土層)
33. 暗褐色(Hue7.5YR3/4)、しまり強い、粘性強い、暗褐色のブロックあり
34. 暗褐色(Hue7.5YR3/3)、しまり強い、粘性強い
35. 暗褐色(Hue7.5YR3/2)、しまりやや弱い、粘性やや弱い、粗砂あり
36. 赤褐色(Hue5YR3/2)、しまりやや弱い、粘性中量あり、粗砂あり、褐色層あり
37. 暗褐色(Hue7.5YR3/2)、しまりやや弱い、粘性あり
38. 暗褐色(Hue7.5YR3/2)、しまり強い、粘性中量あり、暗褐色のブロックあり(土山)
39. 暗褐色(Hue7.5YR3/2)、しまりやや弱い、粘性中量あり、粗砂あり、暗褐色のブロック(一次土層)
40. 灰褐色(Hue7.5YR4/2)、しまり強い、粘性なし、粗砂あり、暗褐色の塊や面がある、暗褐色の塊(一次土層)
41. 暗褐色(Hue7.5YR3/2)、しまりやや弱い、粘性中量あり、粗砂あり
42. 灰褐色(Hue7.5YR3/2)、しまりやや弱い、粘性中量あり、粗砂あり、褐色層あり
43. 暗褐色(Hue7.5YR3/2)、しまりやや弱い、粘性中量あり
44. 灰褐色(Hue7.5YR3/2)、しまり強い、粘性あり、褐色の面がある
45. 暗褐色(Hue7.5YR3/2)、しまりやや弱い、粘性中量あり、粗砂あり、暗褐色の塊や面がある、暗褐色の塊の層あり
46. 灰褐色(Hue7.5YR4/2)、しまり強い、粘性なし、粗砂あり、暗褐色の塊や面がある、暗褐色の塊の層あり
47. 褐色(Hue7.5YR4/6)、しまりやや弱い、粘性中量あり、1mm程度の砂粒をわずかに含む

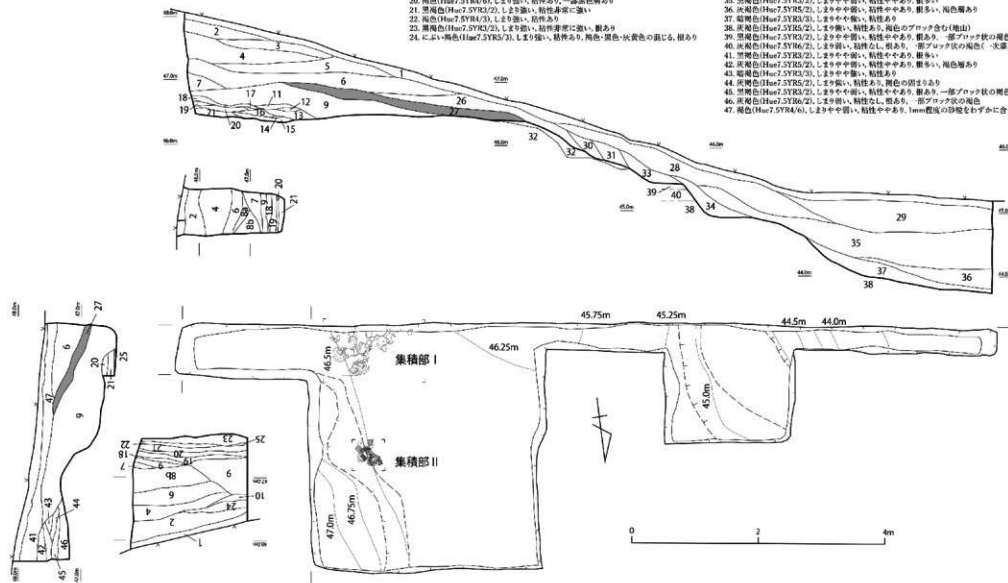


図320 L1~L3トレンチ平面図・土層図 (S=1/60)

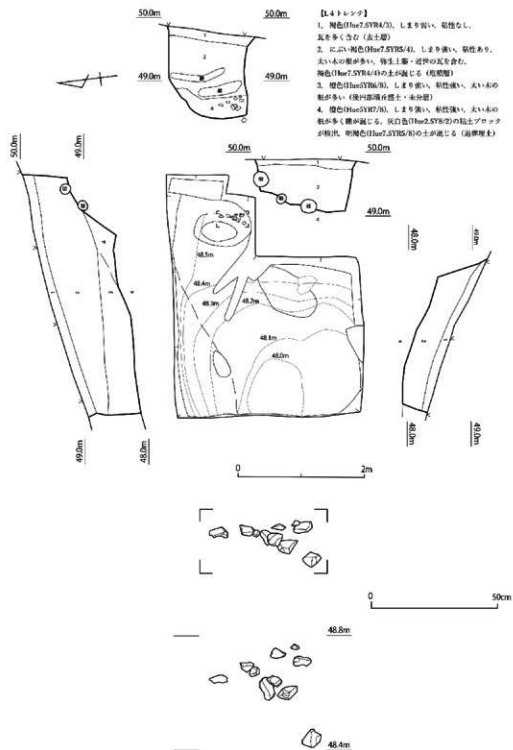


図3-21 L4トレンチ平面図・土層図 (S=1/60)・川原石出土状況 (S=1/15)

を設定した(図3-6)。この結果、表土剥ぎ直後から特に平坦面周辺を中心として多量の須恵器が出土したため、層位の堆積状況に留意しながら掘削を進めた。2019～2020年度にかけて拡張を重ねた箇所をL1～L3トレンチ、2022年度にL3トレンチの東側に約50cmの間隔を空けて設定したトレンチをL4と呼称しており、以下この呼称を用いる。Lトレンチ全体の配置を示したものが図3-19である。以下では、調査の進展に合わせてL1～L3トレンチとL4トレンチを分けて説明する。

2019年度は、周溝から一段目斜面、一段目平坦面にかけて幅1mで細長いトレンチを設定した。これをL1トレンチと呼んでいる。一段目斜面については2m四方で拡張したところ、Gトレンチなどでもみられたように、段状に造成されていることが確認された。須恵器の出土も多く、原位置を保っているものは殆どみられないことから、平坦面から流れ込んだものが大半であるものと想定された。周溝については、近世から近代にかけて、社殿の建て替えに伴い近世のいぶし瓦などの部材や礎などが廃棄されており、その分で厚く硬い堆積層が形成されたことにより全体の掘削が困難であったため、周溝側の検出までを行うことは断念し、設定範囲の中で深さを確認することにとどめた。参道付近の現地表面から周溝底部までの深さは約1.5mであった。

一段目の平坦面については、堆積層を掘り進めたところ、後述する黒色土層の面が検出された。この黒色土層を除去し、当初設定した1m幅で掘削したところ、灰黒色の土層中から、多量の須恵器・土師器が原位置を保った状態で集積する形で出土した(図版24・25)。これを集積部Ⅰと呼称している。2019年度は、北側に1m幅で拡張したものの、集積部Ⅰがさらに北側に続いている可能性もあったことから、1m×2mの範囲をブロック状に掘り残した状態で一度埋め戻した(集積部Ⅰの土器類は、出土状況を記録の上で取り上げを行っている)。

翌2020年度には、北側にさらに拡張区(L2トレンチと呼称)を設定し、全体として掘り下げを行ったところ、広い範囲で多量の土器類の破片が出土したものの、L2トレンチの中央に位置する大きな木の根による攪乱が進んでおり、原位置を保っているものが殆どみられなかったことから、後述するように大きくL1a・L1b・L2という形で区画設定を行って順次取り上げを行った。また前年度に掘り残したブロック状の部分(L1b)を掘り下げたところ、この部分には集積部Ⅰの土器類は続いておらず、この部分での土器類の出土は少なかった。一方、北側拡張区(L2)で大甕の破片などを主体とする集積部Ⅱを確認した。また一段目の平坦面は、標高46.3～46.4m付近で全体として一次盛土により広く造成されていることを確認し、L2トレンチからL1トレンチ側にかけて盛土が東側の墳丘二段目斜面に入り込むような形で広がっていることから、L1・2トレンチが主体部の墓道前面の前庭部付近(石室入口に向かって左手付近)である可能性が想定された。このため、墓道の方向と範囲を確認することを目的として、L1トレンチの延長上に幅50cm・長さ約2mでL3トレンチを設定して掘削を行った。この結果、ここからは土器類が全く出土せず、墓道を埋め戻した範囲である可能性が高く、墓道の埋土自体はさらに墳丘二段目斜面側(東側)に続くものと考えられた。また墳丘一段目の平坦面が一次盛土とみられる一方で、二段目斜面については他のトレンチと同様に薄い互層の二次盛土によって造成されたことをL3トレンチの下層にて確認した。

この点をふまえ、翌年の2021年度にL1トレンチの北側に別途トレンチを設定し、墓道および主体部の検出を行う方針を決定したが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、2021年度は一年間丸々発掘調査が実施できなかったため、調査は中断した。その点も含め、L3トレンチの拡張・延長という形ではなく、L1～L3トレンチとは切り離して、約50cmの間隔を置いて2022年度に新たにL4トレンチを設定して南北3m×東西2.5mの範囲で広く掘削を行ったところ、トレンチの北側で墳丘二段目の盛土を、その南側に広い範囲で墓道の埋土とみられる黒色土層を検出した。この埋土の中には数

カ所で約30～40cm四方の粘土のブロックが認められ、埋土自体も含め、別の場所から埋め戻しのために土を持ち込んだものと想定された。L4トレンチの範囲は、横穴式石室の羨道部入口石材の検出を課題として東側の後門部中心方向に1.4m×1.2mの範囲で拡張したが、周辺に生育している木の根元周辺の土が将来的に豪雨などにより流出する危険性も想定されたため、それ以上の拡張を断念した。あわせて、トレンチ東壁の墓道埋土の突き当たり位置する部分については、検出面からやや掘り下げているが、ここから墳丘の外部から持ち込まれたとみられる川原石がまとまった形で含まれていることを確認した。この点をもとに、この周辺が羨道部の入口付近（その手前数m付近）であることを想定しつつ、この段階で調査を終了した。墓道埋土については上述の東側拡張部分付近の一部を除いて掘り下げを行っていない。あわせてこの過程で、墓道埋土検出面において後世の攪乱等が認められないことから、少なくとも墓道付近については未盗掘である可能性が高いことを確認した。

L1～L4トレンチの土層図からみると、「黒色土層」下の須恵器の集積部Ⅰの周辺はほぼ均質の埋土であり、埋葬に伴って須恵器の廃棄後に人為的に埋め戻されたものと考えられる。その上に「黒色土層」が堆積しており、その黒色土層を覆う形で26・6層が堆積している。特に6層はL4トレンチの埋土に続いているものである。以上から、黒色土層より下位の、須恵器集積部Ⅰ周辺の埋土（9層）が「初葬に伴う第一次の埋土」であり、その後黒色土層が形成された後、それを切り込む形で墓道が掘り返され（土層図の6・7層の下面）、埋葬後に26・6・7層から2層までの上位の層によって埋め戻されたものと想定された。後者を「追葬による第二次の埋土」と考えている。L4トレンチで検出した墓道埋土は、この後者の追葬による埋土である。この結果、土層の堆積状況からは、少なくとも初葬と追葬の2回にわたる埋葬の痕跡を確認することができた（詳細については第6章第3節を参照）。

(2) 須恵器の出土状況（図3-22・23・表3-1）

上述のように、須恵器および土師器については、大きく集積部のⅠとⅡの2カ所にまとまった形で出土しているほか、L1・2トレンチの一段目平坦面の全域にわたって広く須恵器・土師器片が出土した。また一段目斜面から周溝にかけても、一段目平坦面から流れ込んだとみられる破片が多く出土している。L1・2トレンチの範囲に関しては、図3-19のように大きく出土地点を区分して取り上げと注記を行っている。墳丘一段目平坦面をL1a・bとL2、墳丘一段目斜面付近をL1c、周溝内堆積層をL1dと呼称する。

調査の結果として、L1aの集積部Ⅰでは、装飾付須恵器・大型器台・広口壺、高坏などの土器類が一部は破片の状態であり、折り重なった形で、盛土の平坦面直上から出土した（図3-22）。集積部Ⅱ（L2）では、別個体の大甕の破片などが混在する形で、こちらは盛土の平坦面からやや浮いた位置で出土しており、埋め戻し途上のある段階でまとめて廃棄されたものと考えられる（図3-23）。一部の土器は集積部ⅠとⅡの間で接合することから（例：甕A）、集積部ⅠとⅡは一連の廃棄の過程を示すものと考えられる。なお、上述のように、L3トレンチ（墓道埋土）からは須恵器・土師器は全く出土せず、L4トレンチは表土下の堆積土中から近世以降の陶磁器片などが若干出土したが、追葬の埋土周辺からは須恵器・土師器等は殆ど出土せず、墓道付近は最終埋葬以降掘り返された形跡は認められなかった。

L1・2トレンチから出土した須恵器・土師器については、接合を行ったものの大半は完形に復元することができず、残りの破片はLトレンチの周辺に埋設している可能性がある。実際に、今回の調査で出土した破片と、調査以前に周辺で表採され、町で保管されていた須恵器片が接合した事例がいくつかあり、一段目平坦面から流出した破片が周辺に存在しているものと考えられる。集積部Ⅰ・Ⅱのいずれにおいても、破片の状態では複数の破片が折り重なり混在する形で出土していることから、

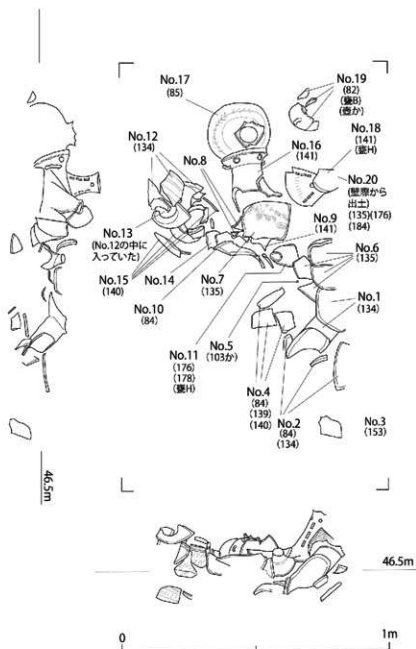


図3-22 Lトレンチ集積部Ⅰ土器類出土状況

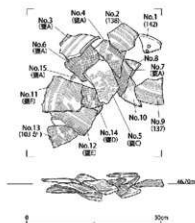


図3-23 Lトレンチ集積部Ⅱ土器類出土状況

表3-1 Lトレンチ集積部Ⅰ・Ⅱ出土土器類と接合関係

位置	集積No.	器物番号	器種	点数	接合部片の出土位置
I	No.1	134	甬台	4点	集積No.2×2点, 集積No.12×3点, L1b埴輪器×2点, L1a埴輪器×2点, L1a埴輪器×7点, L1a埴輪器×2点, L1b埴輪器×6点, L2埴輪器, L1a平断面上
	No.2	84	甕	1点	集積No.4, 集積No.10, L1a平断面上×5点, L1a平断面上, L1a埴輪器, L1b埴輪器, L2埴輪器, L2表土層×3点, 黄土
	No.2	134	甬台	2点	集積No.1×4点, 集積No.15, L1b埴輪器×2点, L1a埴輪器×2点, L1a埴輪器, L1a平断面上×7点, L1a埴輪器×2点, L1b埴輪器×6点, L2埴輪器, L1a平断面上
	No.3	153	甕A	1点	集積No.3, 集積No.4, 集積No.6, 集積No.7, 集積No.15, L1a表土層×2, L1a埴輪器×6, L1a平断面上×20, L1b埴輪器×10, L1b平断面上×2, L2表土層×2, L2埴輪器×2, L2平断面上×1点
	No.4	139	甬台	1点	なし
	No.4	84	甕	1点	集積No.2, 集積No.10, L1a平断面上×5点, L1a平断面上, L1a埴輪器, L1b埴輪器, L2埴輪器, L2表土層×3点, 黄土
	No.4	140	子持配像厨子	1点	集積No.15×10点, L1a平断面上×7点, L1a表土層, L1a埴輪器, L1b埴輪器×2点, L2表土層, L2平断面上
	No.5	1030a	甕	1点	集積No.13, L1a平断面上×2 ※接合しないが同一と考えられる(L1a平断面上×5点, L1b平断面上, L2表土層)
	No.6	135	甬台	1点	集積No.7, 集積No.20, L1a平断面上×11点
	No.7	135	甬台	1点	集積No.6, 集積No.20, L1a平断面上×11点
	No.8	不明	不明		
	No.9	141	子持配像厨子	1点	集積No.16, 集積No.18, L1c
	No.10	84	甕	1点	集積No.4, 集積No.10, L1a平断面上×5点, L1a平断面上, L1a埴輪器, L1b埴輪器, L2埴輪器, L2表土層×3点, 黄土
	No.11	178	高环(酸化処理成)	1点	集積No.20, L1b埴輪器
	No.11	178	高环(酸化処理成)	1点	L1a平断面上, L1a平断面上, L1b埴輪器×2点, L2平断面上, L2埴輪器
	No.11	172・173・174a同→	甕H	1点	集積No.18, L1b・M1内溝内埋土, L1b平断面上, L1b埴輪器, L1a埴輪器×2, L1b埴輪器, L2表土層, L2埴輪器
	No.12	134	甬台	3点	集積No.1×4点, 集積No.2×2点, L1b埴輪器×2点, L1a埴輪器×2点, L1a埴輪器, L1a平断面上×7点, L1a埴輪器×2点, L1b埴輪器×6点, L2埴輪器, L1a平断面上
	No.13	不明	不明		
	No.14	不明	不明		
	No.15	140	子持配像厨子	10点	集積No.4×1点, L1a平断面上×7点, L1a表土層, L1a埴輪器, L1b埴輪器×2点, L2平断面上, L2表土層
	No.16	141	子持配像厨子	1点	集積No.8, 集積No.18, L1c
	No.17	85	甕	1点	L1a平断面上×2点, L1b埴輪器
	No.18	141	子持配像厨子	1点	集積No.9, 集積No.16, L1c
	No.18	172・173・174a同→	甕H	1点	集積No.17, L1b・M1内溝内埋土, L1b平断面上, L1b埴輪器, L1a埴輪器×2, L1b埴輪器, L2表土層, L2埴輪器
	No.19	154・155・156a同→	甕B	1点	L1b埴輪器×3, L1b平断面上×2, L2表土層×2, L1a表土層×2, L1a埴輪器×5, L1b平断面上×1, L2表土層, L1a表土層, L1b平断面上, L2埴輪器, 黄土
No.19	82	甕低	10点	L1a平断面上, L1a平断面上×3点	
No.19	-	甕小	1点	なし	
No.20	135	甬台	1点	集積No.6, 集積No.20, L1a平断面上×11点	
No.20	178	高环(酸化処理成)	1点	集積No.17, L1b埴輪器	
No.20	184	高环(酸化処理成)	10点	なし	
II	No.1	142	袋跡付甬台	1点	L1a平断面上×2点, L1a埴輪器, L1a表土層, L1b埴輪器, L2表土層, L2埴輪器
	No.2	138	甬台	1点	L1b埴輪器, L1b平断面上, L1b平断面上, L1c, L2表土層×3点, L2埴輪器×10点
	No.3	153	甕A	1点	集積No.3, 集積No.4, 集積No.6, 集積No.7, 集積No.15, L1a表土層×2, L1a埴輪器×6, L1a平断面上×20, L1b埴輪器×10, L1b平断面上×2, L2表土層×2, L2埴輪器×2, L2平断面上×1点
	No.4	153	甕A	1点	集積No.3, 集積No.3, 集積No.6, 集積No.7, 集積No.15, L1a表土層×2, L1a埴輪器×6, L1a平断面上×20, L1b埴輪器×10, L1b平断面上×2, L2表土層×2, L2埴輪器×2, L2平断面上×1点
	No.5	157・158・159a同→	甕C	1点	甕片断
	No.6	153	甕A	1点	集積No.3, 集積No.3, 集積No.4, 集積No.7, 集積No.15, L1a表土層×2, L1a埴輪器×6, L1a平断面上×20, L1b埴輪器×10, L1b平断面上×2, L2表土層×2, L2埴輪器×2, L2平断面上×1点
	No.7	153	甕A	1点	集積No.3, 集積No.3, 集積No.4, 集積No.6, 集積No.15, L1a表土層×2, L1a埴輪器×6, L1a平断面上×20, L1b埴輪器×10, L1b平断面上×2, L2表土層×2, L2埴輪器×2, L2平断面上×1点
	No.8	不明	不明		
	No.9	137	甬台	1点	L1a埴, L1b埴
	No.10	不明	不明		
	No.11	164	甕E	1点	L1b埴輪器, L1a埴輪器×2, 集積No.12, L2平断面上
	No.12	164	甕E	1点	L1b埴輪器, L1a埴輪器×2, 集積No.11, L2平断面上
	No.13	1030a	甕	1点	集積No.5, L1a平断面上×2点 ※接合しないが同一と考えられる(L1a平断面上×5点, L1b平断面上, L2表土層)
	No.14	160・161・162a同→	甕D	1点	L1a平断面上, L1a埴輪器, L1b平断面上, L2埴輪器, L1a平断面上, L1b平断面上, L1b平断面上, L2表土層
	No.15	152	甕A	1点	集積No.3, 集積No.3, 集積No.4, 集積No.6, 集積No.7, 集積No.9, L1a表土層×2, L1a埴輪器×6, L1a平断面上×20, L1b埴輪器×10, L1b平断面上×2, L2表土層×2, L2埴輪器×2, L2平断面上×1点

人為的な廃棄の結果であるものと考えられる。廃棄の時点ですでに破片化している点の特徴であり、いわゆる「破砕供献」の事例と考えることができる。土器類の破砕行為がL1・2トレンチ周辺で行われたかどうかという点が問題となることから、集積部Ⅰ・Ⅱで出土した須恵器・土師器と接合する破片の分布を確認したところ、これらはL1・2トレンチの全体に広がっていた(表3-1)。

集積部Ⅰでは、奥の方から壺(85)と提瓶(82)が据えられ、子持配像脚付壺(141)が大きく上下に分かれて配置されている。中央付近には高坏形器台(135)や酸化炎焼成の高坏(176・178)、左手に子持配像脚付壺(140)、手前側に高坏形器台(134・139)、大型壺(84)などがまとまった形で出土している。他に提瓶(81)や横瓶(83)などもL1aから出土している。いわば装飾付須恵器と提瓶・大型壺などの大型器種の破片が集中して廃棄された形であり、葬送儀礼の一端を示している。またこの中には甕A・B・Hの破片も含まれている。

集積部Ⅱでは、甕A・C・D・Eの破片が重なっており、廃棄する以前にこれらの甕類がすでに破砕されていたことを示している。また子持高坏形器台(142)と高坏形器台(138)、器台(137)の破片も含まれる。集積部Ⅰの中に甕Aの破片が含まれることから、集積部Ⅰ・Ⅱの廃棄が一連のものであったことが想定される。これらと接合する破片がLトレンチ全体から出土していることから(表3-1)、破砕された多量の土器片が、Lトレンチの平坦面周辺において分散するような形で廃棄されたものと考えられる。土器類の破砕が行われた場所についてはLトレンチ付近の内部か外部かどうかも含めて厳密に確定することは難しいが、少なくとも集積部Ⅰ・Ⅱにおいて土器類を廃棄する時点ですでに破砕行為が行われており、それらの破片を折り重ねる形でまとめて廃棄されたものとみられる。

集積部Ⅰ・Ⅱの埋土は黒色土層の下位の9層であり、ほぼ均質であること、また集積部ⅠとⅡの間で接合関係が認められることなどから、短期間のうちに人為的に埋め戻された可能性が高い。その上に黒色土層が形成された後に、追葬時に黒色土層上面を掘り込む形で周辺が掘り返され、最終的に墓道全体が埋め戻されたものと考えられる。

以上のような出土状況から、少なくとも集積部Ⅰ・Ⅱから出土した須恵器・土師器については、黒色土層下でほぼ同時に埋没したとみられる一括遺物であり、後述するように多少の時期幅を含みながらも、初葬の時期を考える上での良好な共伴関係を示すものと考えられる。追葬時の須恵器・土師器も堆積層中から出土しているものの中に一部含まれている可能性があるが、それらの多くは石室内部に持ち込まれているものとみられ、基本的にはL1・2トレンチから出土した土器類の大半は初葬に伴うものと考えられる。

墓道と集積部Ⅰ・Ⅱの関係については、第6章で検討する。以下では、Lトレンチから出土した須恵器・土師器について報告した後、Lトレンチ以外の各調査区から出土した土器類について報告する。

(3) 出土遺物

Lトレンチからは須恵器・土師器がまとめて出土している。以下、その内容について器種ごとに報告する。なお図面に掲載していない小片も多数存在している。

① 須恵器

坏蓋 1～17は坏蓋である。1～3・11は復元口径16cm～16.3cmで比較的大きく、4～10・12～14は復元口径12.3cm～14.8cmである。口縁端部に比較的確かな段を有するもの(1～3・5・6・10・13)、段が痕跡的になって端部内面に稜をもつもの(7～9)、端部を獣脚状に作り出して安定するもの(4・11・12・14・15)があり、口縁端部を丸くおさめるものはない。肩部をわずかに屈曲させてやや扁平なドーム状につくるものが多いが、4・17は肩部に浅い凹みをもち、15は浅い沈線を描いている。17

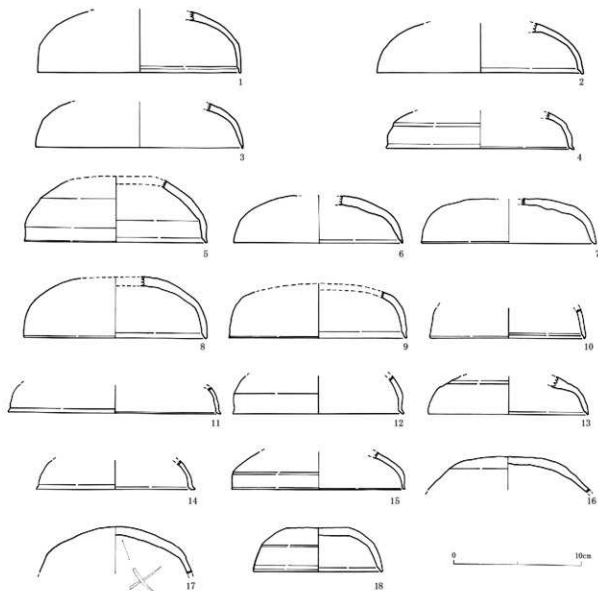


図324 Lトレンチ出土土器類 (1) S=1/3

は天井部内面に「×」のヘラ記号を有する。天井部付近まで観察できるものについてはいずれも天井部外面から1/3～1/2程度の範囲に回転ヘラケズリを施し、その他は回転ナデによって調整する。内面は回転ナデ、天井部付近を不定方向ナデによって調整する。特に16は天井部内面を不定方向ナデによって調整し、その周囲には八角形状の擦痕が認められる。天井部外面を下に向けた状態で左周りに2cm程度の直線的なナデを8回施すが、ナデの単位間にみられる角は連続しているため回転を利用したものであろう。小都市所在竊瓦窯跡群で散見されるものほど明瞭な痕跡ではないが、特徴的な内面調整をもつものとして特筆できる。18は復元口径が10.2cmと小さく、口縁端部の段が痕跡的になって端部内面に稜をもち肩部には浅い沈線を施すものであり、小形の坏蓋か壺類の蓋であると考えられる。坏身 19～39は坏身である。19・23・32は復元口径13.5cm～13.8cmで比較的大きく、20・22・25・26・28は復元口径12.2cm～13.2cmである。いずれも口縁端部に段を有さないものであり、鋭く尖る立ち上がりをもつものがある一方で39のようにやや厚く丸いものもある。立ち上がり長はいずれも1cm

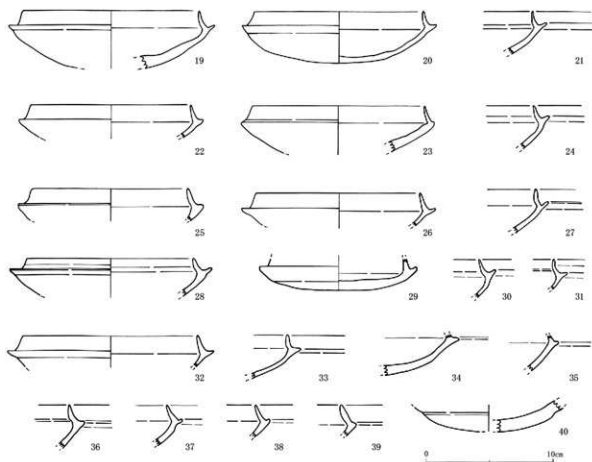


図3-25 Lトレンチ出土器類 (2) S=1/3

～1.4cmを測る。受け部を作り出す際の凹み・稜が受け部の下側外面に認められるものが多いが、23・25・29・38・39は凹みや稜をもたない。特に23は突出が甘く丸い受け部をつくる。29は他と比較して全体の形状が扁平で、先端の丸い受け部をもつものであり、底部は回転ヘラケズリの後に静止ヘラケズリを行う。受け部の成形はやや粗雑であり、受け部内面には静止ナデ、底部側面内面は不定方向ナデによって調整される。焼成はやや甘くにぶい橙色を呈しており、胎土は緻密で精良だが0.5mm程度の白色砂粒がやや目立つ。34は底部外面と断面に粘土紐接合痕が確認できる。坏身はいずれも底部外面から1/3～1/2程度の範囲に回転ヘラケズリを施し、その他は回転ナデによって調整される。内面は回転ナデ、底部付近は不定方向ナデによって調整される。40は坏身状の丸い底部をもつがその他の坏身と比較して器壁がかなり厚い。底部上位の外面に明瞭な凹みをめぐらせており、その凹みに脚をつける脚付壺の底部である可能性がある。内外面に明瞭な擦痕は認められない。

高坏 41～48・50は高坏の蓋である。45は復元口径16cmと比較的大きく、44・48は口径14.8～15cmである。41～43・48は天井部に板状工具による連続刺突文をめぐらしている。41は刺突文が重なって施文される部分がある。41～43は天井部カキメ調整の後に施文されているが、41、42のカキメはやや不明瞭である。48は回転ナデ後に刺突されるがあまり不明瞭でない。つまみは中央部をゆるやかに凹ませるものが多いが、やや大きく中央部の凹みが深いもの(41)や、中央部を凹ませずに若干盛り上げるもの(47)もある。44・45は口縁端部に段を有し、48は段が痕跡的になり端部内面に稜をもつ。いずれも全体の形状はやや扁平なドーム状を呈し肩部に明瞭な段を有さない。48は肩部に3mm

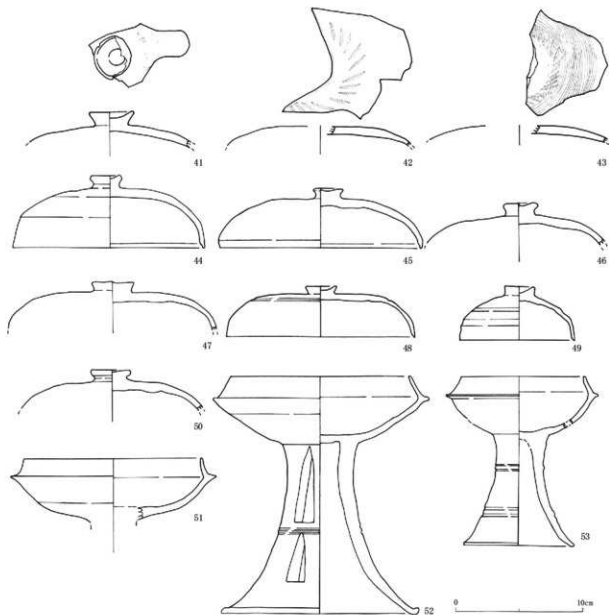


図3-26 Lトレンチ出土土器類 (3) S=1/3

程度の沈線が明瞭に認められるが途中で途切れている。46はつまみの接合痕が外面に認められる。また内面には粘土が剥がれたように器表がざらつく部分が同心円状に確認でき、天井部外面調整時やつまみ接合時の湿台痕かもしれない。47は内面にピンホール状の小さな穴が目立つ。49は直立して頂部を深く凹ませるつまみをもち、口縁端部に段を有する蓋である。外面は回転ナデを施し明瞭な稜をもつ。内面は回転ナデ、不定方向ナデによって調整する。外面は黒色、内面は灰色を呈し、特に内面には黒色のシミ状斑点が目立つ。口径は9.1cmと小さく、54～62のような無蓋高坏に伴う蓋か壺類の蓋の可能性はある。

51～53は有蓋高坏である。51は坏部であり、脚部の上端がわずかに残る。復元口径は14cmで立ち上がりは1.3cmを測る。底部外面は回転ヘラケズリを施し、その他は回転ナデによって調整する。胎土は緻密で精良だが1～3mm程度の白色砂粒が目立ち、5mm程度の白色砂粒も少量含まれる。52

は坏部・脚部共に1/2程度が残存する。復元口径138cm, 器高187cm, 立ち上がり長1.7cmを測り、やや小さい受け部を作ったのち内傾して立ち上がる。坏部外面は回転ナデによって調整されるが底部は未調整である。坏部内面は回転ナデ、底部内面は不定方向ナデを施す。脚部は中位に2条の沈線をめぐらし、縦に長い三角形の透かしを上段と下段に施している。残存している透かしの位置から考えると上段は4方向、下段は3方向から穿たれているようであり、上下で透かしの数が異なる可能性がある。脚部は太く、ラッパ状に開いて端部を丸くつまみ出して成形する。胎土は2~3mm程度の白色砂粒をやや多く含む。53は51・52と比して小形のものであり、口径9.7cm, 器高136cm, 立ち上がり長1.4cmを測る。51・52が灰・暗灰色を呈して堅緻である一方で、53は灰白・浅黄橙を呈して焼成が甘いものであり、142の裝飾付器台・裝飾の坏身との胎土や焼成の類似性が高い。脚部に接合痕などが観察できないため接合方法は不明であるが、142の中央部に53が接合していた可能性がある。若干小さめの受け部を作り出し、受け部直下には稜線がめぐっている。脚部は上位と下位のそれぞれに2条の沈線を施し脚端部は丸くおさめている。内外共に回転ナデによって調整する。

54~62は無蓋高坏で、口径は102cm~11.1cmを測る。いずれも坏部下半に段を有して屈曲し、外傾もしくはやや内湾して立ち上がるものであり、宗像窯跡群や井手ヶ浦窯跡群でよく認められるものである。54は坏部下半にカキメをめぐらせ、脚部中位に1条の沈線を施す。上段の下半には波の小さい波状文を施し、透かし孔の割り付け線とも考えられる貫通しない切れ込みを3方向に刻む。下段は長方形の透かしを3方向に施し、上段の割り付け線と配置を描いている。脚部上半の内面には絞り痕が確認でき明瞭な凹凸が残っている。55・56は坏部下半と脚部上部にカキメをめぐらせる。またいずれも脚部内面に絞り痕が確認できる。57・60は坏部下半にカキメ調整を行ったのち突出部の直下に連続刺突文を施す。57は他と比べて器高が低い。58・59は坏部下半にカキメをめぐらせる。61は坏部下半にカキメを施すが他と比べてやや器壁が厚いものであり、接合はしないが64と同一個体の可能性がある。無蓋高坏はいずれも焼成が良好で、外面が暗灰~黒色を呈する堅緻なものが多い。

63~77は高坏の脚部である。63は無蓋高坏に伴うと考えられ、脚部の下位で強く外側に屈曲し端部は上方に若干跳ね上げる。3/4程度の範囲の一部にカキメをめぐらし、貫通する長い切れ込みを3方向に入れている。64は61の脚部の可能性があるものである。ラッパ状に広がった後に端部を断面四角形に成形しており、形態としては65~68・70・71と類似するが端部外面の面取りは他より緩やかである。中位に2条の浅い沈線を施し、細長い長方形の透かしを上段に、下段にはほぼ正三角形の透かしを上段と配置を描いて3方向に穿つ。65は63・64よりも太いもので、おそらく有蓋高坏に伴う脚部であろう。中位に2条の沈線を施し、上段は上辺の狭まる台形に近い長方形透かしを、下段に正三角形の透かしを上段と配置を描いて3方向に穿つ。端部は指で挟んで回転ナデによって調整し断面四角形に成形したのち、接地面をとがらせて整える。66~68は沈線によって上段と下段に区画されると考えられるが、下段のみが残存している。66は復元底部径14.8cmを測り、透かしがほぼ残存していないため正確な形状は不明であるが、おそらく正三角形の透かしと幅不明の長方形透かしが交互に穿たれ、合わせて4つの透かしが施されていたものと想定される。67は端部の屈曲が強く、断面四角形に成形したあと下方につまみ出す。長方形透かしを3方向に穿つ。68は三角形の透かしが穿たれ、長方形透かしの一部が確認できる。透かしの残存状況から鑑みて66と同様に長方形と三角形の透かしが交互に施され、合わせて4つの透かしが施されていたと考えられる。69はゆるやかに開いたのちそのまま端部が面取りされるものであり、幅や個数は不明ながら長方形透かしが施されている。71は三角形透かしの底辺が確認でき、残存状況から鑑みて3方向に穿たれていたと考えられる。端部は断面四角形に成形したあと下方につまみ出し、端部内面に稜をもつ。72・75は脚部が開いたのちそのまま端

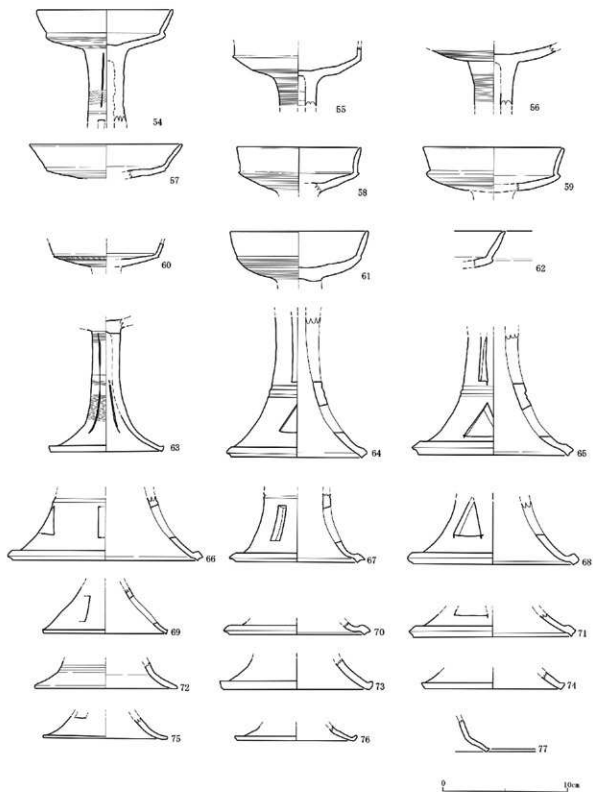


図3-27 Lトレンチ出土土器類 (4) S=1/3

部を丸くおさめるものであり72の外面にはカキメが施されている。75は他と比して小形のもので、長方形透かしが一部確認でき、残存状況から鑑みて合わせて4つの透かしが穿たれていたと考えられる。73・74・76・77は脚端部を跳ね上げるものである。特に76は小形で跳ね上げが強く、77は脚部で屈曲して若干外湾する。

甕 78～80は甕であり、いずれも胴部を欠損している。78は口唇部の段が痕跡的になり若干凹ませて内面に稜をもつもので、頸部と口縁部の境は断面三角形の突出をもつて段をなす。口縁部はやや内湾するが外に開き、外面に先端の尖った工具による沈線状の連続刺突文を施している。外面は灰色、内面はやや紫がかった灰白色を呈する。79は頸部を欠損するがラッパ状に開く頸部をもつと考えられる。78と同様に口唇部の段が痕跡的になり若干凹ませて内面に稜をもつ。頸部と口縁部の境は断面三角形の突出をもつて段をなす。口縁部にも同様の連続刺突文が施されている。外面は灰色、内面はにぶい黄褐色を呈する。80は口唇部に浅い段を有すものである。外傾する口縁部には波状文を2段施し、頸部と口縁部の境は断面三角形の突出をもつて段をなす。頸部は沈線によって区画され、上位には2段の波状文、中位には羽状文、下位には波の小さい波状文を施している。78・79は少量の砂粒を含むものの緻密な胎土であり、焼成も良好で堅緻である。80も焼成は良好で緻密な胎土をもつが、0.5mm程度の角閃石らしき黒い斑点が目立ち、表面がざらついでぼそぼそとした印象を受ける。内外共に褐灰色を呈する。

提瓶 81・82は提瓶であり、いずれも製作手順が推定できる好資料である。81は口径12.2cm、残存高21.1cmを測り、胴部は1/2が残存している。口縁部はラッパ状に開き、口縁端部を肥厚させずに作り出したのち口唇部に1条の浅い沈線をめぐらせる。口縁部外面は中位にやや強く回転ナデを施してわずかに凹ませ、それを境として上段と下段に工具を斜位に当ててやや波の大きな波状文を2段施している。胴部は片面を扁平につくる球形を呈す。扁平側の胴部内面は円形の粘土板のひび割れが明瞭に残っており、内面に工具を軽く当てることによるカキメ調整と、それを切る形で縁辺から中心へ向かう強い指ナデの痕跡が残る。粘土円盤の縁辺は不規則に波打っているため、回転ナデによる縁辺の丁寧な仕上げは行われなかったようである。外面はカキメが同心円状に薄くめぐっているが、ユビオサエによる凹凸がわずかに認められるため、回転台から切り離した後の外面調整は丁寧ではない。粘土円盤から胴部側面の境は、内面に粘土紐接合痕とユビオサエが1周めぐっており、粘土紐積み上げの際に押さえつけて成形したものと考えられる。外面にはカキメが薄く施されている。胴部側面の内面は速度の遅い回転による擦痕が残るもののユビオサエによる凹凸が目立つ。球形を呈する側の胴部が欠損するため円盤閉塞の痕跡は確認できないが、球形へとカーブする胴部側面に平行タタキ痕がわずかに認められる。内面には当て具痕跡が認められずユビオサエが目立つため、胴部を円盤閉塞したのちに胴部側面の外面のみ軽く叩いて成形したものと考える。以上の内容から推察される製作手順は次の通りである。①回転台の上に粘土板を置き、円形に整えたあと軽くカキメを施して内面を調整し、外側から内側に向けて指による静止ナデを行う。②粘土板の上に粘土紐を積み上げ、ユビオサエによって接合する。③更に粘土紐を積み上げて側面を成形する。回転ナデを施しながら適宜静止し、ユビオサエによって成形しているようである。④欠損するため未確認であるが、粘土円盤により胴部を閉塞する。⑤回転台から切り離したのち、胴部側面を軽く叩いて形を整える。⑥球形を呈する側を下にして再度回転台にのせ、扁平側と胴部側面の一部をカキメ調整によって整える。胴部の成形と調整は以上の内容である。これとは別に口縁部をつくる。⑦の工程を終えて乾燥させたのち正位で回転台にのせ、回転を利用して上部に穴をあける。その後口縁部を上のにせ、強い回転ナデによって胴部と接合する。焼成は良好で外面は暗灰色、内面は灰色・にぶい黄褐色を呈する。細かい砂粒を含む

が胎土は精良である。

82は口径11.4cm、器高24.6cm、胴部最大径20.6cmを測り、胴部が一部欠損している。口縁部はラッパ状に外反して開き、口縁端部は肥厚して内面を強い回転ナデによって若干外湾させながら外面に面取りを施している。口縁部外面の下位にはカキメがめぐっており、胴部とは別づくりで製作されている。胴部は扁平な球形を呈し、特に片側をより扁平につくるもので、肩部には環状の耳を有している。耳は頸部側をより太くするしっかりとした作りのものであり、肩部になでつけて接合している。胴部外面にタタキ痕は確認できないが内面には同心円当て具痕がまばらに残っている。扁平側の胴部内面は、円形の粘土板に当て具を軽く押し当てて器壁を薄く仕上げている。胴部側面の内側には当て具痕が比較的明瞭に残っており、その痕跡から鑑みると同心円当て具の全面を使ったのではなく同心円の縁辺部を当て、側面を3、4周めぐるようにして調整したようである。やや丸みをもつ側の胴部には、内面に直径7cm程度の粘土円盤の明瞭な痕跡が残っており、胴部成形の際に円盤閉塞を行ったことが確認できる。粘土円盤はユビオサエとナデによって成形されている。胴部外面にはカキメが施されており、特に扁平な側の方には明瞭なカキメが残っている。以上の内容から推察される製作過程は次の通りである。①回転台の上に粘土板を置き、円形に形を整えたのち当て具を用いて器壁を整える。②粘土板の上に粘土紐を積みあげ、ロクロの回転を利用しながら側面を成形する。③当て具の縁辺部を使って胴部側面の内側を成形・調整する。④さらに粘土紐を積み上げ、回転ナデによって胴部を成形する。この時点ではまだ上面を塞がない。⑤上面の開けている部分から手を入れ、当て具の縁辺部を用いて内部を成形・調整する。⑥回転ナデによって閉塞側の端面を整える。⑦ユビオサエとナデによって薄く成形した粘土円盤を、穴に貼り付けて胴部を閉塞する。⑧回転を利用して外面を整え、軽く工具を当てて浅いカキメ調整を施す。⑨回転台から切り離し、上下を逆さにして再度回転台に設置する。⑩回転を利用して外面を整えたのちカキメを施す。胴部の成形と調整は以上の内容である。これとは別に環状の耳と口縁部をつくる。⑩の工程を終えて乾燥させたのち正位で回転台にのせ、回転を利用して上部に穴をあける。その後口縁部を上のにせ、強い回転ナデによって胴部と接合する。焼成は良好で外面は暗灰色、内面は黄灰色を呈する。濃緑色の自然釉が口縁部から胴部にかかっており、口縁部内面から流れ出して内面にも釉が垂れている。胎土は2mm程度の白色砂粒を比較的多く含むが精良である。また扁平側の胴部外面中央部に他個体の須恵器片が溶着している。

横瓶 83は横瓶である。口径8.6cm、胴部最大径25cm、器高21.2cmを測り、胴部の一部を欠損している。口縁部は外反して開き、口縁端部は上面に稜をもって外に突出させ、端部外面上位と下位に指先か工具を当てることでごく浅い沈線を施している。また端部直下に細い工具を当てて凹ませることで沈線状にする。胴部は中央が膨らむ円筒形の樽状を呈し、胴部上面の中央に口縁部をつける。口縁部内外面は回転ナデによって調整され、頸部内面には胴部と口縁部の接合痕が明瞭に観察できる。胴部側面は片側が欠損しているが、残存している方は直径4cm程度の粘土円盤によって閉塞されており、内外共に円形のひび割れが確認できる。胴部外面には2～4cm程度の間隔で地面と垂直方向に2条か3条の沈線がめぐらされる。沈線の間には連続刺突文が施される。斜位に構えた板状工具を器表に対して垂直に当て、手は動かさずに回転を利用して1つずつ施したと想定できる。特に円盤閉塞側に至るカーブ付近は2、3条沈線の間隔が他と比して広く、沈線をわずかに切る形で工具の端で施文し、それに隣接して他と同様の施文が2段施されている。円盤閉塞外面にも施文と沈線が螺旋状にめぐらされる。円盤閉塞外面は沈線が施文を切っており、回転ナデによって施文が消えて薄くなっている部分がある。円盤閉塞の反対側の側面は欠損しているため詳細は不明ではあるものの、胴部側面に至るカーブから施文の向きが逆向きになって薄く消えており、側面付近には施文されていないようである。円

盤閉塞の反対側面の割れ口内面が波打っているため、粘土板に粘土紐を積み上げた際の接合痕で割れて欠損した可能性がある。胴部内面は基本的に回転ナデが施されるが、特に円盤閉塞の反対側は回転が遅く、ナデの擦痕は明瞭でない。ユビオサエによる凹凸がわずかに残り、地面と垂直方向に粘土接合のための静止ナデも観察できるほか、地面と平行する向きにケズリが施されている。円盤閉塞に近い胴部内面は回転ナデの擦痕が明瞭で、比較的回転が速かったものと想定される。以上の内容から推察される製作手順は次の通りである。①回転台の上に粘土板を置き、円形に形を整える。②粘土板の上に粘土紐を積み上げて側面を成形する。回転ナデを施しながら適宜静止し、ユビオサエによって成形している。③胴部を半分程度成形したあたりで開口部から下方向にケズリ調整を3周程度行う。④更に粘土紐を積み上げ、回転ナデによって胴部を成形する。⑤粘土円盤により胴部を閉塞する。⑥乾燥させた後これまでの工程と同じ向きで回転台に設置し、沈線を施す。⑦ゆっくりとした回転を利用して連続刺突文を施す。⑧円盤閉塞側の外面に螺旋状の沈線をめぐらせる。胴部の成形と調整は以上の内容である。円盤閉塞の反対側面は欠損するため、どの段階に上下逆向きで回転台にのせ調整を施したかは不明であるが、湿台による施文の歪み等が残らないため⑤の後かもしれない。胴部とは別に口縁部を作る。⑧の工程を終えて乾燥させたのち正位で回転台にのせ、回転を利用して上部に穴をあける。その後口縁部を上のにせ、強い回転ナデによって胴部と接合する。焼成は良好で外面は暗灰色、内面は灰色を呈する。円盤閉塞と逆側の胴部に別個体の破片が溶着しており、その周囲は灰白色を呈している。胎土は1mm程度の白色砂粒を比較的多く含むが精良である。

壺 84～123は壺類であるが、一部に甕や提瓶の口縁部などが混じっている可能性がある。84は口縁部と胴部の一部を欠損するがほぼ完形で復元できる広口壺であり、口径26cm、器高31.3cm、胴部最大径25.9cmを測る。胴部中位より高い位置に最大径をもつ球状の胴部と、やや平底気味の底部をもつ。比較的長頸のもので、頸部で屈曲したのち大きく外反して胴部最大径と同程度の大きさにまで開いている。口縁端部は肥厚して上面を面取りし、下部を若干つまみ出して外面に浅い2条の沈線をめぐらしている。頸部中位に浅い2条の沈線を施し、上段には2段の波状文を、下段には1段の波状文を有する。いずれの波状文もわずかに斜位に傾くが縦位のもので、波の上端がやや深く彫りこまれる。頸部の下位には胴部との接合の際の強い回転ナデが認められる。頸部に近い胴部上位の内面は同心円の縁辺部を用いた当て具痕が薄く確認できるが、口頸部接合の際の回転ナデによる擦痕によって切られている。それより下位の胴部内面は同心円当て具痕が明瞭に残り、特に胴部最大径が位置する胴部中位付近の内面では、同心円の中心部を用いた当て具痕が地面と平行にめぐっている部分が見受けられ、当て具を器表に対して垂直に当てて胴部中位のふくらみを成形しているかと想定できる。胴部下半から底部には同心円の縁辺部を利用した半円や扇状の同心円当て具痕が確認できるが、底部内面は当て具痕が薄く消えている部分がある。外面は平行タタキのちカキメによって調整している。胴部中位から上位はタタキ痕が地面と垂直方向にめぐるが、底部付近は平行タタキが重なって格子状になる部分も確認される。底部にも胴部と同様にカキメがめぐらされており、胴部成形・乾燥をしたのち逆位で回転台にのせて底部付近にカキメを施したものと考えられる。底部付近以外のカキメは比較的薄いものであり、軽く工具を当てる程度の調整であった可能性がある。また、胴部下半寄りの中位付近には横位寄りの斜位に傾くカキメが一部見受けられる。焼成は良好で堅緻であり、底部には別個体の須恵器片が溶着する。外面は黒色・灰白色、内面は灰色を呈し、胎土は1mm程度の白色砂粒を含むが精良である。

85は口縁部を一部欠くがほぼ完形のものであり、口径13.3cm、器高25.2cm、胴部最大径25.1cmを測る。胴部最大径は胴部中位よりわずかに上方に位置しており、底部は平底気味で安定する。84と比

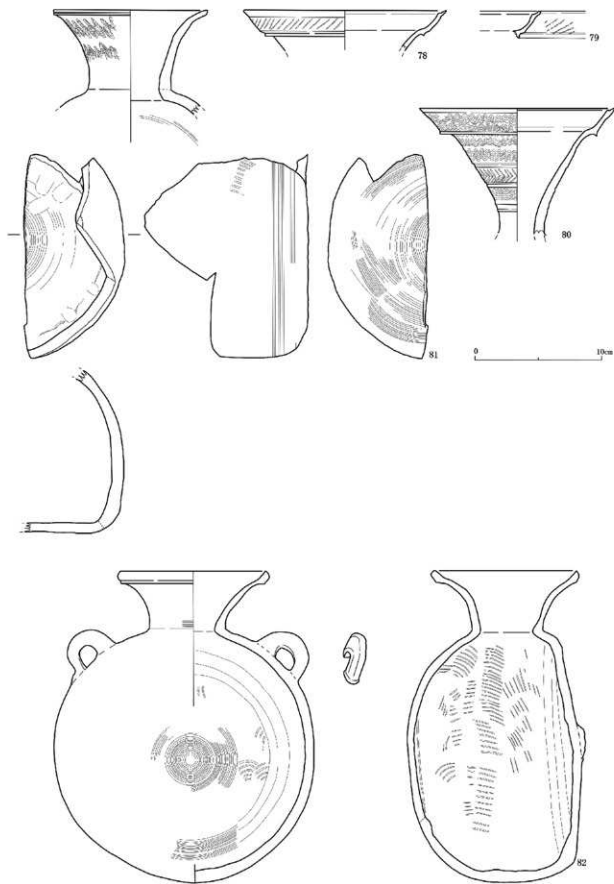


図328 Lトレンチ出土土器類 (5) S=1/3

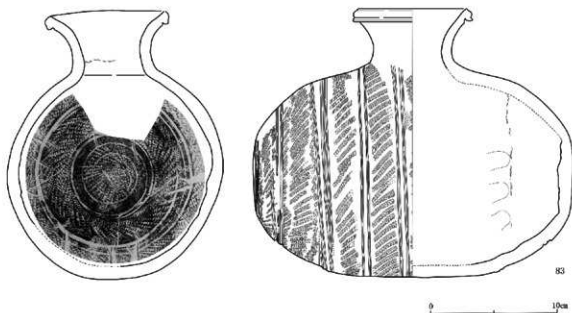


図3-29 Lトレンチ出土土器類 (6) S=1/3

べると頸部が短く、頸部で屈曲したのち外傾させている。口縁端部はゆるく屈曲して肥厚し、断面四角形に成形して外面を面取りするものである。端部下から口縁部外面の上半に波の小さい波状文をめぐらせる。波の最上段は粘土を多く削っており波が斜位に傾かないため、器表に対して垂直に工具を当てて施文したと想定できる。胴部外面の上半から中位にかけて全面にカキメがめぐる。カキメの下にわずかに平行タタキ痕が確認できるため、タタキ成形のち正位で回転台にのせてカキメを施したものと考えられる。肩部にはカキメの上から連続刺突文が刺突の方向を違えて2段施されており羽状文のようになるが、2段の間にも沈線が数条めぐっている。胴部外面の下半から底部外面には格子タタキ痕が明瞭に残っており、丁寧に成形されている。内面に同心円当てで具痕は確認できないが、器壁のわずかな円形の凹凸は無文当てで具の痕跡であるかもしれない。タタキ成形の際内面にどのような工具を用いたかは不明であるが、斜位の擦痕が確認できる部分がありタタキの後にナデを施していることは確実である。やや平底気味の底部は壺製作当初の粘土円盤に由来すると考えられ、内面はユビオサエによる成形がわずかに残り、胴部との境には接合痕が確認できる。胴部中位付近の外面に円形にわずかに凹んで器表の粘土がやや剥がれているような部分があり、焼成前の乾燥時か窯詰め時に何か胴部に当たったものと考えられる。焼成は良好で外面は黒色・黄灰色、内面は黄灰色を呈する。胎土は2mm程度の白色砂粒や細かい砂粒を含むが精良で、全体的に堅緻な印象を受ける。

86～97は口径の復元できない口縁部片であり、口縁端部が肥厚して成形するものが多い。86・88は口縁部外面に三角形の突帯をもち、端部が上方に立ち上がる。特に86は断面に粘土接合痕が観察され、突帯と上方への立ち上がりは粘土を付加して成形したものであることがわかる。また、口縁部内外面と口縁端部上面は回転ナデによって調整し、突帯の下には波の高さは小さいが幅の大きい波状

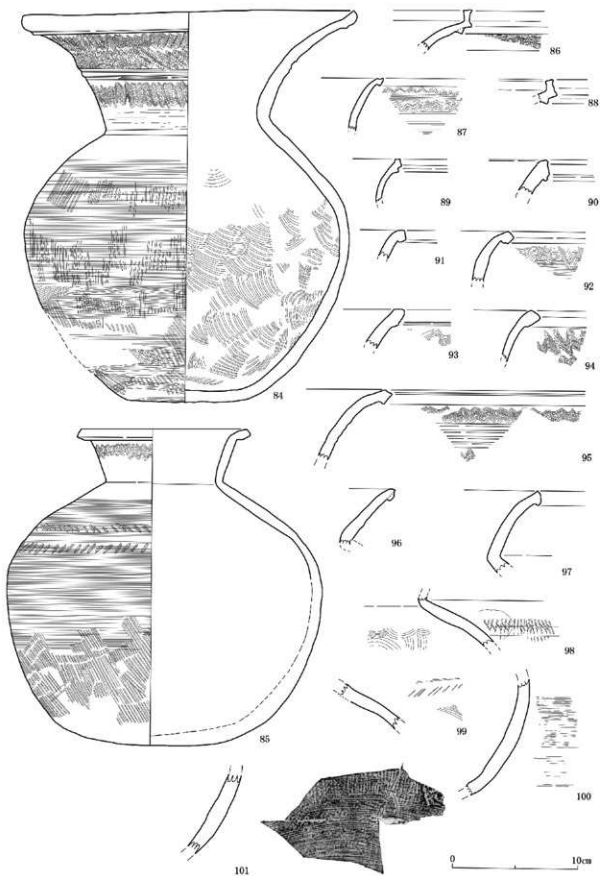


図330 Lトレンチ出土土器類 (7) S=1/3

文が施される。87は口縁端部をつまみ出して上面を凹ませるもので、口縁部にはカキメをめぐらしたのち1段の波状文を施すが、波の上半は工具が当たらずにカキメがそのまま残っている。89は端部がM字状を呈するものであり、他と比して器壁が薄く提瓶の口縁部の可能性もある。90は器壁がやや厚く、口縁端部を僅かに下方につまみ出してあり、端部の上面と下面は沈線状に凹ませている。91は外反して口縁端部を肥厚させ、断面四角形につくるものである。92～95は口縁部外面に波状文をもつ。92はカキメを施したのち、端部直下に波の高さは低いが幅の広い波状文が施されている。93は口縁端部上面を平らにつくり、端部外面下位に1条の沈線を施す。94は肥厚した口縁端部の下に、斜位に傾き波の高い波状文が施される。95は端部上面をわずかに凹ませている。口縁部外面にやや幅の広い沈線を4条めぐらし、その上下に波状文を施す。96は頸部と口縁部の境に剥離がみられ、接合痕かと考えられる。口縁端部は肥厚しており、断面に粘土接合痕が観察されるため粘土を付加して成形したものであろう。97は頸部で屈曲して外反するものである。98は壺の頸部から肩部であるが、直径2.5cm程度の範囲で正円状に丸く変色した部分があるため装飾付壺の可能性が高い。頸部の立ち上がりを僅かに残している。胴部外面には平行タタキが認められるが、成形後の回転ナデによって薄く消えている。内面は頸部下に回転ナデ、その下から同心円当て具痕が残る。肩部に連続刺突文をめぐらす。円形の変色部分にも同様に連続刺突文が施されているが、円形部が周囲よりも1mm程度下がって縁辺部の一部には粘土がわずかに付着しているため、おそらく小壺が装飾としてつけられていたと考えられる。焼成は良好で外面は灰白色、内面は灰色であり、円形の変色部分はやや紫がかった灰色を呈する。99は壺の肩部である。外面に連続刺突文が施され、その上位に沈線が途切れながら3本確認できる。内外共に回転ナデにより調整する。100・101は壺の胴部下半である。100は外面にカキメがめぐり、底部側は強い回転ナデにより擦痕が残る。101は外面に平行タタキのちカキメが施され、特に底部側はタタキが確認できないがカキメが残っている。内面にはエビオサエが明瞭に観察される。

102～106は壺の胴部であり、いずれも球胴状を呈する。特に102、103、104は調整や胎土が非常に類似しており、法量もさほど大きな差がない。102は頸部が一部残存し、復元頸部径10.6cm、復元胴部最大径22.6cm、残存高18.2cmを測る。頸部で屈曲して立ち上がり、口縁部の下位に波の低い波状文が施される。頸部外面には口縁部との接合痕が残っており、内面には接合時の回転ナデによる擦痕が胴部の同心円当て具痕を切っている。胴部外面上位にはカキメがめぐり、その下位から縦位の平行タタキが施されている。タタキの上にはカキメがめぐっており、基本的に水平に施されているがわずかに斜位になるカキメも見受けられる。胴部内面上半には同心円の中心部を用いた当て具痕が地面と平行にめぐる部分が見受けられ、当て具を器表に対して垂直に当てて肩部のふくろみを成形していると想定できる。下半には同心円当て具痕が半円や扇状に残っているが、胴部上半よりも薄くなって消えている。底部に近い胴部外面にもカキメがめぐらされており、胴部成形後に逆位で回転台に置いて底部から胴部下半のカキメを施したと考えられる。また底部に近い胴部側には円弧状の線が観察され、粘土接合痕である可能性がある。焼成は良好で色調は内外共に褐灰色を呈する。胎土は2mm程度の白色砂粒を含み、一部3mm程度の白色砂粒が含まれる箇所はその周辺の器表にやや亀裂が入っている。

103は頸部の立ち上がりがわずかに残存しており、復元頸部径7.4cm、復元胴部最大径23.2cm、残存高17.1cmを測る。胴部外面には縦位の平行タタキが施されているが、頸部下から胴部上半はタタキ痕が非常に薄くなっている。肩部から下の胴部外面にはカキメが全面にめぐりタタキ痕を切る。胴部内面の頸部に近い部分は、口頸部と胴部を接合する際の強い回転ナデによる擦痕が確認できる。同心円当て具痕は半円や扇状に残っており、特に胴部最大径が位置する胴部中位付近は同心円当て具痕が

器表に食い込む部分が認められ、胴部成形時に当て具を強く押し当てたものと想定される。焼成は良好で外面の口縁部・頸部が灰白色、胴部がオリーブ黒色を呈し、内面は黄色灰・青灰色を呈する。胎土は2mm程度の白色砂粒を含むが精良である。

104は頸部の立ち上がりがかくわずかに残存しており、復元頸部径9cm、復元胴部最大径22.2cm、残存高15cmを測る。胴部外面には縦位の平行タタキが全面に施され、その上からカキメがめぐっているが、特に頸部下から胴部上半はタタキやカキメが薄くなっている。頸部外面には口縁部を接合する際の接合痕が残り、内面には口縁部接合時の回転ナデによる擦痕が確認できる。胴部上半の内面には、同心円の中心部を用いた当て具痕が地面と平行に3周程度めぐっている。特に胴部中位内面に同心円当て具痕が器表に食い込む部分があり、縁辺部を押し付けて成形していると考えられる。焼成は良好で色調は内外共に胴部上半が灰白色、下半が黒褐色を呈する。胎土は2mm程度の白色砂粒を含むが精良である。

105は胴部の1/3程度が残存し、復元胴部最大径22.3cmを測る。胴部外面には平行タタキが施されており、102～104のタタキ痕よりも刻みが長いものである。タタキの上からはカキメがめぐらされており、特に胴部上位のタタキ痕は薄くなってカキメが目立つ。胴部内面には同心円当て具痕が残る。胴部中位内面には扇状の当て具痕が地面と平行にめぐる部分があり、やや器表に食い込んでいる。回転ナデによって当て具痕がナデ消されている部分があり、横位の擦痕が確認できる。また底部が残存していないため詳細は不明であるが、胴部の底部側には一部エビオサエが確認できる。焼成は良好で色調は内外共に褐色を呈する。胎土は1mm程度の白色砂粒が含まれているが精良である。

106は壺の肩部であり、色調・調整・胎土からみて129と同一個体である。他の壺類と比して器壁が厚い。外面にカキメがめぐっており、内面は回転ナデによる擦痕が残る。胎土は1mm程度の白色砂粒を含むが精良である。焼成はやや甘く、外面にはぶい黄褐色、内面は灰黄褐色を呈している。

107は壺の底部である。調整や胎土、焼成の具合からみて102～104と類似しており、特に102の色調とよく似ているため同一個体の可能性が高いが接合はしない。外面には平行タタキ痕が認められる。また底部を中心としてタタキの上からカキメが同心円状にめぐらされており、成形して乾燥させた後、逆位で回転台にのせてカキメ調整を施したものと考えられる。内面はエビオサエと同心円当て具痕が残る。特に底部の中心に絞り痕が確認できる点が特筆でき、底部を絞って塞いだものと考えられる。底部の内面にみられる絞り痕の中心は、外面のカキメの中心とわずかにずれている。焼成は良好で、外面は底部側が灰白色で胴部側が黒褐色、内面は灰色を呈す。胎土は2mm程度の白色砂粒をやや多く含むが精良である。

108～113は広口壺の口縁部であり、頸部が締めりラップ状に外反・外傾して長く伸びるものである。いずれも胴部を欠損するため全体の形態は不明であるが、例えば84のような球状の胴部をもつ壺である可能性が高く、102～107の胴部に伴うものであるかもしれない。108は口径24.4cmを測り、回転ナデによる凹凸を残しながら外傾して伸びるものであり、頸部下がわずかに残存している。口縁端部内面を僅かに凹ませて肥厚させ、上面を面取りして外面はM字の突帯状に成形する。口縁部の上位1/3程度の位置に波状文を施しており、その下に3条の沈線をめぐらせる。沈線以下から口縁部の下半には3段の波状文が施されている。109は復元口径24.8cmを測る。口縁端部内面に指を当て回転ナデを施して稜をもち、外面は2条凹ませる。口縁部外面には波の高さは小さいが幅が大きい波状文を施しており、一部回転ナデによってナデ消されている部分もある。110は復元口径21cmを測り、頸部で屈曲したのち外反し口縁部上位で大きく外に開くものである。口縁端部は下方につまみ出して断面三角形に成形する。端部外面は面取りされており、波状文と同様の工具で連続刺突文が施されてい

る。口縁部外面には中位と上位に2条の沈線がめぐり、沈線を切って波状文が施文されているが、一部ヨコナデによってナデ消されている。また口縁部内面にも波状文が施されており、上からよく見えるようになっている。111は復元口径19.8cmを測る。口縁部外面は頸部に近い部分に回転ナデによる擦痕が残り、それより上位には全面にカキメをめぐらせる。頸部から上方2/3程度の位置に沈線が3条施され、その上位と下位にそれぞれ波状文を有する。また口縁部直下にも工具の先端を用いて波状文が施文されている。112は復元口径35cm、113は復元口径26cmを測り、いずれも外反して大きく開くものである。口縁部外面の形態は108・109と類似している。114はやや外反するが上方に立ち上がる口縁部で、断面四角形の口縁部をもつ。口縁部外面にはカキメ調整が行われ、その上から波状文が施される。また「×」のヘラ記号をもつ。115は外反する口縁部で、丸く成形した口縁部をもつ。口縁部外面には3段の細い連続刺突文が施されている。116は外反する口縁部で、口縁部が他と比して広く肥厚し成形されるものである。117は外反する口縁部で、口縁部の形状は115に類似するがそれよりも外側下方に開くものである。口縁部外面にはカキメ調整が施される。118は外反する口縁部で、外面にはカキメ調整が施される。119は壺の頸部で、ゆるやかに外反して立ち上がる。胴部外面には平行タタキが観察できる。内面は回転ナデによって調整される。120～122は壺・瓶類の口縁部であると考えられ、復元口径11.6～12.8cmを測る。いずれも口縁部がラッパ状に開き、端部をわずかに肥厚させて整えるものである。内外ともに回転ナデによって調整する。121は口縁部に波の低い波状文を有す。123は壺・瓶類の口縁部であり、復元口径8.4cmを測る。口縁部は肥厚してM字状を呈し、端部上面は平らにつくる。内外共に回転ナデによって調整する。外面にはヘラ記号を有しており、切り合いと刻みの深浅などから刻まれた向きや順番を想定することができる。下から上方へ短く2本刻んだのち、横位や横位寄りの斜位に4本刻み、更に下から上に1本、斜位に1本刻んで、最後に下から上方へ2本刻む。複雑な記号ではあるがより深く目立つ部分だけを取り出すと「井」字に近い。

壺・その他 124は酸化炎焼成の壺で、口頸部・胴部が1/2程度残存している。復元口径18.9cm、胴部最大径27.1cmを測り、やや扁平な球胴状を呈する。頸部で屈曲したのち大きく外反し、口縁部をわずかに上方へつまみ出す。端部は肥厚して上面を面取りし、外面には1条の沈線がめぐる。口縁部は内外ともに回転ナデによって調整し、頸部には強い回転ナデが認められる。胴部外面は擬格子状になる平行タタキで、肩部付近には回転ナデによってタタキ痕がナデ消されている部分がある。内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。頸部下の内面には同心円の中心部の当て具痕が重なりながら1周めぐり、頸部の擦痕に切られている。胴部下は同心円の縁辺部による当て具痕が残っている。ロクロの使用やタタキ調整などの製作技術や胎土は須恵器と同様のものであり、やや扁平な感はあるが器形も他の須恵器壺類とさほど変わらないが、還元がかかっておらず酸化炎焼成である。焼成は良好で内外共に明るい橙色を呈しており、175～178・184と類似した色調である。胎土は2mm程度の白色・半透明砂粒を含む。125は脚付壺であり、残存高17.1cm、壺部の胴部最大径15.2cm、底部径13.3cmを測る。壺部外面の中位と下半にはそれぞれ1条の沈線がめぐり、内面は強い回転ナデによる凹凸が明瞭である。脚部は中位に沈線がめぐり、上段には長方形、下段には三角形の透かしが配置を揃えて3方向に穿たれる。脚部下位は屈曲して台状になり、屈曲部に2条の沈線が入って断面三角形の突出が2条めぐり、脚部内側下方に突出して断面三角形に成形している。壺部上端の割れ口の状況から考えると上に何らかの装飾が付く可能性があり、装飾付壺の小形品かもしれないが現状ではどのような形態であるか想定できない。焼成は良好で内外共に黄灰色を呈する。胎土は1～2mm程度の白色砂粒を含むが精良である。126・128は短頸壺であり、扁平な球胴状の胴部に短く上方に立ち上

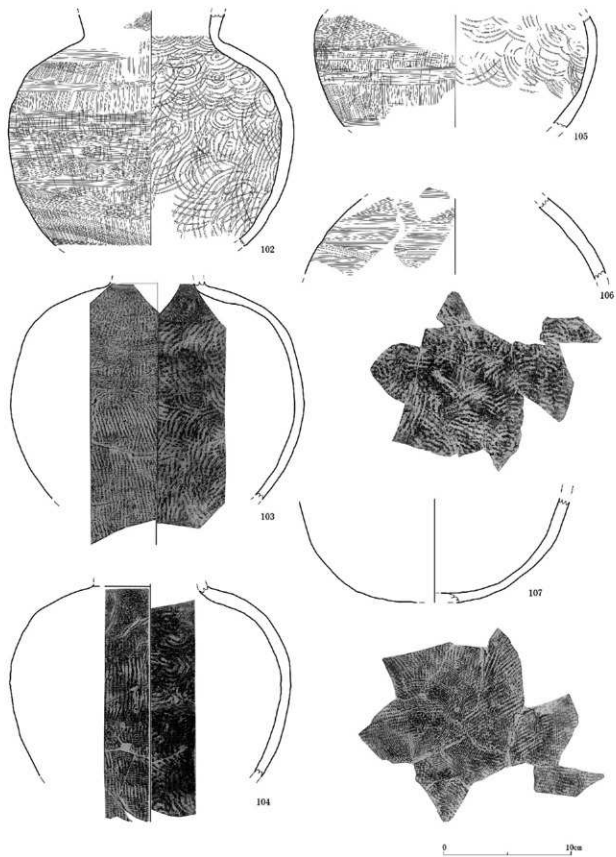


図331 Lトレンチ出土土器類 (8) S=1/3

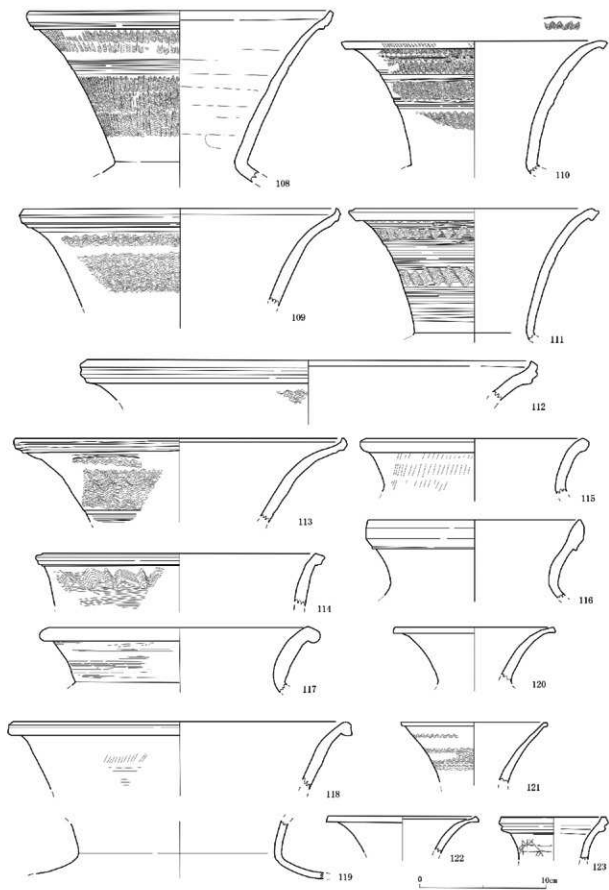


図3-32 Lトレンチ出土土器類 (9) S=1/3

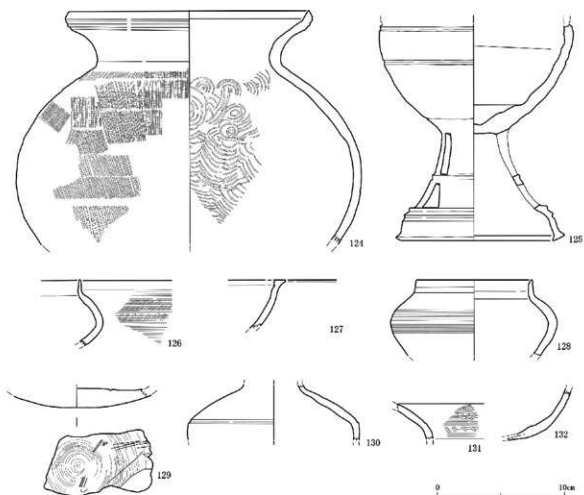


図3-33 Lトレンチ出土土器類 (10) S=1/3

がる口縁部をもつ。126は胴部全面にカキメを施し、胴部中位には刺突文をめぐらせる。128は復元口径9.2cmを測り、胴部中位にはカキメがめぐるものである。外面は黒褐色を呈するが口縁部から肩部にかけては赤褐色であり、本来は蓋を載せて焼成していたかもしれない。127は上端を平らにつくる口縁部であり、腕状の体部をもつと考えられる。129は壺の底部であり、106の壺肩部と同一個体である。底部を中心としてカキメが同心円状にめぐらされており、成形して乾燥させた後、進位で回転台にのせてカキメ調整を施したものと考えられる。胎土は1mm程度の白色砂粒を含むが精良である。焼成はやや甘く、外面にはぶい黄褐色、内面は灰黄褐色を呈している。130は肩部に沈線を施して下方に下がる胴部をもち、頸部は細くすばまるものである。焼成は良好で外面は灰黄褐色、内面は黄灰色を呈する。胎土は1～2mm程度の白色砂粒を含むが精良である。131は壺の肩部である。外面には全面にカキメがめぐらされ、その上から波状文が施されている。また波状文の下には2段の刺突文が傾きの向きを違えて施文されている。焼成は良好で外面は灰黄褐色、内面にはぶい黄褐色を呈す。胎土は1～2mm程度の白色砂粒を含む。132は壺の胴部下半から底部である。胴部側外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリを施す。内面は回転ナデによって調整する。底部内面は粘土の剥離痕が観察され、粘土接合痕であると考えられる。焼成は良好で外面は褐灰色、内面は灰黄褐色を呈す。胎土

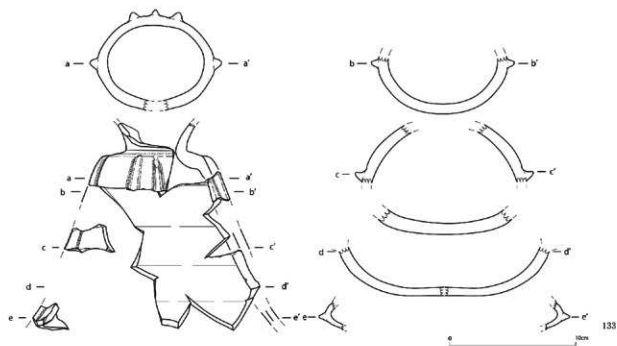


図3-34 Lトレンチ出土土器類 (11) S=1/3

は精良で 0.5mm 程度の細かい砂粒を含む。

革袋形土器 133 は革袋形土器である。頭部で屈曲してゆるやかに外反する口縁部をもち、体部は縦長の台形を呈するものである。口縁部から体部にかけての一部と底部付近の端側かと考えられる小片が残存しており、正確な法量は不明であるが器高 18cm 以上、底部幅 19cm 以上を測ると想定される。正確な底部形態は不明であるが、おそらく体部下半から正面と背面がそれぞれ内側にカーブして底で閉じ合わさっていたと考えられる。肩部には短い刺突文がめぐらされる。体部正面の中央に 1 本の突帯が貼り付けられ、それを挟んで底部の左右端にかけて緩やかに内湾する突帯がつくものと考えられる。また体部の両側には肩部から底部にかけて突帯が貼り付けられ、底部の左右端で正面に付けられた突帯と合流する。突帯の上端は上面からナデつけられてわずかに潰れている。体部正面の 3 本の突帯には体部の境に左右両側とも刺突による刻みが施されるが、側面の 2 本の突帯は正面側の体部との境にのみ刻まれ、背面側の境には刻みをもたない。刻みの形状は部位によって差異があり、左側面突帯の刻みは他の刻みに比して長い。また底部付近に認められる刻みは短くハ字状に施されている。体部は回転ナデによって成形・調整されており、内面には擦痕がよく観察される。底を閉じ合わせる際に体部を内側にカーブさせたと考えられるが、その際についてと想定される縦ナデが体部下半内面にわずかに観察できる。また頭部内面には、体部と口縁部接合時の回転ナデとユビオサエが認められる。焼成は良好で外面は黄灰・灰色を呈し、内面は黄灰を呈する。胎土は精良だが 1～2mm 程度の白色

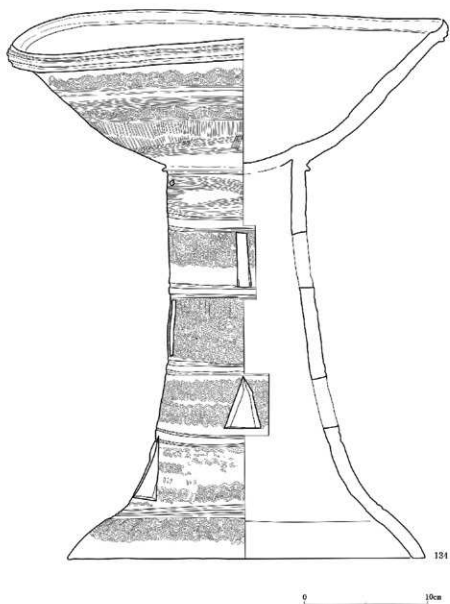


図3-35 Lトレンチ出土土器類 (12) S=1/3

砂粒を含み、肩部内面には回転ナデによって砂粒が動き、沈線状に凹んでいる部分がある。

器台 134～139は大型の高坏形器台である。134は坏部径が脚部径よりも一回り大きいもので、波状文と沈線の施文を繰り返している。坏部は口縁部に沈線状の段を設け、端部を尖らせ気味に仕上げている。脚部は最下段から三角形の三方向の透かし孔が上下に方向を違えて配置され、その上に縦長長方形の透かし孔が同様に方向を違えて三方向に配置される。最上段に円形の凹文（非貫通）が四方向に配される。内面・外面ともに回転ナデで仕上げられている。素地は灰色であるが坏部から筒部にかけて黒色の部分が広く認められる。135は脚部径が大きいもので、波状文と沈線が繰り返される。最下段の三角形の透かし孔は四方向に開口し、その上に約45度ずれた位置で縦長長方形の透かし孔が縦

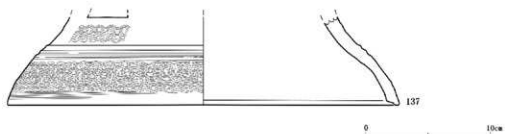
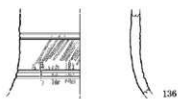
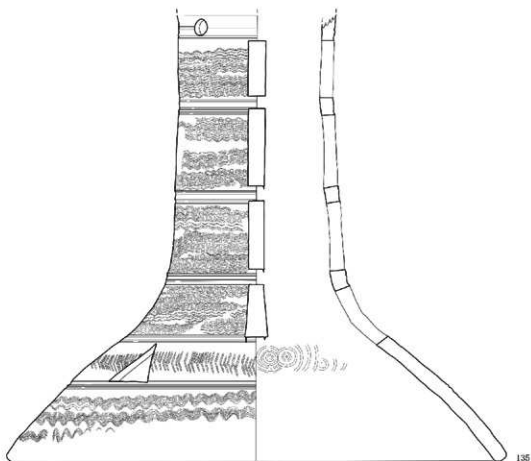


図3-36 Lトレンチ出土土器類 (13) S=1/3

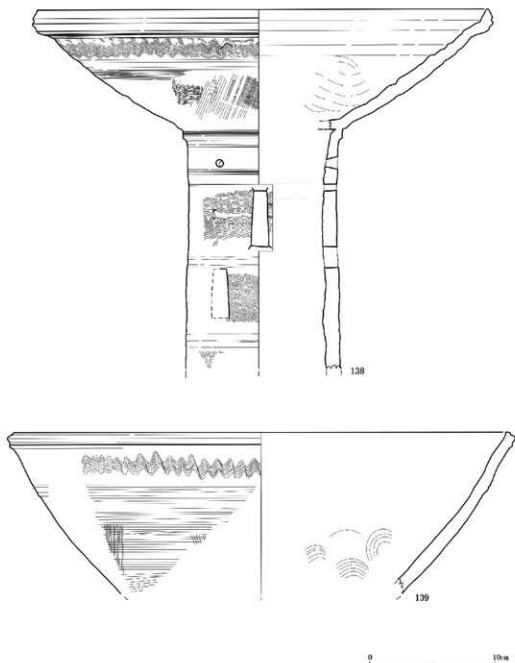


図3-37 Lトレンチ出土土器類 (14) S=1/3

方向に4段配置される。いずれも四方向に開口する。その上に円形の透かし孔があり、こちらは貫通している。欠損しているが残存している部分から四方向とみられる。最下段の三角形の透かし孔の周囲は、綾杉状に板状工具先端の刺突によるとみられる文様が全体をめぐる。全体回転ナデによる仕上げで、内面には一部同心円の当て具痕が残る。脚部の端部はやや角張った形で整形している。素地は灰白色であるが、脚部正面の一部は黒色を呈しており、坏部付近につながっているものとみられる。136と137は、接合しないが同一個体とみられる脚部片である。136の筒部片は、沈線の間に板状工具先端の刺突による斜め方向の施文がめぐる。137の裾部は波状文と沈線を繰り返しており、三角形の

透かし孔が一部に残り、復元すると三方向に開口していたものとみられる。全体は回転ナデにより仕上げられている。素地は灰白色である。脚部端部は内面がやや浮いた状態になるように整形されている。138は坏部から筒部上半にかけての個体である。坏部の下半はタタキ目が残り、その上にカキメと波状文がめぐる。口縁端部は沈線状に段を持ちながら、上端を薄く尖り気味に仕上げている。筒部は縦長長方形の透かし孔が四方向に開口し、上下二段で方向を違えて配置されている。最上段には円形の透かし孔が四方向に開口する。筒部は波状文と沈線が交互に施文される。坏部内面には一部当て具痕が残る。全体は回転ナデにより仕上げられている。素地は灰色であるが、坏部は全体として黒色を呈している。139は坏部片で、上半は波状文と沈線、下半は横方向のタタキ目が全体をめぐる。内面には一部当て具痕が残る。口縁端部は沈線状の段を持ち、上面はやや角張った形に仕上げている。素地は灰色で、全体として黒色を呈する。

装飾付須恵器 140～152は装飾付須恵器である。140は子持配像脚付壺。全体として遺存状況が良好で、脚部端部以外はほぼ関係に復元できる。広口壺の本体に筒状の脚部を接続し、壺肩部に高坏形器台の痕跡器官とされる台座を設け、ここに小像5体と小壺5個を配している。このうち本体に残存しているのは小像3（人・動物・水鳥）と小壺2である。図3-38Eは、接合しないが色調等から140に帰属する可能性を想定した。広口壺部は頸部に板状工具先端の刺突文と沈線を繰り返し、肩部から胴部にかけてはカキメを施す。胴部下半にはタタキ目が残り、脚部は板状工具端部の刺突文と沈線を交互に繰り返す。裾部は回転ナデで仕上げる。最下段に三角形、上二段に縦長長方形、最上段に円形の透かし孔を設け、それぞれ三方向に開口している。それぞれ60度前後ずつずらしながら配列されているため直線的には並んでいない。壺部との接続部は突帯状に膨らんだ部分がヨコナデによって接続されている。壺部の底部にはタタキ目が残り、また脚部との接続部には斜格子状の沈線が刻まれ、接続時の目印ともなっている。肩部の小像は全て2cmほど張り出した台座の部分に設置されている。いずれも右を向いており、人を基点にすると、反時計回りに【1：小像（人）→2：小壺→3：小像（動物）→4：欠損（小壺）→5：欠損（小像）→6：欠損（小壺）→7：欠損（小像）→8：欠損（小壺）→9：小像（水鳥）→10：小壺】となる。小像のうち、Bの人形は頭に帯状のものを巻き、左手に何か持っている。一般的な装飾付須恵器では、狩猟の風景を描いたものに該当するとみられ、人形は左手に弓を構えたものである可能性が高い。Cの動物文は目・鼻・口が描かれ、耳は貼り付けられている。Dは水鳥か。もう1点の動物像（E）は目が浮文状に貼り付けられ、尾部は縦方向に薄く板状になるよう整形されている。小壺はいずれも口径・高さともに5cmほどで広口壺に近い造形である。全体として素地は灰色で、頸部から胴部にかけて灰黒色を呈す。断面からは赤褐色の胎土がみえている。

141は子持配像脚付壺。集積部Iから出土した中心的な器種の一つである。全体として遺存状況も良好であるが、胴部下半と脚部との接続部が欠損しており、この部分の破片が調査区内では確認できなかった。140とはほぼ同様の形態で、広口壺の上半部に長い脚部を接続したものであるが、肩部の段が非常に狭くなっており、小像は全て広口壺の肩部斜面に設置されている。口縁端部は上面に平坦面を持ち、外面は丸く仕上げつつ、頸部に続く部分に段を有する。上から波状文と浅い沈線状の区画が繰り返され、頸部の最下段は回転ナデにより仕上げている。肩部は小像が配されるが、これらが剥離した部分ではカキメが明瞭に観察できる。小像を配する台座は低い三角形の突帯状のものが貼り付けられている。胴部下半は欠失しているが、肩部の突帯状の台座の下位で僅かに残存する胴部は格子目状のタタキ目痕跡が確認できる。接合しないが同一個体とみられる脚部は残存高約31cmである。下から三角形の透かし孔が一段、縦長長方形の透かし孔が三段、それぞれ四方向に開口する形で、縦方向に一直線に並ぶように配される。最上段は円形の透かし孔が45度ほど方向を違える形で配され

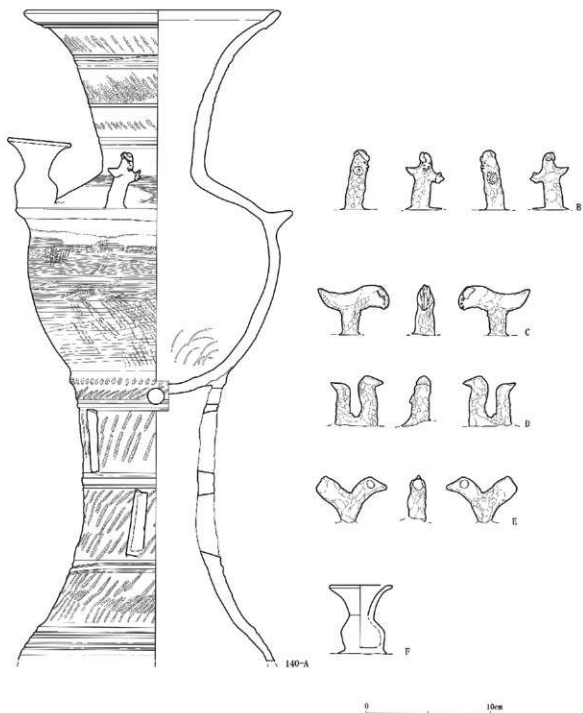


図3-38 Lトレンチ出土土器類 (15) S=1/3

る。全体として、カキメと浅い沈線を繰り返す形で区画が設定され、下半の各区画には板状工具先端の刺突による施文が行われる。広口壺底部との接合部は、140と同様、突帯状の膨らみを伴っている。広口壺の肩部には、全体で小像4体・小壺4個が配されていたものとみられる。騎馬像を基点にすると、反時計回りに【1:騎馬像(右)→2:小壺→3:欠損(小像・動物)→4:欠損(小壺)

→5:小像(動物・左)→6・7・8:欠損(小壺・小像・小壺か)となる。騎馬像は頭に帯状のものを巻き、馬に騎乗する。鞍が明瞭に表現されている。小壺は1点騎馬像の右側に接合する他(出土時には破砕により分離している)、接合しないものの141に帰属するものとみられる小壺がある。いずれも頭部がやや長い形状の広口壺状を呈する。欠損している3の部分では、剥離の痕跡が2カ所に分かれている(向かって左側の剥離痕が低く、右側の剥離痕がやや高い位置にある)ことから、動物などの小像が配されていたものとみられる。4の小壺痕跡を挟んで左向き5の動物像がある。耳が丸くしっぽを巻いたような形状をしており、馬とは異なる犬などの可能性が想定される。全体的に灰色を呈しており、残存箇所では黒色化している部分はみられない。

142は子持高坏形器台である。図示した各破片は接合しないが、白色を呈する色調・胎土・焼成が共通しており、同一個体と判断した。なお、53の有蓋高坏は、142の中央に本来付随していた可能性が高く、中央の高坏を含めて全体で7個の子持となる。全体として焼成が不良で、一部は表面が溶けたような状態となっている。坏部は外反する口縁部を持ち、端部は丸く仕上げている。この口縁端部付近に、筒状の脚部を伴いつつ、外径12～13cmほどの坏身が配される。脚部は不明であるが、径3.5cmほどで中空の筒状の粘土を用いているものとみられる。坏部の内面中央部付近が欠損しているため明瞭でないが、上述のように法量・色調等から53の有蓋高坏はこの坏部の中央に接合されていたものと考えられる。脚部は破片化しているものを図上で完形に近い形に復元した。沈線と透かし孔を繰り返す形状は他の器台や脚付壺と共通する。透かし孔は最下段が縦長の台形状を呈し、上面が尖らず直線となる。その上に縦長長方形の透かし孔が三段、一直線に並ぶ形で配置され、その上に貫通しない円形の凹み文が二段配される。透かし孔の開口は四方向である。坏部との接続部は角張った形で仕上げられ、ナデによる接続が行われたとみられる。透かし孔がある区画には、いずれも波状文が施されている。全体として乳白色を呈している。

145・146は子持脚付壺。接合しないが法量・形態・色調・胎土等から同一個体の可能性が高いものと判断した。また143・144は接合しないが145に伴う小壺の口縁部とみられる。上半部は広口壺状の形態で、外反する口縁部の外面に波状文と浅い沈線を施す。口縁端部は角張った形で外側に突出する。肩部に配された小壺は、全体で7個配置されていたものと復元できる。胴部内面は、同心円の当て具痕が明瞭に残る。脚部は裾部がやや膨らむような形状で、この点が他の個体と異なっている。裾部端部は外反しつつやや突出し、内面はやや浮いた位置でこちらも内側に突出する形状で仕上げられている。裾部外面は全体として回転ナデによる調整であるが、最下段に板状工具端部の刺突による施文があり、その上に沈線がめぐらされている。その上に三角形の透かし孔が配される。筒部上半は外反する形で広口壺の底部に接合されたものとみられる。全体として少し赤みを帯びた灰白色を呈している。

147は142と同様の脚部であるが、端部が重複するため別個体と判断した。こちらも焼成が不良で、表面が溶けたような状態となっている。沈線の上に三角形の透かし孔を有する。

148も脚部片。灰白色を呈するもので、複数個体に破砕された状態のものを図上で復元した。裾部端部は角張ったような形状で仕上げられている。最下段から波状文・沈線が繰り返されている。下から二段目から三角形の透かし孔が配されている。

149～152はいずれも小型品の破片である。装飾付須恵器の一部である可能性も想定されるが、今回報告分の装飾付須恵器との接合関係は確認できない。149は小型の提瓶状の形態を呈する胴部片で、151の口縁部片と接合する。149は断面からみて通常の提瓶と同様に最後に円盤状の粘土で胴部を塞ぐ形でつくられており、装飾付須恵器の一部でなくミニチュアの可能性もある。150は小型の甕もしく

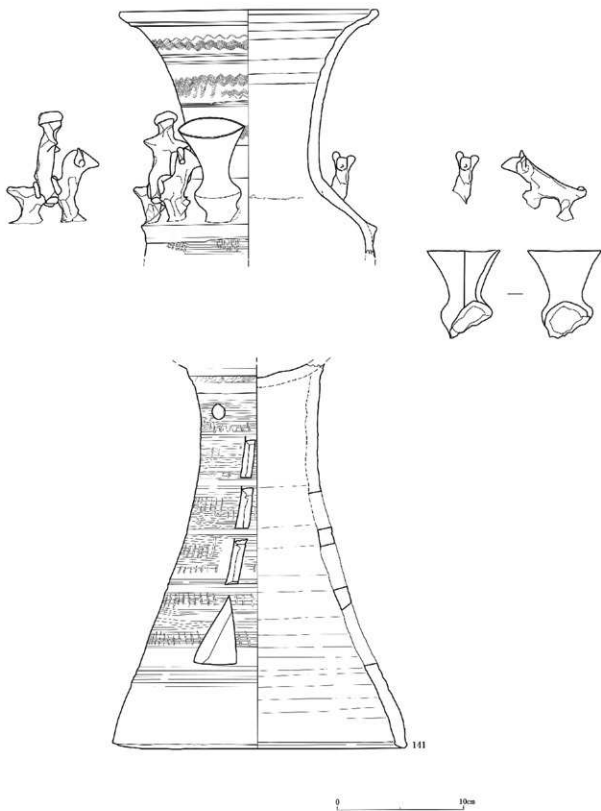


図3-39 Lトレンチ出土土器類 (16) S=1/3

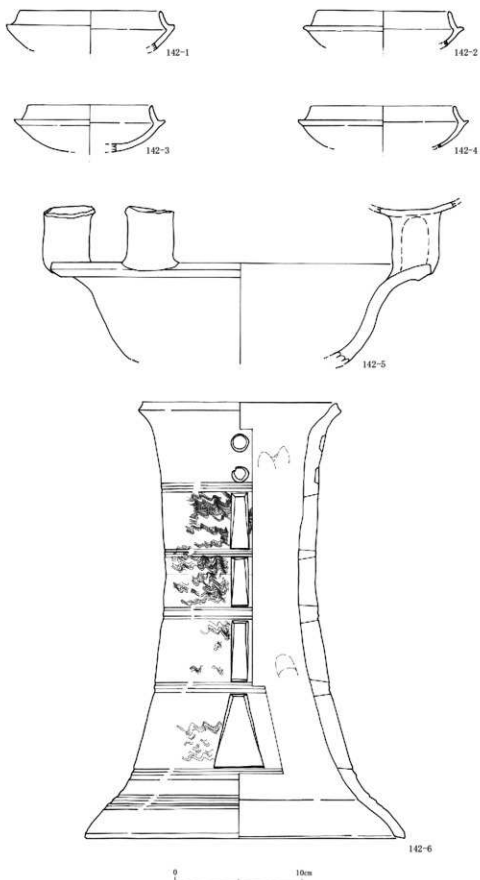


図3-40 Lトレンチ出土土器類 (17) S=1/3

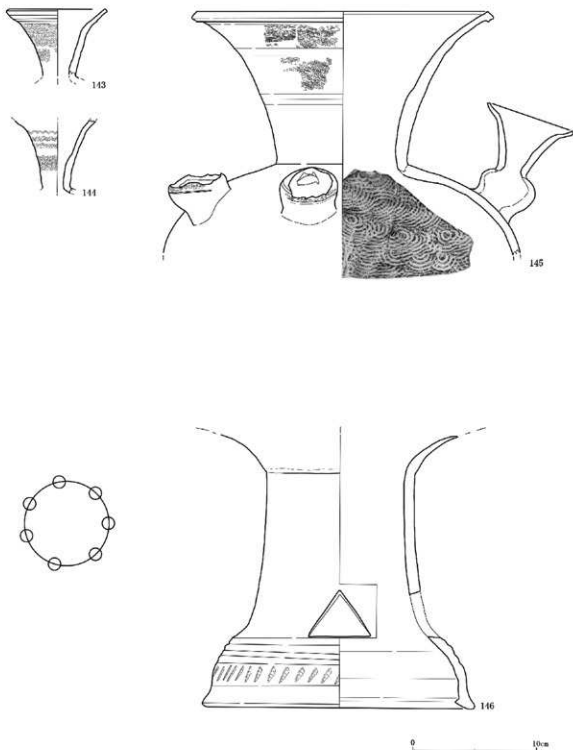


図3-41 Lトレンチ出土土器類 (18) S=1/3

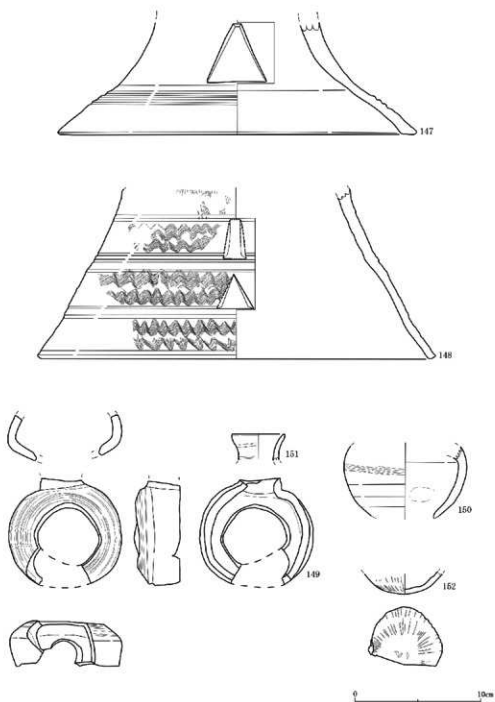


図3-42 Lトレンチ出土土器類 (19) S=1/3

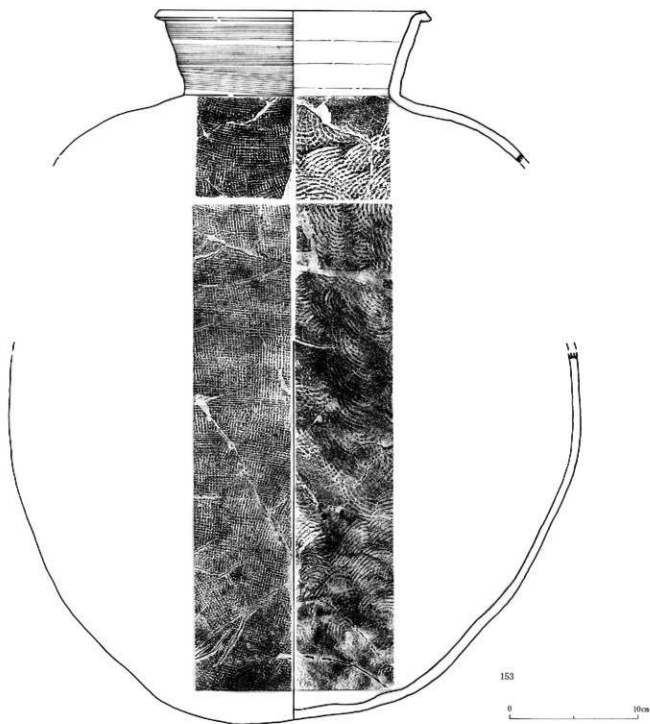


図3-43 Lトレンチ出土土器類 (20) S=1/3

は広口壺の胴部片で、こちらも152の底部片と接合する。152の底面には、140と同様に底面に放射状の沈線が施されており、装飾付須恵器の一部であれば本体との接続部か、もしくは150・152自体が脚付甕などの独立した個体である可能性もある。

甕 前述の通りLトレンチ出土須恵器は破碎供献が行われていると考えられ、甕類についても多量の破片が散在して出土している。接合作業を行ったのち、個々の破片について胎土や色調・調整技法の観察に基づき個体識別を行った結果、最低でもA～Hの8個体が存在することが明らかになった。以

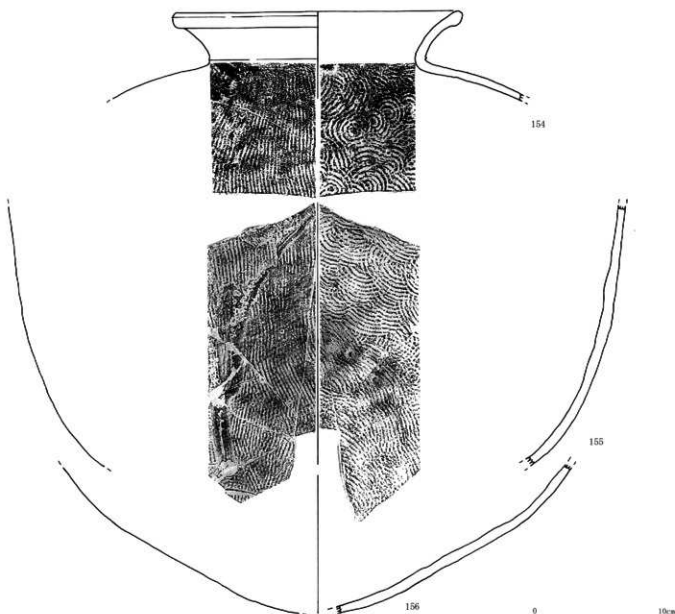


図3-44 Lトレンチ出土土器類 (21) S=1/3

下、それぞれについて報告する。なお図化している破片は全体の一部である。

甕 A (153) 復元口径 20.6cm, 器高 41.8cm 以上, 胴部最大径 44.6cm を測り, 肩部は見つからないが他と比して最も復元できたものである。最大径が胴部中位付近に位置し, 球胴状を呈するものと考えられる。頸部に強い回転ナデを施して屈曲させ, 口縁部は回転ナデによる器表の凹凸をもちながら上方に伸びて外傾する。口縁端部を外につまみ出すか粘土を貼り付けたのち, 端部上面と外面を面取りして断面四角形につくり, 回転させながら端部直下に細い工具を当てることで凹ませて沈線状に仕上げ上げる。口縁部外面にカキメ調整の痕がめぐっているがその後の回転ナデによりほぼ消えている。口縁部から頸部下の内面には回転ナデの擦痕がよく確認でき, 回転台に正位で設置して甕の体部と口縁部を接合し調整を施したと考えられる。胴部外面は頸部下から底部まで全面が格子タタキによって丁寧に調整が施される。底部にはないが頸部下から胴部下まで 3cm 程度の間隔で 4~6 条のカキメが認められるため, タタキによる体部の成形及び調整を行って乾燥させたのち, 回転台に正位でのせてカキメをめぐらせたものと考えられる。胴部内面は頸部下から底部まで全面に同心円当て具痕が残つ

ており青海波状になっている。当て具痕の大きさはどの位置でもさほど変わらないが、頸部に近いほど当て具痕の影りが深く凹弧に対して垂直方向の亀裂が少量見受けられるのに対して、底部付近は亀裂のない浅い当て具痕であるため、当て具変換点を認めて部位による当て具の差異を指摘できるかもしれない。もしくは成形の際の乾燥度合による違いが反映されている可能性もある。また胴部下半には当て具痕が縦位の列状、一部では横位の列状に消えている部分があり、ナデ消されていると考えられ、内面が青海波によって埋め尽くされているわけではない。底部内面はユビオサエによる凹凸が目立ち、当て具痕は非常に薄く不定方向のナデによって調整され、甕の底部としてはやや薄く仕上げられている。焼成は良好で外面は青灰色、内面は灰色を呈する。胎土は2～4mm程度の白色砂粒がまばらに混じるが精良である。以上の特徴に加えて、器表が割られるような割れ口をもつ破片が多く存在しており、個体識別の際に参考にした。

集積部Ⅰから1点(No.3)、集積部Ⅱから6点(No.3、4、6、7、15)が出土しており、L1a・L1b・L2からも多数の破片が出土している。このように出土位置は集積部Ⅰ・Ⅱを含めたLトレンチ内の各場所にまたがっている。

甕 B (154～156) 復元口径 22.4cm、器高 37.8cm 以上を測り、肩部・胴部上半・底部が見つからないが甕 A に次いでよく復元できるものである。底部を欠くため正確な形態は不明であるが、やや尖底気味で肩部が張る倒卵形の胴部を有すると考えられる。口縁部は比較的短いが外反して開くものであり、頸部に強い回転ナデを施して屈曲させる。口縁端部は肥厚して丸く仕上げ、回転ナデにより端部下に稜をつくる。口縁部及び頸部下の内外面には回転ナデの擦痕が残っている。胴部外面は擬格子タタキによって調整する。底部に近い胴部下半にはタタキの上から 4cm 程度の間隔で数条のカキメが施されており、胴部の成形及び調整を行って乾燥させたのち、回転台に逆位でのせてカキメをめぐらせたものと考えられる。胴部内面は頸部下から同心円当て具痕による青海波によってすき間なく丁寧に埋め尽くされている。当て具痕の大きさは直径 4cm 程度であるが、底部に近い破片の方が若干大きい当て具痕をもつ。当て具痕の凹凸がはっきりしていることに加え同心円の凸部分が若干黒っぽくなるという特徴をもつため、個体識別を比較的容易に行うことができた。底部近くの内面にはユビオサエによる凹凸が残るが、同心円当て具痕によって埋め尽くされており比較的器壁が薄い。外面及び口縁部内面は灰オリブ色を呈するが、自然軸がかかることによりオリブ色・オリブがかった黒色・黒褐色を呈する部分が多い。特にオリブ色の自然軸は各所に付着してざらざらとした質感を与えているほか、口縁部内面や胴部外面に垂れて釉だまりができています。また口縁部外面の一部と胴部下半は自然軸が器表を覆うようにかかかって黒色を呈し、マットな質感となっている。胎土は 2mm 程度の白色砂粒や白色・半透明の細かい砂粒が含まれるが精良で、焼成は良好である。

集積部Ⅰから1点(No.19)が出土しており、L1a・L1b・L2からも多数の破片が出土している。このように出土位置は集積部Ⅰを含めたLトレンチ内の各場所にまたがっている。またDトレンチからも甕 B に帰属する可能性の高い破片が出土している(195)。Gトレンチ出土破片も甕 B に帰属する可能性があるが断定はできない(199)。

甕 C (157～159) 復元口径 13cm を測り、厚手の口縁部をもつ。胴部片や底部片を確認できるものの全体の形態は不明である。口縁部は頸部でゆるやかに屈曲して上方に立ち上がり、ヨコナデによる凹凸をもちながら口縁部下位を肥厚させ、腫れぼったい印象を与える。頸部外面にはひび割れが確認できるが、強い回転ナデと指オサエによって口縁部を接合し、頸部下の内面には板ナデ状の擦痕が残る。胴部外面は擬格子タタキによって調整する。内面は同心円当て具痕が残るが非常に薄く、垂直方向の擦痕がわずかにみられることからナデ消されていると考えられる。また胴部下半の内面に同心円

当て具痕の上からカキメ状にめぐる横位の擦痕が残ることが特徴的である。タタキによる胴部成形のどの段階かは不明であるが、おそらく成形途中の乾燥後に回転台にのせ、内面を工具で調整したことによるものと考えられる。その際についたものかどうかは判断できないが、地面と垂直方向に1cm程度の傷のような線状の跡が確認でき、内面調整の際に工具が当たった可能性がある。更に、底部外面半径9cm程度の範囲にカキメが同心円状にめぐらされている。外面のタタキを切つてカキメがめぐるため、成形後に逆位で回転台において調整を施したと考えられる。焼成は良好で、胎土は2mm程度の白色砂粒が含まれるが精良である。以上の特徴に加えて、器表に黒色のシミ状斑点が多く確認できることが特徴として挙げられる。焼成時に胎土中の鉄分が表面にふき出すことによってできた鉄粉であると考えられ、個体識別の際に参考にした。

集積部Ⅱから1点(No.5)が出土しており、L2から多数の破片が出土している。L1bやL1dからも裏Cの破片と思われる個体が1点ずつ出土しているが、出土位置はL2に偏っているといえる。

甕D(160～162) 胴部下半から底部付近の破片が存在している。いずれも器壁が薄いものであり、外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕を残している。平行タタキは縦位かやや斜位のものが多いが、重なって格子状になる部分も見受けられる。より底部に近い162と比べると160や161の方が当て具痕の彫りが深く、特に同心円の縁辺部をやや強く押し当てているようだが、160には同心円当て具痕が薄く消えている部分もある。底部外面には円弧状のごく薄い沈線が入っており、タタキ調整や乾燥が終わった最終時点で作られたものと考えられるが、用途などは不明である。焼成は良好で堅緻である。胎土は非常に精良で細かい砂粒がわずかに含まれる。

集積部Ⅱから1点(No.14)が出土しており、L1a・L1b・L2からも多数の破片が出土している。このように出土位置は集積部Ⅱを含めたLトレンチ内の各場所にまたがっている。

甕E(163～165) 全体の形状やサイズは不明であるが、肩部・胴部・底部に近い胴部を図化している。163は肩部で、外面に格子タタキ、内面に同心円当て具痕をもつ。外面調整が164・165とは異なることから、胴部の上半と下半でタタキ板を違えている可能性がある。もしくは当て具痕の彫りが浅く色調や胎土が類似することから164・165と同一個体としたが、別個体の可能性もあり裏Aとも類似すると思われる。164は胴部下半の破片である。傾きが急であるため、肩部か胴部が張つてやや尖底気味の底部へと至るものと考えられる。外面は平行タタキが施され、タタキ目は縦位寄りの斜位をとって地面と平行してめぐっている。タタキ痕を明瞭に残すがとところどころナデ消してその上からカキメを施しており、装飾的な意味合いをもたせている可能性がある。底部側1/3付近は、それより上位にみられたような地面と平行にタタキ目がめぐるものではなく、縦位のタタキ目や横位のタタキ目が重なって格子状になっておりカキメも施されなくなっている。また、外面調整が変化する部分と対応する形で内面調整にも変化がみられる。上位には彫りの浅い当て具痕が残るものの縦や斜め方向のナデによって消されている部分が多い一方で、その下は彫りの深い当て具痕が施されて内面を埋め尽くし、内面の凹凸が目立つようになる。この内面の凹凸は当て具痕が器壁に食い込むような痕跡であり、内面を当て具で強く押さえつけながら成形を行ったことによるものと想定できる。焼成の際に器表が彫れた部分が見受けられる。165はより底部に近い破片であると考えられる。164と同様に外面は平行タタキとカキメがめぐる部分と、平行タタキが重なって格子状になる部分がある。内面は彫りの深い当て具痕が残るが、より底部に近い部分はユビオサエによる成形が明瞭で当て具痕は認められない。焼成は良好で胎土は2mm程度の白色砂粒を含むが精良である。

集積部Ⅱから2点(No.11, 12)が出土しており、L1a・L1b・L2からも多数の破片が出土している。このように出土位置は集積部Ⅱを含めたLトレンチ内の各場所にまたがっている。

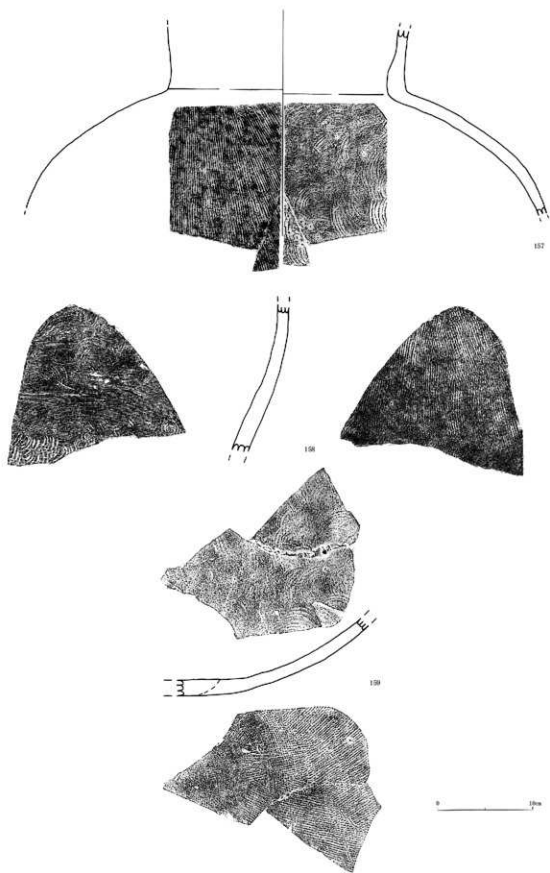


図3-45 Lトレンチ出土土器類 (22) S=1/4

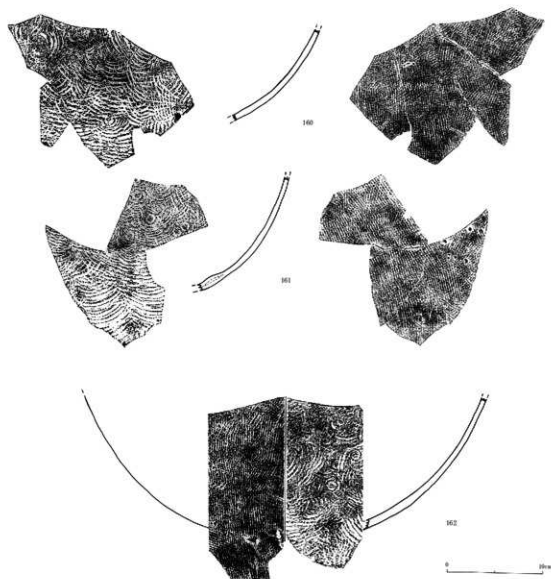


図3-46 Lトレンチ出土土器類 (23) S=1/4

甕 F (166・167) 肩部から胴部上半の破片を図化している。外面は平行タタキが施されその上からカキメがめぐっている。甕 E と同様にタタキ目が縦位をとって地面と平行してめぐっているが、甕 E と比較してタタキ目の凸部が押しつぶされている。1.5cm 程度の間隔でタタキ目が消えてカキメだけがめぐる部分があり、縦位のタタキ目がカキメによって区画される文様のような意匠となっている。内面は比較的彫りの深い同心円当て具痕が施されている。焼成は良好で甕 C よりは小さいがシミ状の黒色の斑点が目立っており、胎土中の鉄分が鉄紛として表面に現れたものと考えられる。以上の特徴に加え、本個体は内面が剥がれている破片が多く断面が板状の層をなして観察できるものもあり、個体識別の際の参考にした。また傾きから考えて胴部下半と想定される破片も存在するが、内面がほぼすべて剥がれていたため図化していない。

L1a・L1b・L1c・L2 から多数の破片が出土している。出土位置は L トレンチ内の各場所にまたがっ

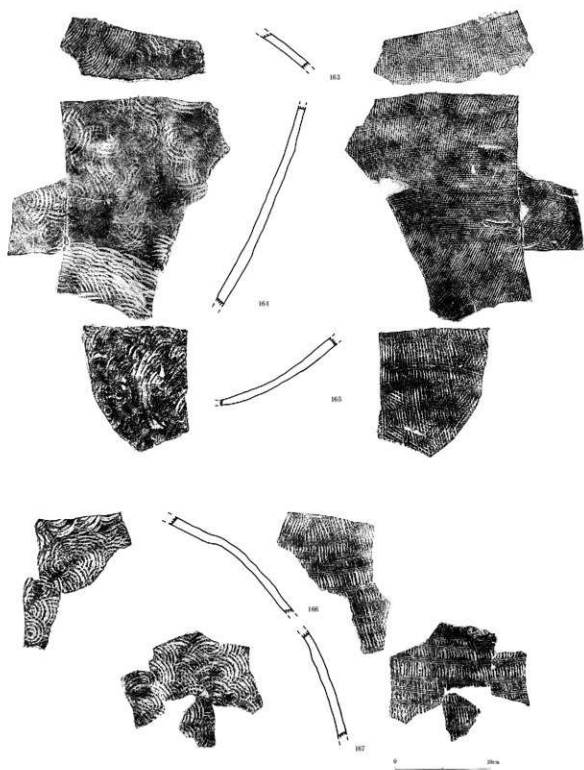


图3-47 Lトレンチ出土土器類 (24) S=1/4

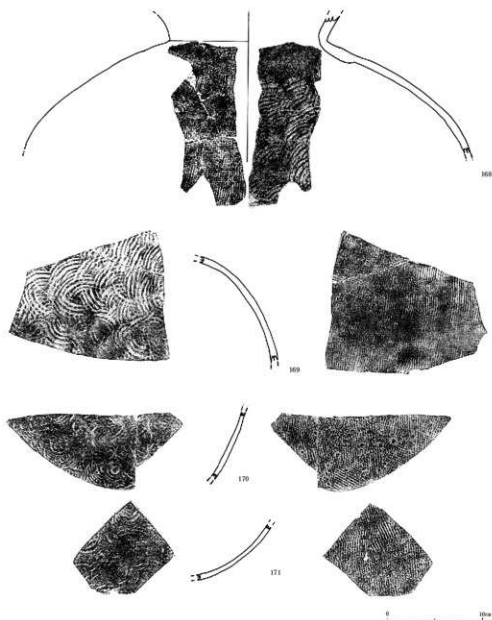


図3-48 Lトレンチ出土土器類 (25) S=1/4

ている。またIトレンチからも甕Fに帰属する可能性の高い破片が出土している(200)。

甕G (168～171) 復元頭部径16.6cmを測り、接合はしないが底部に近い胴部下半まで破片が存在している。頭部は外面に稜をもって屈曲し、口縁部は外傾して上方へ伸びる。口縁部及び頭部下内外面には回転ナデによる擦痕が明瞭に残り、頭部内面には口縁部と頭部との接合痕とみられるひび割れが確認できる。胴部外面は頭部下から平行タタキが施され、タタキ目が縦位をとって地面と平行してめぐっている。胴部上半外面にはタタキ目の上からカキメが全面に施されており、胴部を成形して乾燥した後回転台に正位においてカキメ調整を行ったものと想定される。胴部下半は平行タタキが重複して格子状になる部分がある。内面は胴部上半に直径5cm程度の比較的大きな当て具痕が残るが、胴部

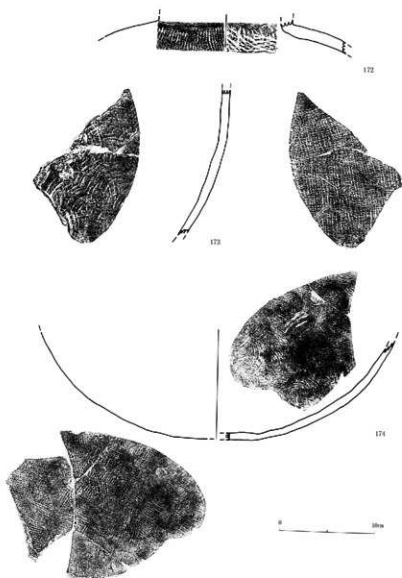


図3-49 Lトレンチ出土土器類 (26) S=1/4

下半にはやや小さく浅い当て具痕が薄く確認できる。また胴部上半内面には当て具痕が斜位の擦痕によりナデ消されている部分もあり、全面が青海波によって埋め尽くされているわけではない。全体的に器壁が薄く、特に肩部や胴部上半よりも底部付近の方が薄いことが特徴であり、焼成の際に膨れた部分がある。また頸部から胴部上半の外面にはオリーブ色の自然釉が附着しており、器表がざらついてところどころ光沢をもつ。1mm程度の白色砂粒や細かい砂粒を含むあまり目立たない精良な胎土であり、焼成は良好である。

破片はL1b・L1c・L2から出土している。L1aから出土した破片は確認できないが、L1a付近で表採されたものがある。以上のように出土位置はLトレンチ内の各場所にまたがっている。

甕 H (172～174) 復元頸部径 14.2cm を測り、接合はしないが胴部・底部の破片が確認できている。172 は頸部から肩部の破片であり、頸部で屈曲したのちのような口縁部が続くかは不明である。頸部内外面をナデによって調整し、胴部は外面を格子タタキ、内面を同心円当て具によって叩きしめる。173 は胴部片である。外面は格子タタキ、内面は同心円当て具痕を有する。当て具痕の大きさは 174 とさほど変わらないが、彫りは浅く比較的薄い。174 は底部である。外面には格子タタキ痕が残るが、格子の凹凸が潰れている部分やすり消えている部分も目立つ。内面はエビオサエによる成形が明瞭である。当て具痕の彫りが浅いわりには内側からの押し出しが明瞭であることから、やや湿った状態での底部成形が想定できる。また、底部付近に凹みがあり、成形時焼成の際にやや歪んだようである。特に底部 (174) は焼成良好だが色むらが大きい。胎土は 1～2mm 程度の白色砂粒を含む。

集積部 I から 2 点 (No.11, 18) が出土しており、L1a・L1b・L2 から多数の破片が出土している。また肩部から頸部片 (172) は L トレンチから出土したと思われる破片と、M トレンチ周溝内埋土から出土した破片が接合している。以上のように出土位置は集積部 I を含めた L トレンチ内の各場所と M トレンチにまたがっている。

高坏 (酸化炎焼成) 175～180・183～185 は高坏である。古墳時代後期の土師器によく認められる精良な胎土で、色調は浅黄橙から橙色を呈しており酸化炎焼成によるものである。しかし広口壺 108・109・112・113 でみられるような口縁端部の形態や、回転ナデ・回転ヘラケズリや回転を利用して施した可能性がある沈線の存在などから、本稿では須恵器として扱うこととした。175 は大きく外に開く坏部をもち復元口径 28.8cm を測る。口縁端部で上方に立ち上がって上端を面取りし、口縁端部外面は M 字の突帯状に成形している。また坏部外面には 2 条の沈線をめぐらせる。ヨコナデによって調整される。胎土は精良で 0.5～2mm 程度の白色・半透明砂粒や赤褐色の粘土粒が含まれ、焼成は良好で色調は橙色を呈する。176 は 175 と同様の形態や沈線をもつがやや摩耗しており端部が丸くなっている。復元口径は 23.3cm を測る。内外共にヨコナデや斜位のナデによって調整される。胎土は精良で 0.5～1mm 程度の白色・半透明砂粒や赤褐色の粘土粒が含まれ、焼成は良好で色調は浅黄橙色を呈する。177 は坏部片であり、外面上位に 2 条、下位に 1 条の沈線がめぐらされる。調整は内外共にナデを施すが、外面下位は回転ナデによるものか。胎土は 0.5～1mm 程度の白色・半透明砂粒や赤褐色の粘土粒が含まれ、焼成は良好で色調は橙色を呈する。178 は完形に復元できるもので、復元口径 25.9cm、底部径 18.2cm、器高 19.9cm を測る。175・176 と同様の形態の口縁端部をもつ。深い碗形の坏部をもちながら口縁部は大きく外に開いている。坏部外面には上位に 3 条の沈線、下位に 2 条の沈線をめぐらしている。脚部は太く安定感のあるもので、ラッパ状に開いて脚端部に至る。脚端部は口縁端部と類似した形態であり、M 字の突帯状に成形して下方に伸びる。また脚部中位には 2 条の沈線をめぐらせる。坏部と脚部は別作りして接合したと想定されるが、脚部上端は厚くなっており接合の際に粘土を充填した可能性がある。坏部・脚部ともに回転を利用した成形・調整を行ったと想定できるが、坏部底部の外面に回転ナデによるかと思われる擦痕が残る他はあまり明瞭ではない。坏部外面にはヨコナデや斜位のナデがみられ、脚部外面はタテナデによる擦痕がみとめられる。胎土は 0.5～2mm 程度の白色・半透明・黒色砂粒や赤褐色の粘土粒が含まれ、焼成は良好で色調は橙色を呈する。179 は坏部の底部と脚部が残存する。脚部端の形態は 178 とは異なり、脚部がラッパ状に開いて器壁を薄くしながらそのまま丸くおさめている。坏部外面は回転ヘラケズリによって調整し、内面はナデ調整を行う。脚部の内外面は回転ナデとタテナデによる擦痕が残る。脚部内面の上端にわずかに絞り痕が認められる。胎土は 0.5～4mm 程度の白色・半透明・黒色砂粒や赤褐色の粘土粒が含まれ、焼成は良好で色調は橙色を呈する。180 は坏部の底部で、脚端部がわずかに残存している。底部外面は回転ナデを施

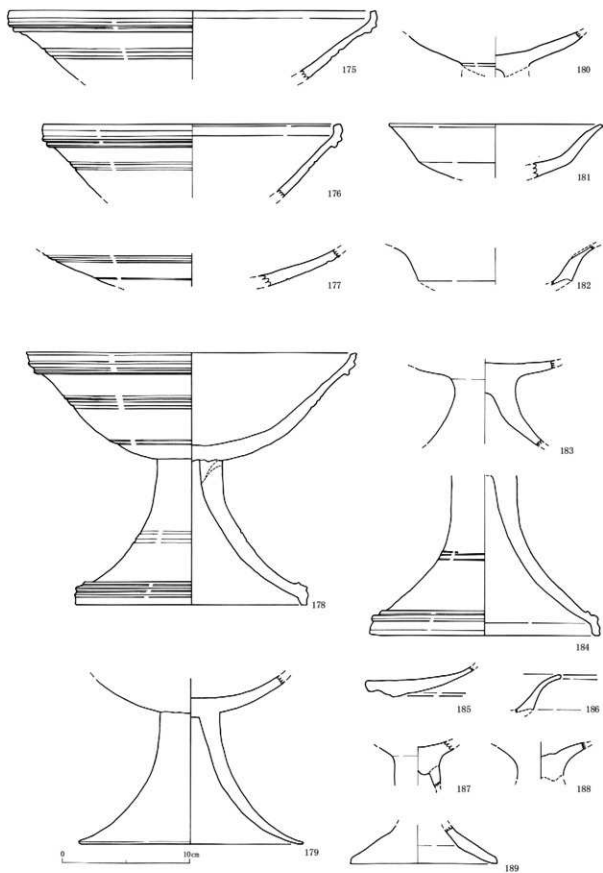


図3-50 Lトレンチ出土土器類 (27) S=1/3

し、内面はナデ調整を行う。胎土は0.5～2mm程度の白色・半透明砂粒や赤褐色の粘土粒が含まれ、焼成は良好で色調はにぶい橙色を呈する。183は坏部底部から脚部である。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は0.5～1mm程度の白色砂粒や赤褐色の粘土粒を含み、他と比してやや雲母が多いようである。焼成は良好で色調は橙色、浅黄橙色を呈する。184は脚部である。178と同様の形態で、脚端部はM字の突帯状に成形して垂下させる。また脚部中位には2条の沈線をめぐらせる。内外共に回転ナデとナデによって調整する。脚部上端には坏部接合の際に充填したと考えられる粘土の接合痕がみとめられる。胎土は0.5～3mm程度の白色・半透明砂粒や赤褐色の粘土粒が含まれ、焼成は良好で色調は浅黄橙色を呈する。185は坏部底部であり、脚部との接合痕が認められる。外面下位は回転ヘラケズリ、他はナデによって調整される。胎土は0.5～1mm程度の白色・半透明砂粒や赤褐色の粘土粒が含まれ、焼成は良好で色調は黄橙色を呈する。

②土師器

181・182・186～189は土師器の高坏である。181・182・186は坏部下半で屈曲し外反して外に開くものである。内外共にヨコナデによって調整される。いずれも内面の摩滅が激しいが外面は丁寧に調整される。182と186は坏部下半の屈曲部を突出させているように見えるが、本来は181のような形態であったかと思われ、坏部下半で粘土が剥離した可能性がある。胎土は精良で0.5mm程度の白色砂粒を含む。焼成は良好で明赤褐色を呈す。187・188は181・182・186のような坏部に伴うと考えられる坏部底部・脚部上端である。特に187は脚部上端に粘土を充填したかと思われる接合痕が確認できる。胎土は0.5mm程度の白色砂粒を含み、焼成は良好で明赤褐色を呈す。189は脚端部で、これも181・182・186～188のような高坏に伴うと考えられる。内面に稜をもって屈曲し外に開いている。胎土は0.5mm程度の白色砂粒を含む。焼成は良好で明赤褐色を呈し、黒斑がみとめられる。

(4) 小結

以上、Lトレンチで出土した古墳時代の遺物について報告を行ってきた。改めて器種構成を列挙すると「坏身・坏蓋・高坏蓋・有蓋高坏・無蓋高坏・甕・提瓶・横瓶・壺類・革袋形土器・高坏形器台・裝飾付須恵器（子持配像脚付壺、裝飾付器台、子持脚付壺）・甕（A～H）・高坏（酸化炭焼成）・高坏（土師器）」となり、非常に豊富で多岐にわたる器種が出土していることが確認できる。また前述の通り破碎供献を行ったことが想定され、破片資料でありながら多くの接合関係を見出すことができた。そのため断面や調整などを観察できる資料が多く、特に瓶類や裝飾付須恵器については製作技法を考えるための好資料であり、報文中でその観察結果を述べている。ここでは時期の検討とその他特筆できる点について簡単にまとめることとしたい。

時期 特に小形器種に着目して時期の検討を行う。①坏蓋：復元口径が16cm台を測るものがある。堆積層や平坦面直上から出土しているものについては12cm台とやや小さいものもあるため若干新しいものが含まれる可能性は否定できないが、全体の傾向としては口径が比較的大きいと言える。また口径縁端部を丸くおさめるものはなく、いずれも明瞭な段かやや痕跡な段をもつものである。一方で肩部の段は痕跡的に残るものと残らないものが混在していることが指摘できる。②坏身：復元口径は13cm前後を測り、坏蓋と同様に比較的大きいことが特徴として挙げられる。また立ち上がり長は1～1.4cmを測り後の時代に比べると長いが、口唇部には段をもたない。③有蓋高坏：2段透かしをもつものである。坏部の口唇部には段をもたないが立ち上がりは比較的长度、蓋の端部には痕跡的な段をもつ。④無蓋高坏：坏部下半で段をなして屈曲するものである。こうした高坏はⅢB～ⅣA期において宗像窯跡群や井手ヶ浦窯跡群でよく認められる。⑤甕：いずれも体部を欠損しているため全体のプロポー

ションは不明であるが、頸部が縮まりラッパ状に開く口縁部をもつ。口唇部に痕跡的な段を有している点が特筆できる。⑥提瓶：半環状の耳をもつ。以上に示した各器種における属性的特徴を踏まえて総合的に判断すると、本遺物群は小田富士雄氏編年のⅢB期（TK43型式前後）に属するものと考えられる。遠賀川上流域の大規模な須恵器窯跡としては井手ヶ浦窯跡群が存在するが、この時期はその開窯期にやや後出する時期にあたる。これは足達編年中の井手ヶ浦編年Ⅰ期に位置し、そこで示された壺坏の法量やその他の特徴、高坏や趣の特徴などと一致している（足達 2022）。

高坏（175～189）Lトレンチからまとまって出土した遺物の中には、須恵器と類似する形態的特徴や製作技法をもつ酸化炎焼成の高坏（175～180・183～185）が認められる。椀形の坏部に大きく開く口縁部をもち、端部をやや厚くして突帯状に成形することや、脚端部を垂下させて口縁端部と同様に成形するといった形態的な特徴に加え、焼成不良によるものとは考えにくいような鮮やかな浅黄橙・橙色を呈することが特筆できる。こうした特徴は八女地域を中心に分布する「八女系須恵器」と呼称される高坏（長・中島 2013）と一部類似するが、天神山古墳出土高坏（酸化炎焼成）はそれらと比べて口縁部の加飾や脚部の太さといった点で異なり、「八女系須恵器」と同じ類とは言えないかもしれない（長氏・中島氏ご教示）。いずれにしてもこの高坏は特異な特徴を有しており、古墳への供献土器について検討する上で今回の出土例は重要となろう。また181・182・186～189は坏部下半で屈曲し外反して開き明赤褐色を呈する土師器高坏である。いずれも完形に復元ができないため全体のプロポーションは不明であるが、こうした高坏は重藤編年の「高坏Ea類」（重藤 2009）と形態的に類似している。これは宗像地域に分布の中心をもつことが指摘されており、胸肩氏の墳丘祭祀と関係があるとする評価もある（小嶋 2018）。以上の2種類の高坏の存在は首長墓級の前方後円墳における葬送儀礼を検討する上で興味深い。

以上、Lトレンチの調査の概要と、そこから出土した土器類について検討した。一部完形のものも含まれるが、大半が接合しても完形にならず、図上に復元している。この点も含め、墓道の前庭部付近における破砕供献の可能性が想定された。天神山古墳から出土した土器類の9割以上が本トレンチからの出土である。一方で、Lトレンチ以外からも数は少ないながらも須恵器片などが出土しており、これらについて節をあらためて報告する。

第4節 Lトレンチ以外の調査区の出土遺物

(1) 各トレンチの出土遺物

天神山古墳出土須恵器はそのほとんどがLトレンチからまとまって出土しているが、Lトレンチ以外の調査区からも破片が数点ずつ出土している。以下、トレンチごとにその内容を述べる。

Dトレンチ 190は合子状の坏身で、復元受け部径は13cmである。受け部の上面は平坦に成形され、立ち上がりの付け根部分に沈線状の凹みをめぐらせている。立ち上がりは内傾し、内面の屈曲もゆるやかである。焼成は良好で色調は内外共に黄灰色を呈する。191・192は高台付きの坏身であり、他の須恵器よりも時期が下るものである。191は復元底部径10.2cmを測り、体部の下端よりやや内側に高台を貼り付ける。高台は断面台形で短いもので、外側を浮かせて接地面を小さくするものであり、8世紀後半のものであると考えられる。焼成は良好で内外共に灰色を呈する。胎土は精良で0.5mm程度の白色砂粒を含む。192は体部下端よりやや内側に断面台形の短い高台を貼り付けるものである。高台の外側をわずかに浮かしている。時期は191と同様に8世紀後半のものであろう。焼成は良好で内外共に褐灰色を呈する。胎土は精良で0.5mm程度の白色砂粒を含む。193は壺・甕類の口縁部である。

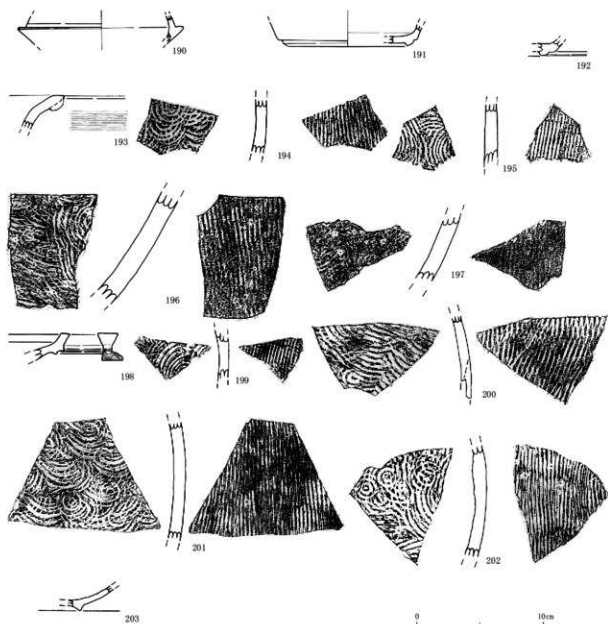


図3-51 Lトレンチ以外の調査区出土土器類 S=1/3

口縁端部は肥厚しており、断面に接合痕が残るため粘土紐を貼り付けて成形したものと考えられる。内外ともに回転ナデを施し、口縁部外面にはカキメがめぐっている。焼成は良好で色調は外面が黒褐色・灰黄褐色、内面は灰黄褐色を呈す。胎土は1mm程度の白色砂粒を含むが精良である。194は甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕を残す。外面はにぶい黄褐、内面は灰色を呈す。胎土は1mm程度の白色砂粒を含む。195は甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕を残す。焼成は良好で外面は黒褐色、内面は褐灰色を呈し、胎土は精良で1mm程度の白色砂粒を含む。内面の同心円当て具痕の凹凸や色調・調整から考えて甕Bに帰属する可能性が高い。Eトレンチ 196は甕の胴部下半である。外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕を残す。焼成は

良好で外面は黄灰色、内面は灰色を呈し、胎土は1～2mm程度の白色砂粒を含む。197は甕の胴部下
半である。外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕を残す。外面は黄褐色、内面は黒褐色を呈し、
焼成は良好である。胎土は1～2mm程度の白色砂粒を含む。内外の調整は201・202と類似するが、
外面の色調が異なるため同一個体であるかは判別がつかない。

Fトレンチ 198は壺類の口縁部である。口縁部外面に三角形の突帯をもち、端部が上方に立ち上が
って上面を平らにするものであり、86・88と同様の形態である。口縁部下には波状文が施されている。
焼成は良好で外面は黒色、内面はにぶい黄褐色を呈す。

Gトレンチ 199は甕類の胴部である。外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕を残す。焼成は良好
で外面は暗灰色、内面はオリーブ灰色を呈す。胎土は精良で0.5～1mm程度の白色砂粒を含む。195
や甕Bと比較的類似しており、甕Bに帰属する可能性はあるが断定はできない。

Iトレンチ 200は甕の胴部片である。外面は平行タタキのちカキメを施し、内面は当て具痕を残す。
断面に粘土接合痕が確認できる。焼成は良好で内外共に灰色を呈す。胎土は精良で1mm程度の白色砂
粒を含む。特にタタキ目の凸部が押しつぶされたような特徴が甕Fと類似しているため、本破片は甕
Fに帰属する可能性が高い。201は甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は当て具痕を残す。焼
成は良好で外面は灰白色、内面は灰色を呈す。胎土は1～3mm程度の白色砂粒を含む。調整や焼成、色
調が202と類似しており、同一個体であると考えられる。なお甕A～Hには帰属しないようである。

Mトレンチ 202は甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕を残す。焼成は良
好で外面は灰白色、内面は灰色を呈す。胎土は1～3mm程度の白色砂粒を含む。調整や焼成、色調
が201と類似しており、同一個体であると考えられる。なお甕A～Hには帰属しないようである。

出土地点不明 203は小さく短い高台をもつ瓦器の椀である。外面は黒色、内面は灰白色を呈する。
中世以降のものであろう。

(2) 小結

墳丘の各場所でトレンチ出土土器群と同時期かと考えられる須恵器片が出土している。特に甕Bや
甕Fと同一個体の可能性が高い破片や、甕Hと接合する破片が出土していることから、Lトレンチで
破砕供献された土器の一部が墳丘の周辺で散布されている状況が指摘できる。またLトレンチ出土の
甕A～Hと同一個体とは考えにくい甕胴部片が出土している点も特筆できる。

第5節 小結

以上、天神山古墳の各調査区と出土遺物について検討を行ってきた。ここで、墳丘および出土遺物
の調査成果について整理しておきたい。

天神山古墳は二段築成の前方後円墳であり、墳丘の規模は、全長67m、後円部径約40m、前方部幅
約44m、くびれ部復元幅約26m、周堤外縁まで含めた範囲全体の南北長は約87m、東西幅約60mを測
る。周溝底面からの後円部の高さは約8m、前方部の高さは約7m、くびれ部の高さは約6.2mである。
周溝の幅は底部で約3～4mの箇所が多い。後円部側が広く、前方部側がやや狭くなっている。また
くびれ部付近（Iトレンチ）では5.5mと幅広である。周堤の幅は、周溝側上端から外側平坦面まで約
3.6mである。周堤・周溝および墳丘一段目は、基本的には地山削り出しであるが、墳丘一段目の平坦
面は、数カ所（調査区ではG・I・L・N・Pトレンチで確認）において厚い一次盛土により、全体とし
て周溝側の上端部は標高46.0m前後で検出されている。墳丘二段目に近い地点でやや標高が高い箇所

がみられるが(N・Pトレンチ)、G・Iトレンチでも46.0m前後で水平面が検出されていることから、この標高46.0m前後で全体が一度水平に造成され、一部は一次盛土を伴いながら一段目の平坦面が設定されているようである。その上に二段目の墳丘が薄い互層の二次盛土によって造成されている。一段目の平坦面は幅約4m前後で、二段目墳丘部分が細長く高いという点がこの時期の北部九州の前方後円墳の特徴として認められる。葺石および埴輪はみられない。また周堤はいわゆる盾形ではなく、墳丘の形状に沿ってくびれ部付近が屈曲し細くなる形態を呈している。この周堤形態は、京大報告で王塚古墳について同様の想定が行われており、王塚古墳の溝溝トレンチ調査の結果もそれに対応するものとみられる(第6章参照)。

その他の特記事項として、Dトレンチの周堤では幅1mの通路状遺構が設けられており、GトレンチおよびLトレンチ付近では、一段目墳丘斜面に登り口かとみられる段状の箇所も確認された。またG・H・Iトレンチでは、前方部中心軸正面・前方部隅角・くびれ部といった各所でピット1基ずつが検出され、その位置関係から墳丘の築造に伴うものである可能性が考えられる。

豆田天満宮社殿北側の墳丘一段目平坦面付近に設定したLトレンチでは、墓道前庭部および埋土を検出するとともに、多量の土器類が出土した。集積部IとIIを中心として、墓道前庭部左手付近の平坦面全体にわたって破砕供献が行われたものとみられ、広い範囲での接合関係が認められた。集積部I・II付近は短期間で埋め戻されたものとみられ、これを初葬の埋土と捉えている。その後、黒色土層の堆積が認められるとともに、それを切り込む形で厚い墓道の埋土が確認でき、これを追葬の埋土と想定している。この追葬の埋土は後世における攪乱等の形跡がみられないことから、墓道周辺部については未盗掘であるものと考えられた。

古墳時代の出土遺物はLトレンチに集中しているが、いくつかのトレンチでも須恵器片が出土しており、かつ一部はLトレンチ出土須恵器と同一個体であることが想定されることから、Lトレンチにおいて破砕供献された須恵器の一部が墳丘の周辺で散布されたものと考えられる。

Lトレンチ出土土器類は、上述のように初葬の埋土に帰属するもので、短期間のうちに人為的に埋め戻されたものと考えられることから、少なくとも集積部I・IIから出土した須恵器・土器器については一括遺物として捉えることができる。出土した土器類は、蓋杯・有蓋高杯・無蓋高杯・甕・横瓶・提瓶・各種壺類・革袋形土器・高杯形器台・各種裝飾付須恵器・高杯(酸化炎焼成)・土器器高杯などであり、器種が非常に豊富である点の特徴である。これらの土器類をもとに古墳の築造年代について述べるならば、蓋杯類や無蓋高杯などから、小田富士雄氏編年のⅢB期(TK43型式前後)と考えることができる。これは宇野愷敏氏(1986)が表探資料にもとづき想定していた年代観と概ね一致するところであり、一部時期がやや新しいと考えられるものも含まれるが、Lトレンチ付近から出土した須恵器が概ねこの時期に帰属することを示している。追葬に関わる須恵器は石室内に持ち込まれたものとみられ、Lトレンチ周辺出土の須恵器は基本的に初葬の葬送儀礼に伴うものと想定される。

7世紀代の土器は殆どみられず、追葬以降における埋葬や祭祀の痕跡は明確でない。ただ、Dトレンチの通路状遺構付近において8世紀後半の坏身片などが出土しており、古代において墳丘周辺に人が訪れた痕跡が僅かながら認められる。中世の土器類は少なく、近世の瓦類や陶磁器類がみられることから、近世以降に豆田天満宮が造営されたことにより、墳丘周辺に人々が再び訪れるようになったものと考えられる¹⁾。

【註】

- 1) 本章は、辻田淳一郎・足達悠紀の両名が分担して執筆した。このうち、第3節(3)Lトレンチ出

土遺物の134～152以外の報告および(4)小結、第4節、表3-1・2を足達が、第1節・第2節・第3節(1)(2)および(3)の134～152の報告と第5節を辻田が担当した。遺構・遺物の実測・トレースは、第1章に掲載した九州大学考古学研究所所属学生と足達悠紀、長安慧と辻田が行った。

【参考文献】

- 足達悠紀 2022 「6・7世紀の須恵器編年考—北部九州を対象として—」『九州考古学』97
- 宇野備敏 1986 「桂川・天神山古墳とその背景」(『九州古墳時代の研究』学生社, 2003に所収)
- 梅原末治・小林行雄 1940 『筑前国王塚裝飾古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第15冊
- 小嶋篤 2018 「『前方後円墳の終焉』から見た胸肩君」『沖ノ島研究』4
- 重藤輝行 2009 「古墳時代中期・後期の筑前・筑後地域の土師器」『地域の考古学』佐田茂先生論文集刊行会
- 長直信・中島圭 2013 「福岡県内出土の八女系須恵器について」『古墳時代の地域間交流1』九州前方後円墳研究会
- 辻田淳一郎編 2015 『山の神古墳の研究—「雄略朝」期前後の地域社会と人制に関する考古学的研究—:北部九州を中心に』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

表3-2 須臾器・土師器一覧表 単位量(cm)は復元径を示す

番号	名称	出土地点	수량	色調(外面)	色調(内面)	構成	胎土	調整(外面)	調整(内面)	備考
1	坏蓋	L1a表土層, L1c	口徑16.0cm, 残存高4.9cm	Hue N6-0灰色	Hue N6-0灰色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ	回転ナブ	
2	坏蓋	L1b埴輪層, L1b平埴面直上	口徑16.2cm, 残存高3.9cm	Hue N3-0黄灰色	Hue 3B 6/1黄灰色	良好	2mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ	回転ナブ	
3	坏蓋	L2埴輪層	口徑18.3cm, 残存高3.6cm	Hue 2.5Y6/1黄灰色	Hue 7.5YR 7.0黄褐色	良好	2mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
4	坏蓋	L1b平埴面直上	口徑14.8cm, 残存高2.9cm	Hue N5-0灰色	Hue N6-0灰色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
5	坏蓋	L1a埴輪層, L1a表土層	口徑14.4cm, 残存高4.9cm	Hue 10YR 6/3C ぶい黄褐色	Hue 10YR 5/3C ぶい黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ	回転ナブ	
6	坏蓋	L1b平埴面直上	口徑13.3cm, 残存高3.7cm	Hue 10YR6/3C ぶい黄褐色	Hue 10YR6/3C ぶい黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ	回転ナブ	
7	坏蓋	L2埴輪層	口徑13.8cm, 残存高3.5cm	Hue 5PB6/1黄灰色	Hue 5PB6/1黄灰色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ	回転ナブ	
8	坏蓋	L2埴輪層	口徑14.4cm, 残存高4.8cm	Hue 2.5Y6/2黄褐色	Hue 2.5Y6/2黄褐色	良好	2mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ	回転ナブ	
9	坏蓋	L2表土層	口徑14.0cm, 残存高3.7cm	Hue 5Y5/1灰色	Hue 2.5Y6/2黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
10	坏蓋	L2埴輪層	口徑12.3cm, 残存高2.4cm	Hue 2.5Y2/1黄褐色	Hue 2.5Y6/1黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
11	坏蓋	表土, L1b平埴面直上	口徑16.6cm, 残存高2.2cm	Hue 10YR5/1黄褐色	Hue 10YR5/1黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
12	坏蓋	L1a表土層	口徑14.8cm, 残存高3.0cm	Hue 7.5YR5/4C ぶい褐色	Hue 7.5YR5/4C ぶい褐色	良好	2mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
13	坏蓋	L1b平埴面直上	口徑12.6cm, 残存高3.0cm	Hue 10YR7/3C ぶい黄褐色	Hue 10YR7/3C ぶい黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
14	坏蓋	L1c	口徑12.4cm, 残存高2.3cm	Hue 10YR4/1黄褐色	Hue 10YR4/1黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
15	坏蓋	L1a表土層	残存高3.0cm	Hue 2.5Y5/2黄褐色	Hue 2.5Y5/1黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
16	坏蓋	L1a埴輪層	残存高2.7cm	Hue 10YR6/3C ぶい黄褐色	Hue 10YR6/3C ぶい黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ	回転ナブ・不定方向ナブ	内面に八角形状模様が
17	坏蓋	L2埴輪層	残存高2.7cm	Hue 2.5Y6/2黄褐色	Hue 10YR6/2黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ	回転ナブ	へ記号×
18	坏蓋	表土	口徑19.2cm, 残存高3.5cm	Hue 10YR5/2黄褐色	Hue 10YR6/3C ぶい黄褐色	良好	2mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ	回転ナブ	
19	坏蓋	L1a表土層	口徑13.8cm, 残存高4.5cm	Hue 2.5YR2/1黄褐色	Hue 2.5YR7/2黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ	回転ナブ	
20	坏蓋	L1b平埴面直上, L1b平埴面直上, L1a表土層, L1b平埴面直上	口徑13.9cm, 残存高4.9cm	Hue 7.5YR5/1黄褐色	Hue 5YR5/2黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ	回転ナブ	
21	坏蓋	L2表土層	残存高3.2cm	Hue 10YR2/1黄褐色	Hue 10YR5/1黄褐色	良好	0.5mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
22	坏蓋	L1c	口徑12.4cm, 残存高2.5cm	Hue 2.5Y6/1黄褐色	Hue 10YR6/2黄褐色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
23	坏蓋	L1b, L1a	口徑13.6cm, 残存高3.5cm	Hue 10YR4/1黄褐色	Hue 7.5YR4/2黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ	回転ナブ	
24	坏蓋	L1b, L1a	残存高4.4cm	Hue N5-0灰色	Hue N5-0灰色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
25	坏蓋	L1埴輪層	口徑12.2cm, 残存高2.5cm	Hue 10YR6/3C ぶい黄褐色	Hue 10YR6/3C ぶい黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
26	坏蓋	L2埴輪層	口徑12.8cm, 残存高2.5cm	Hue 5Y6/1灰色	Hue 7.5YR6/1黄褐色	良好	2~3mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
27	坏蓋	表土	残存高3.4cm	表面Hue 2.5Y2/1黄褐色, 内部Hue 10YR4/4黄褐色	Hue 10YR4/4黄褐色	良好	2mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
28	坏蓋	L1a表土層	口徑13.0cm, 残存高3.1cm	Hue 10YR5/2黄褐色	Hue 10YR5/2黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ, 不定方向ナブ	回転ナブ	
29	坏蓋	埴輪層	残存高2.4cm	表面Hue 7.5YR6/4C ぶい褐色, C面付近Hue 7.5YR5/2黄褐色	Hue 7.5YR6/4C ぶい褐色	良好	0.5mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ, 手持ちヘラクスリ	回転ナブ	
30	坏蓋	L2表土層	残存高3.0cm	Hue 5Y5/1灰色	Hue 5Y5/2灰色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
31	坏蓋	L1a表土層	残存高2.4cm	Hue 10YR1/7黄褐色, 口縁部Hue 10YR7/1灰白色	Hue 10YR7/1灰白色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
32	坏蓋	L2平埴面直上, 表土層	口徑13.6cm, 残存高2.4cm	Hue 2.5Y6/1黄褐色	Hue 7.5Y6/1灰色	良好	2~3mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
33	坏蓋	L2表土層	残存高3.5cm	Hue 2.5Y3/1黄褐色, Hue 2.5Y3/3 ぶい黄褐色	Hue 2.5Y5/2黄褐色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
34	坏蓋	L1c	残存高3.2cm	Hue 2.5Y6/1黄褐色	Hue 5Y6/1灰色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ	回転ナブ	粘土結核含有あり
35	坏蓋	L1a表土層	残存高2.9cm	Hue 2.5Y5/1黄褐色	Hue 2.5Y5/2黄褐色	良好	0.5mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
36	坏蓋	L1a表土層	残存高3.5cm	Hue 10YR5/3C ぶい黄褐色	Hue N4-0灰色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ, ナブ	回転ナブ	
37	坏蓋	L2埴輪層	残存高3.2cm	Hue 10YR4/1黄褐色	Hue 10YR5/2黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
38	坏蓋	L1c	残存高2.8cm	Hue 10YR5/1黄褐色	Hue 2.5YR5/1黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
39	坏蓋	L1a表土層	残存高2.9cm	Hue 2.5Y5/2黄褐色	Hue 2.5Y5/2黄褐色	良好	0.5mm程度の砂粒を含む	回転ナブ	回転ナブ	
40	坏蓋	L2表土層	残存高3.9cm	Hue 2.5YR5/1黄褐色	Hue 2.5YR5/1黄褐色	良好	1~3mm程度の砂粒を含む	不明瞭	不明瞭	断面が付か
41	高坏蓋	L1a表土層	残存高3.4cm	Hue N4-0灰白色	Hue 5Y6/1灰色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ	回転ナブ, 不定方向ナブ	
42	高坏蓋	L1a表土層	残存高1.6cm	Hue N6-0灰色	Hue N6-0灰色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ, カキメ, 連続取戻	回転ナブ, 不定方向ナブ	
43	高坏蓋	L1a表土層, L1c	残存高1.3cm	Hue N4-0灰色	Hue 2.5Y5/1黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナブ, カキメ, 連続取戻	回転ナブ, 不定方向ナブ	
44	高坏蓋	L1b埴輪層	口徑15.0cm, 残高6.7cm	Hue 10YR6/2黄褐色	Hue 10YR6/3C ぶい黄褐色	良好	2mm程度の砂粒を含む	回転ヘラクスリ, 回転ナブ	回転ナブ	

表3-2 須臾器・土師器一覧表

番号	器種	出土地点	通量	色図(外面)	色図(内面)	構成	胎土	調整(外面)	調整(内面)	備考
45	高坪蓋	L1a平ら面蓋上, L2埴輪蓋, L2赤土蓋	口径16.0cm, 高さ4.1cm	Hue 10B05/1黄灰色	Hue 9B6/1黄灰色	良好	2mm程度の砂粒を含む	回転ヘラズリ, 回転ナデ	回転ナデ	
46	高坪蓋	L2平ら面蓋上	残存高3.3cm	Hue 7.5YR1/1黒色	Hue 7.5YR1/1黒色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ヘラズリ, 回転ナデ	回転ナデ	湯呑風か
47	高坪蓋	L1a赤土蓋	残存高3.9cm	Hue N6/0灰色	Hue 5Y5/1灰色	良好	3mm程度の砂粒を含む	回転ヘラズリ, 回転ナデ	回転ナデ	
48	高坪蓋	L1b	口径14.8cm, 残高9.9cm	Hue 2.5Y6/1黄灰色	Hue N5/0灰色	良好	2mm程度の砂粒を含む	回転ナデ, 連続削文	回転ナデ	
49	煎茶鉢	L2埴輪蓋, L2平ら面蓋上	口径9.5cm, 残高4.2cm	Hue 2.5y/1黒色	Hue 5Y5/1灰色	良好	砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	
50	高坪蓋	Lr付込表板	残存高3.0cm	Hue 2.5Y5/1黄灰色	Hue 2.5Y5/1黄灰色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ヘラズリ, 回転ナデ	回転ナデ	
51	高坪蓋	L2埴輪蓋, 赤土蓋	口径14.5cm, 残存高5.0cm	Hue 5Y6/1灰色	Hue N6/0灰色	良好	1~3mmの砂粒を含む	回転ヘラズリ, 回転ナデ	回転ナデ	
52	高坪	L1a	口径14.2cm, 残高18.75cm	Hue N3/0暗灰色	Hue 5Y6/1灰色	良好	2~3mmの砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ, 不定方向ナデ	上縁に三角形透かし(4つ), 下段に三角形透かし(2つ)
53	中高坪	L1a平ら面蓋上, L1a, L1a埴輪蓋	口径9.7cm, 残存高13.6cm	Hue 10YR8/3淡黄褐色	Hue 10YR8/3淡黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	串刺す跡あり
54	高坪	L1c	口径10.8cm, 残存高0.9cm	Hue 2.5Y 2/1 黒色	Hue 10YR 3/0 白色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	回転ナデ, 炭状文, カキメ	回転ナデ, 靱子底	靱子底か, 靱子底透かし(2つ)
55	高坪	L1a赤土蓋	口径10.2cm, 残存高4.3cm	Hue N5/0灰色	Hue 7.5Y6/1灰色	良好	わずかに砂粒を含む	回転ナデ, カキメ	回転ナデ, 靱子底	
56	高坪	L2埴輪蓋	残存高4.8cm	Hue N4/0灰色	Hue 5Y6/1灰色	良好	わずかに砂粒を含む	回転ナデ, カキメ	回転ナデ	
57	高坪	L2埴輪蓋	口径10.8cm, 残存高11.0cm	Hue N2/0黒色	Hue 10YR 3/2 黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナデ, カキメ, 連続削文	回転ナデ	
58	高坪	L1b埴輪蓋	口径10.8cm, 残存高3.7cm	Hue N3/0暗灰色	Hue N3/0暗灰色	良好	砂粒を含む	回転ナデ, カキメ	回転ナデ	
59	高坪	L2埴輪蓋	口径9.9cm, 残存高10.0cm	中心部Hue 2.5Y 3/1 黄褐色, 他 Hue 2.5Y 6/1 黄灰色	Hue 2.5YR 6/2R 黄色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナデ, カキメ	回転ナデ	
60	高坪	L1a埴輪蓋	口径10.8cm, 残存高10.0cm	Hue 10YR 2/1 黒色	Hue 10YR 5/2R 黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナデ, カキメ, 連続削文	回転ナデ	
61	高坪	L1b埴輪蓋, L1a赤土蓋	口径11.9cm, 残存高4.2cm	Hue 5P82/1黄褐色	Hue 5P83/1黄褐色	良好	わずかに砂粒を含む	回転ナデ, カキメ	回転ナデ	
62	高坪	赤土	残存高2.9cm	Hue N 4/0 灰色	Hue 5Y 6/1 灰色	良好	0.5mm程度の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	
63	高坪	L2埴輪蓋	断面径19.0cm, 残存高10.6cm	Hue N3/暗灰色	Hue N4/0灰色	良好	2mm程度の砂粒を含む	回転ナデ, カキメ	回転ナデ, カキメ	透かし文切込みあり
64	高坪	L1b埴輪蓋, L1c, L2埴輪蓋	断面径10.4cm, 残存高11.2cm	Hue N3/暗灰色	Hue 2.5Y6/1黄灰色	良好	わずかに砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	上縁に長方形透かし(1つ), 下段に三角形透かし(2つ)
65	高坪	L1b平ら面蓋上	断面径22.8cm, 残存高9.7cm	Hue 2.5Y6/1黄灰色	Hue 10Y6/1灰色	良好	わずかに砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	上縁に長方形透かし(1つ), 下段に三角形透かし(2つ)
66	高坪	L2平ら面蓋上	断面径14.3cm, 残存高1.0cm	Hue 2.5Y6/1黄灰色	Hue 5Y7/1灰白色	良好	わずかに砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	長方形と三角形の透かしが交互に穿れるか
67	高坪	L1b埴輪蓋	断面径10.8cm, 残存高5.5cm	Hue 10YR 6/2 黄褐色	Hue 10YR 5/1 暗灰色	良好	1~2mmの砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	長方形透かし(2つ)
68	高坪	L2赤土蓋	断面径13.8cm, 残存高5.0cm	Hue 10Y6/1灰色	Hue 2.5Y7/1灰白色	良好	わずかに砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	長方形と三角形の透かしが交互に穿れるか
69	高坪	L2埴輪蓋	断面径10.8cm, 残存高3.7cm	Hue N3/0暗灰色	Hue N5/0灰色	良好	わずかに砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	下縁に長方形透かし
70	高坪	L2赤土蓋	断面径11.8cm, 残存高1.5cm	Hue 10YR 6/2 黄褐色	Hue 10YR 6/1 暗灰色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	
71	高坪	L1c	断面径13.4cm, 残存高1.8cm	Hue 10Y6/1灰色	Hue 2.5Y7/1灰白色	良好	わずかに砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	下縁に長方形透かし(1つ)
72	高坪	L1a	口径12.9cm, 残存高5.0cm	Hue 2.5Y 6/3 黄褐色, Hue 2.5Y 8/1 灰白色, Hue 2.5Y 7.4 黄褐色	Hue 2.5Y 7.4 黄褐色	良好	0.5mm程度の砂粒を含む	回転ナデ, カキメ	回転ナデ	
73	高坪	L2赤土蓋	断面径11.8cm, 残存高2.5cm	Hue 5Y5/1 灰色	Hue 5Y 5/1 灰色	良好	2mm程度の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	
74	高坪	L2赤土蓋	断面径11.5cm, 残存高1.4cm	Hue 2.5Y4/1 黄灰色	Hue 2.5Y6/2 黄灰色	良好	2~3mmの砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	
75	高坪	L1b埴輪蓋, L1b, L2埴輪蓋	断面径10.0cm, 残存高1.8cm	Hue 10YR3/2 白色	Hue 2.5Y5/1 黄灰色	良好	0.5mm程度の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	下縁に長方形透かし
76	高坪	L1b, L1a	口径9.4cm, 残存高1.2cm	Hue 10YR 6/2 黄褐色, Hue 10YR 3/1 黄褐色	Hue 10YR3/1 黄褐色	良好	2mm程度の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	
77	高坪	L2平ら面蓋上, 赤土蓋	残存高2.5cm	Hue 10YR7/1黄褐色	Hue 5YR 3/1 黄褐色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	
78	皿	L1b平ら面蓋上, L2平ら面蓋上	口径16.0cm 残存高3.2cm	Hue N5/0灰色	Hue 10YR3/1灰白色	良好	わずかに砂粒を含む	回転ナデ, 連続削文	回転ナデ	
79	皿	L1a赤土蓋	残存高2.1cm	Hue N4/0灰色	Hue 10Y5/5/3C 白色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナデ, 連続削文	回転ナデ	
80	皿	L1a平ら面蓋上	口径15.4cm, 残存高9.9cm	Hue 10YR6/1黄褐色	Hue 10YR6/1黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナデ, 炭状文, 靱子底	回転ナデ	
81	椀鉢	L1b, L1b平ら面蓋, L1c, L1a, L1a埴輪蓋, 赤土蓋	口径12.2cm, 残存高2.1cm	Hue N3/0暗灰色	Hue 10Y4/1C, Hue 10YR3/2C 白色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	回転ナデ, カキメ, ナデ	回転ナデ, カキメ, ナデ, 靱子底, コビヤエ	自然腐, 内磨削
82	椀鉢	集積1 No.19, L1a平ら面蓋上	口径11.4cm, 残高2.4cm	Hue N3/0暗灰色	Hue 2.5Y6/1黄灰色	良好	2mm程度の白色砂粒を含む	回転ナデ, カキメ, ナデ	回転ナデ, カキメ, ナデ, 靱子底, コビヤエ	自然腐, 内磨削
83	椀鉢	L1a平ら面蓋上, L2赤土蓋, L1a, L1c, L1a赤土蓋, L1a埴輪蓋, L1b平ら面蓋上, L1b埴輪蓋	口径11.4cm, 残高2.4cm, 断面径1.2cm	Hue N3/0暗灰色	Hue N4/0灰色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	回転ナデ, カキメ, 炭状文, 連続削文	回転ナデ, カキメ, ナデ	内磨削
84	煎	L2埴輪蓋, 集積1, L2赤土蓋, L1a平ら面蓋上, 集積1 No.4, L1b埴輪蓋, 集積1 No.15, 赤土, L1a埴輪蓋, 集積1 No.2	口径26cm, 残高31.3cm, 断面径大径29.9cm	Hue 5Y2/1黄褐色, Hue 5Y7/1灰白色	Value N6/0灰色	Value	2mm程度の砂粒を含む	回転ナデ, タグキ, カキメ, 炭状文	回転ナデ, 同心文	靱子底

表3-2 須恵器・土師器一覧表

番号	名称	出土地点	寸法	色(外側)	色(内側)	焼成	胎土	調整(外側)	調整(内側)	備考
85	甕	集積ⅡNo.17, L1a平地面遺上, L1b埴輪	口徑13.3cm, 高25.2cm, 胴部最大径25.1cm	Hue N2/0黄褐色, Hue 2.5Y6/1灰青色	Hue 2.5Y6/1灰青色	良好	2mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, ナブ, タクキ, カキメ, 連続刺突	田転ナズ, ユビオサ	
86	甕	L1d	残存高12.2cm	Hue 10YR6/2C, ぶい黄褐色	Hue 10YR7/2C, ぶい黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, 波状文	田転ナズ	粘土接合痕
87	甕	L1a埴輪層	残存高4.2cm	Hue 2.5Y7/1灰白色	Hue 2.5Y6/1黄白色	良好	1mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, カキメ, 波状文	田転ナズ	
88	甕	L1a平地面遺上	残存高1.9cm	Hue 10YR5/3C, ぶい黄褐色	Hue 10YR7/3C, ぶい黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	田転ナズ	田転ナズ	
89	甕	L1a表土層	残存高3.5cm	Hue 10YR4/1黄褐色	Hue 2.5Y5/1黄褐色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	田転ナズ	田転ナズ	
90	甕	L2埴輪層	口徑(32.0cm), 残存高2.8cm	Hue 10G5/1暗緑灰色	Hue 10YR4/1黄褐色	良好	2mm程度の砂粒を含む	田転ナズ	田転ナズ	
91	甕	L1a埴輪層	残存高2.2cm	Hue N5/0灰色	Hue 2.5Y6/1黄褐色	良好	わずかに砂粒を含む	田転ナズ	田転ナズ	
92	甕	L1a表土層	口徑(30.4cm), 残存高4.0cm	Hue 10YR1/1黄褐色	Hue 2.5Y6/1黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, 波状文	田転ナズ	
93	甕	L1a表土層	残存高4.2cm	Hue 2.5Y5/2暗黄褐色	Hue 5Y5/1灰色	良好	0.5~1mmの砂粒を含む	田転ナズ, 平行タテ筋を含む	田転ナズ	
94	甕	L1a埴輪層	残存高4.1cm	Hue 10YR4/1黄褐色	Hue 10YR6/2暗黄褐色	良好	繊維	田転ナズ, 波状文	田転ナズ	
95	甕	L1a埴輪層	残存高5.7cm	Hue 7.5Y2/1黄褐色	Hue 5Y5/1灰色	良好	1~2mmの砂粒を含む	田転ナズ, 波状文	田転ナズ	
96	甕	L1b, L1c埴輪層	残存高4.4cm	Hue 2.5Y6/2灰黄色	Hue 2.5Y6/2灰黄色	良好	1mm程度の砂粒を含む	田転ナズ	田転ナズ	粘土接合痕
97	甕	L1a埴輪層	残存高6.6cm	Hue 10B0/3暗黄褐色	Hue 10B0/5暗黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	田転ナズ	田転ナズ	
98	須恵器カ	L1b埴輪層	残存高3.9cm	Hue N7/0灰色	Hue N6/0灰色	良好	わずかに砂粒を含む	タクキ, 田転ナズ, 連続刺突	田転ナズ, 同心内文出て具足	小型調子が付く
99	甕	L1a表土層	残存高3.6cm	Hue 10YR7/2C, ぶい黄褐色	Hue 10YR7/2C, ぶい黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, 連続刺突	田転ナズ, 不定方向ナブ	
100	甕	L1r付近表保, L1b, L1b平地面遺上	残存高3.9cm	Hue 10YR5/4黄褐色, 一部Hue 7.5YR6/4暗黄褐色	Hue 10YR5/4黄褐色, Hue 7.5YR6/4暗黄褐色	良好	0.5~1mmの砂粒を含む	田転ナズ, カキメ	田転ナズ	
101	甕	L1b平地面遺上, L1a平地面遺上, L1r付近表保	残存高2.6cm	Hue 5Y5/1灰色	Hue 10YR5/1黄褐色	良好	2mm程度の砂粒を含む	タクキ, カキメ	ユビオサ	
102	甕	L1b平地面遺上, L1a平地面遺上, L2表土層	胴部最大径(22.8cm), 残存高18.2cm	Hue 7.5YR6/1黄褐色	Hue 7.5YR5/1黄褐色	良好	3mm程度の砂粒を含む	タクキ, カキメ, 波状文	同心内文出て具足, 田転ナズ	
103	甕	L1a平地面遺上, L1b表土層, L1a埴輪層, L1a平地面遺上, L2表土層	口縁部・胴部Hue 2.5Y7/1灰白色, 胴部Hue 2.5Y8/1灰白色, 胴部Hue 5Y3/1オリーブ黄褐色	胴部Hue 2.5Y4/1灰黄色, 胴部Hue 5Y5/1黄褐色	良好	1~3mm程度の砂粒を含む	タクキ, カキメ	田転ナズ, 同心内文出て具足		
104	甕	L1b埴輪層, L2表土層, L2埴輪層, L1a平地面遺上, L1b埴輪層	胴部径(22.3cm), 残存高16.5cm	胴部上部Hue 10YR6/2灰白色, 胴部下層Hue 2.5Y3/2黄褐色	Hue 10YR2/1黄褐色, Hue 2.5Y3/2黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, タクキ, カキメ	同心内文出て具足	
105	甕	L2埴輪層, L2r付近表保	胴部径(22.3cm), 残存高5.5cm	Hue 7.5YR4/1黄褐色	Hue 10YR5/1黄褐色	良好	2mm程度の砂粒を含む	タクキ, カキメ	同心内文出て具足のタテ, ユビオサ	
106	甕	L1a埴輪層, L1b, L1b平地面遺上	残存高6.5cm	Hue 10YR5/2C, ぶい黄褐色	Hue 10YR5/2暗黄褐色	中等	1mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, カキメ	田転ナズ	129と同一体
107	甕	L2埴輪層	残存高2.2cm	上部Hue 7.5YR4/1黄褐色, 下部Hue 10Y7/1灰白色	Hue 10YR7/2C, ぶい黄褐色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	タクキの5カキメ	同心内文出て具足, ユビオサ, 取ら産	102と同一体
108	甕	L1a平地面遺上	口徑24.4cm, 残存高13.6cm	Hue 5Y4/1灰色	Hue 5Y7/1灰白色	良好	2~3mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, 波状文	田転ナズ	
109	甕	L1a埴輪層, L1a平地面遺上, L2表土層	口徑(24.8cm), 残存高8cm	Hue N4/0灰色	Hue 10YR7/2C, ぶい黄褐色	良好	1~3mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, 波状文	田転ナズ	
110	甕	L1c L2埴輪層, L1c, L1a埴輪層, L1a表土層	口徑(30.0cm), 残存高10.3cm	Hue N3/0暗灰色	Hue N7/0灰色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, 波状文, 連続刺突	田転ナズ, 波状文	口縁部内面に波状文
111	甕	L1b埴輪層, 表保	口徑(19.8cm), 残存高10.4cm	Hue 2.5YR7/1灰白色	Hue 2.5YR6/2灰黄色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, カキメ, 波状文	田転ナズ	
112	甕	表土	口徑(35.0cm), 残存高3.2cm	Hue 7.5YR3/1黄褐色	Hue 10YR7/3C, ぶい黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, 波状文	田転ナズ	
113	甕	L1r付近表保	口徑(26.0cm), 残存高1.5cm	Hue 7.5Y4/1灰色	Hue 10YR6/2暗黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	波状文	ナブ	
114	甕	L1r表土層, 表土	口徑(23.0cm), 残存高4.2cm	Hue 2.5Y3/2暗黄褐色	Hue 2.5Y6/2C, ぶい黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, カキメ, 波状文	田転ナズ	へ2記号×2
115	甕	L1b平地面遺上	口徑(17.3cm), 残存高4.4cm	Hue 7.5YR5/1黄褐色	Hue 10YR7/2C, ぶい黄褐色	良好	2mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, 連続刺突	田転ナズ	
116	甕	L1r付近表保, L2埴輪層	口徑(17.0cm), 残存高2.2cm	Hue N4/0灰色	Hue 2.5Y4/2暗黄褐色	良好	砂粒を含む	田転ナズ	田転ナズ	
117	甕	L1b平地面遺上	口徑(22.2cm), 残存高2.2cm	Hue 10YR5/1黄褐色	Hue 10YR7/3C, ぶい黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, カキメ	田転ナズ	
118	甕	L1a平地面遺上	口徑(26.6cm), 残存高5.4cm	Hue 5G4/1暗緑灰色	Hue 2.5Y3/1黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, カキメ	田転ナズ	
119	甕	L1b平地面遺上	胴部径(16.8cm)	Hue 10YR7/1灰白色	Hue 10YR6/1黄褐色	良好	繊維	田転ナズ	田転ナズ	
120	甕	L1c平地面遺上, L2埴輪層	口徑(12.8cm), 残存高4.5cm	Hue 2.5Y6/1黄褐色	Hue 2.5Y3/1黄褐色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	田転ナズ	田転ナズ	
121	甕	L1c	口徑(11.6cm), 残存高4.8cm	Hue 10YR5/1黄褐色	Hue 10YR6/2暗黄褐色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	田転ナズ, 波状文	田転ナズ	
122	甕	L1c	口徑(10.6cm), 残存高2.9cm	Hue 2.5Y5/1黄褐色	Hue 2.5Y6/1黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	田転ナズ	田転ナズ	
123	甕	表土	口徑(9.4cm), 残存高3.4cm	Hue 7.5YR5/1黄褐色	Hue 5Y4/1灰色	良好	1mm程度の砂粒を含む	田転ナズ	田転ナズ	へ2記号見す
124	甕	L1b埴輪層, L1b埴輪層, L1b, L2表土層	口徑(18.8cm), 胴部最大径(27.3cm)	Hue 5YR7/6暗褐色	Hue 5YR7/6暗褐色	良好	5mm程度の砂粒を含む	タクキ, カキメ	田転ナズ, 同心内文出て具足	土師調
125	須恵器カ	L1a平地面遺上, L1b平地面遺上	胴部径(15.3cm), 底部径(13.3cm), 残存高17.3cm	Hue 2.5Y5/1黄褐色	Hue 2.5Y6/1黄褐色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	田転ナズ	田転ナズ	上部に長方形穿孔(3.0×2.0), 下部に三角形(3.0×1.0)

表3-2 須臾器・土師器一覧表

番号	器種	出土地点	法量	色顔(外面)	色顔(内面)	構成	胎土	装飾(外面)	装飾(内面)	備考
126	短頸壺	L1c	残存高5.1cm	Hue 10B05/1黄 灰色	Hue 10B06/1黄 灰色	良好	磨光	回転ナデ、カキ、遠 縁刻文	回転ナデ	
127	不明	土師	残存高3.8cm	Hue N2/0茶色	Hue N5/0灰色	良好		回転ナデ、カキ、遠 縁刻文を含む	回転ナデ	
128	短頸壺	L1a増埴層、L2a平ら面直上	口径17.3cm、残 存高4.6cm	Hue 7.5YR3/1黄 褐色	Hue 2.5Y6/2灰黄 色	良好		回転ナデ、カキ	回転ナデ	
129	壺	L1c	底部径11.8cm、 残存高1.3cm	Hue 10YR5/3C いゝ黄褐色	Hue 10YR5/2灰 黄褐色	良好		1mm程度の砂粒 を含む	回転ナデ、カキ	10aと同一個体
130	不明	L1a表土層、L1b、L2表土層	底部径12.4cm、 残存高4.3cm	Hue 10YR5/2灰 黄褐色	Hue 2.5Y6/1黄 灰色	良好		1~2mm程度の砂 粒を含む	回転ナデ	
131	壺	L1a増埴層	残存高2.9cm	Hue 10YR5/2灰 黄褐色	Hue 10YR5/3C いゝ黄褐色	良好		1~2mm程度の砂 粒を含む、割文	回転ナデ	
132	壺	L2増埴層	残存高4.0cm	Hue 10YR4/1黄 褐色	Hue 10YR5/2灰 黄褐色	良好		0.5mm程度の砂 粒を含む	回転ナデ	ユビオサエ、 タナフ
133	高頸土 師器	L1c、L1a表土層、L1c、土師、L1c、L1c	頸部径4.8cm	Hue 2.5Y5/1黄 灰色、Hue N4/0灰 色	Hue 2.5Y5/1黄 灰色	良好		1~2mm程度の砂 粒を含む	回転ナデ	ユビオサエ、 タナフ
134	甗台	L1a増埴層、L1a平ら面直上、集積1 No.1、集積1No.2、L1a増埴層、集積1 No.12	口径35.0cm、頸 部径10.3cm、底 部径29.0cm、高 44.3cm	Hue 10Y7/1灰白 色	Hue 2.5Y5/1黄 灰色	良好		3mm程度の砂粒 を含む	回転ナデ、タナ キ、カキ、割文	回転ナデ、不定向 ナデ
135	甗台	L1a平ら面直上、集積1No.20、集積1 No.7、集積1No.6	底部径38.0cm、 残存高35.6cm	Hue 5B3/1暗黄 灰色	Hue 5B3/1暗黄 灰色	良好		1~2mm程度の砂 粒を含む	回転ナデ、カキ、割 文	回転ナデ、同心内 文、黄
136	甗台	L1b、L2増埴層、L1b増埴層、L2表土層	残存高6.5cm	Hue 10YR7/2C いゝ黄褐色	Hue 2.5Y7/1灰白 色	良好		1mm程度の砂粒 を含む	回転ナデ、割文	回転ナデ
137	甗台	集積1No.8、L1a増、L1b増	底部径21.4cm、 残存高7.2cm	Hue 2.5Y7/1灰白 色	Hue 2.5Y6/1黄 灰色	良好		2~3mm程度の砂 粒を含む	回転ナデ、カキ、割 文	回転ナデ
138	甗台	L1b増埴層、L1b平ら面直上、L1c、L2表 土層、L2増埴層、集積1No.2、黄	口径36.2cm、残 存高24.0cm	Hue 5Y2/1黄 褐色	Hue 2.5Y5/1黄 灰色	良好		1~3mm程度の砂 粒を含む	回転ナデ、割文、カ キ、タナキ、遠縁刻 文の残のらナデ消し	回転ナデ、同心内 文、黄
139	甗台	集積1No.4	口径39.6cm、 残存高13.0cm	Hue 10YR2/1黄 褐色	Hue 10YR6/3C いゝ黄褐色	良好		0.5mm程度の砂 粒を含む	回転ナデ、カキ、タ ナキ、割文	同心内文まで黄、 回転ナデ
140	手形配 飾付	L1a表土層、L1a増埴層、L1a平ら面直上、 集積1No.4、集積1No.15、L1b増埴層、 壺、L2平ら面直上	口径20.1cm、頸 部径8.2cm、残 存高52.2cm	Hue 5Y7/2灰白色	Hue 7.5Y6/1灰色	良好		3mm程度の砂粒 を含む	回転ナデ、カキ、タ ナキ	同心内文、同心 文、黄
141	手形配 飾付	集積1No.8、集積1No.16、集積1 No.15、L1c	口径20.6cm、残 存高52.1cm	上部Hue 5Y5/1 灰白色、下部Hue 2.5Y7/1灰白色	上部Hue 2.5Y7/2 灰白色、下部Hue 2.5Y7/1灰白色	良好		1~2mm程度の砂 粒を含む	回転ナデ、割文、カ キ	回転ナデ
142	箔形付 壺	集積1No.1、L1a表土層、L1b増埴層、 L1a平ら面直上、L1a増埴層、L1a平ら面 直上、L2表土層、L2増埴層	口径29.8cm、高 部径24.2cm、残 存高29.2cm	Hue 10YR8/1灰 白色	Hue 10YR6/1灰 白色	不真		1~2mm程度の砂 粒を含む	回転ナデ、回転ヘラ タナキ、割文、黄	回転ナデ、ユビオサ エ、黄
143	小壺	L2	口径8.2cm、残存 高3.2cm	Hue 10YR8/2灰 白色	Hue 10YR7/3C いゝ黄褐色	不真		砂粒を含む	回転ナデ、割文	回転ナデ
144	小壺	L1a表土層	口径6.2cm、残存 高5.8cm	Hue 2.5Y6/4黄 灰色	Hue 2.5Y6/4黄 灰色	不真		砂粒を含む	割文	回転ナデ
145	手形配 飾付	L1b平ら面直上、L1b増埴層、L1a増埴層、 L1a表土層、土師、L1b増埴層、 壺、L2表土層	口径23.4cm、 残存高19.7cm	Hue 10YR7/4C いゝ黄褐色	Hue 10YR7/3C いゝ黄褐色	不真		1~3mm程度の砂 粒を含む	回転ナデ、割文	回転ナデ、同心内 文、黄
146	手形配 飾付	L1a増埴層、L2増埴層、L1b	底部径22.2cm、 残存高22.8cm	Hue 2.5Y7/2灰黄 褐色	Hue 10YR7/1C いゝ黄褐色	不真		0.5mm程度の砂 粒を含む	ナデ一部刻文方向に ナデ消し	ナデ
147	甗台	L1a平ら面直上、L1b増埴層、L2表土層	底部径28.6cm、 残存高9.5cm	Hue 7.5YR8/4黄 褐色	Hue 7.5YR8/4黄 褐色	不真		0.5mm程度の砂 粒を含む	ナデ	ナデ
148	甗台	L2平ら面直上、L2増埴層	底部径31.7cm、 残存高13.6cm	Hue 10YR7/2C いゝ黄褐色	Hue 10YR7/1灰白 色	不真		1~2mm程度の砂 粒を含む	回転ナデ、割文	回転ナデ
149	ミエ ツノの 瓦(深 鉢形)	瓦(甗台、L1a増埴層)	残存高3.6cm	Hue 10YR8/3C いゝ黄褐色	Hue 10YR5/6黄 褐色	良好		0.5mm程度の砂 粒をのみ含む	回転ヘラ タナキ、タナフ	回転ナデ
150	蓋 (深鉢 形)	甗台	胴部径4.85cm、 残存高5.5cm	Hue N3/0暗灰色	Hue N5/0灰色	良好		1mm程度の砂粒 を含む	回転ナデ、カキ、割 ナデ	ユビオサエ
151	小壺	甗台	口径4.2cm	Hue 10YR7/3C いゝ黄褐色	Hue 10YR7/3C いゝ黄褐色	良好		1mm程度の砂粒 を含む	回転ナデ、カキ	回転ナデ
152	小壺	L2増埴層	残存高1.6cm	Hue 10YR7/2C いゝ黄褐色	Hue 2.5Y7/1灰白 色	良好		わずかに砂粒が 混じる	回転ナデ	ユビオサエ
153	甗A	集積1No.2、集積1No.3、集積1No.4、 集積1No.5、集積1No.7、集積1No.15、 L1a表土層×2、L1a増埴層×4、L1a平 ら面直上×2、L1b増埴層×10、L1b平 ら面直上×2、L2表土層×2、L2増埴層×2、 L2平ら面直上×1	口径20.6cm、 胴部径大径 44.6cm、残存高 41.8cm	Hue 5Y5/1灰色	Hue 5Y5/1灰色、 Hue 5YR6/1黄 褐色	良好		2~4mm程度の砂 粒を含む	回転ナデ、カキ、タ ナキ	回転ナデ、同心内 文、黄、ナデ消し、ユ ビオサエ
154	甗B	L1b増埴層×3、L1b平ら面直上×2、L2 表土層×2	口径22.4cm	Hue 2.5Y7/2灰黄 褐色、Hue 2.5Y2/1 灰色	Hue 2.5Y2/1黄、 Hue N4/0灰色	良好		2mm程度の砂粒 を含む	回転ナデ	自然釉
155	甗B	L1a表土層×2、L1a増埴層×5、L1b平ら 面直上×1、L2表土層		Hue 7.5YR 2/1黄 褐色	Hue 2.5YR2/1黄 褐色	良好		2mm程度の砂粒 を含む	タナキ	同心内文まで黄
156	甗B	L1a表土層×1、L1b平ら面直上、L2増埴層、 甗台		Hue 5YR2/1黄 褐色	Hue 10YR4/1黄 褐色	良好		2mm程度の砂粒 を含む	タナキ、カキ	同心内文まで黄
157	甗C	L2表土層、L2平ら面直上	口径12.0cm	Hue 10YR7/4黄 褐色	Hue 10YR7/4黄 褐色	良好		1~2mm程度の砂 粒を含む	回転ナデ	ヨコナデ、同心内 文、タナキ
158	甗C	L2平ら面直上		Hue 10YR3/1 黄褐色、Hue 10YR5/3C いゝ黄褐色	Hue 5Y6/1灰色	良好		1~3mm程度の砂 粒を含む	タナキ	回転ナデ、同心内 文、黄
159	甗C	L1a、甗表		Hue 5Y5/1灰色	Hue 2.5Y6/1黄 灰色	良好		1~3mm程度の砂 粒を含む	タナキ、回転ナデ	回転ナデ、同心内 文、黄、ユビオサ エ、ナデ
160	甗D	L1a平ら面直上		Hue 7.5YR4/1黄 褐色	Hue 5Y5/1灰色	良好		1mm程度の砂粒 を含む	タナキ	同心内文まで黄
161	甗D	L1a増埴層、L1b平ら面直上、L2増埴層		Hue 7.5Y4/1灰色	Hue 5Y5/1灰色	良好		1mm程度の砂粒 を含む	タナキ	同心内文まで黄

表3-2 須恵器・土師器一覧表

番号	名称	出土地点	測量	色調(外面)	色調(内面)	構成	胎土	調整(外面)	調整(内面)	備考
162	環G	L1a平壇面遺上、L1b平壇面遺上、L2表土層		Hue N6-G灰色、Hue 2.5YR-2灰白色	Hue 10YR8-2灰白色	良好	1mm程度の砂粒を含む	タタキ	同心円文当て具痕	
163	環E	L1b堆積層		Hue 7.5YR5-2灰褐色	Hue 2.5GY5-1オリーブ灰色	良好	1mm程度の砂粒を含む	タタキ	同心円文当て具痕	
164	環E	L1a堆積層×2		Hue 5Y5-1灰色	Hue 5Y5-1灰色	良好	2mm程度の砂粒を含む	タタキ、カキメ	同心円文当て具痕	
165	環E	集積層No.11、集積層No.12、L1a平壇面遺上		Hue 2.5Y7-1灰白色	Hue 10YR4-3Cぶら褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	タタキ、カキメ	同心円文当て具痕	
166	環F	L2平壇面遺上、L2堆積層		Hue 7.5Y5-1灰色	Hue 7.5Y6-1灰色	良好	1mm程度の砂粒を含む	タタキ、カキメ	同心円文当て具痕	
167	環F	L1b平壇面遺上、L2表土層		Hue 5Y5-1灰色	Hue 5Y5-1灰色	良好	1mm程度の砂粒を含む	タタキ、カキメ	同心円文当て具痕	
168	環G	L1b平壇面遺上×4、L1b堆積層、L2堆積層×2、L2c×2	標部皿(16.6cm)	Hue 10YR7-4C、J-L赤褐色	Hue 10YR7-1灰白色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	自然釉
169	環G	表積層×2		Hue 10YR8-4C、J-L赤褐色	Hue 10YR5-2灰褐色	良好	1~3mm程度の砂粒を含む	タタキ、カキメ	同心円文当て具痕	自然釉
170	環G	L1b平壇面遺上、L1c		Hue 2.5Y2-1黒褐色、Hue 10YR5-2灰白色	Hue 2.5Y2-1黒褐色、Hue 10YR5-2灰白色	良好	1mm程度の砂粒を含む	タタキ、カキメ	同心円文当て具痕	自然釉
171	環G	L1b平壇面遺上		Hue 10YR3-1赤褐色、Hue 10YR6-3灰黄褐色	Hue 10YR3-1赤褐色、Hue 10YR6-3灰黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	タタキ、カキメ	同心円文当て具痕	自然釉
172	環H	L1r、M1r(掘溝内)表土		Hue 5Y5-1灰色	Hue 5Y5-1灰色	良好	1~4mm程度の砂粒を含む	タタキ、タタキ	回転ナデ、同心円文当て具痕	
173	環H	L1b平壇面遺上、L1b堆積層		Hue 5Y5-2オリーブ灰色	Hue 2.5Y6-8オリーブ灰色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	タタキ、カキメ	同心円文当て具痕	
174	環H	L1a堆積層×2、L1b堆積層、L2表土層、L2堆積層		Hue 2.5Y7-3赤褐色、Hue 5YR4-6赤褐色、Hue 2.5YR7-9褐色	Hue N4-G灰色	不良	2mm程度の砂粒を含む	タタキ	同心円文当て具痕、ユビオサエ	
175	高坪	L2表土層、L1b堆積層	口径28.8cm、残存高3.5cm	Hue 5YR6-9褐色	Hue 5YR7-6褐色	良好	砂粒を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	
176	高坪	集積層No.11、集積層No.20、L1b堆積層	口径23.3cm、残存高5.8cm	Hue 5YR6-8褐色	Hue 5YR7-6褐色	良好	砂粒を含む	ナデ	ナデ	
177	高坪	L2堆積層	残存高2.9cm	Hue 5YR7-6褐色	Hue 5YR7-7褐色	良好	砂粒を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	
178	高坪	L1b、L1c堆積層、L1a平壇面遺上、集積層No.11、L1b堆積層、L2堆積層、L2平壇面遺上	口径(25.9cm)、底部径18.3cm、残存高10.8cm	Hue 5YR7-6褐色	Hue 5YR7-6褐色	良好	2mm程度の砂粒を含む	回転ナデ、タタナデ	回転ナデ、タタナデ	
179	高坪	L1a堆積層、L1b堆積層、L1b、L1b堆積層	底部径(17.8cm)、残存高13.3cm	Hue 5YR6-9褐色	Hue 5YR7-6褐色	良好	砂粒を含む	回転セラズリ、回転ナデ、タタナデ、絞リ	回転ナデ、タタナデ、絞リ	
180	高坪	L1b	残存高3.6cm	Hue 5YR7-4C、J-L褐色	Hue 5YR7-4C、J-L褐色	良好	砂粒を含む	回転ナデ、ナデ	ナデ	
181	高坪	L1a平壇面遺上	残存高4.1cm	Hue 2.5YR5-9明赤褐色	Hue 2.5YR5-9明赤褐色	良好	砂粒を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	
182	高坪	L1a堆積層	残存高3.0cm	Hue 5YR5-9明赤褐色	Hue 2.5YR5-9明赤褐色	良好	砂粒を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	割縁部か
183	高坪	L2堆積層	残存高3.7cm	Hue 5YR6-9褐色	Hue 2.5YR5-9明赤褐色	良好	砂粒を含む	ナデ	ナデ	
184	高坪	集積層No.20	底部径(18.3cm)	Hue 7.5YR6-4黄褐色	Hue 7.5YR6-4黄褐色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	
185	高坪	L1a堆積層	残存高2.5cm	Hue 5YR6-9褐色	Hue 7.5YR7-8黄褐色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	回転セラズリ、回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	粘土結合層有り
186	高坪	L1b堆積層	残存高3.3cm	Hue 2.5YR5-9明赤褐色	Hue 2.5YR5-9明赤褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	割縁部か
187	高坪	L1a堆積層	残存高3.6cm	Hue 5YR6-9褐色	Hue 5YR6-9褐色	良好	砂粒を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	粘土結合層有り
188	高坪	L1a堆積層	残存高2.8cm	Hue 2.5YR6-9褐色	Hue 2.5YR6-9褐色	良好	砂粒を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	
189	高坪	L2堆積層	残存高3cm	Hue 2.5YR5-6明赤褐色、Hue 7.5YR2-1黒色	Hue 2.5YR5-6明赤褐色、Hue 7.5YR2-1黒色	良好	砂粒を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	
190	坪身	Dtr1(東栗原拡張区)	径17.0cm、残存高2.3cm	Hue 2.5Y5-1黄灰色	Hue 2.5Y5-1黄灰色	良好	1~3mm程度の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	
191	坪身	Dtr地山遺上	残存高1.7cm	Hue 5Y5-1灰色	Hue 5Y5-1灰色	良好	微塵	回転ナデ	回転ナデ	
192	坪身	Dtr1区拡張区溝1付近	残存高1.4cm	Hue 5YR5-1褐灰色	Hue 5YR5-1褐灰色	良好	微塵	回転ナデ	回転ナデ	
193	壺	Dtr西高橋区15	残存高2.8cm	Hue 10YR5-2灰褐色	Hue 10YR5-2灰褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	回転ナデ、カキメ	回転ナデ	
194	壺	Dtr1区北側		Hue 10YR6-3C、J-L黄褐色	Hue N5-G灰色	良好	1mm程度の砂粒を含む	タタキ	同心円文当て具痕	
195	壺	Dtr		Hue 7.5YR3-1黄褐色	Hue 10YR5-1褐灰色	良好	1mm程度の砂粒を含む	タタキ	同心円文当て具痕	壺口と同一個体か
196	壺	Etr		Hue 2.5Y5-1黄灰色	Hue N6-G灰色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	タタキ	同心円文当て具痕	
197	壺	Etr		Hue 2.5Y5-3黄褐色	Hue 2.5Y2-1黒褐色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	タタキ	同心円文当て具痕	
198	壺	Fo2壺	残存高2cm	Hue 10YR2-1黒褐色	Hue 10YR6-3C、J-L黄褐色	良好	1~2mm程度の砂粒を含む	回転ナデ、波状文	回転ナデ	
199	壺	Gr南栗原表土層遺下		Hue N3-G暗灰色	Hue 7.5Y2-1オリーブ灰色	良好	0.5~1mm程度の砂粒を含む	タタキ	同心円文当て具痕	壺口と同一個体か
200	壺	It南栗原区南栗原地山遺上		Hue N4-G灰色	Hue N4-G灰色	良好	1~3mm程度の砂粒を含む	タタキ、カキメ	同心円文当て具痕	壺Fと同一個体か
201	壺	It-2南栗原区南栗原		Hue N6-G灰白色	Hue N5-G灰色	良好	1~3mm程度の砂粒を含む	タタキ	同心円文当て具痕	202と同一個体か
202	壺	It南栗原区南栗原地山遺上		Hue N6-G灰白色	Hue N5-G灰色	良好	1~3mm程度の砂粒を含む	タタキ	同心円文当て具痕	201と同一個体か
203	瓦罎(標)	出土地点不明	残存高2cm	Hue N2-G黒色	Hue 2.5Y4-1灰白色	良好	3mm程度の砂粒を含む	ナデ	ナデ	

第4章 弥生時代以前の遺構と遺物

第1節 弥生時代以前の遺構

天神山古墳の調査では、各トレンチの包含層や盛土層から弥生時代以前の遺物が出土している。天神山古墳が築造された低丘陵部の周辺では、上宮ノ原遺跡と下宮ノ原遺跡の存在が知られていることから（第2章参照）、穂波川流域周辺の低丘陵上において弥生時代の集落が営まれていたことが想定された。この点を念頭に置きつつ調査を行ったところ、墳丘周辺のD・Jトレンチにおいて弥生時代の遺構と遺物が検出された。

Cトレンチ（図3-8）では、周堤東側で平坦面のトレンチ中央部付近から、壺の頸部（14）などが出土している。遺構などに伴うものではないが、包含層中からやや大きめの破片がまとまった形で出土しており、周辺に遺構の存在が想定される。

Dトレンチ（図3-9）では、周堤東側で通路状遺構の北側の平坦面において貯蔵穴上面とみられる径約0.8mの円形土坑を検出した（土坑1）。またトレンチ西側の周溝底面で長さ約1.8m、検出幅約0.8m、残存の深さ約0.2mの範囲で貯蔵穴底面とみられる箇所を検出している（土坑2）。さらに、周堤の壁面上に貯蔵穴の断面がのぞいており、これを土坑3とした。平面的には約1.1m×0.7m、高さ（深さ）約0.6mの範囲で検出している。Dトレンチ周辺は、貯蔵穴が集中している地点であり、古墳の築造に伴って一部破壊されているが、平坦面周辺に残存していることが想定された。Dトレンチ周辺から出土した土器は前期後半から中期前半のものを主体とする（土坑1から土器30が、土坑2から土器20が、土坑3から土器31・石器26が出土している）。

Iトレンチ（図3-13）では、墳丘一段目斜面に貯蔵穴が1.3×0.9mの範囲で面的に検出されている。上半部が未検出であるが、この付近は標高44.5～45.0m前後とみられ、貯蔵穴が掘り込まれた弥生時代当時の地表面の標高が墳丘一段目平坦面付近の高さであったことを示している。

Jトレンチ（図3-8）は、土層図でみると周堤付近の地山が他のトレンチよりやや低くなっているが、この部分は弥生時代の土坑が掘削されている（土坑1）。土層図の16層が土坑1の埋土であり、この部分を削り出す形で周堤が形成されている。出土した土器は前期末から中期前半のものを主体とする（土器57・61・63・65・70・71、石器13・23）。

これら以外の各トレンチでも遺物が出土しているが、包含層・古墳盛土層中に周辺から混入したものが多く、土器類は摩滅が進んでいる。石器類は主に墳丘東側の各トレンチから出土しており、周辺における生活の痕跡を示している。以下、土器類・石器類の内容について報告する。

第2節 弥生時代以前の遺物

(1) 土器類

各トレンチより土器が出土している。いずれも小片で全体の形状が復元できるものはないが、特に時期比定が比較的容易な口縁部と底部の破片を図化している。また内外面が摩滅して調整が確認できないものが多い。

Aトレンチ（1～5）1は壺の胴部で、断面三角形の突帯をもち、中期前半のものと考えられる。2は壺の口縁部であり、やや丸みを帯びる断面三角形を呈する。口縁部から胴部にほぼまっすぐつながり、あまり張らない胴部をもつようである。前期末から後期初頭に位置づけられる。3は壺の口縁部

である。水平な口縁部に内面を突出させて鋤先状の断面を呈する。中期後半に属すると考えられる。4は甕の底部である。若干上げ底にして厚くつくり、裾部をあまり張り出さない。外面にはハケメが残る。中期前半に位置づけられる。5は甕の底部である。平底で厚いもので、時期は中期初頭から前半か。

B トレンチ (6～9) 6は甕の口縁部である。「く」字形に屈曲するもので、外面にハケメが残っている。また断面には粘土接合痕が観察される。前期後半から中期前半のものであろう。7は甕の口縁部である。逆し字状に屈曲し、端部がわずかに肥厚する。時期は中期前半か。8は甕の底部で平底のものであり、中期後半に位置づけられる。9は甕の底部で平底を呈する。中期前後のものであろう。

C トレンチ (10～14) 10～12はゆるやかに外反する壺の口縁部である。前期後半のものか。13は大きく外反して外に開く壺の口縁部で、中期後半に属すると考えられる。14はゆるやかに屈曲する壺の頸部で、4条の沈線が施される。外面はハケメによって調整されたのちミガキが施される。中期前後のもので考えられる。

D トレンチ (15～32) 15～17・21～25は甕の口縁部である。15はゆるやかに外反しており、前期後半に属するか。16は如意形のもので、前期後半～前期末に位置づけられる。17は口縁部の下に断面三角形の突帯が貼り付けられるもので、胴部上半がやや膨らむものである。内面にはユビオサエが認められる。前期末に属するか。18は甕の底部である。上げ底にして厚くつくり、裾部はあまり張り出さない。内面はユビオサエにより調整される。中期前半に属するものである。19は甕の口縁部から胴部で、復元口径は22.2cmを測る。口縁部は「く」字形を呈し、断面三角形の突帯をもつ。胴部が張るもので口縁端部は上方に跳ね上げて外面を僅かに凹ませており、中期後半のものであろう。20は甕の口縁部から胴部である。口縁部は「く」字形を呈すが屈曲がややゆるやかで、胴部はわずかに張っている。中期前半に位置づけられるか。21は如意形を呈する口縁部である。胴部はあまり張らないものであり、前期後半に属すると考えられる。22は「く」字形を呈するものである。端部をやや跳ね上げており、中期に位置づけられる。23は鋤先状を呈する壺の口縁部で、端部外面に刻み目をもつ。中期後半か。24は逆「L」字状の口縁部で、中期に位置づけられる。25は口縁部を水平につくる壺である。中期に位置づけられる。26はわずかに上げ底につくる甕の底部である。中期後半のものか。27はやや上げ底につくる甕の底部で、中期前半に属するものであろう。外面にはユビオサエが認められる。28は底部の中心を上げ底にする。裾部が張るもので、中期初頭から前半に位置づけられる。29は底部の中心をわずかに浮かせるもので、中期に属する。30は平底で外面にハケメ調整が行われるものであり、内面に一部スコゲが付着している。前期後半から中期前半に属するか。31は平底の底部で、前期後半から中期前半に属するか。外面にスリップがかけられ、橙色を呈する。32は底部である。中期のものであろう。

F トレンチ (33～39) 33は壺である。復元口径は11.2cmを測り、頸部に突帯をもつものである。内外面は摩滅している。前期後半に位置づけられるか。34は壺の口縁部で、端部外面に刻み目を施す。中期に属するものであろう。35は甕の口縁部で、胴部が張らず屈曲がゆるやかな如意型を呈する。時期は前期後半から末か。36はやや丸みを帯びる断面三角形の甕の口縁部であり、前期末から中期前半に属するか。37はやや上げ底になる壺の底部で、中期に位置づけられる。38は甕の底部である。裾部はあまり張らないが上げ底につくる厚底のもので、中期前半に位置づけられる。39は平底を呈する甕の底部である。前期後半から中期前半に属するか。

H トレンチ (40～48) 40は断面三角形の突帯をもつ壺の胴部である。中期前半に位置づけられる。41は壺の頸部である。比較的ゆるやかな屈曲をもち、断面三角形の突帯がつけられる。前期末から中

期初頭に属する。42・43は甕の口縁部で、ややふくらみをもつ断面三角形を呈する。前期末から中期初頭のものである。44～47は甕の底部である。44は高い上げ底をもち、中期前半に属するか。45は底部が厚く上げ底につくるが裾部が張り出さないもので、中期前半に位置づけられる。46は底部が厚く平底を呈するものである。前期後半から中期前半に属するか。47はわずかに上げ底につくる甕の底部である。中期前後のものである。48は高坏の脚部で、中期に位置づけられる。

Iトレンチ (49～56) 49はゆるやかに外反する甕の口縁部で、前期末から中期前半に位置づけられるか。外面にハケメ・ユビオサエが認められる。50は甕の口縁部で、頸部に断面三角形の突帯をもつ。外面にユビオサエが認められる。中期に属するものであろう。51は「く」字形に屈曲する甕の口縁部で、胴部上半の張るものである。中期前半に位置づけられる。52はM字突帯を貼り付けており、中期に属する甕であらう。53は平底を呈する甕の底部である。前期後半のものか。54は上げ底で裾部を張り出すものであり、前期末から中期初頭に位置づけられる。55・56は平底を呈する甕の底部である。前期後半から中期初頭か。

Jトレンチ (57～72) 57はゆるやかに外反する甕の口縁部である。前期に位置づけられるか。58は外反する甕の口縁部で、中期前後のものであろう。59は如意形を呈する甕の口縁部である。前期後半から中期初頭に属するか。60は外反する甕の口縁部で、中期のものである。61は外反する甕の口縁部である。端面内面に粘土を付加し、端面外面には刻み目を2条施す。中期に位置づけられる。62は甕の口縁部から胴部で、復元口径14.4cmを測る。やや丸みを帯びる断面三角形の口縁部をもち胴部がはるもので、前期末から中期初頭に属する。63は甕の口縁部から胴部で、復元口径13.2cmを測る。断面三角形の口縁部をもつが胴部がはらないもので、前期末に位置づけられるか。64は如意形の口縁部で、突帯をもつものである。前期末か。65・67は62と同様の口縁部をもち、時期は前期末から中期初頭か。66は水平につくる甕の口縁部で、中期のものである。68は甕の底部で、わずかに上げ底につくる。中期に属する。69は平底を呈する甕の底部である。中期前後のものである。70は甕の底部である。上げ底につくり裾部がやや張るものであり、中期初頭から前半に位置づけられる。71は上げ底につくる甕の底部で、中期前半に属するものである。内面は剥離している。72は高坏の脚部である。

Lトレンチ (73～81) 73はゆるやかに屈曲する甕の頸部で、断面三角形の突帯の上位に羽状文を施す。外面はナデ・ミガキによって調整し、わずかに丹塗りが認められる。内面はナデ・ユビオサエによって調整する。前期末から中期前半に位置づけられる。74は如意形を呈する甕の口縁部で、前期後半に属するか。76は上げ底につくる甕の口縁部で、裾部は張り出さない。中期前半に位置づけられる。77は甕の底部で、裾部を張り出して平底を呈しており、中期初頭のものである。78は甕の底部で、丸底を呈する。外面はナデ、内面はユビオサエ・ナデによって調整する。79・80・81は高坏の脚部である。ここでは弥生土器としたが、他の弥生土器と比較すると胎土が著しく精良で色調は橙から明赤褐色を呈するものであり、形態もLトレンチ出土の土師器高坏(181・182・186～189)と矛盾がないことから、古墳時代後期のものである可能性が高い。いずれも不明瞭ではあるがミガキによる調整が認められる。81は脚部に円形の透かしをもち、内面に絞り痕を有す。また75は高坏の口縁部である。175～178と同類のものであろう。

Mトレンチ (82～84) 82は甕の底部で、やや厚いものである。中期に位置づけられる。83・84は上げ底でやや裾部を張り出す甕の底部であり、中期前半に属すると考えられる。

Nトレンチ (85～87) 85は水平につくる甕の口縁部で、中期前半に位置づけられる。86はわずかに上げ底につくる甕の底部で、中期に属する。87はミニチュア土器の底部である。

Pトレンチ (88・89) 88はゆるやかに屈曲する甕の口縁部で、胴部が張るものである。前期末から

中期前半に位置づけられるか。89は上げ底につくる堯の底部で、中期に属するものであろう。

(2) 石器類

1～6・8～11は黒曜石の剥片である。いずれも製品や未成品とは考えにくく、石器製作の際の剥片であろう。7は安山岩の剥片である。12はスクレイパーである。末端部に両面から二次加工を行って刃部を形成する。横長剥片を素材としている。石材は砂岩か。13は太形蛤刃石斧の基部である。片面の一部のみが残存している。14は太形蛤刃石斧の刃部である。刃縁は比較的鋭く、縦断面形は左右対称的である。一部に敲打痕と研磨痕が認められる。また一部に自然面が残存している。15は柱状片刃石斧である。後主面形は直線的に成形する。砂岩か。16は石皿である。片面のみ使用している。使用面はゆるやかな凹みが認められる。側面に自然面が残存するが研磨により仕上げられている。また裏面には被熱痕があり、やや赤く変色している。砂岩か。17～24は砥石の破片である。17は2面の使用が観察される。18は2面の使用が確認でき、表面には2条の浅い溝が残る。19は1面が使用される。破片であるため全体の形態は不明であるが、おそらく使用面が緩やかに凹むものと考えられる。裏面には被熱による変色と剥離が認められる。20は5面が使用される。表面は使用により緩やかに凹んでいる。21は3面が使用される。22は柱状の定形砥石で、4面全てが使用される。仕上げ砥であろう。23は2面が使用されている。側面にはややゆるやかなV字状の溝が認められる。24は明瞭な使用面の確認ができないが、表面に横方向に鋭いV字状の溝、縦方向にU字状の溝が交差して認められる。25・26は叩き石である。楕円形の自然礫を素材としたもので半分を欠損する。特に25には被熱痕が認められる。27は磨石である。上面と下面は直線的になり、側面には後世の剥落かと考えられる部分を有する。(石器の石材の同定については、九州大学松尾樹志郎氏にご教示いただいた。)

第3節 小結

以上、弥生時代に属する遺構と遺物について述べてきた。遺構については、D・Iトレンチで貯蔵穴が、Jトレンチでは土坑などが確認された。各トレンチから出土した弥生土器はわずかに前期後半や後期のものが含まれる可能性があるが、基本的には前期末から中期を中心とした時期のものであり、この時期の集落が存在していたようである。石器は黒曜石の剥片、両刃・片刃石斧、砥石、石皿、磨石、叩き石が出土している。また砥石にはV字・U字状の溝が認められる他、砥石と叩き石には被熱痕が認められるものもあり特筆できる。なお、Lトレンチ出土の79・80・81は、ここでは弥生土器の高坏として報告したが、胎土や色調から考えて181・182・186～189と同様の土師器高坏である可能性が高い。75については、175～178と同様の高坏(酸化炎焼成)である。

上述の遺物の内容からは、周辺に存在する弥生時代前期末～中期を中心とした集落遺跡とのつながりが想定され、今後の調査の進展が期待される¹⁾。

【註】

1) 本章は、第1節を辻田が、第2節を足達が、第3節は辻田・足達の両名が執筆を行った。

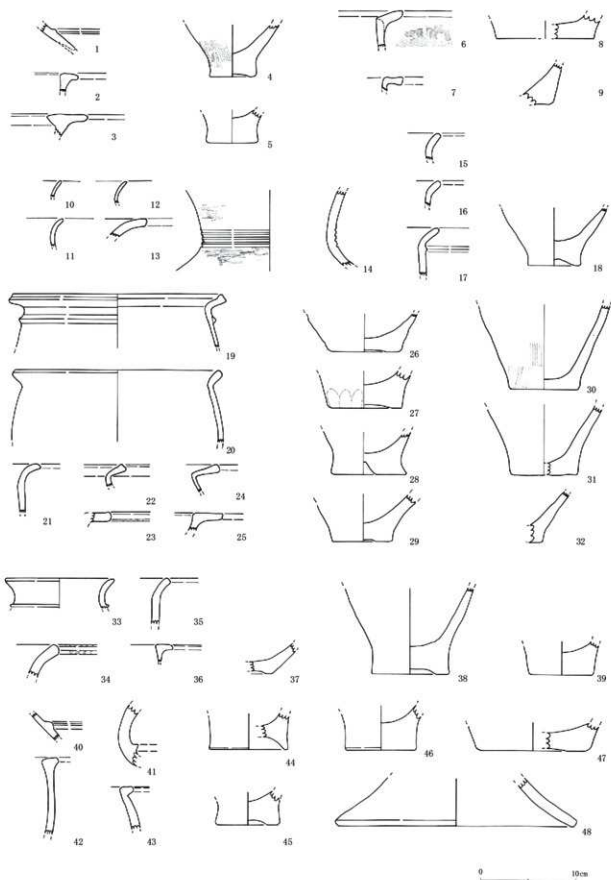


図4-1 各トレンチ出土土器類 (1) S=1/4

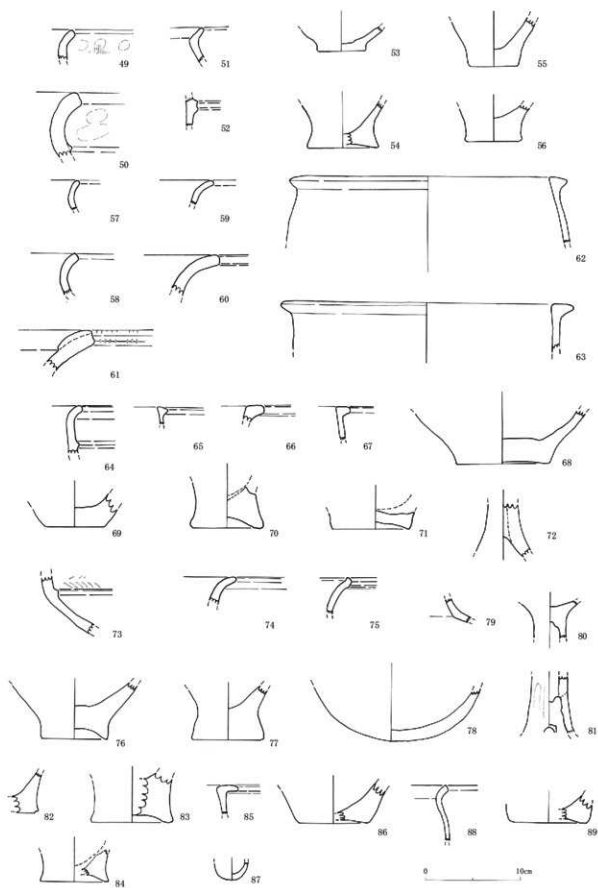


図4.2 各トレンチ出土土器類 (2) S=1/4

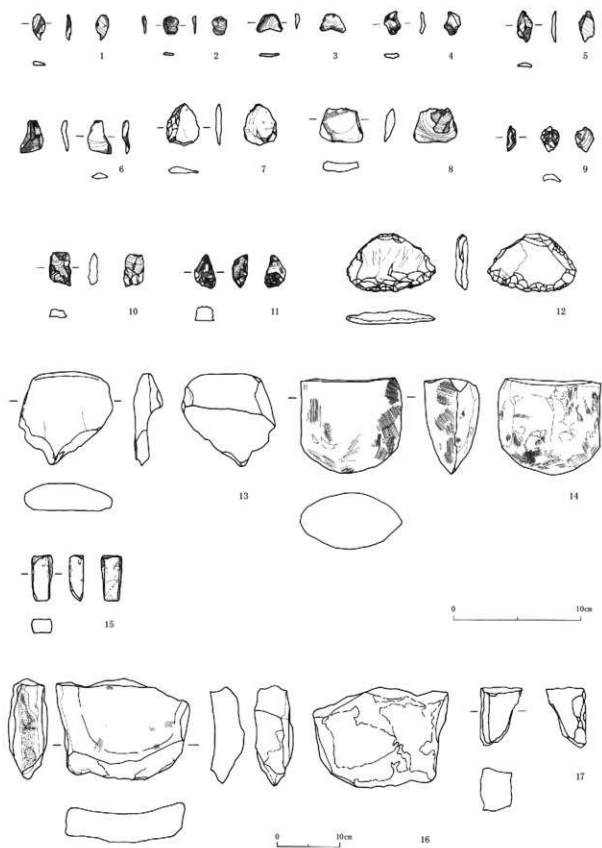


図43 各トレンチ出土石器類 (1) S=1/3, S=1/6

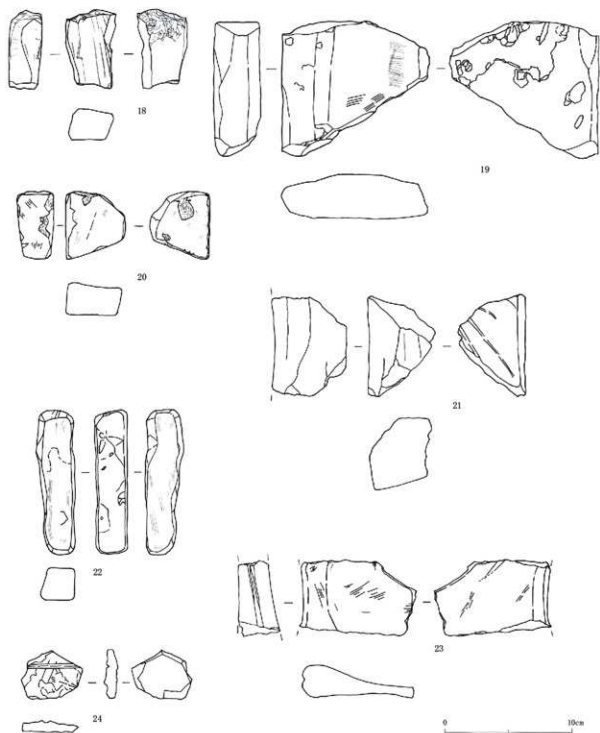


図4-4 各トレンチ出土石器類 (2) S=1/3

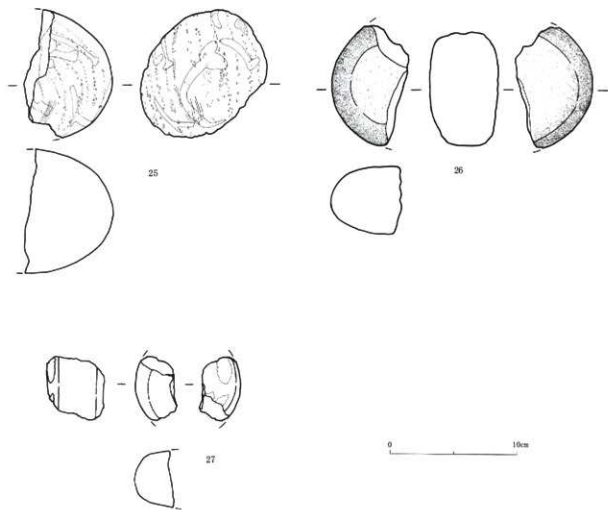


図45 各トレンチ出土石器類 (3) S=1/3

表4-1 弥生土器一覧表

番号	品種	時期	製作部位	法量	色服(外面)	色服(内面)	構成	胎土	調整(外面)	調整(内面)	出土地点	備考
1	壺	中期前半	頸部	残存高4.2cm	Hue10YR6/4 に近い黄褐色	Hue10YR4/3 に近い黄褐色	高粘	1mm程度の砂粒を少量含む	ナデ	ナデ	As-海堤等遺土	
2	壺	前期後半-中期前半	口縁部	残存高1.8cm	Hue5YR6/6 褐色	Hue7.5YR6/4 に近い黄褐色	高粘	1~2mm程度の砂粒を多量に含む	ナデ	ナデ	As-高堤等20層	
3	壺	中期後半	口縁部	残存高2.4cm	Hue10YR7/4 に近い黄褐色	Hue10YR7/3C に近い黄褐色	高粘	1mm程度の砂粒・赤鉄屑・角閃石を含む	ナデ(黄褐色)	ナデ(黄褐色)	As-海堤等遺土	
4	壺	中期後半	底部	残存高5.5cm	Hue5YR4/8 赤褐色	Hue10YR5/3C に近い黄褐色	高粘	1mm程度の砂粒を含む	ココナテ・ハクメ	ナデ	As-高堤等20層	
5	壺	中期前半	底部	底部径(5.4cm)	Hue2.5YR6/1 赤褐色	Hue5Y3/2 オリーブ黄褐色	高粘	0.5~1mm程度の砂粒を含む	顔面	顔面	As-海堤等土壌下	
6	前期後半-中期前半	口縁部	残存高2.8cm	Hue10YR7/6 暗黄褐色	Hue10YR7/6 暗黄褐色	高粘	1mm程度の砂粒を含む	ハクメ	ナデ	Br-赤土層直下		
7	壺	中期前半	口縁部	残存高1.5cm	Hue7.5YR6/8 褐色	Hue7.5YR6/8 褐色	高粘	1mm程度の砂粒を含む	ココナテ	ココナテ	Br-2層	
8	壺	中期後半	底部	残存高2.6cm	Hue5YR4/8 赤褐色	Hue5YR4/7 黄褐色	高粘	1mm程度の砂粒を含む	ナデ	ナデ	Br-赤土層直下	
9	壺	中期末	底部	残存高4.2cm	Hue5YR6/8 褐色	Hue10YR7/3 に近い黄褐色	高粘	3mm程度の砂粒を含む	顔面	顔面	Br-2層	
10	壺	前期後半	口縁部	残存高1.7cm	Hue10YR5/4C に近い黄褐色	Hue10YR5/4C に近い黄褐色	高粘	1~2mm程度の砂粒を含む	ナデ	ナデ	Cr-20層	
11	壺	前期後半	口縁部	残存高3.0cm	Hue10YR5/4C に近い黄褐色	Hue10YR5/4C に近い黄褐色	高粘	1~2mm程度の砂粒を含む	ナデ	ナデ	Cr-20層	
12	壺	前期後半	口縁部	残存高1.3cm	Hue10YR5/4C に近い黄褐色	Hue10YR5/4C に近い黄褐色	高粘	1~2mm程度の砂粒を含む	ナデ	ナデ(黄褐色)	Cr-20層	
13	壺	中期後半	口縁部	残存高1.9cm	Hue7.5YR6/8 褐色	Hue7.5YR6/8 褐色	高粘	1~3mm程度の砂粒を含む	ナデ	ナデ	Cr-比良区1層直下	
14	壺	中期	頸部	最大径18.8cm, 残存高1.5cm	Hue5YR4/6 赤褐色	Hue5YR4/6 赤褐色	高粘	0.5~2mm程度の砂粒を含む	ハクメのシミがキ	ナデ	Cr(中)ブロンズ10層	
15	壺	前期後半	口縁部	残存高1.0cm	Hue7.5YR4/2 褐色	Hue7.5YR4/2 褐色	高粘	1mm以下の砂粒を含む	ナデ(黄褐色)	ナデ(黄褐色)	Cr-2A層土中	
16	前期後半-前期末	口縁部	残存高2.8cm	Hue10YR5/4C に近い黄褐色	Hue10YR5/4C に近い黄褐色	高粘	1~2mm程度の砂粒を含む	ナデ	ナデ	Cr-比良区1層直下		
17	壺	前期末	口縁部	残存高5.0cm	Hue10YR5/4C に近い黄褐色	Hue10YR5/4C に近い黄褐色	高粘	1~2mm程度の砂粒を含む	ナデ	ナデ	Cr-比良区1層直下	
18	壺	中期前半	底部	残存高1.0cm	Hue2.5YR6/6 褐色	Hue10YR5/3 黄褐色	高粘	1~2mm程度の砂粒を含む	ナデ	ナデ・スコピオエ	Cr-2層	
19	壺	中期後半	口縁部	口径(22.2cm), 残存高5.6cm	Hue5YR6/8 褐色	Hue2.5YR6/8 褐色	高粘	1~2mm程度の砂粒を含む	ココナテ・ナデ	ナデ	Dr-西武浜区1層直下	
20	壺	中期前半	口縁部	残存高7.6cm	Hue5YR6/8 褐色	Hue5YR6/8 褐色	高粘	0~2mm程度の砂粒を多量含む	ココナテ・ナデ	ナデ	Dr-西武浜区土壌2	
21	壺	前期後半	口縁部	残存高5.1cm	Hue10YR6/6 暗黄褐色	Hue7.5YR3/8 黄褐色	やや不潔	2mm程度の砂粒を含む	ナデ	ナデ	Dtr	
22	壺	中期	口縁部	残存高2.5cm	Hue7.5YR7/6 褐色	Hue7.5YR3/8 黄褐色	高粘	0.5~2.5mm程度の砂粒を多量含む	ココナテ	ココナテ・ナデ	Dr-西武浜区1層直下	
23	壺	中期後半-中	口縁部(不要)	Hue7.5YR5/4 に近い黄褐色(不要)	Hue7.5YR5/4 に近い黄褐色(不要)	高粘	1~4mm程度の砂粒を多く含む	ナデ(不要)	ナデ(不要)	Dr-海堤等切部	跡目	
24	壺	中期	口縁部	残存高2.8cm	Hue7.5YR6/8 褐色	Hue7.5YR6/8 褐色	高粘	2~3mm程度の砂粒を含む	顔面	顔面	Dtr	
25	壺	中期	口縁部	残存高1.8cm	Hue7.5YR6/8 褐色	Hue7.5YR6/8 褐色	高粘	0.5~2mm程度の砂粒を多く含む	ココナテ	ココナテ	Dr-西武浜区2層土	
26	壺	中期後半-中	底部	底部径7.4cm, 残存高4.4cm	Hue7.5YR5/4C に近い黄褐色	Hue7.5YR5/4C に近い黄褐色	高粘	1~4mm程度の砂粒・角閃石・赤鉄屑を含む	ナデ	ナデ	Dr-西武浜区1層直下	
27	壺	中期後半	底部	底部径7.8cm, 残存高3.8cm	Hue2.5YR6/6 褐色	Hue10YR7/4C に近い黄褐色	高粘	1~2mm程度の砂粒を含む	ナデ・スコピオエ	ナデ(黄褐色)	Dr-西武浜区1層直下	
28	壺	中期前半	底部	底部径2.3cm, 残存高4.5cm	Hue2.5YR5/6 暗赤褐色	Hue7.5YR3/1 黄褐色, Hue7.5YR5/4 に近い黄褐色	高粘	1~4mm程度の白色砂粒・角閃石を含む	ナデ	ナデ	Dr-西武浜区1層直下	
29	壺	中期	底部	残存高4.1cm	Hue5YR6/4C に近い黄褐色	Hue5YR6/4C に近い黄褐色	高粘	1~2mm程度の砂粒を含む	ナデ(黄褐色)	ナデ(黄褐色)	Dr-東北武浜区土壌1層	
30	壺	前期後半-中期前半	底部	底部径7.0cm, 残存高6.8cm	Hue5YR6/6 暗赤褐色	Hue5YR4/2 黄褐色	高粘	2mm程度の砂粒を含む	ハクメのシミがキ	ナデ	Dtr土壌1	内面スコピオ(7)あり
31	壺	中期前半	底部	底部径(3.5cm), 残存高8.8cm	Hue5YR7/6 褐色, スリッパHue2.5YR6/8 褐色	Hue7.5YR6/8 褐色	高粘	2mm程度の砂粒を含む	顔面	顔面	Dr-土坑3	内面にスリッパがつか
32	壺	中期	底部	残存高4.4cm	Hue5YR7/6 褐色	HueR5/0 灰	高粘	1mm程度の砂粒を含む	ナデ(ほぼ顔面)	ナデ(ほぼ顔面)	Dr-西武浜区1層直下	
33	壺	前期後半	口縁部	口径(11.3cm), 残存高2.8cm	Hue7.5YR6/8 褐色	Hue2.5Y2/1 黄褐色	高粘	0.5~1.5mm程度の砂粒を含む	顔面	顔面	H-青雫埴土	
34	壺	中期	口縁部	残存高3.8cm	Hue2.5YR3/1 黄褐色	Hue2.5Y7/4 黄褐色	高粘	0.5~3mm程度の砂粒を多く含む	ナデ	ナデ	Fr-2層	跡目・内面黄褐色(?)
35	壺	前期後半-末	口縁部	残存高4.9cm	Hue5YR6/6 褐色	Hue5YR6/6 褐色	高粘	0.5~1mm程度の砂粒・角閃石を少量含む	ココナテ・顔面	顔面	Fr-海堤等遺土	
36	壺	前期後半-中期前半	口縁部	残存高1.9cm	Hue5YR6/8 褐色	Hue5YR6/8 褐色	高粘	1mm程度の砂粒を含む	ココナテ(ほぼ顔面)	ナデ(ほぼ顔面)	Fr-海土	
37	壺	中期	底部	残存高3.2cm	Hue10YR8/4 黄褐色	Hue5YR7/6 褐色	高粘	1mm程度の砂粒を含む	顔面	顔面	Fr-埋没地山直上	
38	壺	中期前半	底部	底部径2.2cm, 残存高9cm	Hue10YR5/4 黄褐色	Hue7.5YR3/4 に近い黄褐色	高粘	1~4mm程度の砂粒を多く含む	顔面	顔面	Fr-海土	
39	壺	前期後半-中期前半	底部	残存高4.5cm	Hue10R5/8 赤褐色	Hue5Y8/2 灰白	高粘	1~2mm程度の白色砂粒を多く含む	顔面	顔面	Fr-海堤等遺土	
40	壺	中期前半	頸部	残存高2.5cm	Hue7.5YR6/6 黄褐色	Hue7.5YR6/6 黄褐色	高粘	1~3mm程度の砂粒を含む	ココナテ	ナデ(ほぼ顔面)	Hr-青雫埴	
41	壺	前期後半-中期前半	頸部	残存高6.6cm	Hue5YR7/6 褐色	Hue5YR7/6 褐色	高粘	3mm程度の砂粒を含む	ココナテ	ココナテ	H2r-海土層	
42	壺	前期後半-中期前半	口縁部	口縁部径(23.4cm), 残存高7.8cm	Hue10YR7/3 に近い黄褐色	Hue10YR7/4C に近い黄褐色	高粘	2mm程度の砂粒を多く含む	ココナテ	ナデ	Fr-海堤等山直上	破断黄褐色土(HueN3?)
43	壺	前期後半-中期前半	口縁部	残存高4.7cm	Hue10YR8/4 黄褐色	Hue10YR8/4 黄褐色	高粘	1mm程度の砂粒を含む	ココナテ・顔面	ココナテ・顔面	Fr-海堤等山直上	
44	壺	中期前半	底部	底部径(7.4cm), 残存高3.8cm	Hue10YR8/4 黄褐色	Hue10YR8/4 黄褐色	高粘	1mm程度の砂粒を含む	ナデ(ほぼ顔面)	ナデ(ほぼ顔面)	Fr-海堤等山直上	
45	壺	中期前半	底部	底部径(6.6cm), 残存高5.6cm	Hue2.5YR6/6 褐色	Hue10YR4/3 に近い黄褐色	高粘	2mm程度の砂粒を含む	顔面	顔面	Hr-白倉	
46	壺	前期後半-中期前半	底部	底部径(7.2cm), 残存高4.7cm	Hue2.5YR5/6 暗赤褐色	Hue7.5YR6/6 褐色	高粘	2mm程度の砂粒を多く含む	ココナテ・ナデ	ナデ	H2r-青雫埴(10層)	

表4-1 弥生土器一覧表

番号	時期	種類	形状・部位	位置	色態(外面)	色態(内面)	構成	胎土	調整(外面)	調整(内面)	出土地点	備考	
47	中期か	底部	底部径4.4cm、 残存高2.5cm	Hue7.5YR5/6 に近い 黄褐色	Hue7.5YR5/6 に近い 黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を 多量含む	ナブ	ナブ	ナブ	Hr増穂層		
48	高坪	底部	底部径(12.1cm)、 残存高5.1cm	Hue7.5YR6/6 黄	Hue7.5YR6/6 黄	良好	1~3mm程度の砂粒を 含む	麻城	麻城	麻城	Hr増穂層		
49	前期末・中 期前半	口縁部	残存高3.3cm	Hue7.5YR6/6 黄	Hue7.5YR5/6 明褐色	良好	1~2mm程度の白色の 砂粒を含む	ココナブ・ハク ム・ユビオオエ	ナブ	ナブ	作楽弘法区		
50	中期か	口縁部	残存高5.6cm	Hue10YR4/2 灰黄	Hue10YR3/2 黄褐色	良好	1mm以下の砂粒を含む	ココナブ・ユビ オオエ	ココナブ	ココナブ	作楽窪田環へ 土壌層		
51	中期	口縁部	残存高3.8cm	Hue7.5YR7/6 黄	Hue7.5YR7/6 黄	良好	1~2mm程度の砂粒を 含む	ナブ・ココナブ	ナブ	ナブ	作楽弘法区		
52	中期	底部	残存高3.8cm	Hue10YR2/2 灰黄 Hue10YR7/4C に近い 黄褐色	Hue10YR7/4C に近い 黄褐色	良好	1~2mm程度の砂粒を 含む	麻城	麻城	麻城	作楽弘法区		
53	前期後半	底部	残存高2.5cm	Hue10YR4/2 灰黄	Hue10YR4/2 灰黄	良好	2mm程度の砂粒を含む	麻城	麻城	麻城	作楽土中		
54	前期末・中 期前半	底部	底部径(7.6cm)、 残存高5cm	Hue7.5YR6/6 黄	Hue7.5YR6/6 黄	良好	1mm程度の砂粒を含む	麻城	麻城	麻城	作楽窪田環 層		
55	前期後半・中 期前半	底部	底部径4.8cm、 残存高3.2cm	Hue7.5YR6/6 黄	Hue10YR7/1 黄	良好	3mm程度の砂粒を含む	麻城	ナブ	ナブ	作楽弘法区		
56	前期後半・中 期前半	底部	底部径(5.6cm)、 残存高4.8cm	Hue7.5YR6/6 黄	Hue7.5YR5/6 明褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	麻城	麻城	麻城	作楽窪田環 層		
57	前期か	口縁部	残存高3.3cm	Hue2.5YR7/4 灰赤 Hue10YR4/2 灰黄	Hue10YR7/6 明黄褐色 Hue10YR4/1 黄褐色	良好	1~5mm程度の砂粒を 含む	麻城	麻城	麻城	作楽生1号土坑		
58	中期か	口縁部	残存高4cm	Hue10YR6/黄褐色	Hue10YR6/黄褐色	良好	1~3mm程度の砂粒を 含む	ナブ(ほぼ麻)	ナブ(ほぼ麻)	ナブ(ほぼ麻)	作楽窪田環 層		
59	前期後半・中 期前半	口縁部	残存高3cm	Hue7.5YR4/2 灰黄	Hue10YR4/3 に近い 黄褐色	良好	1~4mm程度の砂粒を 含む	ナブ(ほぼ麻)	ナブ(ほぼ麻)	ナブ(ほぼ麻)	作楽窪田環 層		
60	中期	口縁部	残存高4.4cm	Hue10YR5/2 灰黄	Hue10YR5/2 灰黄	良好	1~4mm程度の砂粒を 含む	ナブ(ほぼ麻)	ナブ(ほぼ麻)	ナブ(ほぼ麻)	作楽窪田環 層		
61	中期	口縁部	残存高4.4cm	Hue7.5YR2/2 灰白	Hue7.5YR2/2 明黄褐色	良好	2~10mm程度の砂粒を 多く含む	ココナブ	ココナブ	ココナブ	作楽生1号土坑	跡目	
62	前期後半・中 期前半	口縁部	口径(14.6cm)、 残存高5.7cm	Hue7.5YR7/3 浅黄褐色	Hue7.5YR7/6 黄	良好	3mm程度の砂粒を含む	ココナブ(ほぼ麻)	ココナブ(ほぼ麻)	ココナブ(ほぼ麻)	作楽窪田環 層		
63	前期末か	口縁部	口径(13.3cm)、 残存高5.3cm	Hue7.5YR7/6 黄	Hue7.5YR7/6 黄	良好	1~2mm程度の砂粒を 含む	ココナブ	ココナブ	ココナブ	作楽生1号土坑		
64	前期末か	口縁部	残存高4.9cm	Hue7.5YR6/6 黄	Hue7.5YR6/6 黄	良好	0.5~2mm程度の砂粒を 多く含む、内 容に磁石を含む	ココナブ	ココナブ	ココナブ	作楽窪田環 層		
65	前期後半・中 期前半	口縁部	残存高1.8cm	Hue2.5YR7/4 灰赤	Hue2.5YR7/6 黄	良好	1~4mm程度の砂粒を 多く含む	ココナブ	ココナブ	ココナブ	作楽生1号土坑		
66	前期後半・中 期前半	口縁部	残存高2.3cm	Hue7.5YR3/3 に近い 黄褐色	Hue7.5YR3/4 に近い 黄褐色	良好	1~3.5mm程度の砂粒を 含む	ナブ(ほぼ麻)	ナブ(ほぼ麻)	ナブ(ほぼ麻)	作楽窪田環 層		
67	中期	口縁部	残存高3.7cm	Hue7.5YR6/6 黄 Hue7.5YR4/2 灰黄 Hue7.5YR2/2 灰白	Hue10YR7/4C に近い 黄褐色	良好	1~2mm程度の砂粒を 含む	麻城	麻城	麻城	作楽窪田環 層		
68	中期	底部	底部径9.6cm、 残存高5.3cm	Hue7.5YR7/6 黄	Hue7.5YR2/2 灰黄	良好	0.5~2mm程度の砂粒を 含む、内 容に磁石を含む	ココナブ	ココナブ	ココナブ	作楽塚の 土		
69	中期か	底部	底部径(6cm)	Hue7.5YR6/6 黄	Hue7.5YR3/3 に近い 黄褐色	良好	1~3mm程度の砂粒を 多く含む	ココナブ	ココナブ	ココナブ	作楽塚の 土		
70	中期前半	底部	底部径(7.6cm)、 残存高4.8cm	Hue7.5YR6/6 黄	Hue2.5YR6/6 黄	良好	1mm程度の砂粒を含む	麻城	麻城	麻城	作楽生1号土坑		
71	中期後半	底部	底部径(7.0cm)	Hue7.5YR7/4 黄	Hue2.5YR3/4 黄	良好	1mm程度の砂粒を含む	ナブ	別紙	別紙	作楽生1号土坑		
72	高坪	底部	残存高5.5cm	Hue7.5YR5/4 に近い 黄褐色	Hue7.5YR5/4 に近い 黄褐色	良好	2~3mm程度の砂粒を 含む	麻城	麻城	麻城	作楽窪田環 層		
73	前期末・中 期前半	底部	残存高6.6cm	Hue5YR5/6 明褐色	Hue5YR5/6 明褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	ナブ・エギカ	ナブ・ユビオオエ	ナブ	Lr土層	目次文一 部分の 一部	
74	前期後半	口縁部	残存高3.9cm	Hue7.5YR3/4 に近い 黄褐色	Hue7.5YR3/6 黄	良好	1~3mm程度の砂粒を 含む	ナブ(ほぼ麻)	ナブ(ほぼ麻)	ナブ(ほぼ麻)	Lr土層		
75	高坪か 吉塚時代 後層	口縁部	残存高3.9cm	Hue7.5YR6/6 黄	Hue7.5YR6/6 黄	良好	0.5~2mm程度の砂粒を 含む	ココナブ	ココナブ	ココナブ	Lr土層	龍化灰黄褐色の 高坪(175g.2) か	
76	中期前半	底部	底部径(8cm)、 残存高5.7cm	Hue7.5YR7/6 黄	Hue7.5YR7/6 黄	良好	1~2mm程度の砂粒を 多く含む	ココナブ	ナブ	ナブ	Lr土層		
77	中期後半	底部	底部径(7.4cm、 残存高5.3cm)	Hue7.5YR6/6 黄 Hue7.5YR5/6 明褐色 Hue7.5YR5/4 黄	Hue7.5YR5/2 灰黄 Hue7.5YR5/4 黄	良好	0.5~2mm程度の砂粒を 含む、内 容に磁石を含む	ナブ	ナブ	ナブ	Lr層部付近		
78	高坪	底部	残存高5.4cm	Hue7.5YR4/6 黄 Hue7.5YR3/3 明黄褐色	Hue7.5YR5/4 に近い 黄褐色、Hue7.5YR3/1 黄 褐色	良好	1~3mm程度の砂粒を 含む	ナブ	ナブ・ユビオオエ	ナブ	Lr土層		
79	高坪	吉塚時代 後層	底部	残存高2.5cm	Hue2.5YR6/6 黄	Hue2.5YR6/6 黄	良好	0.5mm程度の砂粒を含む	ナブ	ナブ	ナブ	Lr土層	土器高坪か
80	高坪	吉塚時代 後層	底部	残存高4.1cm	Hue2.5YR5/6 明黄褐色	Hue2.5YR5/6 明黄褐色	良好	1mm程度の砂粒を含む	ナブ・エギカ	別紙	別紙	Lr土層	土器高坪か
81	高坪	吉塚時代 後層	底部	残存高6.0cm	Hue2.5YR5/6 明黄褐色	Hue2.5YR5/6 明黄褐色	良好	0.5mm程度の磁石や 砂粒を少量含む	ナブ	ナブ	ナブ	Lr土層	土器高坪か
82	中期	底部	残存高4.1cm	Hue7.5YR6/2 灰黄	Hue7.5YR2/2 明黄褐色	良好	1~3mm程度の砂粒を 含む	クナブ・麻	麻城	麻城	Mr土層		
83	中期前半	底部	底部径(4.3cm)、 残存高4.5cm	Hue10YR6/3 に近い 黄褐色、Hue2.5YR8/1 黄 褐色	Hue10YR6/3 に近い 黄褐色	良好	1~3mm程度の砂粒を 含む	ナブ・クナブ	ナブ	ナブ	Mr土層		
84	中期前半	底部		Hue2.5YR/		良好	1~2mm程度の砂粒を 含む				Mr土層		
85	中期前半	口縁部	残存高3.1cm	Hue7.5YR6/6 黄	Hue7.5YR6/6 黄	良好	0.5~4mm程度の砂粒を 含む	ココナブ	ココナブ	ココナブ	Nr増穂層		
86	中期	底部	底部径(7.2cm)、 残存高4.3cm	Hue2.5YR5/6 明黄褐色	Hue7.5YR6/6 黄	良好	2mm程度の砂粒を含む	ココナブ	ココナブ	ココナブ	Nr増穂層		
87	エニ テム ブ土 層	底部	残存高1.9cm	Hue7.5YR2/2 黄褐色	Hue7.5YR2/2 黄褐色	良好	0.5mm以下の磁石を 少量含む	ナブ	ナブ	ナブ	Nr増穂層		
88	前期末・中 期前半	口縁部	残存高5.8cm	Hue2.5YR6/6 黄	Hue2.5YR6/6 黄	良好	1mm程度の砂粒を多 く含む	ココナブ	ナブ	ナブ	Pr土層		
89	中期	底部	底部径(7.8cm)、 残存高3.1cm	Hue2.5YR5/6 明黄褐色 Hue7.5YR3/3 に近い 黄褐色	Hue10YR7/4 に近い 黄褐色	良好	2~4mm程度の白色・ 半透明砂粒・内 容に磁石を含む	麻城	麻城	麻城	Pr土層		

表4-2 弥生石器一覧表

パンクNo.	番号	器種	法量	重量	石材	出土地点	備考
No.78	1	削片	全長2.1cm 幅0.95cm	0.4g	黒曜石	Dtr:赤土溝下	
No.78	2	削片	全長1.35cm	0.2g	黒曜石	Dtr:赤土層	
No.78	3	削片	全長1.5cm 幅2.05cm 厚0.3cm	0.5g	黒曜石	Cr1層	
No.78	4	削片	全長1.8cm 幅1.2cm 厚0.4cm	0.6g	黒曜石	Dtr1区2a層	
No.78	5	削片	全長2.4cm 幅1.1cm 厚0.3cm	0.7g	黒曜石	Dtr:埋め戻し土	
No.78	6	削片	全長2.4cm 幅1.2cm 厚0.4cm	1.3g	黒曜石	Etr:埋埋赤土	
No.78	7	削片	全長3.2cm 幅2.5cm 厚0.5cm	3.5g	安山岩か	Etr:埋埋層	
No.78	8	削片	全長2.6cm 幅3.4cm 厚0.7cm	7.0g	黒曜石	Gr:赤土層	
No.79	9	削片	全長1.9cm 幅1.5cm 厚0.7cm	1.0g	黒曜石	It	自然面あり
No.79	10	削片	全長3.2cm 幅1.7cm 厚0.7cm	3.6g	黒曜石	L2tr:埋埋層	
No.79	11	削片	全長2.6cm 幅1.5cm 厚0.1cm	4.4g	黒曜石	Ntr:埋埋層	
No.78	12	スクレイパー	全長4.5cm 幅7.0cm 厚0.1cm	33.1g	砂岩か	Htr:埋埋部 地山面上	
No.79	13	紐方石斧	全長7.3cm 幅7.1cm 厚0.2.1cm	137.5g	玄武岩	Jtr:弥生1号土坑	自然面あり
No.79	14	石斧	全長7.5cm 幅7.8cm 厚0.4.3cm	380g	玄武岩	Cr:埋埋部狭長区埋埋層	
No.78	15	柱状片方石斧	全長3.8cm 幅1.55cm 厚0.1cm	11.3g	燧石	Cr:埋め戻し土中	自然面あり
No.78	16	砥石	全長15.6cm 幅20.6cm 厚3.4.6cm	2260g	砂岩	Dtr:表探	被熱痕あり
No.78	17	砥石	全長4.6cm 幅3.1cm 厚0.5.4cm	80.6g	砂岩	Dtr:埋埋部赤土層	
No.78	18	砥石	全長5.7cm 幅3.7cm 厚0.2.45cm	79.0g	砂岩か	Ftr:埋埋部土層埋埋部	
No.78	19	砥石	全長10.2cm 幅11.7cm 厚0.3.8cm	520g	砂岩か	Ftr:埋埋部埋土	表面に被熱痕あり
No.78	20	砥石	全長5.2cm 幅4.5cm 厚0.3.8cm	87.3g	砂岩か	Htr:埋埋部狭長区赤土層	
No.78	21	砥石	全長6.0cm 幅5.5cm 厚0.5.6cm	215.9g	砂岩か	Htr:埋埋部地山面上	
No.79	22	砥石	全長11.5cm 幅3.0cm 厚0.2.5cm	159.7g	石英質岩	Jtr:埋埋部東側地山面上	
No.79	23	砥石	全長5.7cm 幅9.15cm 厚0.3.0cm	157.3g	砂岩	Jtr:弥生1号土坑	
No.79	24	砥石	全長3.8cm 幅4.4cm 厚0.1.0cm	22.1g	砂岩	Mtr:埋埋部埋土	交差する溝あり
No.79	25	叩き石	全長10.1cm 幅6.8cm 厚0.9.6cm	740g	不明	Ltr:表探	被熱痕あり
No.78	26	叩き石	全長9.5cm 幅5.8cm 厚0.5.3cm	345.5g	凝灰岩	Dtr:土坑3	
No.79	27	磨石	全長5.0cm 幅3.0cm 厚0.4.4cm	81.2g	凝灰岩	Ntr:埋	一部被埋の割痕か

第5章 自然科学的分析

第1節 天神山古墳と周辺遺跡出土須恵器の胎土分析

足達悠紀¹⁾・足立達朗^{2,3)}・尾園晃⁴⁾・長安慧⁵⁾・嶋田光一³⁾・
 榊山範一⁶⁾・八木健一郎⁶⁾・松浦宇哲⁶⁾・辻田淳一郎⁷⁾

(1)九州大学大学院地球社会統合科学府、(2)九州大学アジア埋蔵文化財センター、
 (3)九州大学大学院比較社会文化研究院地球変動講座、(4)桂川町教育委員会、
 (5)飯塚市教育委員会、(6)嘉麻市教育委員会、(7)九州大学大学院人文科学研究院

はじめに

天神山古墳では多種多様な須恵器が多量に出土しているが、それらがどこの窯で生産されたかが問題となっている。そこで本節では、天神山古墳出土須恵器の胎土の化学組成を分析することで産地の推定を行った。また天神山古墳が所在する遠賀川上流域では井手ヶ浦窯跡群が地域の拠点窯として認識できるが、井手ヶ浦産須恵器がどの程度流通しているかという点についても議論の対象となった。そのため、当該地域に所在するその他の遺跡出土須恵器についても合わせて胎土分析を行った。以下にその結果を報告する。

1 資料と方法

(1) 対象遺跡の立地と地質環境 (図1)

本稿では、前方後円墳である天神山古墳 (桂川町)・ホーケントウ古墳 (飯塚市)、Ⅲ B-Ⅳ A 期の集落遺跡である寿命北隈遺跡・影塚南遺跡・大坪遺跡 (桂川町)、鷺迫遺跡・榎町遺跡 (嘉麻市)、Ⅳ A-Ⅳ B 期の須恵器窯跡であるコノマ遺跡群 SK09 (桂川町) を分析対象とした¹⁾。

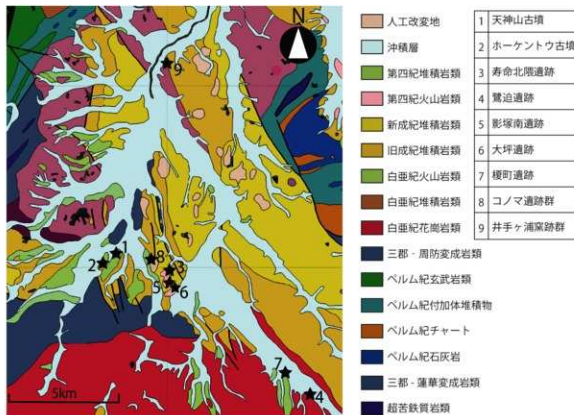


図1 対象遺跡の立地と地質環境

これらの遺跡は遠賀川の上流域に所在し、西は三郡山地、東は福智山地、南は筑紫山地に囲まれている。対象地域の地質環境については足立ら（2018b）を大いに引用・参照し、以下その概要を簡単に述べることにしたい。三郡山地は主に変成岩類からなっており、砂質・泥質変成岩類のほか苦鉄質・超苦鉄質変成岩類が分布する。また三郡・蓮華変成岩（約3億年前）と三郡・周防帯（約2億年前）に形成年代の差異によって区分されることが指摘されている（柴田・西村1989）。福智山地は主にペルム紀の石灰岩や堆積岩類・白亜紀の堆積岩類から構成され、筑紫山地は主に白亜紀の花崗岩類で構成されている。筑豊盆地の内部には旧成紀の堆積岩類や白亜紀の花崗岩類が分布する（足立ら2018b）。

(2) 分析対象資料（図2・表1）

1～10はホーケントウ古墳出土の須恵器である。1は大甕の胴部片で、外面は平行タタキ、内面はナデにより調整する。2は大甕の胴部片で、外面はナデ、内面は同心円当てで具痕が残る。これらは飯塚市文化財調査報告書第60集（飯塚市2024）の第29図37、第30図38に掲載されている大甕である。分析を行った資料は胴部片であるが、帰属する大甕はどちらも口縁部に波の高い波状文を有するもので、牛頭窯跡産のものに類することが指摘されている。3・4は坏蓋の口縁部で、どちらも口唇部にやや痕跡的な段を有している。いずれも内外ともに回転ナデを施す。5は坏身で、復元口径は11.2cmを測る。口唇部は丸くおさめており、内外ともに回転ナデを施す。6は脚付壺の脚部で、飯塚市報告の第26図34と同一個体である。外面に2条の沈線とカキメをめぐらせ、内面は回転ナデを施す。内外に黒い斑点状の鉄粉がみとめられる。7は長脚2段透かしをもつ高坏の脚部である。飯塚市報告の第23図19と同一個体である。脚端部は上下につまみ出して外面を平らにし、分析した破片の上位には沈線が確認できる。8は器台の脚部である。外面には沈線をめぐらせており、少なくとも2段にわたって斜線文が施されている。9は高坏形器台坏部の口縁部である。斜線文を有し、一部に自然釉がか

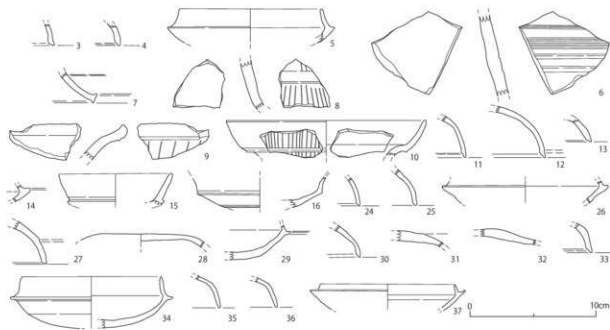


図2 胎土分析使用資料 S=1/3

表1 胎土分析使用資料

資料番号	産地	産地名	産機・出土位置	産機(調査番号)	分析部位	時期	色調(外面)	色調(内部)	胎土	焼成	備考	
1	ホーランド工場	ホーランド工場	HK77トレ	産1 (第29回37)	胴部	ⅡB	Hue2.5Y7/1灰白	HueN5/0灰	1~2mm程度の白色砂粒を含む	良好		
2			HK77トレ	産2 (第30回38)	胴部	ⅡB	HueN7/0灰白	Hue5G6/1緑灰	0.5~2mm程度の白色砂粒を含む	良好		
3			HK77トレHD等	坯面	口縁部	ⅡB	Hue2.5Y6/2灰黄	Hue2.5Y6/2灰黄	精良	良好		
4			HK77トレHD等	坯面	口縁部	ⅡB	Hue2.5Y5/2暗灰黄	Hue2.5Y5/2暗灰黄	精良	良好		
5			HK77トレR10	坯身	口縁部	ⅡB	Hue2.5Y7/2灰黄	Hue2.5Y7/2灰黄	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好		
6			HK77トレR24	胴付帯 (第26回34)	胴部	ⅡB	Hue2.5Y7/2灰黄	Hue2.5Y7/2灰黄	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好	瓶点注(黒色)の胎粒が認められる	
7			HK77トレHD等	底杯 (第22回19)	胴部	ⅡB	HueN3/0暗灰	Hue2.5Y4/2暗灰黄	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好	長径2段造かし	
8			HK77トレ黒染 灰よりやや上	胴白	胴部	ⅡB	Hue2.5Y3/2黒地	Hue10Y85/2灰黄緑	0.5~1mm程度の白色砂粒を含む	良好	斜線文	
9			HK77トレ黒色土	胴白	坯部の口縁部	ⅡB	Hue5Y2/1黒	Hue2.5Y6/3Cふい黄	0.5mm程度の白色・半透明砂粒をやや多く含む	良好	斜線文、一部自然焼かかか	
10			HK77トレナス(2産)	ハソウ	口縁部	ⅡB	HueN4/0灰	Hue2.5Y5/1灰	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好	斜線文、美濃国は別産片から移動検出している	
11	前方後円墳	天孫山古墳	TNJR1R 黒土	坯面	口縁部	ⅡB	Hue2.5Y5/2暗灰黄	Hue2.5Y6/1灰黄	1mm程度の白色砂粒を含む	良好	瓶点注(黒色)の胎粒が認められる	
12			L1c増焼層	坯面	口縁部	ⅡB	Hue5Y5/1灰、Hue5Y2/1黒	Hue5Y4/1灰	0.5~1mm程度の白色砂粒を含む	良好		
13			L1c増焼層	坯面	口縁部	ⅡB	Hue2.5Y6/4Cふい黄	Hue2.5Y6/4Cふい黄	精良	良好		
14			L1c増焼層	坯身	受け部	ⅡB	Hue2.5Y6/2灰黄	Hue2.5Y6/2灰黄	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好		
15			L2平坦面直上	高坪	坪部	ⅡB	Hue5Y6/1灰、Hue5Y2/1黒	Hue5Y2/1黒	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好		
16			Ltr	高坪	坪部	ⅡB	Hue5Y6/1灰	Hue5Y6/1灰	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好		
17			L1b増焼層	産A(153)	胴部	ⅡB	Hue5Y3/1灰	Hue5Y5/1灰	1mm程度の白色砂粒を含む	良好	153参照	
18			L1b増焼層	産B (154-156)	胴部	ⅡB	Hue2.5Y7/2灰黄	HueN4/0灰色	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好	154-156参照	
19			L1a平坦面直上	産F (166-167)	胴部	ⅡB	HueN4/0灰色	HueN4/0灰色	1mm程度の白色砂粒を含む	良好	166-167参照	
20			Ltr黒土層	手掛附帯 (145)	蓋部	ⅡB	Hue10Y87/4にふい黄焼	Hue10Y87/4にふい黄焼	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好	145参照	
21			L2a黒土層	産白(148)	胴部	ⅡB	Hue10Y87/1灰白	Hue10Y87/1灰白	1mm程度の白色砂粒を含む	良好	148参照	
22			L2b平坦面直上	ハソウ(80)	口縁部	ⅡB	Hue10Y86/1緑灰	Hue10Y86/1緑灰	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好	80参照	
23			L1b平坦面直上	ハソウ(78)	口縁部	ⅡB	HueN3/0灰	Hue10Y87/1灰白	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好	78参照	
24	身命北遺跡	身命北遺跡	11号住居中層	坯面	口縁部	ⅡB、ⅡA	Hue2.5Y6/3Cふい黄	Hue2.5Y6/2灰黄	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好		
25			11号住居中層	坯面	口縁部	ⅡB、ⅡA	HueN5/0灰	Hue5B6/1青灰	0.5~1mm程度の白色砂粒を含む	良好		
26			11号住居中層	坯身	受け部	ⅡB、ⅡA	Hue5B6/1青灰	Hue5Y6/2灰オリーブ	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好	瓶点注(黒色)の胎粒が認められる	
27			3号住居床直上	坯面	胴部から口縁部	ⅡB	Hue7.5Y3/1灰	Hue7.5Y5/1灰	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好		
28			3号住居床直上	坯面	天井部	ⅡB	HueN5/0灰	HueN5/0灰	0.5~2mm程度の白色・半透明砂粒を含む	良好	3cm内で切り取り	
29			3号住居床直上	坯身	蓋部	ⅡB	HueN5/0灰	HueN5/0灰	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好	3cm内で切り取り	
30			新塚遺跡	9号住居	坯面	口縁部	ⅡB	Hue5Y4/1灰	Hue2.5Y6/1灰	0.5~1mm程度の白色砂粒を含む	良好	瓶点注(黒色)の胎粒が認められる
31			大坪遺跡	8号住居層土	坯面	天井部	ⅡB、ⅡA	Hue5Y8/2灰黄	Hue5Y6/1灰	0.5mm程度の白色砂粒を含む	良好	
32			大坪遺跡	8号住居層土	坯面	天井部	ⅡB、ⅡA	Hue5Y8/1灰白	Hue5Y8/1灰白	精良	良好	瓶点注(黒色)の胎粒が認められる
33	大坪遺跡	8号住居層土	坯面	口縁部	ⅡB	Hue5Y3/1灰	Hue5Y8/1灰白	0.5~1mm程度の白色砂粒を含む	良好			
34	榎町遺跡	2号住居床直上	坯身	口縁部から底部	ⅡB	HueN6/0灰、HueN3/0暗灰	HueN6/0灰	0.5~1mm程度の白色砂粒を含む	良好	3cm内で切り取り		
35	宮路	コノマ遺跡群	S09	坯面	口縁部	ⅡA、ⅡB	Hue2.5Y8/2灰白	Hue2.5Y8/2灰白	0.5mm程度の白色砂粒・2mm程度の黄色砂粒を含む	不良		
36			S09	坯面	口縁部	ⅡA、ⅡB	Hue2.5Y8/2灰白	Hue2.5Y8/2灰白	0.5mm程度の白色・半透明・透明砂粒、角閃石を少量含む	不良		
37			S09	坯身	口縁部	ⅡA、ⅡB	Hue2.5Y8/2灰白	Hue2.5Y8/2灰白	0.5mm程度の白色・半透明・透明、角閃石を含む	不良		

かる。10は題の口縁部で斜線文を施す。復元口径は15.8cmを測る。

11～23は天神山古墳出土須恵器である。11～13は坯蓋の口縁部で、いずれも口唇部に段を有している。14は坯身で、やや丸みを帯びる受け部をもつ。15・16は無蓋坯環で、いずれも下半に段を持って外傾・外反するものであり、井手ヶ浦窯跡群や宗像窯跡群でよくみとめられるものである。15の方はやや厚みがある。17は甕A(153)で、口縁端部で折れ曲がるものである。18は甕B(154・156)で、玉縁状の口縁端部を有している。こうした口縁端部は牛頭窯跡群でよく確認されることが指摘されている(太田2020)。19は甕F(166・167)の胴部である。20は子持脚付壺(145)の壺部である。灰白色を呈し内外面に黒い斑点状の鉄紛が目立つことが特徴的である。21は器台(148)の脚部で外面に波状文を有する。22(80)は題の口縁部で波状文を有するものである。角閃石らしき黒い斑点があることや、表面がざらついているという特徴がある。対して23(78)は沈線状の刺突文を有し、緻密な胎土で焼成も堅緻な印象を受けるものである。24～34は集落出土の須恵器である。いずれの遺跡においても坯身・坯蓋を分析対象とした。時期はⅢB期が主であるが、口縁端部の形態が不明なものについては回転ヘラケズリの範囲などからⅢB～ⅣA期とした。25は口唇部を丸くおさめる。35～37はコノマ遺跡群のSK09(窯跡)から出土した須恵器である。焼成段階で窯が崩落した(桂川町2020)ため焼成が不良である。本稿で対象とした遺跡の中では新しい時期に位置づけられるが、天神山古墳周辺に「ⅢB期に操業していたが現在は未発見の窯」が存在した場合に、その胎土がコノマ産須恵器と類似する可能性を鑑みて分析対象とした。

また、比較資料として牛頭窯跡群(大野城市)・宗像窯跡群(宗像市)・井手ヶ浦窯跡群(飯塚市)の胎土分析結果を引用・参照した。これらは足立ほか(2018a)、足立ほか(2018b)に掲載されているもので、データの詳細については九州大学の足立達朗氏よりご教示いただいた。表2については今回の報告にあたって足達が分析した結果を掲載したものであるが、表3については以前に足立氏が分析した結果を再掲するものである。

(3) 分析方法

対象資料について観察及び実測図の作成・写真撮影等の考古学的記録を行った。資料番号28・29・34については3cm四方程度に切り取って試料を採取した。内外面の風化部分や自然軸を研削したのち、水道水を用いて5分間超音波洗浄を3回、続いてElix水を用いて5分間超音波洗浄を2回行った。次に110℃で48時間以上乾燥させた。乾燥させた試料はタングステン製乳鉢を用いて粗く粉砕した。さらに高速振動試料粉砕機(Retsch製)もしくは多検体試料精密粉砕機(安井器械社製マルチピースショッカー)で細砕した。得られた粉末試料約3～6gを計量した上で秤量済みの磁性るつばにいれ、110℃の恒温乾燥機で12時間乾燥させた。次に880℃のマッフル炉で25時間強熱乾燥させた。乾燥後の粉末試料1.8000gとSpectroFlux100B(Alfa Aesar製)3.6000gを正確に秤量しメノウ乳鉢で混合した(混合比=1:2)。粉末を白金のつばに移し、ピードサンプラーを用いてガラスピードを作成した。途中で剥離剤をミクロスパーテル1杯分加えた。完成したガラスピード試料を用いて、九州大学大学院比較社会文化研究院設置の波長分散型蛍光X線分析装置(XRF,リガク製ZSX Primus II)による元素分析を実施した。測定した元素は主要10元素[SiO₂・TiO₂・Al₂O₃・Fe₂O₃・MnO・MgO・CaO・Na₂O・K₂O・P₂O₅](wt%)および微量元素13元素[V・Cr・Co・Ni・Cu・Zn・Ga・Rb・Sr・Y・Zr・Nb・Ba]である。なお、Coは粉砕時の器具等からの影響を受けやすいため、分析結果の解析からは除外した。測定条件の詳細は中野ほか(2009)および中野ほか(2012)を参照されたい。

2 分析結果

(1) 天神山古墳・ホーケントウ古墳出土須恵器の胎土分析結果

XRFによる元素測定結果を表2の1～23に示す。表3については足立ほか(2018a)および足立ほか(2018b)での測定結果である。測定結果をもとに、縦軸に各元素含有量、横軸にSiO₂含有量をとったハーカー図を作成した(図3-1～4)。

最も含有量の高いSiO₂について、足立ほか(2018a)の成果により牛頭窟跡群出土須恵器は57-66wt%の範囲にまとまることが示されている。天神山古墳・ホーケントウ古墳出土須恵器について便宜上66wt%以上とそれ未満に分けて見てみると、資料番号1(甕)・2(甕)・11(坏蓋)・16(高坏)・17(甕A)・18(甕B)・19(甕F)・20(子持脚付壺)・21(器台)が57-65wt%、それ以外が66-70wt%の範囲を示す。

66wt%未満の中でも特に1(甕)・2(甕)・11(坏蓋)・20(子持脚付壺)・21(器台)については、その他の主要・微量元素についても牛頭産と類似した値を示すものが多いため、「牛頭産」もしくは乙金などの牛頭周辺地域での生産が行われた可能性が高いと言える。

16・17・18・19は牛頭及び宗像の値のどちらも類似が認められるため判然としないが、特に16(高坏)はTiO₂、Al₂O₃、Na₂O、V、Ga、Rb、Nb、Baなどの多くの元素において宗像の組成幅に当てはまるため、どちらかと言えば宗像産の可能性が高い。ただしSiO₂の含有量が井手ヶ浦の値と比べてやや低いものの、その他の元素については井手ヶ浦の値に類似するものも多く、井手ヶ浦産である可能性も否定できない。また19(甕F)についてはNa₂Oや超苦鉄質岩に特徴的なMgO・Cr以外は基本的に宗像の値に近く、宗像産である可能性が比較的高い。一方、18(甕B)はMgOやCrがやや高いもののTiO₂、Al₂O₃、FeO₂、Na₂O、K₂O、Ga、Rb、Nbで牛頭の値と類似しており、どちらかと言えば牛頭産である可能性がある。前述の通り玉縁状の端部形態が牛頭に多いため(太田2020)、考古学的情報と合わせて考えると牛頭周辺産として良いかもしれない。17は総合的に判断して牛頭か宗像のどちらか一方により近いとは言えない状況である。ここまで「牛頭」か「宗像」かのどちらに近いかを議論したが、もちろん「未知の窟」に由来する可能性や、器種による胎土の違いなどが影響している可能性もある。ここでは「1・2・11・20・21及び18は牛頭周辺で生産された可能性が高い」が、それ以外については明言しにくいことを強調しておきたい。またコノマ窟出土須恵器は牛頭と類似する値をもつ元素が多い。特にSiO₂については牛頭の範囲と類似するが、TiO₂、MnO、Na₂O、K₂Oなどの主要元素及びV、Rb、Sr、Y、Nb、Baなどの微量元素については牛頭の値と区別が可能である。今回の分析で牛頭周辺産の可能性が高いとした試料については、SrとYでコノマと類似するもののその他について基本的に牛頭の値に近いことを、在地産ではないと判断した。

次にSiO₂が66wt%以上を示すものについてみていく。宗像と井手ヶ浦の示す値はほとんどの元素で連続しているため明確に区別することは難しいが、比較的よく分かれる元素としてはSiO₂、FeO₂、K₂O、Rb、Znが挙げられる。これらについてみていくと、8(器台)・9(器台)はどちらも判然としないが、4(坏蓋)・6(脚付壺)・12(坏蓋)・23(甕)については宗像の値に近く、それ以外については井手ヶ浦の値に近いものが多い。

以上の結果をまとめると次のようになる。1(甕)・2(甕)・11(坏蓋)・18(甕B)・20(器台)・21(器台)は牛頭周辺で生産された可能性が高い。4(坏蓋)・6(脚付壺)・12(坏蓋)・16(高坏)・19(甕F)・23(甕)はどちらかと言えば宗像周辺で生産された可能性の方が高いが、井手ヶ浦産である可能性も否定できない。8(器台)・9(器台)は少なくとも牛頭産ではない。17(甕A)は少なくとも井手ヶ浦産ではない。そのほか3(坏蓋)・5(坏身)・7(高坏)・10(甕)・13(坏蓋)・14(坏身)・

表2. 天神山古墳及びその周辺遺跡出土須恵器の胎土分析結果

測値	原(21wt%)																	原(25ppm)																
	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	Mn ₂ O	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	LOI	Wt%	Co	Ni	Cu	Zn	Ga	Rb	Sr	Y	Zr	Nb	Ba												
1	61.74	0.78	28.10	3.10	0.02	0.60	0.33	1.17	2.75	0.03	0.05	69.64	38.97	5.54	n.d.	64.27	33.85	140.68	81.41	29.64	105.00	23.72	408.21											
2	61.28	0.40	29.32	2.86	0.02	0.57	0.33	1.29	2.77	0.03	0.27	98.45	67.58	9.69	n.d.	65.86	33.09	141.78	84.28	30.30	152.13	23.26	490.52											
3	68.71	1.41	22.84	3.43	0.02	0.52	0.31	0.54	0.77	0.03	0.15	99.54	66.98	22.18	19.09	95.03	28.96	54.78	53.27	24.07	332.66	17.30	201.87											
4	68.66	0.65	22.75	3.32	0.01	0.57	0.21	0.89	1.74	0.02	0.31	99.54	86.70	8.18	10.80	55.44	31.30	85.80	61.92	16.06	369.41	17.26	378.61											
5	67.58	1.33	22.87	3.90	0.02	0.64	0.29	0.58	0.88	0.02	0.89	99.13	154.32	73.33	18.40	107.67	28.48	38.84	52.69	26.49	322.69	16.72	230.25											
6	67.22	0.95	21.28	7.62	0.01	0.50	0.10	0.30	1.27	0.02	0.28	99.54	89.62	54.83	7.72	8.46	31.67	29.80	74.48	37.53	334.43	18.57	256.38											
7	68.48	1.30	21.58	3.43	0.02	0.62	0.46	0.88	1.30	0.01	0.24	99.18	103.67	58.54	22.61	21.05	79.39	35.08	93.13	31.37	287.30	14.34	367.72											
8	68.65	1.05	20.28	5.92	0.02	0.55	0.37	0.33	1.61	0.03	0.01	99.07	132.99	67.20	8.54	14.03	52.99	24.75	75.69	55.13	209.51	13.34	262.67											
9	68.81	1.07	21.19	6.96	0.02	0.58	0.40	0.33	1.63	0.03	0.01	100.13	134.99	113.22	9.88	15.69	39.17	25.68	74.40	57.80	313.67	13.26	266.23											
10	70.48	1.12	19.84	8.97	0.01	0.51	0.33	0.35	1.52	0.03	0.35	99.63	117.70	69.72	10.23	37.59	24.91	72.71	48.44	16.85	112.76	13.20	261.34											
11	68.78	0.84	28.80	3.97	0.02	0.71	0.35	1.00	2.63	0.04	0.04	99.26	78.69	45.07	14.27	0.70	68.69	35.06	145.20	79.11	29.34	132.83	21.20	406.79										
12	68.48	1.21	21.31	4.84	0.02	0.54	0.25	0.37	1.86	0.04	0.57	98.32	129.99	73.23	17.22	13.77	68.68	28.20	115.40	90.97	33.90	266.90	21.28	428.36										
13	70.42	1.27	21.10	3.00	0.02	0.54	0.33	0.72	1.07	0.05	0.75	99.27	89.14	63.75	16.83	17.09	74.05	25.07	51.31	66.83	29.35	307.18	19.70	201.21										
14	68.15	1.28	21.81	3.88	0.02	0.61	0.36	0.72	0.81	0.04	1.10	99.89	108.41	72.97	26.44	17.98	95.89	27.00	37.18	70.33	29.35	326.84	16.84	216.69										
15	69.72	1.10	20.17	4.94	0.06	0.54	0.50	0.95	1.64	0.02	0.23	99.90	91.71	49.35	16.48	15.38	80.67	22.23	71.46	108.57	31.15	291.80	14.21	368.19										
16	65.10	1.29	23.77	4.87	0.02	0.61	0.44	0.56	0.92	0.05	0.73	100.37	113.75	56.40	8.68	16.85	104.66	20.08	42.74	87.67	30.96	113.67	15.63	279.91										
17	63.43	1.12	25.60	4.09	0.02	0.55	0.57	1.23	1.90	0.04	1.31	100.45	139.36	153.38	n.d.	38.54	76.01	31.44	90.00	91.18	27.19	268.26	79.26	375.65										
18	62.94	0.95	25.99	3.74	0.02	0.91	0.43	0.98	2.58	0.03	1.73	99.91	96.59	88.57	n.d.	41.2	56.31	31.31	118.69	82.19	22.73	187.17	21.14	429.38										
19	65.43	1.12	22.51	4.66	0.04	0.93	0.60	1.22	1.76	0.04	1.30	99.63	106.89	120.81	n.d.	17.99	67.12	26.07	80.62	107.62	25.85	270.64	16.67	335.29										
20	56.89	0.84	30.48	3.74	0.06	0.73	0.33	0.85	2.17	0.08	3.85	100.84	64.41	45.37	n.d.	76.47	39.47	117.83	75.45	21.87	164.37	25.51	433.71											
21	68.30	0.83	22.14	2.85	0.02	0.54	0.35	0.79	2.38	0.01	1.69	100.00	72.25	42.03	n.d.	57.47	37.61	138.22	69.60	32.67	210.82	28.49	412.65											
22	67.75	0.80	20.56	4.76	0.01	0.60	0.19	0.42	2.09	0.03	2.40	99.60	73.63	53.38	n.d.	62.27	44.55	25.33	128.24	55.13	25.90	214.38	16.16	399.12										
24	65.37	1.20	25.19	4.28	0.01	0.84	0.22	0.52	1.73	0.03	n.d.	102.29	135.34	69.78	14.00	18.68	77.26	29.26	92.81	69.84	43.45	270.17	24.81	448.02										
25	63.34	0.96	27.17	4.60	0.06	0.75	0.35	0.86	2.31	0.03	0.26	99.95	80.86	48.02	11.14	10.66	93.32	36.57	116.67	99.83	20.45	375.32	34.49	303.82										
26	67.41	1.28	23.66	3.81	0.02	0.73	0.37	0.64	0.83	0.05	0.60	99.20	83.50	133.49	33.82	19.87	106.00	30.14	30.08	66.91	26.76	308.63	16.58	203.92										
27	71.81	1.17	20.44	4.35	0.02	0.78	0.23	0.37	1.64	0.08	0.43	100.38	117.84	66.56	14.70	12.39	60.02	33.16	88.20	36.98	284.88	16.49	333.80											
28	63.29	1.14	24.44	6.56	0.07	1.23	0.66	1.03	1.82	0.10	0.46	100.83	140.95	95.16	29.36	16.64	107.65	28.84	95.61	98.36	23.42	361.89	16.49	403.96										
29	66.56	1.18	24.79	4.86	0.06	1.11	0.65	1.00	1.83	0.07	n.d.	103.97	151.96	109.39	33.44	18.28	112.65	28.59	95.69	98.29	26.25	252.47	16.18	394.89										
30	63.04	1.10	22.18	5.38	0.02	0.72	0.50	1.00	1.61	0.03	0.27	99.86	122.38	113.44	17.84	9.65	60.30	25.21	75.84	84.60	21.90	281.31	15.62	314.78										
31	61.62	1.05	25.18	6.34	0.03	0.74	0.70	1.47	0.98	0.04	0.57	98.41	176.58	143.49	33.84	24.19	105.93	45.32	78.96	22.17	21.10	271.16	27.16	341.56										
32	69.16	1.22	21.97	3.34	0.03	0.64	0.39	0.79	1.11	0.08	0.49	99.26	112.91	80.68	24.84	18.65	86.86	25.09	53.64	72.07	31.80	293.25	15.59	345.86										
33	69.19	1.26	22.11	3.38	0.03	0.69	0.43	0.85	1.12	0.06	0.35	99.68	118.41	96.20	27.90	39.24	85.31	25.98	51.20	77.00	31.17	284.14	15.50	321.69										
34	65.89	1.03	21.38	5.94	0.02	0.84	0.56	1.08	1.68	0.05	0.41	99.73	124.31	102.71	14.31	14.89	73.13	21.85	80.95	92.77	23.29	252.96	14.57	378.79										
35	61.69	1.31	26.14	4.60	0.01	0.83	0.33	0.60	1.39	0.01	2.69	99.61	98.68	87.98	16.07	10.75	72.86	32.09	65.42	89.05	31.33	310.33	16.60	360.23										
36	60.01	1.32	28.18	4.84	0.01	0.73	0.37	0.50	1.38	0.02	2.36	99.62	121.73	77.29	16.84	13.35	78.66	33.51	61.56	79.45	35.57	290.84	18.07	278.82										
37	65.05	1.27	22.19	4.88	0.01	0.71	0.42	0.58	1.36	0.02	2.16	99.93	113.75	71.57	18.12	12.84	71.64	32.77	62.43	82.80	33.15	290.84	17.86	278.19										

表3 北九州市における諸窯跡群出土須恵器の胎土分析結果(足立ら 2018a・b)

窯跡	胎土分析結果														備考										
	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O	H ₂ O	SiO ₂	CaO	Ni	Co		Zn	Ga	Bi ₂ O ₃	Σ	Y	ZrO ₂	Nb ₂ O ₅	BaO		
須恵器 胎土分析結果	M1	68.61	1.25	23.10	3.81	0.04	0.01	0.56	0.90	1.38	0.05	0.61	19.67	93.93	39.84	22.51	98.08	25.69	55.95	90.73	33.37	278.13	0.33	360.72	
	M2	67.49	1.21	23.10	3.76	0.04	0.01	0.61	1.01	1.34	0.05	0.33	19.64	111.90	79.27	34.68	25.38	97.62	50.86	95.55	34.74	279.48	0.33	364.15	
	M3	68.00	1.24	23.10	3.59	0.04	0.04	0.55	0.89	1.19	0.03	0.94	100.98	110.06	76.24	25.12	105.33	25.52	50.37	101.16	36.44	294.27	0.35	365.88	
	M4	67.96	1.26	22.99	3.54	0.04	0.04	0.54	0.88	1.16	0.03	0.92	100.98	110.06	83.86	33.57	26.12	108.97	25.52	50.37	107.16	35.50	297.50	0.35	372.32
	M5	68.10	1.22	22.94	3.11	0.02	0.04	0.50	0.89	1.36	0.04	0.90	101.32	109.28	61.09	21.24	23.71	86.46	24.37	60.37	91.34	33.24	315.56	0.35	369.82
	M6	68.10	1.21	22.44	3.55	0.04	0.82	0.56	0.87	1.29	0.84	0.31	100.28	108.04	81.07	36.64	26.31	103.06	23.32	55.35	104.43	35.82	297.79	0.505	401.94
	M7	67.37	1.24	23.44	3.58	0.04	0.03	0.55	0.86	1.24	0.04	0.48	99.67	107.15	78.00	33.17	25.09	105.38	25.11	53.96	103.78	30.57	298.67	0.47	364.23
	M8	67.60	1.20	23.66	4.21	0.03	0.09	0.57	0.93	1.38	0.04	0.13	99.96	120.84	97.66	39.65	27.12	91.63	24.44	61.82	92.84	33.58	292.97	0.47	364.29
	M9	67.17	1.22	24.77	4.18	0.03	0.27	0.35	0.61	1.27	0.03	0.12	100.46	128.60	74.27	25.30	24.99	79.25	27.88	57.46	77.60	32.02	271.97	0.386	316.03
	M10	68.18	1.18	22.93	4.01	0.03	0.03	0.65	0.85	1.52	0.04	0.11	100.39	113.40	95.04	31.17	27.65	79.23	27.17	66.45	89.81	30.20	278.01	0.33	315.96
	M11	68.94	1.21	23.96	4.46	0.02	0.72	0.40	0.71	1.32	0.03	0.21	100.03	122.66	88.28	26.34	22.76	79.16	26.22	60.77	81.28	29.23	272.80	0.33	324.98
須恵器 胎土分析結果	M12	68.81	1.19	22.54	4.84	0.05	0.79	0.50	0.88	2.41	0.03	0.17	100.06	105.89	84.20	20.45	14.01	74.56	25.15	104.60	118.83	24.53	267.26	0.51	524.82
	M13	62.80	1.22	24.34	7.08	0.04	0.88	0.62	0.56	1.97	0.03	0.10	99.84	106.81	76.80	27.93	75.81	27.66	84.03	140.60	28.33	231.90	0.40	475.53	
	M14	64.30	1.20	23.74	6.76	0.03	0.66	0.33	0.35	1.63	0.03	0.54	99.69	154.34	88.35	20.69	14.12	76.81	26.06	74.94	81.93	25.41	264.24	0.75	347.28
	M15	67.13	1.24	21.49	5.91	0.03	0.81	0.22	0.17	1.38	0.02	0.78	99.18	117.93	76.05	14.79	12.38	27.07	24.88	61.28	69.10	20.92	184.45	0.56	266.24
	M16	68.28	1.13	22.81	6.57	0.03	0.99	0.59	0.60	2.07	0.02	0.03	99.46	146.27	78.43	18.69	9.52	71.65	24.46	82.21	159.05	28.44	219.21	0.334	478.95
	M17	63.68	1.16	21.09	8.62	0.03	0.54	0.54	0.54	1.31	0.07	0.18	99.64	123.91	71.05	28.39	17.52	80.70	29.90	66.55	153.04	33.26	288.81	0.436	322.89
	M18	63.68	1.29	22.05	8.66	0.05	1.04	0.46	0.45	1.21	0.02	0.82	99.77	120.32	76.62	21.45	17.03	83.38	24.51	57.50	120.72	28.19	316.66	0.802	264.33
	M19	62.07	1.14	20.84	6.54	0.04	1.00	0.52	0.55	1.78	0.06	1.06	99.39	125.61	71.39	20.02	12.54	71.81	84.23	143.66	29.05	203.02	0.453	412.97	
	M20	62.09	1.20	21.99	8.07	0.06	1.10	0.51	0.43	1.65	0.10	0.77	99.57	144.44	65.20	14.28	19.23	65.62	27.80	90.97	27.38	304.82	0.613	364.49	
	C1	62.55	0.92	26.96	4.54	0.04	0.68	0.64	1.02	2.49	0.03	n.d.	99.62	68.98	34.88	21.93	11.64	81.00	32.80	119.32	142.52	28.50	347.60	27.66	511.53
	C2	62.58	0.98	27.44	4.35	0.04	0.74	0.42	1.07	2.36	0.03	n.d.	100.08	76.33	49.24	18.23	12.87	74.73	31.89	113.98	153.05	25.14	347.2	26.32	519.28
C3	62.58	1.04	27.68	4.35	0.04	0.74	0.42	1.07	2.36	0.03	n.d.	100.08	77.00	50.89	19.93	11.22	81.46	35.00	123.99	119.49	23.97	390.28	27.71	491.37	
C4	62.58	1.04	27.68	4.35	0.04	0.74	0.42	1.07	2.36	0.03	n.d.	100.08	76.36	49.85	22.55	15.06	140.05	36.92	103.79	111.37	17.87	390.28	27.40	522.88	
C5	64.16	1.01	25.17	4.83	0.02	0.84	0.37	0.86	1.90	0.02	0.84	99.73	79.75	50.33	14.82	4.24	58.86	31.07	88.99	96.26	21.3	323.98	26.50	429.45	
C6	64.20	0.75	26.08	4.82	0.04	0.78	0.82	1.76	2.83	0.02	0.41	99.53	59.63	44.00	30.93	13.42	81.87	26.80	134.27	187.85	26.80	337.62	21.51	601.46	
C7	60.85	0.77	28.67	4.68	0.04	0.77	0.71	1.95	2.32	0.02	0.47	99.43	64.28	48.43	22.44	8.48	112.25	31.75	126.41	189.27	27.22	302.26	21.51	618.68	
C8	60.86	0.86	24.64	4.08	0.03	0.84	0.33	0.97	2.55	0.05	n.d.	100.01	68.26	57.34	21.1	8.58	96.87	33.85	143.68	151.58	20.26	262.86	20.04	501.49	
C9	60.13	0.82	28.16	5.39	0.04	0.81	0.72	1.75	2.27	0.02	1.47	100.32	68.18	42.64	18.30	10.76	112.89	39.84	124.84	165.87	24.88	340.11	24.93	564.12	
C10	63.28	0.88	26.80	3.23	0.03	0.71	0.67	1.81	2.84	0.03	n.d.	100.32	75.33	50.20	18.30	8.67	74.98	32.18	123.88	158.81	20.26	337.23	23.83	503.87	

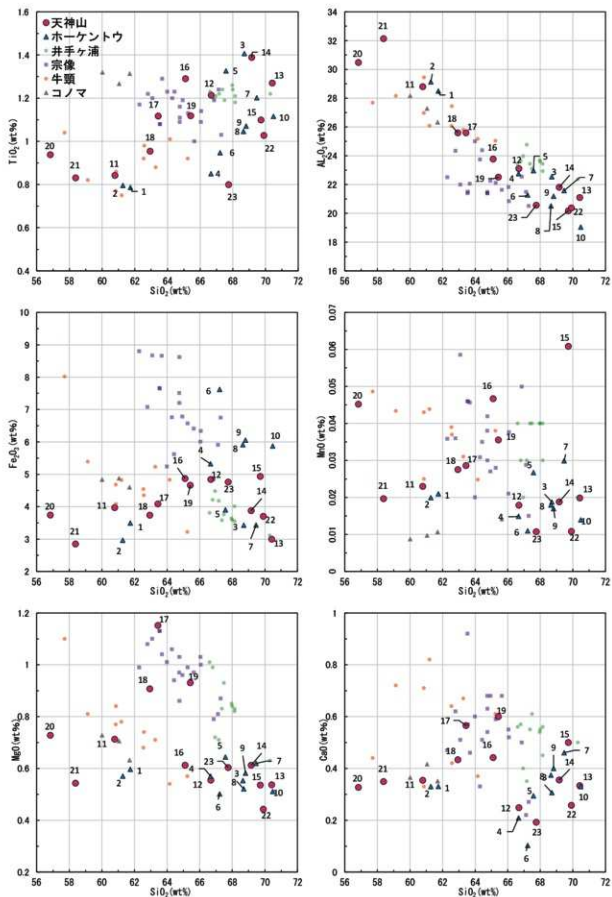


図3-1 主要元素ハーカー図 (天神山古墳・ホーケントウ古墳出土土須恵器)

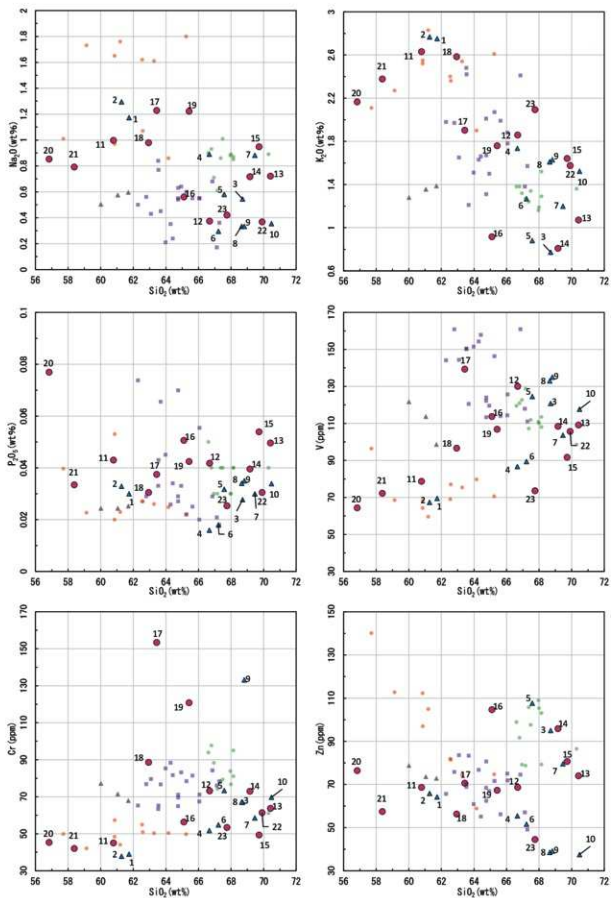


図3-2 主要・微量元素ハーカー図(天神山古墳・ホーケントウ古墳出土須恵器)

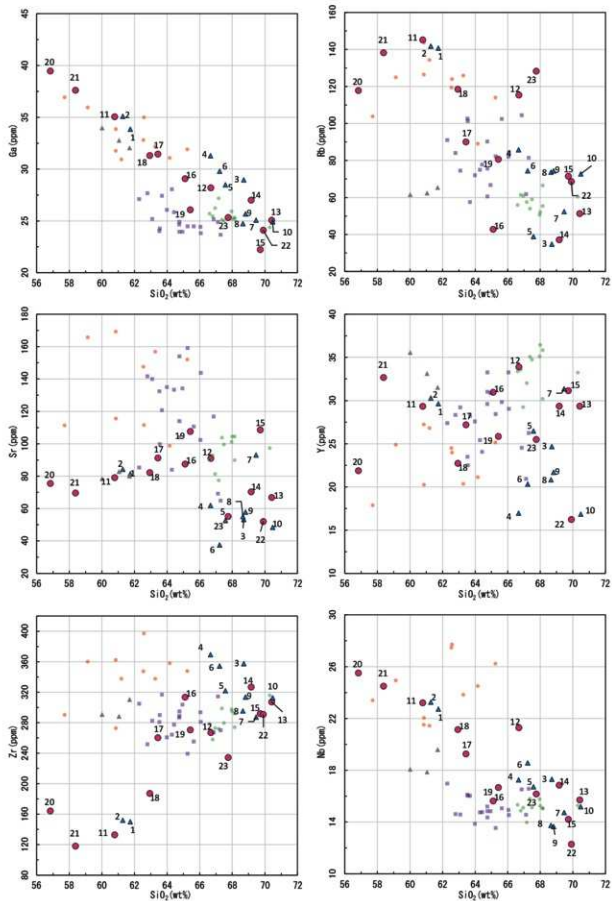


図3.3 微量元素ハッカー図 (天神山古墳・ホケント古墳出土土須恵器)

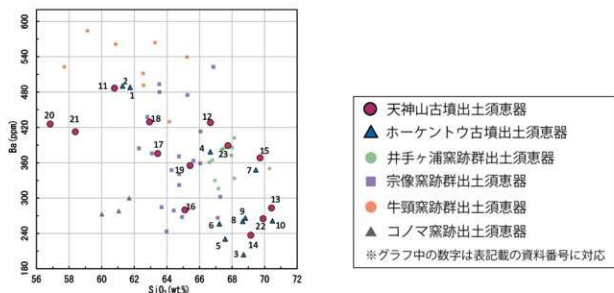


図34 微量元素ハーカー図（天神山古墳・ホーケントウ古墳出土須恵器）

15（高坏）・22（甗）は井手ヶ浦産の可能性が高く、小形器種については井手ヶ浦産が、大形器種についてはその他の窯跡産の可能性が高いものが多いようである。なお、今回対象としなかった窯跡群や未発見の窯、器種による胎土の使い分け、埋没環境の影響等、様々な要因で化学組成に差異が生じる場合がある。「○○産」と判断されたものであっても、あくまで可能性に留まることを再度強調しておきたい。

(2) 遠賀川上流域集落出土須恵器の胎土分析結果

XRFによる元素測定結果を表2の24～37に示す。測定結果をもとに、縦軸に各元素含有量、横軸にSiO₂含有量をとったハーカー図を作成した（図4-1～4）。

SiO₂の含有率が66wt%未満の試料は24・25・28・31である。このうち25（寿命北限）は全ての元素で牛頭と類似した値を示しており、牛頭周辺産である可能性が非常に高い。28（鷺迫）はMnOとZnの値が高いこと、Zrの値が低いこと以外は全て宗像と類似した値を示しており、宗像産である可能性が指摘できる。31（大坪）はいずれの窯とも判別がつかない。24（寿命北限）は判別が難しいが、井手ヶ浦と宗像を比較的よく区別するSiO₂・Fe₂O₃・K₂O・Zn・Rbについてみると、どちらかと言えば宗像に近いようである。SiO₂の含有率が66wt%以上の試料はややばらつきが大きいいため断定は避けたいものの、基本的には井手ヶ浦産の可能性が高いと言える。

以上の結果をまとめると次のようになる。25（寿命北限）は牛頭周辺産の可能性が非常に高い。24（寿命北限）・28（鷺迫）は宗像産の可能性があるが、特に24（寿命北限）は井手ヶ浦産の可能性も否定できない。31（大坪）はいずれの窯とも判別がつかず、在地産とも言い難い。そのほか26（寿命北限）・27（鷺迫）・29（鷺迫）・30（影塚南）・32（大坪）・33（大坪）・34（榎町）は井手ヶ浦産の可能性が高い。

3 まとめと予察

以上、天神山古墳とその周辺遺跡出土須恵器の胎土分析結果を述べてきた。首長墓級の前方後円墳である天神山・ホーケントウ古墳において、その須恵器が少なくとも牛頭・宗像・井手ヶ浦窯跡群と

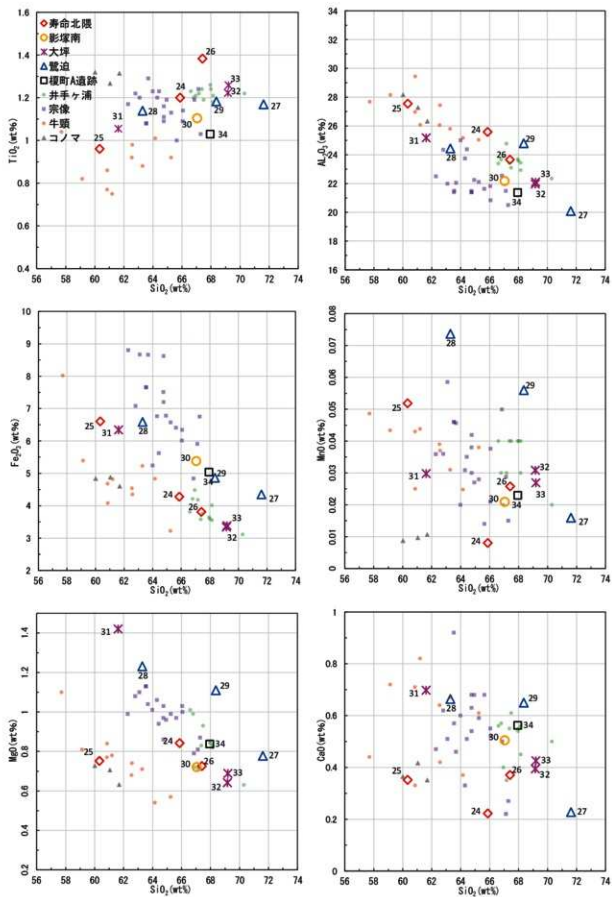


図4-1 主要元素ハーカー図（遠賀川上流域の集落出土須恵器）

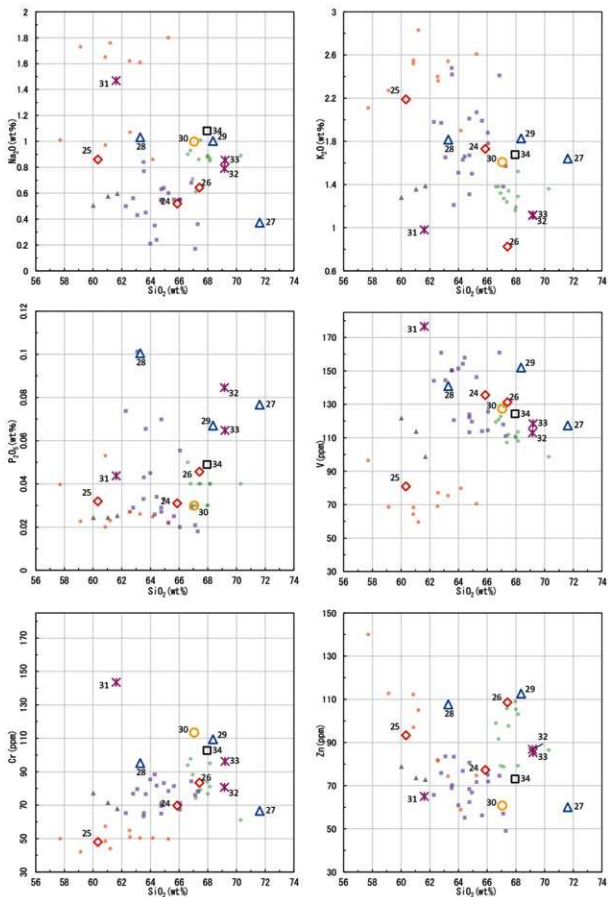


図4-2 主要・微量元素ハーカー図（遠賀川上流域の集落出土須恵器）

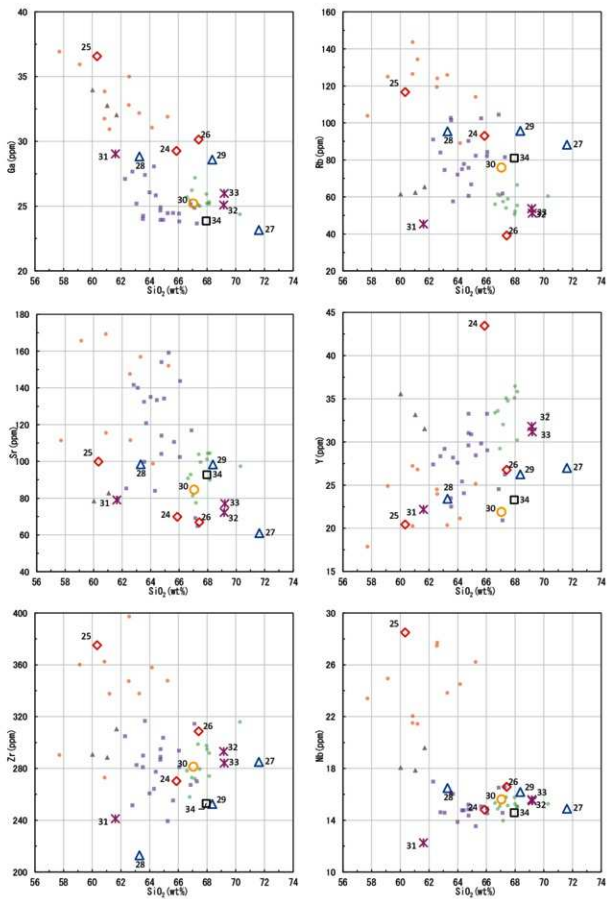


図4-3 微量元素ハーカー図（遠賀川上流域の集落出土須恵器）

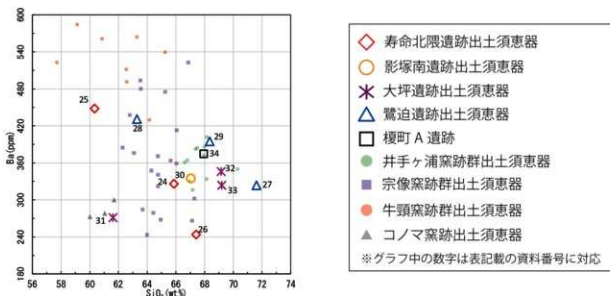


図4.4 微量元素ハーカー図（遠賀川上流域の集落出土須恵器）

いった複数の窯跡から供給されている可能性が高いことが指摘できた。特に大形器種について、当該地域の拠点窯ではなく離れた地域の産地から流通する点は興味深い。また、集落出土須恵器については基本的に井手ヶ浦産のものが占めるものの、一部に宗像産・牛頭産のものが認められた。どの窯とも言い難い試料も存在し、今後の調査や胎土分析の進展が期待されるところである。

最後に以下2点の論点に即して簡単に予察を述べることにする。①井手ヶ浦窯跡群は誰のため・何のために須恵器を生産し供給したのか。本稿で行った胎土分析の結果、古墳祭祀に用いるもの・日用品として用いるものといった両側面で流通している点が指摘できる。井手ヶ浦窯跡群は本地域の拠点的な須恵器生産窯ではあるが、天神山古墳のような在地の首長墓級の墓への独占的な流通を行っていたわけではなく、複数の窯から供給された須恵器と一体となって古墳祭祀を担っていたことがわかる。こうした結果は、当時の須恵器生産・流通体制や古墳祭祀、その背後にある首長層のネットワーク等を考える上で重要であると考えられる。②「鎌屯倉」「穂波屯倉」がおかれた2つの河川流域において、両地域を横断した須恵器の流通が認められるかどうか。今回の分析で嘉麻川・穂波川の両地域に井手ヶ浦産の須恵器が流通している可能性が高いことが指摘できた。分析数を増やしてデータを蓄積する必要があるが、少なくとも両地域のそれぞれで異なる須恵器が流通する様相は認められず、おそらく遠賀川という河川の動脈を用いて鎌・穂波の両地域に須恵器を供給していたのであろう。

おわりに

天神山古墳を中心に出土須恵器の産地について検討してきた。今回の分析では比較資料として牛頭・宗像・井手ヶ浦窯跡群出土須恵器の胎土分析結果を参照したが、そのほかの窯跡についてもデータを蓄積する必要がある。埋没環境や焼成諸条件などに関する検討を同時に進めることで、更に妥当な結果の解釈につなげることができるだろう。本稿で示した産地は「可能性」に留まるものではあるが、考古学的情報と相互補完的に検討することで、より確からしい産地の同定につながるものと考えられる。

1) 本稿での胎土分析にあたっては、飯塚市教育委員会よりホーケントウ古墳出土須恵器、桂川町教育委員会より

寿命北限遺跡・大坪遺跡・影塚南遺跡・コノマ遺跡群出土須恵器、嘉麻市教育委員会より榎町遺跡・鷺迫遺跡出土須恵器をご提供いただいた。謹んでお礼申し上げます。

参考文献

- 足立達朗・田尻義了・甲斐孝司・岩橋由季・森下靖士 2018a「北部九州における窯跡出土須恵器の胎土分析」第35回日本文化財科学会発表資料
- 足立達朗・田尻義了・中野伸彦・小山内康人・八木健一郎 2018b「井手ヶ浦窯跡群出土須恵器の胎土分析について」『飯塚市文化財調査報告書52：井手ヶ浦窯跡群Ⅱ』飯塚市教育委員会
- 飯塚市教育委員会 2024『ホーケントウ古墳』飯塚市文化財調査報告書第60集 飯塚市教育委員会
- 太田智 2020「九州の須恵器裏からみた地域性と地域間交流」『福岡大学考古学論集3 武末純一先生退職記念』武末純一先生退職記念事業会
- 桂川町教育委員会 2020『コノマ遺跡群』桂川町文化財調査報告書第21集 桂川町教育委員会
- 柴田賢・西村祐二郎 1989「三郡結晶片岩の同位体年代」『地質学論集』33
- 中野伸彦・角縁進・小山内康人・米村和紘・桑原義博 2009「低希釈率ガラスビードを用いた主成分・微量・軽希土類元素の定量」『比較社会文化』15
- 中野伸彦・小山内康人・足立達朗・米村和紘・吉本紋・Nugroho SETIAWAN 2012「蛍光 X 線分析装置・レーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計を用いた低希釈率ガラスビードの主成分・微量・希土類元素の迅速定量分析」『比較社会文化』18

【図版出典】第1図：20万分の1日本シームレス地質図より QGIS3.34.4 および Adobe IllustratorCS4 で作成

はじめに

古墳時代後期（6世紀中～後期）の前方後円墳である天神山古墳の発掘調査では、後円部の中心から南西方向の墓道と、その奥部において石室の入り口を塞いだとみられる小石の一部が確認され、墓道とその周囲の墳丘堆積物の累重状況などから、1回以上の追葬が行われたことが確認されている。今回の分析調査では、追葬時の盛土が確認されている墓道西側の墳丘堆積物の累重状況を確認することを目的として、現地調査による堆積学・土壌学的な観察記載、植物珪酸体分析を実施する。以下に調査結果を報告する。

1 現地調査

現地調査は令和4年（2022）9月15日に、埋め戻しが行われていた後円南西部の令和2年度（2020）発掘調査区西部において再掘削された小トレンチで実施した（図1）。現地調査では、断面観察・写真撮影と、初葬盛土上部の黒色土層より観察用試料と植物珪酸体分析試料を採取した。以下に調査結果について述べる。この際、発掘調査成果との整合性をとるため、基本的には発掘調査時の層序区分に基づいて記載を行うが、細分される場合はアルファベット小文字を付けて区分した。

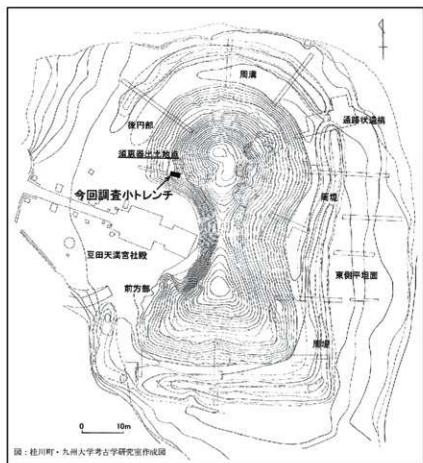


図1 調査地点の位置

(1) 調査結果

発掘調査時の断面図とトレンチ断面写真を図2、採取試料の断面写真と擾乱状況を図3に示す。トレンチの堆積物は発掘調査時に上位より、追葬時の墓道を埋めた堆積物（層準1）、黒色土（層準2）、須恵器が出土する初葬時の盛土（層準3）に大区分される。調査断面には現世の根成孔隙が多数分布する。

層準1：7.5YR4/2～4/3 灰褐～褐色極細粒砂質泥～泥質砂。これらと同質の長径3cm以下のブロック土が多く混じる。堆積構造および堆積休止期を示す土壌化層準は認められない。下位の層準2との層界は比較的明瞭で、ブロック土の堆積時に生じた凹凸面が確認され、一部は層準2上部に混ざる。現世の根成孔隙および、過去に本堆積物で充填されたと考えられる根跡が多数認められる。本層準は、一連の工程で形成された人為的堆積物と推定される。

層準2：発掘調査時に黒色土として区分されている。層相の多少の違いから、上・下部に細分される。上位より層準2a・2bとする。

層準2aは、層準1のブロック土が混じる、黒褐～暗褐色泥質極細粒砂。細礫～中粒砂が混じる。斜面下部側では泥がちである。上位の層準1の堆積物ブロックが混じり、著しく擾乱される。トレンチ東側の斜面上部側では、不明瞭ながら、堆積斜面に相当するとみられる右下がりの層理状の不連続な構造が数層準確認される。雨水などで斜面上部側の表土が移動堆積した異地性の土壌と推定される。

層準2bは、腐植に富む黒～黒褐色極細粒砂質泥。上部ほど黒色で、現地で土壌が生成されたと考えられる土壌層位A層に相当する。斜面下部側では不明瞭であるが、斜面上部側では角塊、亜角塊状の粒団構造が確認される。下位の層準3との層界は漸移的である。斜面下部側では土器片が混じる。本層準は土壌化層準に相当し、旧地表をなしていたとみられる。現世の根成孔隙および、過去に層準1で充填された根跡、本堆積物で充填されたと考えられる根跡が多数認められる。

層準3：褐色～黄褐色極細粒砂質泥。粗粒砂～細礫が僅かに混じる。また、堆積構造は認められず、同質の数mm程度のブロック土が散在する。上部では暗色化し、腐植を含むようになる。土器片が混じる。現世の根成孔隙および、過去に層準1・層準2で充填された根跡が認められる。人為的営力で形成された堆積物で、上部は土壌生成が進行し、土壌層位B層に相当する。発掘調査結果から、本層準は初葬時の墳丘盛土である。

なお、層準3から層準2bにかけて、出土する土器は「破砕供献」を示唆する、意図的に破砕した土器片からなり、裝飾付き須恵器が含まれることが発掘調査により確認されている。

(2) 調査地点における堆積物の累重状況

上述の堆積物の観察結果に基づいて、調査地点における堆積物の累重状況を整理する。初葬時の墓道は、褐色～いぶい黄褐色細礫・中粒～極粗粒砂混じり極細粒砂質泥で人為的に充填されている（層準3～層準2b）。本堆積物上部は土壌化が進行しており、腐植質土壌を形成している（層準2b）。この土壌化層準の上位には、斜面上方から移動した、斜面上方の表土由来の腐植質土壌などの再最堆積物が累重する（層準2a）。また、本堆積物中には、下記する追葬時の盛土（層準1のブロック土）が混入するなど、追葬時の人為的擾乱の影響を受けていることが推定される。

追葬時の盛土（層準1）は、初葬時の盛土（層準3）に比較して、土色が灰色がち、粒径組成が泥がちで、成因の異なる堆積物が利用されていることが推定される。

以上、発掘調査時に黒色土として区分された層準は、全体が現地で生成された層準ではなく、下部が現地で生成された層準3を母材とする土壌で、上部は異地性の土壌の積層からなる。土壌化の期間は不明であるが、土壌層位A層の層厚は1cm程度であることから、数100年といった長期間にわたるものではなく、追葬までの堆積休止期に形成されたと考えた場合、大きく矛盾しないように思われる。

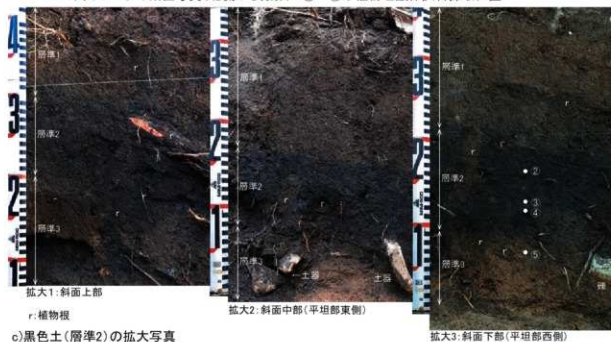
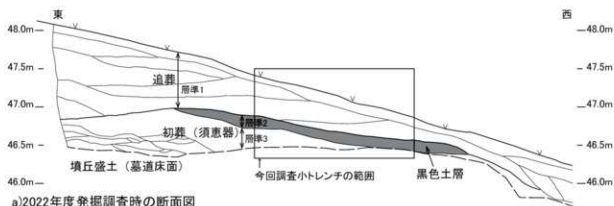


図2 調査トレンチの断面写真

斜面上部



層準 1
7.5YR4/2 ~ 4/3 灰褐色
極細粒砂質泥

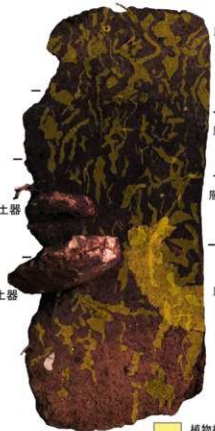
層準 2a
7.5YR2/2 ~ 3/3 黒褐色 ~ 暗褐色 細粒
~ 粗粒砂混じり腐植質極細粒砂質泥
— 旧地表面

層準 2b
7.5YR3/2 黒褐色 細粒 ~ 粗粒砂混じり
腐植質極細粒砂質泥、

層準 3

7.5YR2/4 ~ 4/4 暗褐色 ~ 暗
極細粒砂質泥、細粒 ~ 粗粒砂混

斜面下部



層準 1
10YR4/2 灰黄褐色
中粒砂質かに混じる極細粒砂質泥

層準 2a
7.5YR2/3 ~ 3/2 暗褐色 ~ 黒褐色
細粒 ~ 粗粒砂混じり腐植質極細粒砂
質泥

層準 2b
7.5YR3/1 黒褐色
腐植質極細粒砂質泥

層準 3

上部
7.5YR4/3 ~ 3/3 暗 ~ 暗褐色
細粒 ~ 粗粒砂混じり極細粒砂質泥
中下部
7.5YR4/4 ~ 5/4 暗 ~ にぶい黄褐色
細粒、中粒、粗粒砂混じり
極細粒砂質泥

 植物根による擾乱が著しい部分

図3 採取柱状試料の写真と根成孔隙の分布状況

2 植物珪酸体分析

2-1. 試料

分析は、層準1、層準2a、層準2b、層準3上部、層準3下部の5層準から採取した試料（試料1～5）について実施した。

2-2. 方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が500以上になるまで行った。これはプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率を乗じて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとられる（杉山，2000）。

2-3. 結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図4に示した。主要な分類群の顕微鏡写真を図版1に示す。

〔イネ科〕イネ、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族型

〔イネ科-タケ亜科〕メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科-その他〕未分類等

〔樹木起源植物珪酸体〕未分類等

(2) 植物珪酸体の検出状況

植物珪酸体総数は、層準3下部（試料5）では18,500個/g、層準3上部（試料4）で30,100個/g、層準2b（試料3）では42,600個/gと、漸移的に増加する。追葬時の擾乱が及んでいる初葬盛土を覆う堆積物の試料2では32,200個/g、追葬時の盛土の試料1では29,900個/gと比較的近似する。

植物珪酸体組成は、層準的に変化する。層準3下部から層準2bにかけて、ススキ属型、ウシクサ族型、メダケ節型、ネザサ節型が増加する。層準2b層から上位層準では、イネ、ヨシ属が産出するようになる。イネの含量密度は、層準2b（試料3）で600個/g、層準2a（試料2）で1,200個/g、層準1（試料1）で1,100個/gである。ヨシ属は層準1で増加する。

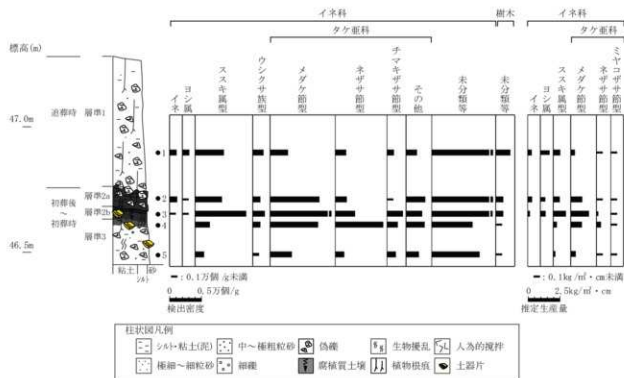


図4 天神山古墳の植物珪酸体分析結果

表1 天神山古墳の植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 (和名/学名)	上段: 層位 下段: 試料番号					
	層位1	層位2a	層位2b	層位3 上部	層位3 下部	
	1	2	3	4	5	
イネ科	Gramineae					
イネ						
イネ	<i>Oryza sativa</i>	11	12	6		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	11	6	6		
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	45	42	80	23	14
ウシクサ族型	<i>Andropogoneae type</i>	17	12	19	12	7
タケ亜科	Bamusoideae					
メダケ節型	<i>Pleiblastus sect. Nipponocalamus</i>	28	77	123	75	34
ネザサ節型	<i>Pleiblastus sect. Nezasa</i>	17	18	31	75	14
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	11	6	25	17	14
未分類等	Others	17	30	25	29	20
その他のイネ科	Others					
未分類等	Others	119	107	99	64	75
樹木起源	Arboreal					
未分類等	Others	23	12	12	6	7
植物珪酸体総数	Total	299	322	426	301	185

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.32	0.35	0.18		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.69	0.38	0.38		
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.56	0.52	0.99	0.29	0.17
メダケ節型	<i>Pleiblastus sect. Nipponocalamus</i>	0.32	0.89	1.43	0.87	0.39
ネザサ節型	<i>Pleiblastus sect. Nezasa</i>	0.08	0.09	0.15	0.36	0.07
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	0.03	0.02	0.08	0.05	0.04

2-4. 考察

植物珪酸体の層位的産状を見ると、層準3上部から層準2bにかけて初葬盛土形成後の土壌化層準で含量密度が増加することが認識できる。層相変化と同調的な変化を示しており、初葬盛土形成後、墳丘およびその周辺ではメダケ節、ネザサ節、ススキ属などが分布を上げたことが推定される。樹木起原の植物珪酸体も増加することから、樹木なども分布するようになった可能性がある。

土壌化層準以外の堆積物は、人為的に持ち込まれた堆積物である。初葬盛土堆積物（層準2）と追葬時の盛土堆積物（層準1）では、植物珪酸体組成が多少異なっていたことから、堆積物の入手先が異なっていたことが示唆される。初葬盛土堆積物（層準2）はススキ属、メダケ節、ネザサ節などが分布する場所、追葬時の盛土堆積物（層準1）は、これらの種類の他に、湿地に生育するヨシ属、栽培種のイネも無視できないほど産出した。追葬時盛土は、初葬時盛土に比較して灰色が強く、泥質であり、還元条件下で形成された堆積物の可能性があることから、ヨシ属などが生育する比較的湿った場所の堆積物が使用されている可能性がある。調査地近辺で、このような堆積物の分布が想定されるのは周溝内である。現時点では周溝埋土に関する情報が不足しているため、この点については今後の課題としたい。また、イネについては、含量密度が稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準とされている3,000個/g（杉山、2000）を下回っていることから、水田耕作土が盛土材料として利用された可能性は低く、資材として盛土中に取り込まれていた可能性がある。この点も当該期の古墳周辺の土地利用状況など、発掘調査成果に基づいて再検討したい課題である。

なお、初葬形成後の土壌化層準である層準2b・2aからも栽培種のイネが検出された。層準2bは低密度であったこと、根成孔隙の分布状況から、上層から混入したものと判断される。また、層準2aは層準1とほぼ同様の含量密度を示したものの、本層準には追葬時盛土が多く混入することから、層準2aのイネも追葬時の盛土に由来する可能性が高い。

3. まとめ

今回の天神山古墳の調査では、追葬時の盛土が確認されている墓道西側の墳丘堆積物の累重状況について、現地調査および植物珪酸体分析により検討した。その結果、初葬盛土形成後の調査地点は、ススキ属やササ類などの草本植物が分布する、土壌生成が進行する場所に变化したことが確認された。また、初葬盛土と追葬盛土では層相および植物珪酸体組成において差異が確認された。前者は比較的高燥な場所、後者は湿った場所の堆積物が使用されている可能性が示唆された。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志（1986）「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－」『考古学と自然科学』19, p.69-84.
- 杉山真二（2000）「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』同成社, p.189-213.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕道及のための基礎資料として－」『考古学と自然科学』20, p.81-92.
- 藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）「プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17, p.73-85.

図版1 植物珪酸体



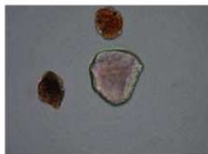
1. イネ (試料1:層準1)



2. イネ (試料2:層準2a)



3. ヨシ属 (試料1:層準1)



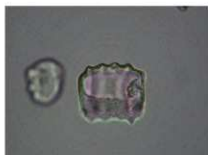
4. ススキ属型 (試料2:層準2a)



5. ウシクサ族型 (試料5:層準3下部)



6. メダケ節型 (試料4:層準3上部)



7. ネザサ節型 (試料3:層準2b)



8. ミヤコザサ節型 (試料4:層準3上部)



9. 樹木-未分類等 (試料1:層準1)

— 50 μ m

第6章 天神山古墳の調査成果

第1節 天神山古墳の墳丘形態・規模と築造技術の復元

(1) 墳丘の規模と築造技術

本章では、天神山古墳の調査成果について、墳丘形態・墳丘の付属施設（通路状遺構等）・墓道と須恵器出土状況・装飾付須恵器・歴史的背景の5項目について検討を行う。

まず墳丘については、墳長67mで二段築成の前方後円墳であり、周堤外縁まで含めた墓域は南北約87m、東西約60mを測る。墳丘の周囲全体に周溝・周堤がめぐり、東側には平坦面が緩やかに続いている。豆田天満宮の造営によって削平された西側部分を除いた復元図を示す（図6-1）。元来、王塚古墳の南東側約700mの位置に存在する低丘陵部の高台周辺において、弥生時代前期～中期を中心として集落が営まれていたが、集落が廃絶された後、長い土地利用の断絶期間の後に、6世紀代に新たに開発が行われたものと考えられる。古墳の築造に際しては、周溝の掘削が行われ、周堤および墳丘一段目が地山削り出しによって造成されている。墳丘一段目は、いくつかの場所では厚めの盛土（報告では一次盛土と呼称）によって、標高46.0m付近で全体として平坦となるように造成されている。その後、墳丘二段目については、全て薄い互層の盛土（二次盛土）によって一段目の上に造成されている。主体部は未検出ながら、Lトレンチで墓道埋土が確認されたことから、西側くびれ部で南西方向に開口する形で横穴式石室が設置されているものと考えられる。横穴式石室は墳丘一段目の平坦面上に基礎が築かれ、全体を互層盛土の二段目墳丘によって覆っているものと想定される。主体部の位置や造成方法については、王塚古墳に近似している。ただ、葺石・埴輪は用いられておらず、この点で後述する王塚古墳・ホーケントウ古墳より時期的に後出するものと考えられる。

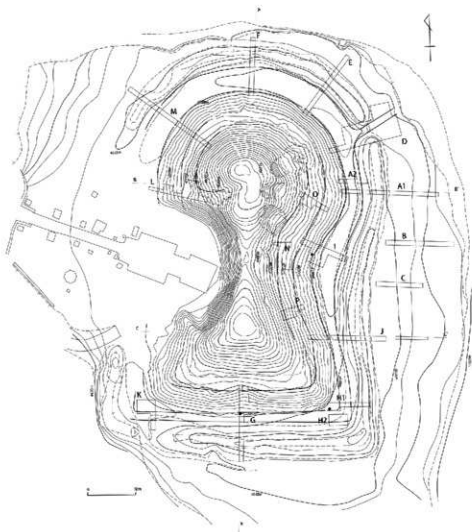


図6-1 天神山古墳墳丘形態復元図 (S=1/800)

(2) 周堤の形態について

天神山古墳の墳丘を特徴付けるものとして、周溝と周堤が挙げられる。前述のように西側が大きく削平されているものの、東側は後述するDトレンチの通路状遺構も含めて良好に保存されている。周溝は全体的に後円部側が幅広(3.5～4m前後)であるのに対し、前方部側はやや幅狭(2～3m)となっている。周堤については、盛土による造成などの可能性も想定されたが、調査した箇所では全て地山削り出しによるものであった。注目されるのは、周堤および周溝全体の平面形態がいわゆる盾形でなく、墳丘のくびれ部付近で屈曲し、墳丘形態に沿う形で築かれている点である。九州ではこの時期に周堤が良好に残存している事例は少ないが、福岡県内では、例えばいずれも6世紀前半の八女市岩戸山古墳や福岡市今宿大塚古墳、みやこ町扇八幡古墳などで盾形周溝・

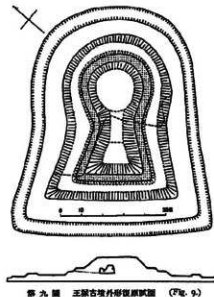


図6-2 王塚古墳墳丘形態復元図(梅原・小林1940)

周堤が検出されている(柳沢2014; 柳沢・菅波2016)。遠賀川上流域では、周堤は明瞭な形で確認できないが、飯塚市寺山古墳・ホーケントウ古墳や桂川町王塚古墳の周溝形態が参考となる。このうち寺山古墳については盾形の周溝が復元されているが、周辺の削平が進んでいるため周堤の有無については明瞭でない(飯塚市教育委員会1986)。王塚古墳については、京都帝国大学による調査(「京大報告」)の中で、残存する地形から、天神山古墳と同様に、墳丘形態に沿う形で西側くびれ部付近で屈曲する周溝・周堤形態が復元されている(図6-2; 梅原・小林1940)。王塚古墳では、1982～1989年に墳丘の整備事業に伴う周溝の発掘調査が行われている。このうち墳丘西側の8・9トレンチでは墳丘のくびれ部に沿うような形で周溝の上端が検出されており(桂川町教育委員会2021:p.35)、京大報告の想定を裏付けているものとみられる。また王塚古墳に後続すると考えられるホーケントウ古墳でも、周堤は未検出ながら、墳丘形態に沿う形で周溝が掘削されている(飯塚市教育委員会2024)。以上から、天神山古墳の周溝・周堤の形態的特徴は、王塚古墳以来の在地的な系譜の中で理解することができる。他に、後述する福津市新原・奴山30号墳などでも墳丘形態に沿った形の周溝が検出されている。春日市日拝塚古墳では、周溝がくびれ部付近で若干屈曲するが、周溝の幅が一定でないなど若干異なる。これらの事例も含め、6世紀代の北部九州における周溝の一形態と考えることができよう。

第2節 墳丘に付属する施設について

(1) Dトレンチの通路状遺構

天神山古墳では、墳丘が全体として良好に保存されていることもあり、築造当時のままの状態を残しつつ埋没した箇所が多く見受けられた。その中で特に注目されたのが、Dトレンチの通路状遺構、G・Lトレンチなどで検出された段状の遺構、G・H・Iトレンチで検出された墳丘裾部のビットなどである。

Dトレンチの通路状遺構は、墳丘北東部の周堤の一部が幅約1m、長さ約10m前後で周溝と周堤外部との間をつなぐ形で設置されている。墳丘と周堤外部との間をつなぐ施設としては、全国的にみてもいわゆる「陸橋部」と呼ばれる形で周溝の一部を掘り残して周堤と墳丘を接続する場合が一般的である。例えば前述の春日市日拝塚古墳でも、石室開口方向の正面となる後円部東側の周溝の一部が陸

橋部状に掘り残されているのが確認できる。この場合は墳丘へ進入する際には、周堤上面から陸橋部を渡って移動することになり、周堤の「上面」が動線となる。この場合、周堤の高さにもよるが、周堤の外部から、周堤上面に登るための入口が存在したことも想定される。これに対し、天神山古墳では、周堤の一部を切断し、周堤外部から周溝の中に歩いて入る（あるいは周溝から外部へと出る）ための施設としての通路が設けられ、周堤外側の平坦面の中（およびおそらく丘陵の裾部へと）続いている。通路状遺構の一部には、低い階段状の段も設置されている。周堤側の段が高く、周溝・墳丘側の段が低い位置にある。通路状遺構自体の底面の標高も、周堤付近から周溝側に向かって緩やかに低くなる傾斜であり、周堤付近から周溝方向に「下っていく」形となっている。逆に東側の端部より東は丘陵斜面が低くなる地形であることから、周堤

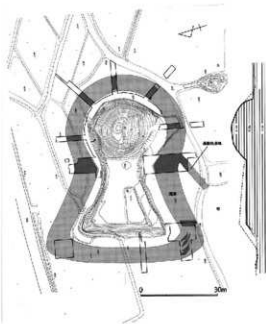


図6-3 新原・奴山30号墳測量図

付近に、墳丘本体と外界をつなぐ「出入口」が設けられていたことになろう。この通路状遺構が墳丘東側のいわば「裏手」のみに設置されていたのか、西側の横穴式石室開口方向にも設置されていたかどうかについては現状で不明であるが、西側周堤付近は豆田天満宮の境内に保存されている可能性もあることから、周堤がどのように続くかについては将来的に検証されることが期待される。

この通路状遺構の系譜が王塚古墳などに辿ることができるかどうかは不明である。類例として、福津市の新原・奴山30号墳の2020年度調査で、同様の通路状遺構かとみられる、周溝に接続する溝状遺構が検出されている（図6-3；福津市教育委員会2023）。ここでも天神山古墳と同様に、周溝と通路状遺構の埋土が連続する水平堆積として検出されていることから、後世の改変などでなく、古墳築造時に一連のものとして造成された施設と判断されている。新原・奴山30号墳の通路状遺構の延長上には、古墳が築かれた段丘上面より下位の標高となる谷部があり、南側に延びることから、段丘裾部の南側谷部から古墳群が築かれた段丘上面に至る動線として位置し、そのまま周溝内部に入り墳丘に接続する入口として築かれている。

この点をふまえて天神山古墳の通路状遺構について考えると、通路状遺構の先にある周溝は墳丘周囲を全周しており、通路状遺構の底面と周溝底面が連続している。その意味で、周堤は墳丘側の内部空間と、周堤外側の外部空間とを区画しており、通路状遺構は、この内部空間と外部空間の間をつなぐ接続部分となっている。少なくとも現状では、墳丘の「外部」から「内部」へと入るための出入口として、古墳築造当時はこの通路状遺構が機能しており、どこからでも周堤を乗り越えて墳丘側に入るような入り方はなかった可能性が想定される。また周堤東側の平坦面では、古墳時代に帰属する遺構などは検出されておらず、周堤の周辺は墳丘の外界としての丘陵斜面が緩やかに続く景観として設計されていたものと考えられることができる。

(2) Gトレンチ・Lトレンチの段状部

次に、墳丘の数カ所で認められた段状部について検討する。調査前に、Dトレンチと同様に一部が低く埋没していたのがGトレンチの前方部前面の中心付近である。この部分では、土層図による堆積

状況からも、周溝側の周堤斜面と、前方部側の斜面に数カ所、段状の平坦面が確認できる（図3-11）。階段というには段差が大きすぎるが、周溝内部から墳丘本体に上るためのいわば「登り口」が設けられていたものとみられる。Lトレンチの墓道・前庭部前面の墳丘一段目斜面付近（図3-20）にも同様の段状部が認められることから、前方部や後円部の数カ所にそうした登り口が設けられていたとみるのか、正式な登り口は石室入口に接続するLトレンチ付近のもののみで、Gトレンチの段状部などは、例えば古墳の築造工程に関わる作業用の施設の残存と考えた方がよいのか、この点については課題である。ただ東側くびれ部付近のIトレンチのように面的に広く調査を行った箇所においてそうした段状部はみられなかったことから、墳丘の全面にわたってこうした段状部が設けられているとは考えられない。前方部前面中心部や石室入口付近（墓道前面）といったいくつかの地点に限定してそうした墳丘への登り口が設置されていたものと考えておきたい。

(3) 墳丘裾部のピット・一段目平坦面の溝状遺構

あわせて注目されたのが、G・H・Iトレンチの墳丘裾部で検出されたピットである（図3-11・12・13）。それぞれ前方部前面中心軸上、前方部東南隅角、東側くびれ部の屈曲点で、墳丘裾部の傾斜変換点に位置している。いずれも径が30～40cm前後、深さが40cm前後で、細い木柱状のものを立てた柱穴と考えられる。墳丘裾部に柱穴が並ぶ事例がいくつか知られているが（土生田1998）、天神山古墳の場合は一定の間隔を置いて多数配列するというあり方ではなく、上述のような墳丘平面形態の屈曲点・墳丘主軸上に位置していることから、調査時には墳丘の設計企画や測量・築造に関わる何らかの付属施設の可能性が想定された。ただ、ピット自体は、周溝が掘削され、墳丘一段目の地山削り出しがある程度進行（あるいは完了）した後に掘削されたとみられることから、墳丘の測量や築造に関わるものであったとすれば、どのように用いられたのかが明確でない。いずれにしても、埋土の状況からみれば、古墳の完成後には木柱は抜き取られ、柱穴も埋戻されたものと考えられる。その点では、古墳の完成時に一時的に木柱状の施設を立てるための柱穴であった可能性なども想定される。これについても、同様のピットが前述の福津市新原・奴山30号墳の周溝から検出されている。報告では、ピットが少数かつ不規則であり、また付近に5世紀代の集落が営まれていることから、「古墳築造以前に存在した集落の遺構が残存したものである可能性が高い」とされている（福津市教育委員会2023:p85）。天神山古墳ではピットが周溝底面から掘削されているとみられることから、墳丘の築造に伴うものと考えられることができる。新原・奴山30号墳の場合も、周溝底面での検出面からのピットの深さと周溝掘削以前の集落の面との位置関係が、ピットの性格を考える上では重要であろう。天神山古墳の場合は、調査区の位置の関係で、例えば西側くびれ部や前方部南西隅角付近などでのピットの有無が確認できなかったが、今後は周辺遺跡の調査においても、同様のピットについて存在する可能性も含めて調査する必要がある。

この他、墳丘に付属する施設として、後円部東側一段目平坦面（Oトレンチ）の溝状遺構がある（図3-17）。これは墳丘一段目の平坦面上で、後円部中心から東側の一段目斜面側に直線的に延びる形に設けられているもので、石組みなどを検出しているわけでもなく、現状で機能や目的は不明である。報告でも述べたように、石室の排水施設などを可能性の一つとして想定しておきたい。

第3節 Lトレンチの墓道の復元と須恵器出土状況

(1) 墓道の復元

Lトレンチの調査では、多量の土器類が出土したが、それが墓道の前庭部であるという認識のもと、墓道の検出を行った。この調査成果の内容についてあらためて検討しておきたい。

Lトレンチは後円部西側の一段目平坦面付近を中心に東西方向に設定したものであるが、一段目平坦面で集積部Ⅰ・Ⅱと呼称している須恵器・土師器の集中出土地点を検出した(図3-19・20)。土器類は、基本的に全て破砕されており、土層図でいう9層および黒色土層(27層)よりも下位で平坦面直上からまとまった形で出土した。これ以外に一段目斜面や周溝内部からも多数の破片が出土したが、これらは基本的に平坦面付近の破片が流れ込んだものとみられる。この点をもとに層位を確認したところ、9層および黒色土層(27層)が土器類の破砕供献に伴う堆積であるのに対し、その9層および27層を覆う形で26層・6層・7層・5～2層の堆積が認められる。このことから、9層および黒色土層(27層)が「初葬」に伴う墓道の埋土、それを覆う形で堆積した上記の26層～2層を「追葬」に伴う墓道の埋土と認定した(第3章・図3-20)。L4トレンチは墓道の続きを確認するために設定したものであるが、ここでも平面的に追葬に伴う墓道の埋土を確認することができた(図3-21)。

以上の調査の過程で、筆者らが黒色土層と呼ぶ27層が何に由来するのか、また初葬の埋土とどのような関係にあるのかが問題となった。このため、2022年度に、27層と初葬・追葬の埋土について古環境研究所(担当:辻本裕也氏)に分析を依頼した。上述の問題に関連する分析結果について要約すると、黒色土層(27層)は大きく上下に細分でき、下層は初葬埋土が現地で腐食土壌化したもの(ススキ属・メダケ節・ネザサ節などが分布したとされる)で、上層はそれが追葬時に攪乱されていること、初葬の埋土と追葬の埋土はいずれも人為的に持ち込まれた堆積物で、両者の成因が異なっていること、すなわち、追葬埋土が初葬埋土に比べて泥質で、湿地に生育するヨシ属や栽培種のイネなどを含む比較的湿った場所の堆積物が使用されたものと想定された。ただイネが含まれるとはいえ、含有量の少なさから水田耕作土などの可能性は低く、具体的には、追葬の埋土の由来として、周溝内の埋土などが想定され、人為的に墓道周辺に持ち込まれたものであることが指摘されている(第5章第2節参照)。

この結果、筆者らが黒色土層と呼ぶ27層は、初葬に伴う墓道の埋土の表土が一定期間を経て腐植土壌化したものであり、それを切り込む形で追葬に際して掘削が行われた後、最終的に別の湿った場所の泥質の堆積物が新たに持ち込まれ、墓道が埋め戻されたことが明らかとなった。この点もふまえつつ、「初葬の埋土」と「追葬の埋土」による少なくとも2回以上の埋葬が行われたことが認定できる。「2回以上の埋葬」とするのは、墓道の埋め戻しを行わない状態が維持される中で追葬が行われた可能性を排除できないためであり、埋土を伴う墓道の埋め戻しについては「少なくとも2回」ということになる。

この点をもとに、初葬と追葬の埋土の範囲を平面図上および土層図上に記入したのが図64である。初葬時、すなわち古墳築造の直後の墓道が広く存在していた当初においては、集積部Ⅱの周辺が墓道の左端であり、そこからL4トレンチの方向に墓道が伸びる。L4トレンチの北壁は、墳丘の盛土層が見えているものと捉え、その方向に墓道全体が続くものと想定している。集積部Ⅰは、墓道の中心軸に近いがそれでもやや左寄りの位置にあることがLトレンチ東壁の黒色土層(27層)の右下がりの傾斜から判断できる(図3-20)。そして集積部Ⅰ・Ⅱを含むL1-3の付近で、破砕された土器類の供献が行われ、その後に非常に均質な9層で短期間に埋め戻しが行われたものとみられる。その後、9層の上面付近は腐食土壌化したため、そうした土壌化の期間を挟んで27層を水平的に掘り込む形で追葬が行われる。追葬後は、26・6・7層以上の泥質の埋土が新たに多量に持ち込まれ、墓道の埋め戻しが行われたと考えることができる。L4トレンチの追葬の埋土中には、少量の川原石とともに大きめの粘土状のブロックが多量に含まれており、この点でも、別の場所から埋め戻しのための土が持ち込まれたと

する辻本氏の想定は妥当であるものと考ええる。

以上のようにみた場合、土器類の破砕供献は、一段目平坦面の直上、墓道の前庭部において行われたものであり、上記黒色土層（27層）の下位の9層にはほぼ限定される形で帰属している点が重要である。多種多様な土器類において多少の時期幅が含まれるとして、破砕供献に伴う埋め戻しはきわめて短期間のうちに人為的に行われたことが想定されるためである。他方で、例えばL4トレンチ周辺や、追葬の埋土自体を掘削したL3トレンチ内部からは須恵器・土師器等は殆ど出土していないことから、追葬に伴う土器類があるとすれば、それらは石室内に持ち込まれたか、墓道内部のより石室に近い位置で追葬の埋土の下位に埋没しているものと想定される。これらについては未調査部分に属していることから、今回の調査で出土した土器類は初葬に伴うものが大半であるものと考えられる。なお、近隣のホーケントウ古墳においても、天神山古墳と同様の墓道と黒色土層を含む埋土が検出されており、相互の関係を考える上でも注目される（飯塚市教育委員会2024）。

集積部Ⅰ・Ⅱの周辺が墓道の入口付近であり、L4トレンチの東壁付近の奥に羨道部入口があるとすれば、墓道の長さは推定で8～9m前後、幅は入口付近では少なくとも4m前後あったものと想定される。L3トレンチの平坦面盛土の標高46.7～8m前後の延長上に石室入口・閉塞部が存在するとすれば、石室入口付近の追葬の埋土は、最大で1.7m前後の厚さ（高さ）で埋め戻されているものと考えられる。L4トレンチは南側が最も低い形で埋没しているため、この付近を墓道の中心軸が通ると考えるならば、石室（入口）はL4トレンチの東方向やや北寄りの位置に存在するものとみられる。

この時期の北部九州においては、石室中心軸の延長が墳丘・後円部の中心につながる場合（例：桂川町王塚古墳・飯塚市寺山古墳）や、玄室空間の中央部が墳丘・後円部の中心点に一致する場合（例：筑紫野市五郎山古墳・古賀市船原古墳）などが認められる。その点をふまえ、L4トレンチの墓道検出点から墳丘中心点までの距離を測ると約6～7mであり、これが石室全長・規模を考える上での指標となる。飯塚市寺山古墳では、玄室長4.2m、奥壁幅奥壁幅2.2mの石室が検出され、盗掘により単室か複室かの推定は困難とされているが、奥行1.5m前後の前室は設置可能とも指摘されている（飯塚市教育委員会1986）。6世紀中葉～後葉の単室両袖型横穴式石室の羨道長は2m前後のものが多いことから、先の「約6～7m」の距離を元に、玄室規模が4m前後であるとすれば、2m前後の羨道を持つ単室両袖型横穴式石室か、全長7m前後であったとみた場合、小規模な前室を伴う複室両袖型の可能性を考慮することができる。後円部中心点が玄室奥壁か玄室空間の中央部であるかによっても変わってくるため、現状ではどちらであるかの可能性の限定はできず、将来的な非破壊による調査技術の発展に期待したい。L3トレンチの墓道の底面が標高46.7～8m付近であり、後円部墳頂部の標高が51.5m前後であることからすれば、玄室の高さは、2.5～3m前後という推定が可能であろう。

(2) 須恵器の出土状況（図3-22・23・表3-1）

上述のような墓道の復元をふまえつつ、土師器も含めた土器類の出土状況についてあらためて検討を行う。第3章の報告でも述べたように、Lトレンチでは、集積部Ⅰ・Ⅱを中心として多量の土器類が出土した。集積部Ⅰ・Ⅱ以外の特にL2区周辺は、木の根による攪乱で原位置を保っていないものが多かったが、Lトレンチ全体にわたって土器片が分布していた。集積部Ⅰでは、裝飾付須恵器や高坏形器台をはじめ、大型の器種が破砕された状態で折り重なるように出土した。集積部Ⅱでは、甕の破片を主体として、破片を人為的に重ねるような形で廃棄が行われている。集積部Ⅰ・Ⅱの両者にまたがって出土する破片（甕A）があることから、両者は一連の廃棄の過程によるものと考えられることができる。

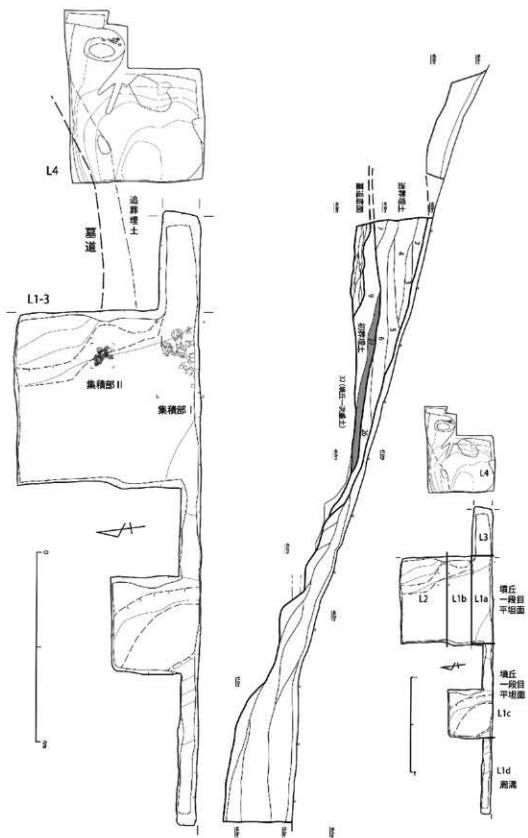


図6-4 Lトレンチ・墓道復元図 (S=1/80)

集積部Ⅰの器種は大半が破砕されているが、このうち最も東側の位置でおそらく最初に据え置かれた壺(85)については、口縁部が破砕されている以外は頸部から胴部にかけてはほぼ完存していた。出土時には内部に土砂が充満した状態であったため、そのまま取り上げた後、研究室で内部について掘り下げを行ったが、他の遺物や有機質などは出土していない。その壺(85)の右側からは壺Bの破片や提瓶(82)の破片が出土した。また壺(85)の手前に重なる形で、上下に分割された手持配像脚付壺(141)が配され、またその左手には別の子持配像脚付壺(140)と高坏形器台(134)、手前には高坏形器台(135)と広口壺(84)が破片の状態で廃棄されている。さらに壺A(153)・壺Hや酸化炭素焼成の高坏(176・178)などがまとまった形で出土した。それ以外の子持高坏形器台(142)手持脚付壺(145・146)などの裝飾付須恵器、また壺(80)・提瓶(81)・横瓶(83)や革袋形土器(133)についてもL1トレンチ周辺の平坦面付近からの出土である。後述するように、ここに挙げた器種構成が天神山古墳の葬送儀礼を特徴付ける基本器種とも呼べるものであり、これらが初葬に伴って前庭部で行われた破砕供献において主要な役割を与えられているとみることができる。無蓋高坏や坏蓋・坏身などは、表土層・堆積層中から分散して出土するものが多い点も注意される。これらも多くは破砕されているが、追葬時に破砕供献されたものが含まれる可能性についても考えておく必要がある。その意味でも、裝飾付須恵器を含めた集積部の土器群は、初葬の被葬者の葬送儀礼に際して特別に用意されたものと考えられよう。

また報告でも述べたように、「破砕供献」と表記しているが、これらの土器類が破砕された具体的な地点については明確でない。集積部Ⅰ・Ⅱの周辺も含め、Lトレンチの平坦面の中で破砕行為が行われたという積極的な証拠はない。実際には最終的に廃棄された時点ですでに破片化が進んでいたものとみられ、これらが周辺に散布される形で廃棄されている。さらに、一部の破片は墳丘の各トレンチからも少量ながら出土している。前述のホーケントウ古墳では、複数個体の大甕をくびれ部の平坦面付近に一定の間隔を置いて配置しており(飯塚市教育委員会2024)、天神山古墳の破砕供献とは若干の時期差があるものと考えられる。

裝飾付須恵器も含めた土器類の出土事例としては、①墳丘上・くびれ部ないし造り出しから出土する場合、②前庭部付近で出土する場合(破砕の事例も含む)、③石室内部に納められる場合の大きく3つに大別できること、また時間的に①→②・③の順に変遷したことが指摘されている(岸本1975; 山田1998)。天神山古墳の前庭部における破砕供献は、②に該当する。天神山古墳の裝飾付須恵器を含めた前庭部の破砕供献に近いと考えられる事例として、福岡県古賀市・原口1号墳の出土例が挙げられる(福岡県教育委員会1974)。径約23mの円墳であるが、裝飾付須恵器(手持壺)や高坏形器台などを含む須恵器・陶磁器類が前庭部・墓道埋土から破片の状態で出土している。土器類は石室内から出土している。盗掘・攪乱を受けており出土状況が明確でないが、破砕供献の可能性も想定される。また京都郡みやこ町菅見大塚古墳(円墳・径約25m)では、前庭部ではないが周溝などに裝飾付須恵器などが破砕散布されたものと考えられている(九州歴史資料館2015)。他に前庭部での出土事例として、奈良県烏土塚古墳や京都府大枝山22号墳などが挙げられる。なお、裝飾付須恵器の破砕については、前庭部の事例に限定されず、石室内部に持ち込まれたものが破砕され、例えば脚部と壺部に分離されて別の場所に置かれる事例なども多く知られている(山田1998)。天神山古墳の場合は、Lトレンチ内部から出土した破片全てを接合しても完形ならず、一部の部位が欠落するものが大半である。これらは、豆田天満宮社殿の造営に伴って失われた墓道の右半分や石室周辺、また墳丘の各所に散布されている可能性についても考えておく必要があろう。

第4節 天神山古墳出土土器類の構成と特徴

(1) 天神山古墳出土土器類の器種構成と生産・流通について

報告でも述べたように、天神山古墳から出土した土器類は、「坏身・坏蓋・高坏蓋・有蓋高坏・無蓋高坏・甕・提瓶・横瓶・壺類・革袋形土器・高坏形器台・装飾付須恵器（子持配像脚付壺、装飾付器台、子持脚付壺）・甕（A～H）・高坏（酸化炎焼成）・高坏（土師器）」などが挙げられ、器種が非常に豊富である点が特徴である。九州では装飾付須恵器自体の出土が多くなく、その点でも貴重な資料といえる。6世紀中葉～後葉では、福岡県内においては福岡市元岡石ヶ原古墳や糸島市西堂古賀崎古墳などが共通した器種構成（装飾付須恵器・高坏形器台・革袋形土器など）を持つ事例として挙げられる。土器群全体としては、【須恵器蓋坏・有蓋高坏・無蓋高坏+各種壺類・高坏形器台・装飾付須恵器・酸化炎焼成高坏・土師器高坏・須恵器大甕類】という多器種の構成が、いわゆる首長墓の葬送儀礼の道具立てとして用いられたものと考えられることができる。

足立悠紀氏・足立達朗氏による胎土分析の結果として、天神山古墳・ホーケントウ古墳のいずれについても、蓋坏などの小型器種は、飯塚市井手ヶ浦窟跡産が主体で、高坏形器台や大甕などについては、一部牛頭窟址群や宗像地域など、他地域から搬入されたものが含まれると考えられている（第5章第1節参照）。また井手ヶ浦窟跡群では装飾付須恵器も出土していることから、装飾付須恵器の一部は井手ヶ浦産の可能性が高いと考えられる。

井手ヶ浦窟跡群は、嘉麻川流域で後の嘉麻郡側に位置するが、嘉麻川流域の地域集団のみならず、穂波川流域の集団に対しても須恵器の供給を行っていたことが確認されたことにより、嘉穂盆地全体の須恵器産として操業していた点が判明した点は重要である。また穂波川流域でもコノマ遺跡群で6世紀末前後の窟跡が検出されており（桂川町教育委員会2020）、それに先行する天神山古墳の時期において穂波川流域で須恵器生産が行われていた可能性についても考慮する必要があるが、後述するように、井手ヶ浦窟跡群の管理者や統括がミヤケ（鎌屯倉・穂波屯倉）との関連でどのように考えられるか、という点が課題といえる。

周辺の古墳と比較すると、同時期の嘉麻川流域の首長墓とみられる飯塚市寺山古墳（前方後円墳・68m）では、寺山古墳では人物埴輪・馬形埴輪をはじめとする多くの形象埴輪が出土し、円筒埴輪については周溝内に集中して配置されているが、盗掘を受けている点を考慮する必要があるものの、装飾付須恵器などは出土していない。逆に天神山古墳では装飾付須恵器が出土する一方で、埴輪の使用が全くみられない点が大きく異なる。後述するように、高橋克壽氏は、形象埴輪と装飾付須恵器の両者が同一古墳において共存する事例が少ないことを指摘している（高橋克2019・2023）。この点で、寺山古墳との違いは、古墳築造および葬送儀礼に際して、形象埴輪と装飾付須恵器のいずれを採用するかという選択の違いとして表れていると考えることもできよう。

またホーケントウ古墳は天神山古墳（ⅢB期）より先行してⅢA期新相の時期に築造されたとみられるが、須恵器の器種構成などは若干異なっている（飯塚市教育委員会2024）。すなわち、蓋坏・有蓋高坏・無蓋高坏・甕・提瓶（小型）・高坏形器台や広口壺、脚付壺や大甕類などが基本器種として共通する一方、装飾付須恵器や横瓶・大型の提瓶などがみられない。ホーケントウ古墳の調査担当者の榊山範一氏は、また円筒埴輪が樹立されている点で、時期的に天神山古墳に先行するとともに、王塚古墳や天神山古墳の被葬者を最上位としつつ、それに準ずる位置の在地上土層の墳墓であると捉えられている（飯塚市教育委員会2024および榊山氏の御教示による）。この点も含め、天神山古墳は穂波川流域における当該時期の穂波川流域の首長墓であることが裏付けられるものと考えられる。

(2) 装飾付須恵器の構成と特徴

天神山古墳から出土した装飾付須恵器は、全体が復元できるものが少なくとも4個体あり、破片も含めるとさらに数個体が存在した可能性がある。ひとまずこの4個体について検討するが、子持配像脚付壺A(140)・子持配像脚付壺B(141)・子持脚付壺(143)・子持高坏形器台(142)である。いずれも6世紀後半の事例として類例が知られるもので、山田邦和氏の分類(1998)では、それぞれ順に装飾付壺Ⅱ-1類2点(胴部突帯をもつ長脚品)、装飾付壺Ⅲ-1もしくは2類(胴部突帯をもたず長脚もしくは短脚との中間的な長さのもの)、子持器台I-1類(子器が坏で、親器の形態が通常の高坏形器台と大きく違わないもの)に相当する。この中でも、子持配像脚付壺A・Bは、いずれも騎馬像・人物像と各種動物像を伴い、狩猟の場面を描いたものと想定される一群であり(間壁1988)、大型の装飾付須恵器の中でも代表的な器種である。

同一古墳で大型の装飾付須恵器が複数個体出土する事例は一定数存在するものの(山田1998)、多くても2個体もしくは3個体のものが一般的であり、4個体以上が供献されている事例は和歌山県井辺八幡山古墳など稀少であり、この点でも注目される。

高橋克壽氏は、装飾付須恵器の小像について、人物や鳥・動物が他界を意識して奉納されたと捉えている。須恵器に付加された小像は、石室内に埋葬される被葬者に対して捧げられた折りの造形であり、それが横穴式石室の全国的な本格的導入により、6世紀以降に生じた古墳における葬送観念の変革によって採用されたと考えている(高橋克2019・2023)。また高橋氏は、装飾付須恵器の小像と人物・動物埴輪群像との間には相互補完的關係があることについても指摘している。すなわち、人物動物の装飾付須恵器が出土した古墳は階層的にはかなり広い範囲に及ぶのに対して、人物・動物埴輪を出土した古墳は非常に限定され、かつ当該須恵器が副葬されない傾向にある(例:兵庫県西宮山古墳における装飾付須恵器の事例)。このことから、高橋氏は、人物動物の装飾付須恵器を副葬する意識とそれを埴輪で表現して墳丘に樹立するというとは、同じ折りの表現の仕方の違いにすぎないのではないかという推測が成り立つ、と論じている(高橋克2019:p.83)。上述のように、天神山古墳と寺山古墳の両者における違いは、嘉穂盆地の内部でそれぞれ穂波川流域・嘉麻川流域のほぼ同時期の首長墓において、異なる葬送儀礼上の表現が採用された事例として理解することができよう。

また装飾付須恵器については、6世紀後半において前庭部で破砕された事例が多いこと、また横穴式石室の普及に伴い埋葬主体内部からの出土例が増加する一方、墳丘・周溝・前庭部からの出土が全体の42%と依然として多いことから、これらの装飾付須恵器は副葬品でなく、葬送祭祀に使用された儀器であることが指摘されている(山田1998)。遠賀川上流域も含めた北部九州では、装飾付須恵器の採用事例は必ずしも多くないが、その中で天神山古墳の事例は、装飾付須恵器を用いた葬送儀礼のあり方が、北部九州の在地的なものではなく、全国的にみて同時期の上位層における葬送儀礼の一般的なあり方をふまえて行われたものであり、そうした葬送観念や儀礼の情報が共有されていることを示している点が重要であろう。

第5節 天神山古墳の築造年代と歴史的背景

(1) 遠賀川上流域における古墳築造動向と天神山古墳の築造年代

最後に、天神山古墳の築造年代とその意義について検討しておきたい。あらためて、遠賀川上流域の主要古墳分布(図66:松浦2014)と北部九州のミヤケ・古代山城の分布図(図67:柳沢2014)を御参照いただきたいが、嘉穂盆地周辺は、磐井の乱後の「日本書紀」安閑二年(535)に、穂波屯

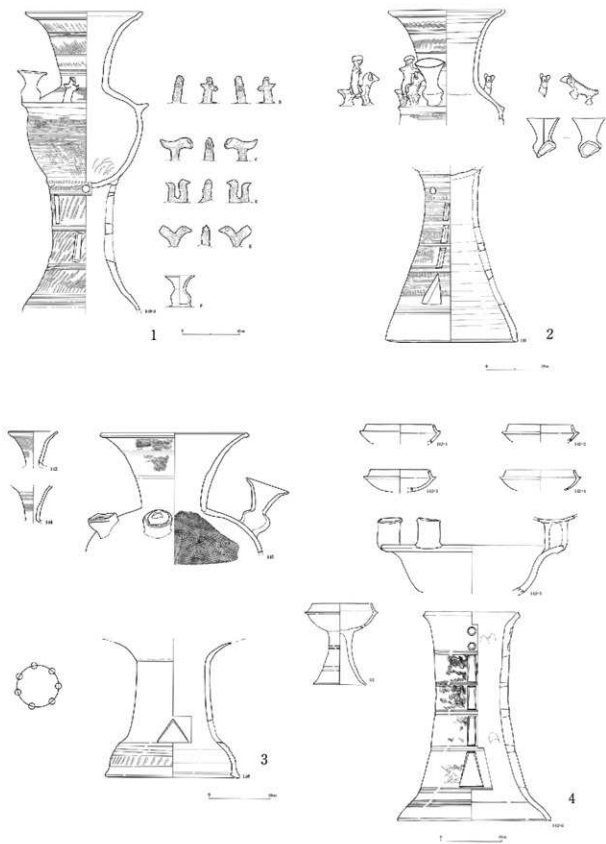


图6-5 天神山古墳出土裝飾付須惠器 (S=1/6)

1: 子持配像御付壺A (140), 2: 子持配像御付壺B (141), 3: 子持御付壺 (143), 4: 子持高环形器台 (142·53)

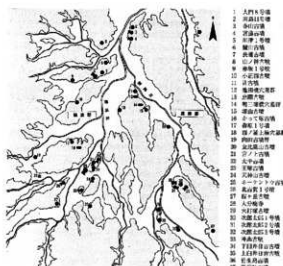


図6-6 嘉穂地域の古墳分布図
(松浦2014を改変)



図6-7 北部九州におけるミヤケ・古代山城分布図
(柳沢2014を改変)

表6-1 嘉穂地域の古墳築造動向 (辻田2015を改変)

※前：前方後円墳、円・円墳、下輪は150m以上の前方後円墳。*：時期が前後する可能性あり

	築成編年	穂波川流域			
		穂波川流域南部	西岸	東岸	嘉麻川流域北部
前期	1				
	2	金比羅山 (前・81) *大平 (前・35) *宮ノ上 (前・37)	*赤坂1号 (円・21)	忠勝 (円・42) *辻 (円・30)	西ヶサコ (円・22)
	3				
	4				神出 (前・68)
中期	5				
	6	*新白山 (円・—)			
	7				
	8	森原1号 (前・28)	山の神 (前・80) 小正西 (円・30) 横山 (横穴)		かつて塚 (円?・—) 次郎太郎3号 (円・40)
後期	9	寿命王家 (前・86) ホーケントウ (前・50) 天神山 (前・67)		宮脇 (前・35)	次郎太郎2号 (前・50) 竹生島 (前・50)
	10			香山 (前・68)	次郎太郎1号 (前・50)
終末期			山王山 (円・20) 【敲打技法裝飾】	川島11号 (円・15) 【壁画裝飾】	

小北古賀1号墳 (前) は時期不明 赤瀬別古墳 (前・30)・横穴式石室) は時期不明 赤井手ヶ渡原跡

倉・鎌屯倉が設置されたことが記載される地域にあたる。穂波川流域が後の穂波郡、嘉麻川(遠賀川本流)流域が後の嘉麻郡にあたり、それぞれの地域で古墳の築造と時期的変遷が認められる。

報告でも述べたように、天神山古墳の築造年代は、初葬に伴う土器群の年代観から、北部九州の須恵器編年ⅢB期(TK43型式)と考えることができる。追葬はⅣA期(TK209型式)前後と想定されるが、後者については墓道・石室内部が未調査のため詳細は不明である。また近隣のホーケントウ古墳はⅢA期新相と位置づけられている(飯塚市教育委員会2024)。これらの点をふまえ、嘉穂盆地の古墳築造動向について整理したものが表5-1である。これは筆者が作成した表(辻田2015)に、ホーケントウ古墳の年代を付加したものである。他の遺跡の年代観については、嶋田光一氏の整理(2015)も参考にしている。

嘉穂盆地の古墳築造動向は、穂波川流域と嘉麻川流域で大きく異なることに加え、それぞれの地域で古墳築造地点が南北に分かれている。天神山古墳は穂波川流域南部（上流域）に位置しており、こちらを桂川古墳群と呼称している。6世紀では、ⅢA期前後（6世紀前～中葉）の築造とみられる王塚古墳（86m）の後、ⅢA期新相のホーケントウ古墳（50m）、ⅢB期（6世紀後葉）の天神山古墳（67m）と連続して前方後円墳が築造されており、天神山古墳は穂波川流域で築造された最後の前方後円墳となる。南部では終末期古墳は未確認であるが、北部でⅣA期に山王山古墳（円墳・20m以上）が築造される。敲打技法の円文を有する装飾古墳である。またこの時期には、南部のコノマ遺跡群でⅣA期に須恵器生産が行われている（桂川町教育委員会 2020）。

嘉麻川流域では、6世紀代の前方後円墳として宮脇古墳（35m）と寺山古墳（68m）が築造されており、寺山古墳は嘉麻川流域の最後の前方後円墳となる。ホーケントウ古墳・天神山古墳に近い時期の築造と考えられる。本地域の拠点窯である井手ヶ浦窯跡群はⅢA期新相の操業開始とみられ（飯塚市教育委員会 1985・2018；福岡県教育委員会 2011；足達 2022）、この近隣で後続して築造された川島古墳群の11号墳（円墳・15m）は、彩色壁画（円文）を有する装飾古墳である。

このように、嘉穂盆地では、穂波川流域と嘉麻川流域でそれぞれに古墳の時期的変遷が認められ、最後の前方後円墳の築造がⅢB期前後で、天神山古墳が全長67m、寺山古墳が68mと、いずれも規模が約67～68m前後であるという共通項がある。またⅢB期（TK43型式）は、近畿地域の大王墓も含め、西日本の各地で前方後円墳の築造が停止する時期にあたる（高橋照 2023）。この点をふまえ、穂波川流域と嘉麻川流域の相互の関係について検討したい。

(2) 嘉穂盆地におけるミヤケの設置とその前後

穂波川流域と嘉麻川流域では、それぞれにミヤケが設置されたものと考えられるが、例えば博多湾沿岸地域でみられる三本柱柵を伴う倉庫群のような具体的な遺跡などは見つからない。日野高志氏の研究（1967）では、歴史地理学的な観点から条里と郡家の位置が復元され、その脈絡でミヤケの位置についても検討されている。それによれば、穂波屯倉は現在の桂川町太郎丸付近、穂波郡家は飯塚市秋松付近と想定されている（図6-8；日野 1967）。木本雅康氏は、後者については飯塚市大分の水屋付近と想定している（木本 2016）。いずれにしても、ミヤケや郡家推定地の北側に山の神古墳や山王山古墳などが位置し、また南側に王塚古墳や天神山古墳をはじめとした桂川古墳群が位置する。

嘉麻川流域でも同様に、北側に寺山古墳・川島古墳群と井手ヶ浦窯跡群があり、南側に次郎太郎古墳群・竹生島古墳・上臼井日吉古墳などが分布する。嘉麻郡家は現在の嘉麻市鴨生付近などが想定されており（川添 1968）、鎌倉屯倉もその周辺に存在した可能性も想定される。

また奈良時代には盆地の中心部分を東西に横断する形で官道が通り、南西部の大分廃寺付近を通過して大宰府方面につながっている（木本 2016；梶原 2017；図6-9）。穂波郡側に伏見駅、鎌郡側に網別駅がある。

穂波川流域・嘉麻川流域のいずれも、上記のように南北に古墳群が営まれつつ、その間に挟まれた地域にミヤケや郡家が営まれた可能性が想定されている（図6-10）。穂波川流域の古墳の変遷についてみると、5世紀後葉～末に山の神古墳が北部に造営された後、王塚古墳から天神山古墳に至るまで、南部の桂川古墳群での築造が連続している。最後の山王山古墳は再び北部で築造されている。5世紀後半以降、古墳被葬者の親族関係における父系化が指摘されており（田中良 1995）、この点をもとに検討した結果、山の神古墳では、TK47型式期に初葬の被葬者が埋葬された後、TK10型式前後に追葬の被葬者が埋葬されているものと復元している（辻田編 2015）。こうした観点から、各古墳の初葬・追

葬の被葬者の関係についてみたものが図6-11である。王塚古墳が築造された6世紀前～中葉は、王塚古墳の初葬の被葬者と山の神古墳の追葬の被葬者が同時期に存在しており、また天神山古墳が築造された6世紀後葉は、天神山古墳の初葬の被葬者と王塚古墳の追葬の被葬者（およびホーケントウ古墳の被葬者たち）が同時期に活動していたものとみられる。ここでいう追葬の被葬者は「独立した古墳が築かれなかった被葬者」であり、この時代の地域社会は、古墳の新規築造の契機となる（初葬の）被葬者と、独立した古墳が築かれず、既存の別の古墳に埋葬される追葬の被葬者たちにより共同統治されるものと考えることができる（辻田2023b）。このことは、6世紀中葉前後に穂波屯倉が設置されたとするならば、その経営の実態を考える上でも重要であろう。王塚古墳の被葬者は、交互式神獸鏡系の大形倭製鏡や振り環頭大刀、金銅製馬具類などの出土からも、継体朝前後のヤマト王権中枢と密接な政治的関係を持っていたことが想定されており（柳沢2004・2014；松浦2005；桃崎2010・2015；辻田2012）、ミヤケの設置以降あるいはホーケントウ古墳や天神山古墳の被葬者の時期においても、そうした関係をさらに発展させたものと想定される。

この点は嘉麻川流域でもある程度は共通しており、寺山古墳の被葬者（たち）と川島古墳群を営んだ被葬者層は同時期に共存しつつ、鎌屯倉と井手ヶ浦窯跡群の経営に関わったものと想定される。この点で注目されるのが、本書に収録されている胎土分析の結果である。先にも触れたように、天神山古墳・ホーケントウ古墳出土の須恵器は井手ヶ浦窯跡群で生産されたものが主体であり、これに牛頭窯跡群や宗像地域で生産された可能性があるものが搬入された可能性が足達悠紀氏・足立達朗氏らによって指摘されている。また集落遺跡から出土した土器類も、井手ヶ浦産のものが多く含まれている。両氏らも指摘するように、穂波川流域で未発見の窯跡が存在する可能性を考慮する必要があるが、上記の事実は、嘉麻川流域の側に属する井手ヶ浦窯跡群で生産された須恵器が、嘉麻川流域の集団に対してのみ供給されたのではなく、穂波川流域も含めた嘉穂盆地の地域社会の中で広く流通していたことを示している（第5章第1節参照）。このことは、穂波屯倉と鎌屯倉の両者が、嘉穂盆地の中で例えば排他的に競合するようなあり方ではなく、緩やかな形で並存するようなあり方を想定させるものといえよう。また大甕類などをはじめ、福岡平野に所在する牛頭窯跡群からの須恵器の供給が一定数あるとすれば、那津官家を介したミヤケのネットワーク（田中史2019）の実態を考える上でも重要である。報告でも触れたような土師器高坏Ea類（重藤2009・小嶋2018）や酸化炎焼成の高坏（長・中島2013）の存在もまた、博多湾沿岸地域や北部九州各地とのつながりを示しており、また宗像地域からの搬入品があるとすれば、これまでも指摘されているような、遠賀川上流域と宗像地域についての密接な関係性を示すものとも考えることができる（小嶋2018・2022）。

松浦宇哲氏は、前述の「日本書紀」安閑二年記事にみられる、遠賀川流域から周防灘沿岸地域に偏って七つの「屯倉」が設置される点について、磐井の乱後の戦後処理や敗戦の代償などではなく、ヤマト王権と北部九州の東側地域首長層との交渉を示す記事として理解すべきであること、具体的には、「磐井攻略を目的として北部九州の東側地域に重点的に置かれた政治的・軍事的拠点に対し、磐井の乱後、ミヤケ制が本格的に整備されていく過程において多様な機能が付加された可能性などを考慮すべき」ことを論じている（松浦2022：p.15）。上述のような穂波屯倉・鎌屯倉・那津官家の相互の関係性は、磐井の乱後の北部九州における地域社会の再編成のあり方を考える上で具体的な考古学的証拠を示すものともいえよう。

(3) 北部九州における前方後円墳の築造停止と天神山古墳の位置づけ

最後に、天神山古墳が穂波川流域で最後に築造された前方後円墳であることについて、他地域との



図6-8 穂波郡域の条理の復元(日野1967を改変)

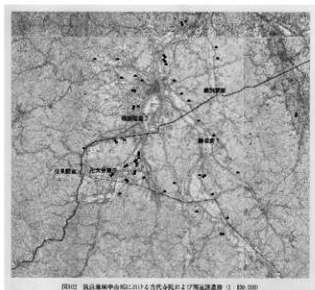


図6-9 穂波郡・嘉麻郡周辺の官道と遺跡
(梶原2017を改変)



図6-10 穂波屯倉・鎌屯倉と周辺における古墳の分布

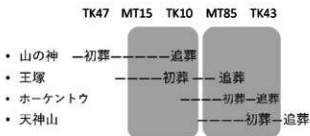


図6-11 穂波川流域における前方後円墳の被葬者と地域社会(トーンが同時代に生きた被葬者たち, 辻田2023bを改変)

比較の上で相対化を行い、結びとしたい。

天神山古墳は、上述のように全長67mである。北部九州の各地において最後に築造された前方後円墳は、小規模なものから90～100m前後まで幅があり、有力豪族の奥津城や屯倉比定地などによって傾向が異なることが指摘されている(田村2009;辻田2023a)。筆者は、北部九州の前方後円墳の築造停止について、大きくA～Cの3類型に区分している(表6-2)。A・B類型はそれぞれ田村悟氏が指摘する、「屯倉」比定地において有力古墳が希薄であるあり方および有力豪族の所在が推定される地域で大型古墳が造営されるあり方(田村2009)にほぼ相当するが、A類型について、より前方後円

表6-2 北部九州における前方後円墳築造停止の諸類型（辻田2023a）

分類	特徴	地域	備考
A1類型	大型前方後円墳の築造停止が早く（TK10前後）、群集墳の中で小型前方後円墳が築造される	福岡平野、早良平野、今宿地域など	牛頭塚跡群
A2類型	大型前方後円墳が不在で、60m級の前方後円墳を上位として周辺に群集墳・横穴墓が営まれる	遠賀川上流域など	井手ヶ浦窯跡群
B類型	前方後円墳の規模が90～100m級に大型化した後、大型円墳に転換する	宗像地域、筑後川中流域南岸、八女地域など	宗像窯跡群、八女窯跡群
C類型	前時期までに在地の大型前方後円墳などが不在ながら、6世紀後半（TK43）に大型円墳などが出現する	筑紫野・小部地域、遠賀川中流域など	五郎山古墳、新延大塚古墳など

墳の築造停止が早く、群集墳の中で小型前方後円墳の築造がみられる A1 類型と、大型前方後円墳は不在ながら、60 m 級の前方後円墳の築造が最後となる A2 類型とに区分し、いずれもミヤケの設置と関連するものと考えている。また、前時期までに在地の大型前方後円墳などが不在ながら、6 世紀後半に大型円墳などが出現する C 類型を設定し、これも A 類型に近い性格の被葬者像を想定している（表 6-2：辻田 2023a）。

天神山古墳は、嘉麻川流域の寺山古墳とともに、A2 類型の代表的な事例として位置づけられ、ミヤケの比定地において、最後の前方後円墳の規模が大型化せず、前方後円墳の築造停止後は大型の円墳に転換する。上述のように、天神山古墳と寺山古墳は、いずれも全長 67 ～ 68m 前後ではほぼ同規模であり、この点でも嘉穂盆地内部で同格の位置づけであったことが想定される。先に胎土分析の結果を基に想定した、緩やかな形での並存という理解とも整合的である。

他方、那津官家が設置された博多湾沿岸地域では上述の A1 類型のような形で、前方後円墳の築造停止が早く、群集墳の中に小型の前方後円墳が営まれるなど、嘉穂盆地・遠賀川上流域とも異なるあり方である。また遠賀川上流域との関連も想定される宗像地域は上述の B 類型であり、福津市在自剱塚古墳（102m）のように大型前方後円墳の築造が行われた後、大型円墳（手光波切不動古墳）へと転換している。このように、最後に築かれた前方後円墳の大きさは地域によって異なるものの、その後の 6 世紀末～7 世紀初頭前後には大型円墳へと転換する点は共通しており、いわば大型円墳の築造という点では「平準化」する動きと考えることもできる。

この「68m 前後」の最後の前方後円墳という点については、大抜屯倉が設置されたと想定されている北九州市の曾根平野（桃崎 2010）付近で築造された、小倉南区・荒神森古墳も 68m であり、同規模である点が注目される。本地域では、6 世紀中葉～後葉に荒神森古墳が築造された後、古墳の規模が縮小している（宇野 2015）。またこの「68m 前後」という規模は、関東周辺をはじめ、ミヤケ関連地域で築造される最後の前方後円墳として、列島各地で広く認められる数値であり（石島他編 2011；若狭 2017・2021）、一定の規格が存在した可能性を示唆している。天神山古墳についても、そうしたミヤケ設置および関連地域における前方後円墳の築造停止という観点において、全国的な傾向の中に位置づけることができよう。

以上、天神山古墳の調査成果について、いくつかの観点から検討を行ってきた。天神山古墳は、上述のような脈絡において、磐井の乱後に二つの屯倉が設置された遠賀川上流域・嘉穂盆地の中で、穂波川流域において最後に築造された前方後円墳であり、遠賀川上流域や北部九州にとどまらず、全国的な前方後円墳の築造停止とミヤケ制・国造制・部民制の歴史的展開（cf. 館野 2004；菱田 2007；岩永

2022) の中に位置づけられる重要な遺跡であることが明らかとなったものとする。遠賀川上流域については、古墳の副葬品や周辺の集落遺跡出土遺物などからも、朝鮮半島との交流窓口の一つと想定されており(嶋田 1991・2015; 柳沢 2004・2014; 嘉麻市教育委員会編 2014; 松浦 2022 など)、そうした観点からのさらなる議論の展開が期待される。また遠賀川上流域も含め、群集墳・横穴墓の築造動向や集落遺跡とそこからみた地域社会のあり方についての検討が進んでおり(下原 2006; 岩橋 2015; 小嶋 2022; 出見 2023 など)、こうした点についても今後の課題としておきたい。

本稿をなすにあたりまして、下記の皆さまには関連する諸問題について多岐にわたり御教示をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

足達達朗、足達悠紀、岩永省三、井上勇也、江上正高、大庭孝夫、尾園晃、河野一隆、岸本圭、城門義廣、櫛山範一、重藤輝行、嶋田光一、長安慧、長谷川清之、福本寛、松浦宇哲、溝口孝司、宮地聡一郎、宮本一夫、毛利哲久、桃崎祐輔、八木健一郎、吉村靖徳(五十音順・敬称略)

【参考文献】

- 足達悠紀 2022 「6・7世紀の須恵器編年考—北部九州を対象として—」『九州考古学』97
飯塚市教育委員会 1985 「井手ヶ浦窯跡」飯塚市文化財調査報告書第9集
飯塚市教育委員会 1986 「寺山古墳」飯塚市文化財調査報告書第10集
飯塚市教育委員会 2018 「井手ヶ浦窯跡群Ⅱ」飯塚市文化財調査報告書第52集
飯塚市教育委員会 2024 「ホーケントウ古墳」飯塚市文化財調査報告書第60集
岩橋由季 2015 「遠賀川流域における横穴墓の出現と展開」辻田淳一郎編『山の神古墳の研究』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
岩永省三 2022 「古代国家形成過程論—理論・針路・考古学—」すいれん舎
宇野儀敏 1986 「桂川・天神山古墳とその背景」(『九州古墳時代の研究』学生社、2003に所収)
宇野儀敏 2015 「大抜屯倉とその後」『河上邦彦先生古稀記念論文集』河上邦彦先生古稀記念会
梅原末治・小林行雄 1940 『筑前国王塚裝飾古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第15冊
岡田裕之 2021 「後期古墳の土器破砕儀礼—須恵器大甕の破砕を中心として—」『持続する志』(上)
梶原義実 2017 「古代地方寺院の造営と景観」吉川弘文館
嘉麻市教育委員会編 2014 「6世紀の九州島ミヤケと渡来人」(記録集) 嘉麻市教育委員会
川添昭二編著 1968 「嘉穂地方史 古代・中世編」嘉穂地方史編纂委員会
岸本雅敏 1975 「裝飾付須恵器と首長墓」『考古学研究』22-1
木本雅康 2016 「筑前国徳波・嘉麻両郡の古代官道」(『日本古代の駅路と伝路』同成社、2018に所収)
九州歴史資料館 2015 「東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告17」九州歴史資料館
桂川町教育委員会 2020 「コノマ遺跡群」桂川町文化財調査報告書第21集
桂川町教育委員会 2021 「特別史跡王塚古墳保存活用計画」桂川町教育委員会
小嶋篤 2018 「前方後円墳の終焉—から見た胸肩君」『沖ノ島研究』4
小嶋篤 2022 「遠賀川流域の古墳と集落—造墓秩序と生活圏—」『集落と古墳の動態Ⅲ—古墳時代中期末～古墳時代後期—』九州前方後円墳研究会
児島隆人・藤田等編 1973 『嘉穂地方史 先史編』嘉穂地方史編纂委員会
重藤輝行 2009 「古墳時代中期・後期の筑前・筑後地域の土器器」『地域の考古学』佐田茂先生論文集刊行会
嶋田光一 1991 「福岡県榎山古墳の再検討」『古文化談叢』児島隆人先生喜寿記念事業会
嶋田光一 2015 「遠賀川上流域における古墳時代遺跡の変遷と近年の成果」辻田淳一郎編『山の神古墳の研究』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
下原幸裕 2006 『西日本の終末期古墳』中国書店
白石太一郎 1975 「こととわたし考」(『古墳と古墳時代の文化』塙書房、2011に所収)
館野和己 2004 「ヤマト王権の列島支配」『日本史講座1巻 東アジアにおける国家の形成』東京大学出版会
高橋克壽 2019 「人物植輪論の見直し」『花園大学考古学研究論叢Ⅲ』花園大学考古学研究室40周年記念論集刊行会
高橋克壽 2023 「小像付き須恵器と形象植輪」春成秀爾編『何が歴史を動かしたのか 第3巻 古墳・モニュメントと歴史考古学』雄山閣

- 高橋照彦 2023 「前方後円墳の終焉」春成秀爾編『何が歴史を動かしたのか 第3巻 古墳・モニュメントと歴史考古学』雄山閣
- 田中史生 2019 『渡来人と帰化人』角川選書
- 田中良之 1995 『古墳時代親族構造の研究』柏書房
- 田村悟 2009 「北部九州の終末期群集墳再考」『終末期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会
- 長直信・中島圭 2013 「福岡県内出土の八女系須恵器について」『古墳時代の地域間交流 1』九州前方後円墳研究会
- 辻田淳一郎 2012 「磐井の乱に至る諸変動」『日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』日本考古学協会 2012 年度福岡大会実行委員会
- 辻田淳一郎編 2015 『山の神古墳の研究—「雄略朝」期前後の地域社会と人制に関する考古学的研究—』九州大学大学院人文科学研究科考古学研究室
- 辻田淳一郎 2023a 「前方後円墳の築造停止とその背景—北部九州を中心として—」『史淵』160
- 辻田淳一郎 2023b 「威信財と親族関係」岩永省三編『古墳時代の親族と地域社会』同成社
- 出見優人 2023 「古墳時代後・終末期における鐙付大刀の副葬とその性格—北部九州を中心に—」『九州考古学』98
- 土生田純之 1998 『黄泉国の成立』学生社
- 菱田哲郎 2007 『古代日本 国家形成の考古学』京都大学学術出版会
- 福岡県教育委員会 1974 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ」福岡県教育委員会
- 福岡県教育委員会 2011 「井手ヶ浦窯跡群」福岡県文化財調査報告書第 230 集
- 福津市教育委員会 2023 「津屋崎古墳群Ⅳ」福津市文化財調査報告書第 50 集
- 日野尚志 1967 「筑前国徳浪郡の桑里と郡家および屯倉」『史学研究』99
- 間壁霞子 1988 「裝飾須恵器の小像群—製作の意図と背景—」(『考古学の視点 生活意識の考古学』間壁霞子, 2009 に所収)
- 松浦宇哲 2005 「福岡県王塚古墳の出現にみる地域間交流の変容」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室
- 松浦宇哲 2014 「『筑豊』のミヤケと渡来文化」嘉麻市教育委員会編『6世紀の九州島 ミヤケと渡来人(記録集)』嘉麻市教育委員会
- 松浦宇哲 2022 「考古学からみた古代北部九州の東と西」『福岡地方史研究』60
- 右島和夫・若狭透・内山敏行編 2011 『古墳時代毛野の実像』雄山閣
- 桃崎祐輔 2010 「九州の屯倉研究入門」『還暦、還暦?、還暦!』武末純一先生還暦記念事業会
- 桃崎祐輔 2015 「山の神古墳出土馬具の検討」辻田淳一郎編『山の神古墳の研究』九州大学大学院人文科学研究科考古学研究室
- 柳沢一男 2004 『描かれた黄泉の世界 王塚古墳』新泉社
- 柳沢一男 2014 『筑紫君磐井と「磐井の乱」岩戸山古墳』新泉社
- 柳沢一男・菅波正人 2016 「今宿地区古墳群(今宿古墳群)」『新修福岡市史 資料編 考古 1』福岡市山田邦和
- 1998 「須恵器生産の研究」学生社
- 若狭徹 2017 『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館
- 若狭徹 2021 『古墳時代東国の地域経営』吉川弘文館

【挿図出典】

図 6-1: 辻田作成, 図 6-2: 梅原・小林 1940, 図 6-3: 福津市教育委員会 2023, 図 6-4: 辻田作成(図 3-19 を改変), 図 6-5: 第 3 章掲載分を再掲, 図 6-6: 嘉麻市教育委員会 2014 を改変, 図 6-7: 柳沢 2014 を改変, 図 6-8: 日野 1967 を改変, 図 6-9: 梶原 2017 を改変, 図 6-10: 辻田作成, 図 6-11: 辻田 2023b を改変, 表 6-1: 辻田 2015 を改変, 表 6-2: 辻田 2023a。

第7章 総括と課題

徳波川東岸の低丘陵上に位置する天神山古墳は、昭和13年(1938)の京都帝国大学と九州帝国大学による測量調査を経て、王塚古墳に後出する前方後円墳で、周溝や墳丘盛土から王塚古墳との関係性が指摘された。その後、天神山古墳が位置する徳波川沿いで発掘調査や分布調査が行われ周囲の古墳や横穴墓の存在が明るみとなり、桂川古墳群あるいは徳波川流域南部古墳群(以下、桂川古墳群)と称される古墳群が形成されることが指摘された。その古墳群の中で天神山古墳は、金比羅山古墳、宮ノ上古墳、大平古墳、森原1号墳、王塚古墳、北古賀1号墳、ホーケントウ古墳の合計8基の前方後円墳と茶臼山古墳の大型円墳1基を含む首長墓系譜の中で理解され、多くの研究者により変遷が示されてきた。また、天神山古墳が所在する地域一帯は、『日本書紀』安閑2年(535)に設置された徳波屯倉の比定地とされており、天神山古墳と徳波屯倉との関わりが注目されてきた。

しかし、京都帝国大学と九州帝国大学の測量以降、詳細な調査が行われていなかった。そのため、墳丘規模や築造時期と古墳の性格を明らかにするため、範囲確認調査と整理作業を行なった。

範囲確認調査と整理作業の結果、天神山古墳は小田富士雄氏編年のⅢB期(TK43型式前後)にあたる6世紀後葉に築造された全長67mを測る2段築成の前方後円墳で、底部の幅が約3m～4mの周溝と、周溝側上端から外側平坦面までで約3.6mを測る周堤が墳丘をめぐり、周堤外縁まで含めた範囲は南北長約87m、東西幅約60mとなる。この調査では、貯蔵穴群や土坑が検出され弥生時代前期末～中期初頭を中心とする土器や石器が出土し、天神山古墳は弥生時代の集落跡を造成して築造され、古墳時代以降では古代から中世の遺物が僅かに認められたのみで、近世に豆田天満宮が建立されるまで手つかずであったことが判明した。そのため、良好な状態で墳丘が残されたため、墳丘形態および墳丘の付属施設について新たな情報が得られ、更にLトレンチで墓道や前庭部が検出され、須恵器と土師器が破砕された状態で出土したことから石室位置の特定や埋葬回数、葬送儀礼をはじめ桂川古墳群の中で最後に築造された前方後円墳であると判明し、天神山古墳の性格がより具体的となった。

墳丘形態では、一段目平坦面の幅が約4mと広く、二段目の墳丘が細く高くなり、同時期の北部九州の前方後円墳と同様な形態をしている。一方、周溝および周堤の平面形態は、いわゆる盾形ではなく墳丘に沿うような形であり、周堤は確認できないが王塚古墳やホーケントウ古墳の周溝も同様であるため、当地域の前方後円墳に共通する在地的な強い形態であると判明した。

墳丘の付属施設では、Dトレンチより周堤の一部を切断して造られた通路状遺構、G・Lトレンチで検出された段状遺構、G・H・Iトレンチで検出された墳丘裾部のピットがある。墳丘東側の周堤の一部が途切れていたため調査を行なった結果、墳丘の外部空間から内部空間に出入りするため築造当時造られた通路状遺構を確認した。この通路状遺構から、古墳の使用期間中は周堤を乗り越えてどこからでも墳丘の内部空間に出入りしたのではなく、決められた通路を使用していた可能性が考えられる。陸橋状の遺構と合わせて古墳の外部空間から内部空間への導線が検討できる事例となるだろう。段上遺構は、階段とするには段が高いが、GトレンチやLトレンチの前方部中央や墓道付近に限られるため、墳丘への登り口である可能性が高く、通路状遺構と合わせて墳丘の内部空間における導線を復元する事例となるだろう。墳丘裾部のピットは、前方部前面中心軸上、前方部東南隅角、東側くびれ部の屈曲点で、墳丘裾部の傾斜変換点に径30～40cm前後、深さが40cm前後の細い木柱状のものを立てた柱穴であると考えられるが、墳丘の築造に関わる付属施設であった可能性があるものの、実態は不明であり、今後の調査事例の増加を待って性格を明らかにしたい。

なお、この調査では、葺石や埴輪の墳丘表飾は認められず、天神山古墳は墳丘表飾を伴わない古墳

である可能性が高い。王塚古墳やホーケントウ古墳で葺石や埴輪の埴丘表飾が伴うが、後出する天神山古墳で認められないのは対照的である。

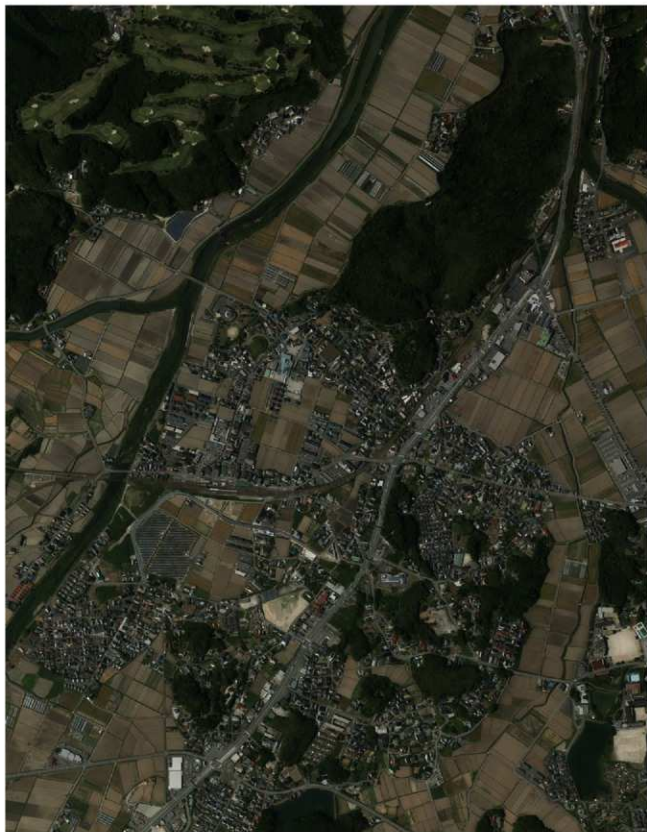
トレンチでは、一段目の平坦面より須恵器の坏蓋・坏身・高坏蓋・有蓋高坏・無蓋高坏・甕・提瓶・横瓶・壺類・革袋形土器・高坏形器台・手持配像脚付壺・裝飾付器台・手持脚付壺・甕・高坏（酸化炎焼成）や土師器の高坏などの豊富な器種の土器類が破碎された状態で、且つ、一部は集積された状態で出土した。その後、範囲を拡張して調査を行なった結果、墓道と前庭部を検出することができた。墓道と前庭部の検出により石室は、後円部の二段目に位置し、閉塞部分が未確認であるが概ね西に向けて開口すると考えられる。石室は未調査であるため、形態や規模については不明であるが、将来的な非破壊による調査技術の発展を待って明らかにしたい。埋葬の回数は、調査時の土層所見と土壌分析（第5章第2節参照）により、墓道埋土中の黒色土層を境に下層が初葬に伴う埋土で、上層が追葬の埋土であることが判明し、少なくとも2回以上の埋葬が行われた可能性がある。また、初葬の埋土中より破碎された須恵器や土師器が出土し、2箇所を集積部を確認した。これらの須恵器や土師器は、破片を接合しても完形にならないため、初葬時に伴う葬送儀礼で破碎供献されたことが考えられる。高坏形器台・手持配像脚付壺・裝飾付器台・手持脚付壺の4個体の裝飾付須恵器が出土したが、一古墳で4個体以上の裝飾付須恵器が伴うのは和歌山県井辺八幡古墳など事例が少なく、貴重な発見となった。また、天神山古墳では埴輪が認められない一方、多様な裝飾付須恵器が出土しているため、王塚古墳やホーケントウ古墳とは異なった葬送儀礼上の表現が採用されたことが考えられる。なお、天神山古墳の須恵器は、窟跡出土資料や他の古墳出土資料、集落出土資料と比較した胎土分析が行われた（第5章第1節参照）。分析の結果、天神山古墳の須恵器は、飯塚市井手ヶ浦窟跡群産の須恵器が主体であり、これに大野城市牛頭窟跡群産や宗像窟跡群産の須恵器が加わることが指摘された。天神山古墳の土師器高坏や酸化炎焼成の高坏も含めると、嘉麻川流域、福岡平野、博多湾沿岸、宗像地域など北部九州各地域との関係性があったことが考えられる。

天神山古墳は、桂川古墳群で最後に築造された前方後円墳であると判明した。最後に築造された前方後円墳かつ埴丘規模に注目すると、飯塚市寺山古墳（全長68m）や北九州市荒神森古墳（全長68m）が挙げられ、前者は鎌屯倉、後者は大抜屯倉と関わりとされ、天神山古墳も穂波屯倉と関わりとすることが考えられる。また、68m前後の前方後円墳は、関東周辺をはじめ、ミヤケ関連地域で築造される最後の前方後円墳として広く見られる規模である。ミヤケ設置および関連地域における前方後円墳の終焉という観点において、天神山古墳は全国的な傾向の中に位置づけられる。

最後に、天神山古墳の調査結果を踏まえつつ、桂川古墳群の首長墓の中でこれまでに判明したことを概観する。寿命丘陵の最高所に位置する3世紀末頃に築造された金比羅山古墳が当古墳群の首長墓系譜の初源であり、6世紀前半に寿命丘陵の麓に王塚古墳が築造され、後続してホーケントウ古墳が、そして6世紀後半に当古墳群の中で最後の前方後円墳である天神山古墳が築造された。現段階では、桂川古墳群の中で最初の前方後円墳と最後の前方後円墳が判明し、更に王塚古墳、ホーケントウ古墳、天神山古墳から磐井の乱前後や屯倉設置とそれ以降の関連を深く論じられるまでとなった（第6章5節参照）。しかし、金比羅山古墳から王塚古墳までの首長墓とされる宮ノ上古墳、大平古墳、茶臼山古墳は、いまだ詳細な調査が行われていないため築造時期が明らかではなく、また天神山古墳以降の桂川古墳群の実態についても不明である。

桂川古墳群は、これまでの調査で地域の歴史解明に寄与し、北部九州あるいは日本列島での古墳時代を考証する資料を提示している。今後も桂川古墳群の調査研究を継続して行い、当古墳群の歴史的価値を高めるとともに、地域が誇る文化財として保存・活用に向けていきたい。

圖 版



天神山古墳周辺の航空写真



1 天神山古墳遠景（西から）



2 前方部南西隅角から前方部・周堤を望む（西から）



3 前方部南東隅角から後円部を望む（南から）

4 後門部墳丘（北から）



5 後門部墳丘・周堤（西から）



6 後門部・L・Mトレンチ付近（西から）





7 A1・A2トレンチ全景
(東から)



8 A1・A2トレンチ全景
(北東から)



9 Aトレンチ周堤付近
(東から)



10 Aトレンチ平坦面完掘
(西から)



11 Bトレンチ平坦面完掘
(東から)



12 Bトレンチ西側完掘
(南から)

図版 5



13 Cトレンチ完掘（東から）



14 Cトレンチ弥生土器出土状況（東から）



15 Dトレンチ表土剥ぎ後（東から）

16 Dトレンチ周溝付近
(北から)



17 Dトレンチ周溝完掘
(東から)



18 Dトレンチ通路状遺構
完掘 (墳丘側・南西から)





19 Dトレンチ通路状遺構
堆積状況 (南から)



20 Dトレンチ通路状遺構
堆積状況 (東から)



21 Dトレンチ通路状遺構
完掘 (東から)

22 Dトレンチ通路状遺構
完掘（東から）



23 Dトレンチ通路状遺構
内側（東から）



24 Dトレンチ通路状遺構
完掘（西から）





25 Dトレンチ通路状遺構
内側（西から）



26 Dトレンチ通路状遺構
東端完掘（西から）



27 Dトレンチ土坑1検出
状況（北から）

28 Dトレンチ土坑2完掘
(東から)



29 Dトレンチ土坑3検出
状況 (北から)



30 Eトレンチ完掘 (南から)





31 Eトレンチ埋堀完掘
(北東から)



32 Fトレンチ周辺 (後門
部北側・周堤・東か
ら)



33 Fトレンチ周溝完掘
(北から)

34 Fトレンチ周堤完掘
(南から)



35 Gトレンチ周堤付近
(前方部・北から)



36 Gトレンチ前方部掘定
掘 (南東から)





37 Gトレンチ前方部前面
ピット (東から)



38 Gトレンチ前方部側完
掘 (南西から)



39 Gトレンチ前方部側完
掘 (南から)

40 Gトレンチ墳丘二段目
盛土（南から）



41 Gトレンチ周堤側段状
部断ち割り（北東から）



42 Gトレンチ周堤完掘
（北東から）





43 H1トレンチピット・
前方面南東隅角付近
(東から)



44 H1トレンチ周溝・周
堤完掘 (南から)



45 H1トレンチ周堤付近
完掘 (南西から)



46 H2トレンチ完掘（西から）



47 Iトレンチ・東側くびれ部付近完掘（南東から）



48 Iトレンチ完掘（東から）



49 Iトレンチ一段目斜面
(東から)



50 Iトレンチ一段目一次
盛土周辺 (南から)



51 Jトレンチ前方部東斜
面完掘 (東から)

52 Jトレンチ周堤付近完掘 (西から)



53 Jトレンチ周堤・弥生土坑付近 (東から)



54 Kトレンチ・前方部南西隅角付近完掘 (南から)





55 Kトレンチ周溝完掘
(北から)



56 Mトレンチ・後門部北
西側・周溝付近完掘
(西から)



57 Mトレンチ周溝付近
(南から)

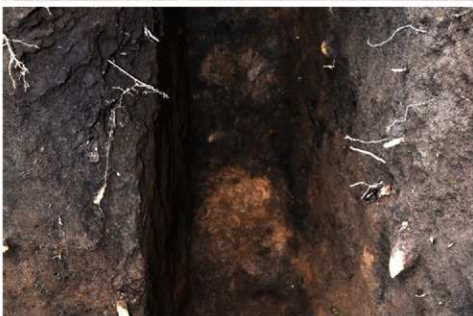
58 Mトレンチ墳丘一段目
斜面（西から）



59 Nトレンチ・東側くび
れ部平坦面付近完掘
（東から）



60 Nトレンチ二段目斜面
互層盛土（東から）





61 Oトレンチ・後門部東側平坦面付近完掘（東から）



62 Oトレンチ東側完掘（南西から）



63 Oトレンチ盛土層（東から）

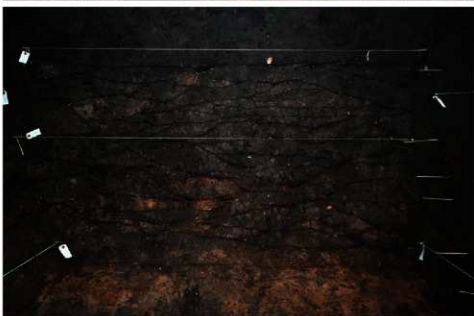
64 Oトレンチ溝1 (東から)



65 Pトレンチ・前方部東側平坦面完掘 (東から)



66 Pトレンチ盛土層 (東から)





67 Lトレンチ・後円部西側周溝付近完掘（西から）



68 Lトレンチ・周溝付近完掘（西から）



69 Lトレンチ・墳丘一段目斜面付近（西から）

70 Lトレンチ・後円部西
側平坦面・須恵器集積
部Ⅰ検出状況（北か
ら）



71 Lトレンチ・須恵器集
積部Ⅰ（北から）



72 Lトレンチ・須恵器集
積部Ⅰ（西から）





73 Lトレンチ・須恵器集
積部 I (北から)



74 Lトレンチ・須恵器集
積部 I (西から)



75 L1トレンチ・東壁墓
道埋土堆積状況 (西か
ら)

76 L1-3トレンチ・後円部
西側平坦面完掘（西から）



77 L1-3トレンチ完掘（北から）



78 Lトレンチ・須恵器集積部Ⅱ（西から）





79 L1トレンチ・南壁墓
道埋土堆積状況（北か
ら）



80 L3トレンチ・墓道埋
土堆積状況（西から）



81 L4トレンチ完掘（北
東から）

82 L4トレンチ・墓道埋
土検出状況（西から）

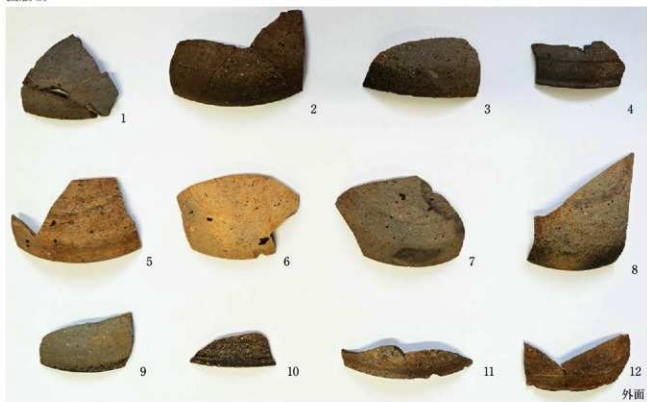


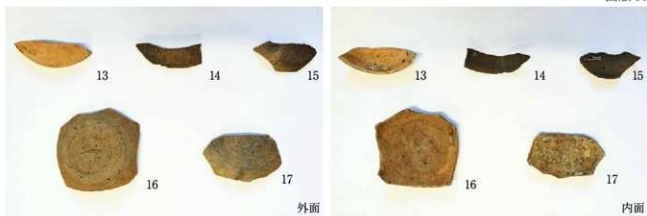
83 L4トレンチ・墓道埋
土内・川原石出土状況
（西から）



84 L1トレンチからL4ト
レンチを望む（西か
ら）











18



20



44



45



49



51



52



53



54



55



56



61



65



83



83



83 側面



83 側面



81 口緣部



80



81
側面外面



81
側面內面



81 正面



81 背面





外面



内面





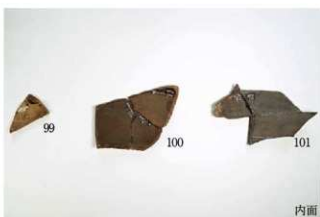
98 外面



98 内面



外面



内面



102 外面



102 内面



103 外面



103 内面



104 外面



104 内面



105 外面



105 内面



106 外面



106 内面



107 外面



107 内面



108



110



109 外面



109 内面



124 外面



124 内面



125 外面



125 内面

天神山古墳出土須恵器





天神山古墳出土須恵器



135



136 外面



136 内面



137 外面



137 内面



138



139 外面



139 内面

天神山古墳出土須恵器







140 壺部



140 小像



140
壺部底部



141



141 壺部

天神山古墳出土須恵器



141
騎馬像



141
騎馬像



141 小像



141 小像



141 小壺

天神山古墳出土須惠器



142 坏部



142 脚部



142
坏身内面



142
坏身外面



145 口縁部



145 壺部



145 筒部



145 脚部



145
壶部内面



143

144



143

144





153



154



153 外面



153 内面



155



156 外面



155



156 内面



157 外面



157 内面



158



159 外面



158



159 内面





168 外面



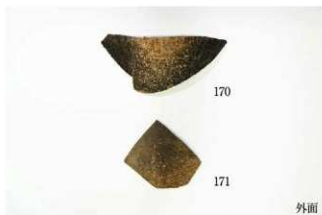
168 内面



169 外面



169 内面



外面



内面



172
外面



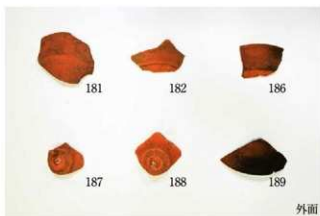
173
内面



174 外面



174 内面



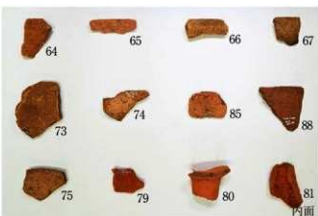
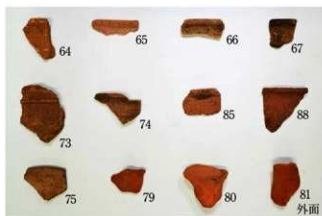
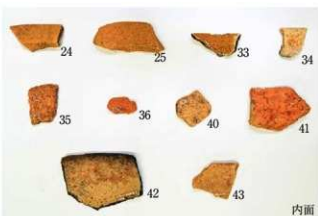
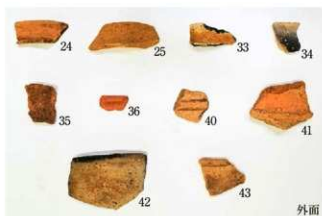
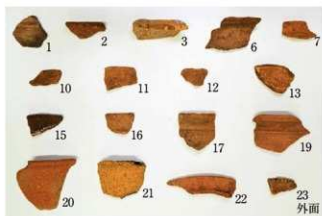


外面



内面





图版 63



天神山古墳出土弥生土器・石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	てんじんやまこふん							
書名	天神山古墳							
副書名	福岡県嘉穂郡桂川町大字豆田所在前方後円墳の調査							
シリーズ名	桂川町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	長安慧(編)・辻田淳一郎(編)・尾園晃・足達悠紀・足立達朗・嶋田光一・柳山純一・八木健一郎・松浦宇智・株式会社古環境研究所							
編集機関	桂川町教育委員会							
所在地	〒820-0096 福岡県嘉穂郡桂川町大字土居 424 番地 1 TEL: 0948-65-1100 FAX: 0948-65-3424 E-mail: bunkazai@town.keisen.fukuoka.jp							
発行年月日	2024年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
天神山古墳	福岡県嘉穂郡桂川町大字豆田	40421		33° 35' 09.5"	130° 40' 6.62"	20140911 ～ 2020921	496	範囲確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
天神山古墳	古墳 集落	古墳時代 弥生時代	前方後円墳 貯蔵穴・土坑	須恵器・土師器 弥生土器・石器		<ul style="list-style-type: none"> ・6世紀後葉築造の全長67mを測る二段築成の前方後円墳。 ・通路状遺構、段状遺構など新たに確認。墓道・前庭部を検出し、石室位置を特定。 ・4個体の裝飾付須恵器を含む須恵器・土師器が初葬時の墓道埋土より破砕状態で出土。 ・桂川古墳群最後の前方後円墳で、墳丘規模も含めると惣波屯倉と関連する。 		
要 約	<p>天神山古墳は、合計8基の前方後円墳と1基の大型円墳からなる桂川古墳群の首長墓のうちの一つである。昭和13年に測量され、王塚古墳に後出する前方後円墳で、惣波屯倉と関わりがあると指摘されたが、ほとんど未調査であったので、墳丘規模や築造時期、古墳の性格は不明であった。この範囲確認調査で天神山古墳は、6世紀後葉に築造された全長67mを測る前方後円墳で、桂川古墳群で最後に築造された前方後円墳と判明。墳丘形態は北部九州の前方後円墳および王塚古墳やホーケントウ古墳の在地の前方後円墳と共通することが判明。通路状遺構や段状遺構など墳丘付属施設を新たに確認したが、葺石や埴輪の墳丘表飾は伴わないことが判明。墓道・前庭部を検出し、後円部2段目に概ね西に開口する石室が位置することが判明。2回以上の埋葬が行われ、初葬時の墓道埋土中より全国的に稀少な4個体の裝飾付須恵器を含む須恵器・土師器が破砕供献された状態で出土。最後に築造された前方後円墳や68m前後の墳丘規模は、全国的な傾向からミヤケと関わるとされ、天神山古墳も惣波屯倉との関わりがあると判明した。</p>							

桂川町文化財調査報告書 第22集

天神山古墳

—福岡県嘉穂郡桂川町大字豆田所在前方後円墳の調査—

令和6年3月26日

発行 桂川町教育委員会
福岡県嘉穂郡桂川町大字土居424番地1

印刷 ダイワ印刷株式会社
福岡県飯塚市大日寺1419番地1